

山
岳

第三十五年第一號

山岳第三十五年第一號目次

神河内地名考……………	(會員)	小島鳥水……………	一頁
積雪期の臺灣山岳……………		阿部武道……………	三五
小興安嶺横斷記……………		京都帝國大學旅行部……………	充
高所に於ける人體血液に就いて(綜説)……………	(會員)	額田敏……………	一〇七
蕃人の原始社會經濟生活の一側面……………		阿部武道……………	一五二
——タイヤル族の土地制度に就いて——			
北 葛 澤……………	(會員)	西岡一雄……………	一八三
フィリップ・デ・フィリップ……………	(會員)	オーレル・スタイン……………	一九七
追悼記			
故人河野齡藏氏を語る……………		小島鳥水……………	二二
赤羽良一氏を憶ふ……………		茨木猪之吉……………	二八
岡本勝二君を憶ふ……………		田中菅雄……………	三〇
白馬嶽山麓蓮華溫泉主人親子遭難記……………		月橋正樹……………	三三

圖 版

插 圖

大霸尖山西面……………田中 薰 對頁 二六

南湖大山北峯下キャンプより主山

を望む……………田中 薰 二九

フィリッポ・デ・フィリッピ……………一九六

リモ氷河に於ける第三キャンプ……………一九七

故河野齡藏氏……………三〇〇

故赤羽良一氏……………〃

故岡本勝二氏……………〃

小興安嶺北部略圖……………七一

北葛澤概念圖……………一八四

神河内地名考

小 島 鳥 水

一 序 説

二 上 高 地

三 上 河 内

四 神河内(神合地)

五 神祇の神河内

六 自然としての神河内

七 結 語

一、序 説

明治末期以來、俄かに有名になつた上高地の地名に就いて、私は、實際の地形より見るも、古い記録より見るも、甚だ不當な地名であることに慊焉の情を抱くこと久しかつた。

上高地なる名は、その使用の始めから、至つて曖昧であつた。上高地は、穂高岳麓、梓川溪谷の一部を形ち造る谷盆地である。高地と謂はむよりも、低地であり、窪地である。それも昔から、さう書かれてゐる地名なら、

今に追んで、之を改むるにも及ばないが、古くからは明確な地名(及び漢字)が定まつてゐたわけではなく、具體的に言へば、登山者が追々と多くなるに随つて、明治三十八年に、上高地温泉株式會社が設立せられ、大正二年には、參謀本部陸地測量部實測五萬分の一圖が出版され、上高地圖幅の名が記載されて、今日では、それが決定的、もしくは一般向きの地名になつた觀がある。併し私は、不當に宛字された地名は、正當の文字に還元されるべきであるとの信念を抱いて、六年以前「山岳」誌上に於て「上高地は神河内が正しき説」を公けにし、故辻村伊助氏が、神河内の原始的風光と、その地名を悦んでゐられたところから、右の一文を辻村の靈に捧げた。

當時「國民新聞」の山岳欄を擔當せられてゐた小西民治氏は、私の説に共鳴せられ、全文を同新聞の、山岳欄に轉載せられ、帝國ホテル社長大倉喜七郎男は上高地にホテルを建築せられるに當つて、勇敢に神河内ホテルと名づけ、之を新聞雜誌に廣告せられ、松本驛の停車場には、神河内帝國ホテルと染めた印絆天を著たホテル用人が、客の送迎や用足しに出張してゐたことは、現に私の目撃したところである。

然るに盲目的に、上高地と決めてゐる土地の役人連や、地方人士から、神河内なる地名に對して、盛んにホテルに對して抗議が出たらしく、私の風聞する所に據れば、信州出身の今は故人となつた大教育家某氏が、ホテルに來泊の際、神河内といふ名は不承知だと言つて、頗る御機嫌が悪かつた由である。私は是等の人々に向つて問ひたい、地圖の上に、測量員が上高地と書いたと云つて、或はそれから引用した地理書案内記類に、上高地と記してあるからと云つて、それがどうして正當にして確定的な名になるのであらう。現實に眼を掩うて、上高地と書いてあるから上高地でなくてはならないと言つても、現地檢證をやれば、高地でなくて低地であり、臺地でなくて盆地である、これがどうして高地であらう。況んや念入りに「上」の字を冠せてゐるに於てをやである。

この地名は、明らかに不當であり、反地形的の稱呼であり、土地の人や、その地の官廳やが、率先して正しき文字を使用せねばならぬものであると考へられるにも拘はらず、一向にその實が認められてゐない以上、私は茲に重ねて、上高地なる名の不當なる所以を縷説するの必要を感じ、併せてその後に提説、又は或人々に依つて使用せられる「上河内」と、私の持説の「神河内」に就いて、語らせてもらひたいのである。

二、上 高 地

昭和初期の頃、私は米國から歸朝して、偶ま東京に於ける金融財政の重立つた人々を、「上高地」に案内する役目を負うた。その時の上高地は、既に自動車も大正池畔まで開通してゐたし、上高地の汚損された風景は、豫想された通りに、私を慘ませたが、それは別問題とする。私の駭いたことは、同行の人々が、始めて上高地に来て、上高地が高地で無かつたのに駭ろいてゐたことである。併し考へて見ると、成程、上高地といふ名から想像すれば、誰しもこの土地が臺地もしくは高原のやうに考へることは、決して錯覺ではなく、地名そのものに、根本的な錯誤があるのである。

是より先、「東京朝日」の下村海南、杉村楚人冠、鈴木文史朗諸氏が、大正の中期、カミコウチを探られたことがあるが、その時の鈴木氏の紀行に、徳本峠から俯瞰して

「上高地はどこです」

「あの川の流れてゐるところですよ」

「へえ、あの谷底が………?」

僕は軽い失望をさへ感じた。上高地といふ漢字の現はす當然の幻覺とでもいはうか、僕の頭の中に描いて来た上高地は、山上の廣潤な臺地で、四方に遠く山嶽がそびえ、そこに梓川が流れ、放牧の牛や馬が、どこの緑原にでも遊んでゐる筈だつた。「上高地」といふ、こゝ十年來見慣れて来た三字の漢字が、この實景を見るのに邪魔になる。

だが、その失望は、下へ降りて見て、全く跡方もなく忘れた。

全く上高地なる漢字の現はす幻覺は、實景とは正反對のものである。誇張して言へば、地を指さして天といふ如きものである。實景は期待以上、地名は想像以外である。猶ほ鈴木氏は左の如く結ばれてゐる。

五千尺旅館の主人(私註、丸山氏)は、上高地狂で、身上をすり減らして、この宿屋を一軒残したといふが、入口に、特に神河内かみがうちと書いてあるのは、我意を得た。一體、土人はこゝをカミウチと呼んで来たものだから、上内でも、上河内でも、神河内でもいふ、さうすれば、あんな失望は、瞬間的でもなくて済むだらうと思ふのは、僕一人だらうか。

然り、決して鈴木氏一人でないことは、上述の私の見聞が、之を補説してゐる。上高地の文字の不當なることは、これ以上の絮説を必要としないだらう。「話せば解る」で通用しない人には、「見れば解る」と云へば済む。尤も、私が「上高地は神河内が正しき説」を書いた時、文中に「神河内が既に九十餘年前の刊本(善光寺名所圖會のこと)に記録されてゐる以上、上高地なる文字が、それ以前、又は同時代の記録に所見あるかを知りたいのである」と言つて、一種の挑戦狀を敲きつけた。

それに對して、坂井衡平氏が、國民新聞に一文を寄せられ、古地理書に上高地の文字の出所があることを教示

せられた。私は同氏の全文を切り抜いて保存してゐたが、本文を書くに當つて、搜索したが、所謂、しまひ忘れて見當らない。併し私は、その當時、坂井氏に答へる必要を認めなかつた。何分、手許に原文が見當らないから、記憶のまゝに原文を引用するのは歪曲に陥る虞れがあるが、只斷言して憚らないことは、同氏の引用書にある上高地は、肝心の穗高明神垂跡の穗高嶽や、明神池、又は盆地一帯のことに言及せられず、單に上高地邊の長堀山一帯といふ意味のもので（記憶のまゝ）谷盆地そのものを、上高地として明示したのでは無いのである。私とても、長堀山とか、その他盆地を圍繞してゐる山群を、上高地と言ふならば別問題になるから、異存の有無は保留するが、あれだけでは、上高地説の根據には成り兼ねる。況んや上高地以外に、上河内、神河内の舊記があることは、次に縷説するやうに、嚴として動かないのみならず、猶ほ況んや、私が前説に述べた如く「穗高明神とその土地の垂跡の關係から言つても、神河内にその意義が認められるに反して、上高地に無いに於てをやである」この穗高明神關係の神河内説は、本文の第五章に改めて説いてある。

三、上 河 内

次には、カミコウチ、則ち上河内の説である。

上河内の文字は、明治末期以後、相應に早くから使用されてゐる。前に引用した大正年間の鈴木氏の文中にも上河内が見えてゐるし、幸田露伴氏は、昭和二年六月、歌人太田水穂氏と共に、島々から騎馬で徳本峠の頂上に立たれ感想を記せられたが、上河内と書いて、上高地を棄てられてゐる。故河野齡藏氏も、カミコウチは上河内であるといふ説で、氏自身の記述されたカミコウチは、上河内と書かれてゐる。昨年の山岳會々報で、武田久吉

氏も上河内説を述べられてゐる。

それよりも、私の見た限りに於て、最も古く上河内の名は「信府統記」に見えてゐる。「信府統記」三十二卷は、信州松本城主、水野忠幹が、藩政の参考に資せむがため、領内及び信州一圓の地理歴史に關する記録を集成しやうとして、享保七年九月、家臣鈴木重武及び三井弘篤に、編纂方を命じた。兩人は、丸山友陣、野村政助を助手として、舊記を搜索し、土俗の口傳を徴し、その草案を綴つたが、業未だ成らずして、忠幹逝き、弟忠恒が之に代り、忠恒の時代に於て、完成したもので、時に享保九年十二月、今から二百十六年前のことである。現今ならば、水野忠恒監修、某々編輯ともいふべき、御領内の官撰地誌であるが、是等編輯員は、山谷村里を跋渉したらうが、高山深谷に至つては、親しく實査したか、どうか明らかでない。書名の信府といふのは、松本の別名である。松本領内でも、木曾路の如きは、尾張領と相半ばしてゐるが、安曇郡は、全部松本領であつた。そして本書全部は、大正二年十一月、信濃史料編纂會に依つて、収録せられ、信濃史料叢書第二篇として、活字本となつて刊行せられた。以下、私の引用文は、凡てこの活字本に依つたのであるが、その内、上河内の名の現はれたものを、先づ拾つて見ると、左の如くである。

兄増り、蝶ヶ嶽、常念ヶ嶽ハ、孰レモ長尾組ノ山ニテ、北ハ穂高組堺ニテ、西ハ上河内ナリ、此蝶ヶ嶽ハ、春季ニ至リ、積雪漸ク消ユル時、其形恰モ蝶ノ羽ノ形ニ似タレバ、因テ地名ヲ付シタルモノナリ、是レ日請ケニ因レルガ故ニ、年々異ナル事ナシ。地麓ニ、大水澤、崩ノ澤、蝶形澤、本澤、二ノ澤、一ノ澤ナド云アリ、小野澤ノ落合ヨリ、下流ヲ烏川ト云フ。(第六卷安曇郡境記)

梓川ハ、其源、遙ニ北ニシテ、上河内山ノ奥、飛驒ノ國界、白石ト云フ所ヨリ出デ、上河内ノ山中ヲ、南ヘ大野川マデ五里餘流ル。此川筋、山中ノ平原ニテ、幅一里餘、或ハ二三十町程アリ、但シ此地寒氣最モ烈シク、夏五月迄ハ雪アリ、六月ニ至テ、少シノ間、往來スレトモ、八月末ヨリ又雪積リテ、往來叶ヒ難キ程故、田畑開發スルコト叶ハズ。

○

上河内山ノ内、名ヲ稱フル所ハ、耳たらし瀧（此下ハ大ナル淵ナリ）ほりのど、とくさ澤、かすみ川入、細池、うぶ屋、飛驒越、是ヨリ飛州細尾村マデ一里半餘アリ（但シ杣路ナリ）此左右ニ溫泉三ヶ所アリ（第六卷安曇郡境記）——句點圈點は、筆者の施こせるもの、以下同じ。

上河内山とは、カミコウチを繞ぐる一帯の山を通稱してゐるのであらう。

この中の地名で、今も唱へられてゐるのは、トクサ澤（徳佐澤、又は木賊澤とも宛字されてゐる）カスミ川入（霞澤の川、霞澤岳の代りに、霞嶽と呼ばれたこともある。善光寺名所圖會には、霞嶽となつてゐる）耳たらし瀧は、御手洗瀧の轉訛で、その下に大きな淵があるといふのは、或は明神池の二の池から、三ノ池へ落ちる飛泉のことであらう。明神池を、御手洗池とも言つた。飛州細尾村は、按ずるに中尾村、又は枋尾村の誤りであらう。溫泉三ヶ所は、上河内、蒲田、平湯などを意味してゐるのだらうか。

中島正文氏に従へば、信濃會染村、師岡氏所藏の寛文中作と言はれる、信州筑摩郡安曇郡畫圖には、上河内川の記入があつて、用水も出ると註記されてあるし、中島氏の手許にある天保七年飛驒新道の繪圖にも、上河内の名があつて、湯場の印までが、書き入れられてあるとのことである。（「山と溪谷」第五十八號）

之に依つて見るも、上河内の地名は、地形とも、合致してゐるし、古い地理書や地圖にも、出所が歴然と認められる。上高地の如き、孟浪な地名とは撰を異にしてゐる。且つ上高地の名が、最も非難せられるのは、高地といふ漢字にあるのだから、高地が河内と改められたことは、私の持説の神河内とも、其點に於ては一致してゐる。

併しながら「信府統記」は、上河地なる名を載せてゐると同時に、それよりも以前の名として、神河内の宛字なる神合地(かみあつち)(振假名は原文の儘)をも載せてゐるのである。殊に穂高明神垂跡の穂高岳、及び明神池の如きカミコウチの心魂とも云ふべき焦點には、斷然神合地の名を取つてゐるのである。同書の上河内が地形的觀點より信じ得べくば、同書の神合地は、地形的、歴史的、文化的の觀點よりも、信ぜられなければならないのである。

抑も上河内といふ地名は、前述の如く、古地圖や古記録にも歴然たる出所があり、實際の地形から考へても、山民語から察しても、妥當の名であつて、採るべきものではあるが、只だ如何せむ、上河内の名には、日本アルプスを通じて、無雙なる神域的景觀が具象されてない。由來、河内といふ名は、信濃、飛驒、遠近の如き溪澗地には、相應に多く、例へば大河内、小河内、上河内、諸河内(シヨコウチ)、八重河内等、算へれば未だ多いであらう。就中、上河内といふ名は、南アルプス南部の峻峰に、上河内岳があり、この岳に登るには、上河内澤を經由するのが、順路なやうである。私は未だ、こゝの上河内を踏査したことはないが、今まで、登山者の誰にも、推賞されてゐないところを見ると、安曇のカミコウチに比ぶべき風景でないことは、確かであらう。私は穂高岳を、上河内岳と呼ぶことを好まない如く、安曇のカミコウチを、上河内と書くには、大きな物足りなさを感じる、上河内は一般の普通名詞であるだけで、地形的には、成程上河内ではあるが、それと同じ名の谷が、南アルプスにもあつ

て、兩方共、地形上の名に過ぎない。安曇のカミコウチには、神の垂跡があり、神に因んだ山名川名があり、古くから神河内の宛字として、神合地が上河内の名と並存してゐる以上は、撰擇の問題として、單なる上河内がいゝか、神河内がいゝかといふことになる。

斷はつて置くが、私は上河内の名が平凡だから、新に之を改造しようといふのではない、改名は上高地の一例で、もう澤山だ、由緒ある古名を、碌に調べもせず、放漫なる身勝手な考へで改造されては堪まらない。併し神河内の名は、神合地の宛字に假装されたとしても、又神河内としても、古くから存在してゐるのである。しかも上河内の名が、神河内となることは、只つた一字違ひではあるが、その一字が死活の問題であり、畫龍點睛の問題になるのである。土地に古くから行はれる神話傳説の領分も、土地の景象を、具體的に表現されるのも、この神の一字に繋がつて存するのである。以下詳しく之を述べる。

四、神 河 内（神合地）

「信府統記」は見えたカミコウチの全記事は、左の如くである。

穗高嶽ハ、梓川出口ヨリ、大野川マデノ中程、西ノ方ニアル大山ナリ。此嶽ハ、往古ヨリ、穗高大明神ノ山ト云傳ヘテ、此名アリ、嶮山ニシテ登ルコト能ハズ。麓ニ大明神ノ御手洗トテ、あら池ト云フアリ、廣サ三四町四方程ノ池ニテ、深サ測リ難ク、いわなト云フ魚多クアリ、杣人筏ニ乗テ是ヲ釣ル、此外、梓川ヨリ西ス方ニ山嶽多シト雖モ、深山ニテ、往來ナケレバ、山名モ知レズ。（第六卷）

之に依つて、穗高岳は、往古より穗高大明神の山と言ひ傳へられたこと、及び麓の池が大明神の御手洗池とい

ふことが知られる。

尤も、地名としては、神河内とも、上河内とも、そこには書いてないが、神合池の地名は、以下の如くに次第に現はれて来る。

大嶽(私註、未詳)ハ、上野組ノ山ニテ、此裏通ハ上河内也(或ハ神合地トモイフ)

穂高大明神ハ、彦火瓊々杵尊ヲ祀ル、往古當國神合地、穂高嶽ニ垂跡アリテ、其後、此所ニ鎮座セン故、在號ヲモ、穂高ト稱スルモノニヤ、猶其縁起ハ神社ノ部ニ載ス(同上)

穂高大明神の記事左の如し。

穂高 大明 神

保 高 町

古傳ニ、經津主命、武甕槌命ノ兩神ノ、螢火光邪神、蠅聲邪神ヲ、東へ追ヒ給ヒシトキ、皇御孫尊、穂高嶽ニ鎮座マシマスト云ヘリ、此嶽清淨ニシテ、其形幣帛ノ如ク、麓ニ鏡山、宮川、御手洗河水ノアル所ヲ、神合地ト云フ、大職冠鎌足公モ、此神ヲ敬ミ祭り給ヘリ。

當社ノ事、延喜式神明帳ニモ見エタリ。(第二十卷 松本領諸社記)

更にこの縁起を布衍したと見るべきは、左の一文にある。

白雉四年、穂高大明神ヲ、伊勢國ヨリ勸請ス、此神ハ、天津彦々火瓊々杵尊ノ垂跡ナリ、穂高ニテ、社家代々云ヒ傳フル説ニ曰ク、往昔、豐葦原瑞穗國、日向高千穂櫛振嶽ニ降臨也、經津主命、武甕槌命、葦原中津國ニアル螢火神、蠅聲邪鬼等ヲ撥平ゲ給フ時、皇御孫ノ尊、當國穂高岳ニ鎮座、此嵩清淨ニシテ、幣帛ノ如ク、麓

ニ鏡山アリ、官川、御手洗、河水ナリ、神合地ト云云。穗高嶽ハ、今上野組、上河内トイヘル所ナリ、此嵩、高山岩壁ニシテ、上ルコト能ハザル大山ナリ、其後、雄略天皇ノ御宇、勢州山田原外宮相殿ニ鎮座ト云々。(第十七卷、安曇筑摩兩郡舊俗傳)

即ち元は神合地と言はれたところだが、穗高は今上河内と云へる所に在るといふ意義に解せられる。

この神合地は、原文にカミゴウチといふ振假名がついてゐる。合地はガツチと訓まれることもある、孰れにしても、正しい漢字は、河内と宛てられるべきものである。河をゴウと濁つて發音されてゐる例は、飛驒國では大野郡久々野村の無數河、同郡莊川村の三尾河、寺河戸、益田郡小坂町(飛驒側、御嶽山麓)の濁河などが、擧げられる、即ちゴウチは河内である。

民俗研究家で、且つ山に興味を有してゐられる高橋文太郎氏は、カミコウチの土民語、カミグチ、或はカミコウチを解釋して、カミグチといふ呼名は、恐らくカミコウチとか、カミガツチなどからの音韻變化で、カワ、コウチ、ガツチは、溪谷や、澤の上流、又はその平地を、下手から呼んだ地方語である。これは信州のみにある呼び方でなく、例へばサワガツチ(新潟縣北蒲原郡)コーチ、又はカワチ(同縣北魚沼郡)等、汎い分布をもつてゐるとして、幾多の實例を擧げてゐられるが、私は附け加へて、南アルプスの、仁田岳と笈ヶ岳の山脚に挟まれた溪澗に、信濃俣ガツチ河内の名があることも、考へられる。即ちガツチも、亦漢字で書けば、河内が正しいのであつて、合地は訛音の宛字に過ぎない。

尤も、高橋氏は、カミコウチといふ呼名のカミは神でなく、澤の上手の上を意味して、カミコウチといふ呼稱が発生したものと思ふと、上河内説を取りながらも、一方に於ては、現在の南安曇郡穗高町にある、穗高神社の

奥社が、穂高嶽、今の明神嶽あたりの麓にあることは、善光寺名所圖會にも詳しく記してあり、實際の穂高町の同社を尋ねた時も、この事は言つてゐたし、當町には、保尊ホノノといふ姓の舊家があり、この由緒ある同社の、奥の院の安置される地としても、神域といふことは出来るであらうと言つて、カミコウチの神域なることを否定してゐられないのみならず、結論に於ては、方言の言葉を、割合よく現はすに近い「上河内」でもよいし、山の聖地を傳へる意味で「神河内」と書くも亦よいと、中立の態度を守つて居られる。

私は思ふ、日本の地名は、地形からも、人文からも、或は民族の信仰傳説からも、名づけられてゐる。今日でこそ、一體に科學的に物事を考へる傾向が強いが、太古時代から傳はつてゐる地名は、吾々の祖先とは、それこそ、永い間の生活と、有機的關係をもつてゐるのである。殊に古代に於ては、祭事と政治とは、共に「まつりごと」と呼ばれ、不可分の關係にあつたことは、古事類苑の、政治部の總説に「政治は……古來政事又は政道と云ひ、邦語に之をまつりごとと訓ず、即ち祭事と同訓にして、原と神祇若くは天皇に、服従よぶひて、其事を承はり行ふ儀より、出づと云ふ」そして所謂、祭政一致といふ成語は、意外にも支那から來たのでなくて、日本製の言葉である。單に地形から來た地名ならば、國の内外を問はず、到るところにあらうが、祭政一致の古代から、今日に連綿たる地名は、本邦に於て特殊なほどに多く、祭事祭神は、神話や傳説と絡んで、山名になつた例もある、戸隠山、淺間山の如きも、それである。

されば必しも地形一點張りの、地理學的解釋にのみ依るべきでない。

カミコウチの地形は、いかに上河内であるが、同時に、神河内又は神合地の地名があつて見れば、當然、之を神祇的にも、祭事的にも解し得られるのである。殊に神佛尊崇の盛んな日本に於ては、山谷の名にも、釋迦が

岳、餓鬼岳、地獄谷の類は、明らかに佛教思想からの名であるし、一方に於て、峠といふ日本製の漢字は、神への手向から来たといふのが通説であるし、地名にも、木曾に鳥居峠、神の御坂、飛驒に宮峠、それから平地では諸國に一の宮、二之宮、三の宮などもあるし、東京には神田があつて、そこを流れる川を神田川といふ。

本文を書くに當つて、咄嗟の間に、神の字を冠らせた地名人名を思ひ浮べて見ると、神田、神山、神坂、神谷、神岡、神野、神原、神崎、神林などが出てくるが、未だそれ以外に多くあらう。神川があれば、神河があつてもよく、神ノ御坂があれば、神の河内といふ名稱も、不自然ではなからう。川と河とは、素と區別すべき意義があるのかも知れないが、人の姓にしても、川合もあれば、河合もあり、日本では同一意義に使用されてゐるのである。又有名なる小豆島の寒霞溪は南畫の題名の如き地名であるが、元の名は神懸で、神に誓いを懸けること、即ち「かけまくも畏こき」の懸である、神に因んだ地名の存在は、徒らに忌避すべきものでない。

五、神祇の神河内

「信濃地名考」三卷は、信州岩村田の人、吉澤好謙（鶏山と號す）が、長い間、同國の山川に臥遊して、地名を實地に質し、古典に考へ、明和七・八年の頃、脱稿、安永二年に、上梓したものであるが、傳はるもの稀に、且つ刻本の字體磨滅してゐるのを、明治三十四年、改めて和紙鉛版に附したものがあつた。

右の地名考に依れば

安曇郡（和名阿都之）後世音を轉じて「あつみ」とよべり、安曇郡穂高ノ神社は、保高のむらにいます（神名、式名、神大）當郡西の方、飛驒國に坂合、仰げば保高ノ嶽、雲にそひて、連山左立に兒立す、神號も爰に

據る歟、古事記曰、綿津見神者、阿曇連等之祖神云々、姓氏錄曰、安曇宿禰ハ海ノ神、綿續豐玉彦ノ神ノ子、穗高見ノ命ノ後云々。又海ノ神ノ後、海犬養ワヌイヌカヒの姓カバネも見えたり、加茂翁曰、あつみは、海てふことそ、綿續ツツタツの約也、ワア通して阿曇なり、アツを約むればウとなれり、今大町の奥に海殘れり、上なるを青木海アヲキミと云(わたり三十町餘) 次を中つなツツの海と云、次を海の口と云、二三の海は、大さ上なるものなかはといふ、其邊を仁科と云(此邊の總名、按仁は土の古語) この地、草創の水を治めたる此神の勳功イササト仰くへき也。

安曇が水に因んだ名であることは、信濃にのみ止まらず、遠く離れた近江にも、同名の川がある。

古風土記に依れば、近江の國は、淡海の國で、水停ミヅトる國と言はれてゐるが、注進風土記に依ると、その近江の國に、安曇川がある。信濃とは、あまりに飛び離れてゐるが、安曇と川とは、古くからの因縁があるのもおもしろい。

悠遠なる太古、天地開き始まりける時、雌雄兩柱の大御神(諸冉二尊)が、我が大八洲國を生みたまひ、山川には、夫れ々々の神がある。延喜式には國々の神名を載せてゐる、神祇に大小があり、式に載せられてゐない神は、式外を以て呼ばれてゐる。信濃國には、四十八座の神があるが、安曇郡には、大神が唯一座在はして、それが穗高神社である。今は縣社となつてゐる。訪方郡サトの諏訪明神(信濃一の宮)などと、大神なる點に於て同格の神である。安曇には穗高の外に、小神として川會ノ神社が一座、式外として梓川ノ神祠があるが、孰れも本論以外の神々である故に、除くとして、安曇郡の神々が、悉く水に深い縁があるのは注目すべきである。

安曇の神は、御先祖から子孫に至るまで、治水を旨とせられたもので、その顯著なる功績は、信州一圓に止まらず、隣國の甲州にまで及んでゐる。

「山梨縣土木建築史」(昭和十年十月版)に依ると、著者廣瀨廣一氏は、上古時代、富士川疏水の考察に於て、左の如く、信州の安曇族に言及されてゐる。

古傳説には、甲斐三郡の地は、群山四周の間に湛へた湖海であつたが、神人の力で、南方の山を劈開し、水を落して平地となしたと云ふ。著者は、その最初の開拓者を考へて、南山劈開の事業は、蹴裂明神、即ち佐久神であると斷言した。(私註、信濃地名考には、佐久郡の條に、佐久は分割の義にやとある)この神は安曇族の祖、日金拆命ヒカナツで、信濃の安曇、更級、佐久の各地で、湖沼河川の疏通を行つた神である。元來、安曇族は、海神族で綿津見命を祖とし、海邊を故郷とした氏族であつた。それ故に、彼等の住處は、好んで水郷湖村を選んだ。信濃安曇郡は、彼の族の東國に於ける故郷とも云ふべき土地であつた、この山の中に、太古湖水があつた、その地の傳説には、安曇の祖先が、その湖水を涸したと云ひ傳へてゐる、想ふに初め、この湖畔に於て漁撈し、農耕時代に入つてから、水を涸らして田地となし、永住するに至つたので、この間、彼等は湖河を疏通する工事に、獨得の技能を自得し、土地に國境なく、領土に限界のなかつた時代に、安曇族は、更級佐久地方から、一丘を越えて甲斐に入り、巖を切つて水を疏し、そこに美田を拓いて、佃作に従つたのは、決して偶然でない。

著者は、更に進んで、偉大な功勞者を神として祀るは、我が大和民族の古俗であつた、南山を劈開して、この盆地を開拓した功勞者は、やはり神として祀られてゐる佐久神社は即ちこれで、安曇氏の祖、日金拆命を祀り、佐久の社號を附したもので、その社は、延喜式神名帳に載せられた神社である。尙ほ有名なる昇仙峽から金峰登山の途中にある金櫻神社(中巨摩宮本村)を「日本地名辭典」に、日金拆命を祀つた治功の神で、佐久蹴裂と同神であると記してあるのは、卓見にして従ふべき説である。古來甲州は、水患に悩まされたため、治功の神を

處々に祀り、その加護を祈つたものと想はれる、そして、そのいづれもが、安雲の祖神日金折神であるのを見る
と、劈開や治水の土功が、この氏族の手に依つたことの断定が下される。

甲州から筆を回らして、問題のカミコウチなる發着點に還る。

穗高神社縁起に依れば、カミコウチは

穗高見命の跡を垂れ給ひたるところにして、御名を宇都志穗金折命とも申し奉り、伊裝諸尊の御兒、大綿津見
の御子にして、長く此の地に在はして、水利を治め、荒地を開き、子孫繁榮の基を定めさせられたり。

又曰く

南方（湖水の）僅かにして三十塚あり、而して封土の形見ゆるは、神孫數代の跡にして、其のあたりを神垣内
と云ひ、又神の平とも云ふ、其の間に田代と云ふ處あり、現に湖水を殘し、水暖かにして、年中潤るゝことな
し、是れ昔畊地の跡を仰せるなるべし、猶ほ山路を登降し、東南の方に出づる古路を、三内路と云ふ、されば
數世を此處に經たりしことも、明らかなることぞかし。

この神垣内といふ名に關して一言する、垣内は、垣の内部であり、垣は「構」^{カウ}くの名詞形とも「限」^{カハ}の義とも解
釋され、土地にすれば、内外を限る圍ひであり、人倫にすれば、友垣などいふ如く、江戸時代の狂歌會派に、今
なら同人とか、會友とかいふところを「吾が垣内に生ひ立ち」など書いてゐる例もある。尤も垣内を、コウチと
訓ませることは考慮の餘地が存すると思ふが、文法的にはいざ知らず、轉訛としては有り得られやう。飛驒では
垣内を方言カイトウと言つてゐる、例へば漆垣内（大野郡大八賀村、及古城郡國府村）木曾垣内（同國府村）殿
垣内（大野郡丹生川村）の類である。「神ノ平」といふ名は「善光寺名所圖會」にも、神河内の一地名として出

てゐる。

昭和三年七月、南安日本アルプス休泊所組合發行、松下茂氏著「日本北アルプス登山案内」といふ小冊子には上高地は、もと神垣内の約音で、穂高見命、初めて此地に據り給ひし、遺跡を表すものとの説がある。或は神合地、神河内、神郷地等の文字を用ゐたとも云ふ。其の起原は何れも詳でない。近來、陸地測量部の地圖に、上高地の文字を用ゐられてより、廣くこれを用ゐらるゝに至つた。

起原としては、神垣内は「縁起」に、神合地は「信府統記」に、神河内は「善光寺名所圖會」に、夫れ々々出所がある。神郷地といふ名は、始めて聞くところである。上河内の名を、全然逸したのは、著者が聞きしなかつたからであらう。近來陸地測量部云々は、事實その通りである。

安曇神の名が、或は穂高見命、或は宇都志穂金拆命、日金拆命等となつてゐるが、祖先は穂高見命で、その御兒たちが、宇都志穂金拆命（宇都志穂は渦潮うずしほか）日金拆命等で、發祥地は穂高嶽に垂跡の尊にあられるのだ。穂高嶽といふ名は、紀記の古典に見える高千穂嶽に、似た名で、神代の山名として、ふさはしいものである。

六、自然としての神河内

カミコウチの地形は、斷層谷の埋積盆地で、前穂高（三〇九〇米）の南に派出された一支峰、明神岳（二二六三米）の斷層崖下に、明神池が、梓川の右支流にあり、一ノ池、二ノ池、及び三ノ池に別れ、湖沼學者が「明神池湖群」と一括して呼ぶところに、カミコウチの神域的景象が、最も印象強く描き出され、白樺や化粧柳の幽林、又は石楠花の美しい群落が、池を圍んで、池畔には穂高明神の奥社が鎮座してゐる。一ノ池及び二ノ池の

間に、狹隘な水道があり、二ノ池と三ノ池の間には、溪流飛泉を懸けてゐる、又穂高の明神岳からは離れるが、梓川の左支流には、田代池があり、霞澤嶽が近く聳え、大正池は、讀んで字の如く大正年代に出来たものではあるが、焼嶽噴火のための堰止湖で、白樺の枯木などが、湖面の上に骨立してゐる。要するに、カミコウチ一帯は河内風景の尤も淨麗なるもので、之を横に兩斷すれば、一つは前穂高(明神岳を含む)をバツクにした明神池が上半部となり、他の一つは、霞澤嶽や焼岳をうしろに控ゑた田代池や大正池が、下半部の中心をなしてゐる。その兩者を繋ぐものは林道であるが、カミコウチの風景の魂は、私の見るところ、山では穂高であり、湖水では明神池であると思ふ。聖なる神河内を思慕する情魂も、實にこのところに停まる。形象語としての神河内に、一字の動搖を許さぬのも、穂高の山は神々しく、明神池の水は清淨感に充ち溢れてゐるからである。

幸田露伴氏は、徳本峠から始めて見た穂高岳に就いて

眼の前に開けた、深い廣い傾斜、其向ふの巍々堂々たる山、何といふ男らしい、神々しさを有つた嬉しい姿であらう。思はず、知らず、涙ぐましいやうな心持になつて、危く手をさしのべたいやうな氣がした。吾が魂に於て、彼を見たのか、彼に於て、吾が魂を看たのか、辨へがたいやうな瞬間であつた。

と感想を述べられてゐる。「神々しい姿」「涙ぐましい氣持」「吾が魂を看た」そして陶淵明の句ではないが、辯ぜんとして己を忘れた瞬間の神來は、詮じ來れば、穂高そのものから、隱身かくしんの神を認めたのである。

釋迢空氏の歌に

穂高嶽正目まなこに汝なれをあふぎ見れば生けらく神に似てあらずやも

人間が正目で穂高を仰ぎ視れば、生きたる神に似てゐると云ふのである、正目は靈魂の眼である、凡べての人間

が、さういふ風に、穂高を神々しく見るか否かは問題だが、更に古人に溯つて、文政年間に初めて穂高山の文章を書いた高島章貞の記事を讀んでも「穂高嶽ニ詣デ」「穂高神社ノ舊社ヲ尋ネ」「上古綿積神ノ子、穂高見ノ命雄據之地ナリ、其神孫數世、今ニ至ツテ此ニ存ス」「巖々タル神跡仰グ可キ哉」「深山ノ躰相、從來斯ノ若シト雖、更ニ又神靈アルガ如シ、嗚呼我穂高神岳、乾坤ノ精氣モ、ソレ此ニ鍾マレルカ、然ラズンバ嶽ト湖ト、何ゾ斯ノ若ク神靈ナラムヤ、其神靈ハ敬シテ遠カルベク、絶景ハ清ウシテ近ヅクベキ者、此神嶽也、吁靈ナル哉」等の文章を以て、神域の山谿觀を讚嘆してゐる。是れも、漢學者一流の誇張した文章として、一概に葬り去るには、神河内そのものの風景が、あまりに神々しいのを奈何ともし難い。

元來、神といふ語は、隠見かくしゆの意なりとも言はれ、古事記の開卷には「獨神成座而隱身也」と見えてゐる。山川湖沼の如き物體に、露骨には現はれてゐない。現身うつしの神といふのは、天皇である「大君は神にしませば」とある古歌は、それを莊重に讃えてゐる。高い處を上かみといふから、天皇を御上おかみと尊稱せられてゐる、だからと言つて上河内なる文字の關する限り、上は神の意味だとは言はない、上河内の上は、どこまでも上流の上である。それは北アルプスの上河内でも、南アルプスの上河内でも、通じてさうである。併し穂高や明神池が、神々しく清々しいのはさういふ物躰を通じて、隠れて見える神が、人間の魂の眼を通じて、古人にも今人でも、仰がれるからである。富士山が、昔から神山と言はれるのも、穂高が「此レ神嶽也」と讃へられたのも、精神美の山嶽であるからである。

いかに神河内の神なる文字を嫌ふ人でも、往古から、現在に亘る神に因みての地名を、抹殺することは出来ませぬ。

(イ) 穗高岳に、西・北・前・奥などいふ區分的稱呼を冠らせたのは、明治末期以來のことであるが、穗高に明神岳、又は御幣岳の舊名あることは、口碑又は文字として残つてゐるところで、現に明神岳の稱呼は、今の地圖にも記されてゐる。明神岳といふ名は、箱根の外輪山にもあるが、神河内の明神嶽は日本アルプスを通じて、唯一の神名を冠らされた山である、又御幣岳といふ名は、前記高島章貞の文にも「青天朗カナル日、偶然トシテ峻峰現ハル、目ヲ極メテ之ヲ望メバ、危削峙立シテ白幣ニ似タリ」とも見えてゐる。

(ロ) 嶽麓の湖水は、明神池とも、宮川の池とも呼ばれてゐる、明神池は、明神岳の稱呼から附帶した名であるか、或は穗高明神の祠が、湖邊にあるところから、池を明神池といひ、峰を明神岳と呼んだのか、順序は孰れにしても、神名を確認すべきである。

歌人窪田空穂氏は、大正二年八月に、カミコウチに入つたが、同氏の語るゝ所に依れば、同氏の父が、明治二十四五年の頃、牧場に適當な地を相して、カミコウチへ行かれたことがあるさうで、その空穂氏の「日本アルプスへ」の紀行文には、明神の池と書かれてゐる。

(ハ) 宮川池の名があり、その附近の小屋を宮川の小屋と呼んでゐる。宮川といふ名は、神社と極めて密接の關係があり、伊勢大廟に近いところに宮川があることは、普ねく人の知つてゐるところであるが、飛驒國の第一宮、水無明神(延喜式神名帳にある神)の鎮座ある山澗の流水を宮川と呼んでゐる、神社に詣でる途に宮峠があり、村を宮村と言つてゐる。穗高の宮川の池は、ウエストンの登山記にも見えてゐるし、明治三十九年の「山岳」には、河邨白水、林並木等も、宮川の池と記してゐられる。

(ニ) 明神池に穗高神社の奥の院たる、神祠を安置してあることは、苟くもカミコウチに遊んだ人は、皆知る

ところである。

以上、現地検分の地名であるが、穂高見命及び安曇族の過去に於ける治水、その他の功績より見るも、敬神の風俗厚き村民の口碑から見ると、官撰地誌たる「信府統記」の記述に、上河内又は上河内川の名がありながら、その以前の稱呼として神合地を特記してゐるところから見ると、又「善光寺名所圖會」の編者が、熱心に探求したカミコウチの記事に、神河内の名を出してゐるに見ても、記録的には古く（最古と斷言するには、もつと資料の蒐集を要する）且つ地形的には、河内の二字が、當然川の上流にして、山岳に圍繞された地形を意味するのだから上河内と言はなくても河内が既に上流なのであるから、重言の必要もなかるべく、穂高明神知ろし召すところの河内であるから、神河内又はその宛字としての、神合地が、自然と人間との有機的關係に、最も含蓄的であり、表現的の名である。

尙ほ「善光寺名所圖會」の神河内なる文字に就いて、圖會の作者を輕視することに依つて、神河内の名まで、輕視せんとする人があるかも知れないが、名所圖會の聞き書きは、あの時代としては、寧ろ駭くべき程、正確なもので、高瀬川の噴湯丘や霰石のことまで、詳密に記述してあるし、神河内に就いても、信府統記などより、一層詳しく、例へば明神池が三湖に分れ、上池、中池、下池と名づけて、各池の大きさを間數けんすうであらはし、石南花や柳林までを記述してゐるところは、恐らく本書が始めてであるかも知れないと思はれる。古人の知識慾と、それを獲得する熱心さは、驚嘆すべきものがある。

次手を以て、聊か古人のために惑ひを解いて置く。

之を要するに、神河内が、既存の名稱の中にあつては、最善の名なのである、勿論上高地が、一般に通用され

且つ公認(?)された名だから、上高地を使ふ人は、絶對的に多からうし、地理的の普通名詞、上河内を、その儘固有名詞に移して、上河内と呼ぶのも、地形に照らして合理的であるから、それもよからう。私は、他人がしがかり呼ぶことに、一々抗議する閑暇を有しないが、私としては、神河内の名が特色的で、且つ自然と神人を包含した深味のある名であると信じ、この佳名を永久に護るものである。

併し假に神河内の名よりも、上河内、上高地、又は其他の名が、遙かに古い文書地圖(恐らく刊行物以外の)に現はれた場合は、どうするかといふに、私は、その場合と雖も、形象文字として内容と魅力に富んだ神河内の名を採るに躊躇しないであらう。それを主張するに都合のいゝ一例として、私は鬼怒川（ヌカガハ）の名稱に就いて語りたい。キヌカハは、最も古く出た「和名抄」に依れば衣川である、一に絹川とも書かれてゐる、吉田東伍博士の「大日本地名辭書」に依れば「鬼怒は訛言に依る」と述べられてゐるから、典據から言へば、採られないかも知れないが、併し衣川或は絹川と、鬼怒川とでは、感じの上から言つて正反對になる、私は鬼怒川の文字の方に惹き寄せられる心的の響きを感じるが故に、假令遅れて作られた訛言的名稱であつても、鬼怒川と書くであらう。神河内の場合でも、上高地もしくは上河内に比して、崇高なる心的の響きが強い上に、神話的歴史的稱呼の傳統嚴然たるものがあるから、私に取つて神河内といふ土地は、唯一無二の神域でもあり、神河内といふ名は、犯す可らざる聖地を代表した名でもある。

七、結 語

以上の卑見を綜合して、私は左の如く言ふ。

(一) 上高地は、實際の地形と正反對の地名にして、カミコウチに對する宛字としては、最惡のもの、且つ未だ此地を知らざる人々に對して、錯誤感を與へたることあり、最も採る可らず。

(二) 上河内は、地形より見て正しく、言葉としても不合理ならず、他に「より善き古名」なき限りに於て、之を採るに吝かでないが、この土地に特殊なる景象を表現するところがないから、そこに充たされざる不満がある。

(三) 神河内は、穂高嶽と明神池（或は宮川池）と山水の雙絶を、おのづからその地名に包擁するのみならず穂高明神垂跡の聖業及び神代に於ける安曇族治水の功績を、その地名の内に表現してゐる、一谷地としての部分的地名、上河内に比べて、神話、傳説、歴史、及び實際の地形を具備する地名であるから、採つて以て、永久に使用すべき名であると信ずる。

最後に言ふ、現代は日本精神が高調せられ、殊に敬神崇祖の風、天下に起つて來たのは、大に嘉みすべきことではあるけれど、一方に於て、所謂時代の風潮に便乗して、神がかりの言論を振りかざし、動もすれば、自己陶醉に陥らんとする傾きがあるのは、私の蹙眉するところである。私自身も、自己陶醉の氣分なしとは言ひ兼ねるから、今に於て、神河内説を述ぶることは、却つて遠慮すべきに似てゐるが、私の神河内なる文字使用は、上高地のそれと同じく、遠く明治三十六年（今から四十年近くの前、世間が未だカミコウチの名を知らず、入山者も無かつた頃）から始つてゐるので、その時分は無自覺に上高地又は神河内を併用してゐた關係上、茲に僞名上高地を抹殺し、正名神河内を主張すると云ふ懺悔の意味も、兼ねてゐるが、旨とするところは、四十年前近くから持説として、神河内（「統記」の神合地）なる美名を、永久に保存且つ實際に使用するに在るのだから、こひねが

はくは、時局便乗の譏より免かるを得んか。

(完)

本文關係の私の最初の研究「上高地は神河内が正しき説」は、「山岳」第二十九年第一號(昭和九年五月)に載せ、後に拙著「アルピニストの手記」(昭和十一年八月初版、十四年六月普及版)に轉載してある。本文は前説と、成るべく重複しないやうに書いたから、不備の點は前説御參考を希ふ。

積雪期の臺灣山岳

神戸商業大學山岳部
昭和十一年春季山行

阿 部 武 道

一、遠征隊の輪廓

名 稱 神戸商業大學山岳部臺灣山岳遠征隊

隊の編制 隊長 山岳部長 田中薫。副隊長 山本明。隊員 土橋芳雄、石田正三、奥田五郎、阿部武道、丸山靜雄（信

州細野案内人）。隊友 足立源一郎、齋伯

目的 地 臺灣北部高山地帯、次高山（三九三一米）大霸尖山（三五七三米）南湖大山（三七九七米）

時 期 昭和十一年三月十六日 神戸出帆。四月十八日 神戸歸着。

足立齋伯は云はずと知れた、山を描いては當代の巨匠である。氏の参加が私達登山隊を特色づける上に於て、如何に効果があったかは今更らこゝに語るまでもない。私達がこの山旅に於て、臺灣山岳の持つ自然の美しさをきわめ、自稱風景讚美論者となりすまじ得たのも、氏の指導よろしきを得たからである。

信州細野部落の産、アルプス名案内人丸山靜男君は、また安曇節の名歌手である。臺灣の山で人夫に使ふのは蕃人達であるが、若し彼等が雪の山へ登るを肯じない場合を慮り、久しいお馴染の丸山君の参加を求めたのである。今後、宜蘭濁水の奥、ビヤナン社を訪れるもの、もしタイヤル青年の、さも安曇節に似たる歌謡を口づさむを耳にせば、これぞ我が「丸さん」こと

積雪期の臺灣山岳（阿部）

丸山君の影響である。

彼の地の山の月餘の旅に於いて

「そのいづれの瞬間を思ひ出しても何の悔ゆることのない、白日に露すとも何等不安を感じない生活」(スウイス日記序文より)を送り之に成功の秘訣の一つには、慈愛こもれる田中隊長の指揮統制の下に、足立菴伯と云ふこの上ない隊友をむかへ、それにアルプスの名案内人丸山君を加へた、私達の、臺灣山岳の美に優るとも劣らざる、蕃人を加へた、人の和の、美しさにあつたのではないかと思ふ。

尙、この行を實現するにあつて、援助を乞ふた諸先輩に對し、特に配慮を煩はした臺灣在住の諸氏に對し、感謝の意を表しつゝ、今や大陸の戦塵のうちに尊き使命を擔ひて奮闘せられて居るであらうところの我が友、當時の隊員山本明、土橋芳雄の兩君の爲に、又この旅行から歸るを喜び迎へし、併し今は榛名の麓ふるさとの丘に眠れる父の靈に、この一文を捧ぐ。

時の流れは又水の流るゝが如し、人の生の旅路もまた波瀾萬丈、誰れか天の一角に流星の運命を知らんや、私は感慨無量の心地にて、三年前の、あの時の古ぼうけた山日記を辿るのであつた。

二、遠征日誌

昭和十一年三月十六日 正午蓬來丸にて神戸港出帆。

十九日 基隆入港、直ちに臺北市外北投温泉へ、船旅の疲れを流す。

二十日 午前總督府理蕃課訪問、種々登山ルートの打合せをする。午後一〇・三五發にて臺中に南下、車中平塚長官を訪問挨拶す。

廿一日 午前三・〇〇臺中着、ガソリンカーで豊原へ、更にバスにて土牛に向ふ。途中、東勢郡役所を訪問、土牛より森林鐵道、終點の久良栖(クルス)より明治温泉へ徒歩。

廿二日 大甲溪の廻行を始む、ウライ、小澤臺を経て達見駐在所泊。

廿三日(晴) 達見、タバシ、佳陽、サラマオ、大保久を経て平岩山駐在所泊。午前一〇・三〇か、佳陽駐在所手前より遙か彼方に「臺灣の屋根の雪」南湖大山の雪帽を望む。

廿四日(晴後曇) 平岩山滞在、蕃社調査。

廿五日(曇後雨) 午前中蕃社調査、午後平岩山發ビヤナン鞍部へ、(一〇。〇)鞍部駐在所泊。

廿六日(晴後小雨) 南湖の登攀に踏出す、エキジユウ駐在所を右に折れて、エキジユウ溪湖行、ガン、テリユウ河畔

一三〇二米附近露營。

廿七日(晴後霧深し) (三〇。〇)急坂をキレットイへ、午後一・五〇、狩獵小屋着。

廿八日(晴) (一〇。〇)霧晴れ濁水の谷を距て、次高の大雪嶺を望む。ウラウキレットイの草原を経て「月の尾根」インタダシンバチンに至る、ダイヤルは三四〇〇米の雪田まで、それより隊員のみにてトランスポート、南湖大山北峰西肩に天幕をはる。

廿九日(快晴) (一。〇)北峰よりスキーにて氷河の香り、ブナツケイのカルボードンへ直滑行、更に主山下の大カールを経て主山南方のコルより登頂、午後一・三〇。

卅日(晴) 天幕撤收、キレットイへ

白山羊の捕物。

卅一日(霧後晴) エキジユウ溪をビヤナン社へ

四月一日 ビヤナン社にて一日休養。

二日(小雨) 出發が遅かつたのでビヤナン鞍部泊り。

三日(曇後晴) ミツピンの頭、松林の尾根を経て「新緑の櫛平」キャワン溪狩獵小屋。

四日(快晴) (三〇。〇)草尾根を傳ひタマラップの尾根に登り、タッタクシンダへ至る。水あり雪あり景色よし、こゝをきめて、

積雪期の臺灣山岳 (阿部)

二六

次高登攀のベースキャンプ地となす。

五日(霧雨後晴) ポチンシロンに登り次高及大霸を偵察す、午後はタイヤルスキー講習會開催。

大霸次高を二班に分けて登攀する事に決す、大霸班(リーダー 田中部長、足立實伯、土橋、石田、奥田)。次高班(リーダー

1 山本、阿部、丸山)

六日(晴後霧) (∞) B・Cよりバツパカ溪に下り三又點(三、三三〇米)へA・C(アドヴァンス・キャンプ)を設ける。シ

ミタを偵察に出かけたが霧深し(次高班)。同じくバツパカ溪に下りアスライユン峰下の茅原^{まはら}へA・Cを設置(大霸班)。

七日(快晴) 午前四・〇〇天幕發 シミタ、タラクシヤを経て午後二・三四、次高登頂東面カールを降り東尾根三〇四〇米で、

ビヴァーク(次高班)。午前七・〇〇天幕發、大霸へ登頂午後一・三〇 A・Cへ歸る(大霸班)。

八日(快晴) 東尾根を下りキャワン溪狩獵小屋へ(次高班)。A・Cより一同三又點へ向ふ。石田、土橋、ポチンシロンの稜線

を縦走しタッタクシンのB・Cへ、田中、足立、奥田、A・Cへ歸る(大霸班)。

九日(快晴) 連絡の爲シンタB・Cまで登る(次高班)。大霸班殘部のものシンタB・Cへ歸る(大霸班)。石田、奥田及タイヤル

は次高A・Cの撤收に向ひ、歸營後B・Cの撤收を行ひ、一同キャワン溪に下る。

十日(晴) ビヤナン鞍部を経てビヤナン社に歸る。

十一日(晴) 午前中蕃社の調査にすごし、午後出發シキクン駐在所泊り。

十二日 シキクン社より土場温泉へ。

十三日 森林鐵道で竹林へ、更に羅東へ出で臺北に歸る。

十四日 總督府訪問、警保局長の午餐會、夜は臺灣山岳會主催の歡迎會出席。

十五日 基隆港出帆。

十八日 神戸歸着。



南湖大山北峰下キャンプより主山を望む

田中 薫



大霸尖山西面

田中 薰

田中隊長は廿一日神戸入港の郵船朝日丸で歸着。足立嶺伯は十八日臺北發新高への登攀に向ふ。
使用人夫はクルス、ピヤナン鞍部問世五名(男女混合)、南湖、次高、大覇はピヤナン社青年各十七名。

三、紀 行

・雪への憧れ

一滴の水だになき赤肌の熱帯乾燥原の上に、獨り肅然として青空を摩する氷帽の高峯か、はたまた、菩提樹の葉蔭遙かに聳立する雪と氷の連嶺か、私達の夢想が、その何れにあつたにせよ、臺灣遠征を企てた動機と云へば熱帯の雪を踏んでみたいと云ふ熱情であつたのである。

そうした臺灣の雪に、限りなき思慕と憧れをいだいた私達であつたが、出發前に集め得た臺灣の山に関する雪の知識は、決して豊富とは云ひ得なかつた。その内容も十二月か、一月といつた積雪のいまだ絶無か、或は、あつてもほんの薄化粧程度の記録にすぎなかつた。こんな状態なので、登山用具の準備なども容易に決定しそうななかつたのである。

たま／＼上京した田中隊長を煩はして中央氣象臺の岡田博士などの意見を徴したのであるがその結果は、「雨であらう」との教示であり、又臺灣山岳の權威者鹿野理學士は、「降るのは雪であらう」との意見であり、この二權威の見解の相異にはいさゝか迷はざるを得なかつた。だが、結論としては、私達は此等兩説の折衷説にも等しい雲を豫想し、更に又、私達の乏しい經驗は「今年は全国的に雪が多かつた點からみて、臺灣の雪も日本アルプスの晩春から初夏へかけてと同じやうな雪質の積雪状態ではあるまいか」など、未だ見ぬ世界の積雪量につ

いてまでも大膽な憶測をしてみました。何故なら私達の期待してゐる臺灣山岳の獨自的な美しさも、熱帯蕃人人夫統制の登山的な面白味も雪なきものとしては考へ得られなかつたからである。

たとへ、私達を待つべき山々が、現實に赤裸の岩山であつたとしても、私達の頭を一杯にして居たものは、殘雪に照り輝きながら迎える筈の「臺灣の屋根」への想ひであつた。

以上の信念を心奥深く潛めて船中の人となつたものゝ相手は常夏の國、臺灣である。時折り襲ひ來る不安はこれをどうすることも出来なかつた。船室に積れた八臺のスキーを眺めても、第一臺灣航路にスキーを持ち込むといふことが、何か方向違ひの異端者的行爲であり、まして履物がおそろいのスキー靴と來て居るんだから、南の國への旅行者にふさわしい出立だなどとお世辭にも云へた恰好でない。

併し、私達のこうした雪饑飢の不安と脅怖とから救つてくれた第一報は、臺灣の新聞に出た雪の便りである。それは去る三月七日、合歡道路に七尺の積雪があつたと云ふのである。合歡は海拔三、四〇〇メートル程のところ、私達の目指す山はそれよりも北方にあつて而も更に五〇〇米高いところであつてみれば、毎日日照りが續いて融けて行くとしても、先ずく安心と云ふ譯である。

それ以來、船の南下し行くにつれ如何に寒暖計の水銀柱が上昇しやうと、「熱帯地風景を前景に見る白雪の山々」——こんな贅澤な思ひを彼の地の山にはせて、足立畫伯の繪の講義を聽くことの出来る私達になつたのである。

・南 國 の 装

旅はまず煙雨に包まれた基隆の入港からはじまる。若葉に煙る美しい雨脚の中にこゝ基隆の港は柔かな夢幻的

な畫像となつて、心靜かにながめ入る私達の心を捉えるのであつた。岩壁に並ぶ黝ずんだ赤煉瓦の家、眼にしみる様な若葉の並木、彩色面白きサンパンの波のうねりに身を委せたる風情など淡彩的な、南國の港にふさわしい情趣がある。

基隆に上ると直ぐ、臺北迄の汽車の窓からでも、始めて旅するものゝ眼を捉えるものは、近くの丘に茂れる低い緑木の中にあの廣い大きな裂葉を展げてゐる檳榔樹と竹林に圍まれ先祖を祀る廟を中心に兩翼へ建られた赤煉瓦造りの本島人の家とである。

細雨の中の田植え、見るからに豊かな蓬來米の實る田の面へ、薄紫、白、黒、桃色などとりどりの上衣に、中途半端な寛いズボン、芭蕉の笠と云ふいでたちの娘がセツセと立働いて居る風景、人間に對する好意と敵意とを物うい兩眼に浮べながら、あの灰色の體を泥水に浸し、もの愴く田の中を往復する水牛など、全て色彩的にも極めて芳醇なよきながめである。この人間世界と、自然の四圍のよく融合されたオリエンタルの景觀をとらえて、モンシンのだと稱しても、地理學者ならざる我が身とは云へ、あながち見當はずれの素人考へでもないらしい。もし幸ひその時迄に、パール・バックの一冊でも讀み了へてゐた私だつたら、きつとすばらしい空想を畫いたにちがいない。

臺北の並木道、カジマルの若葉も美しいものゝ一つである。

・ 山に向ふの日

雪の融けぬうちに一刻も早く心あせる私達であつたが、その前に是非とも済さねばならなかつたことは、總督府の理蕃課

に回頭して型通りの入審許可を得ること、高山地の旅行に就き地元警察官の世話を頼むことであつた。

大屯山の麓北投温泉に船旅の疲れを流した私達は翌廿六日、總督府を訪ねた。當の理蕃課では異口同音「暖くて雪などもうないでせうよ、何？ スキーを持って来た、もう少し早かつたらいいのに御氣の毒ですなあ」といふ意見が大部分を占め私達の雪の希望も少々あやしくなつてきた。

たゞ實踐家の平澤技師だけが「何あに、今年の大雪なら澤山残つて居ますよ」と、私達の味方だつた。そんな譯で、不安と希望をいただいたまゝに同夜臺北を出發したが汽車の窓は全部開けつばなしといふ暑さである。午前三時に着いた臺中の宿では蚊帳が吊つてあり、蒸し暑い夏の宵を思はず温氣だ。土牛で八仙山から木材を出して居る營林署の危氣な輕便鐵道に荷物を積み込む時などは流汗淋漓。眞晝近い日は中天に照りつけ、車窓から見える土埃の多い畑。沿線に隙間なく植えられた芭蕉の大きな葉が、むく／＼と湧く夏の雲を切つて早くも「臺灣の夏」を告げてゐる。

・大甲溪を行く

輕鐵の久良栖驛クウラスに降りるとクラススの蕃社がある。蕃社と云つても改良住宅で、パイヤがみのり、パイナツプルの畑があつたり、共同墓地が出来て居たりして、その生活は平地とかわりがない。何しろ五十個と云ふ大した荷物なので蕃人への分配作業に一汗かいてしまふ。こうして荷物は卅餘名の蕃人の肩へ、蕃社から蕃社へとリレ一式に私達の根據地とする平岩山まで、十五里二十町の道を運ばれて行くのである。荷物の中には逸物スキーも含まれて居る。そして大甲溪の素晴らしい溪谷美は、私達に此の三日路の山旅を酔はしむるのである。

大甲溪は源を北合歡山、中央尖山、次高に發し、大雪山、白姑大山間に岩盤を穿ちて、深谷をなし、臺中州に出て沃野を潤し、大甲郡の海に入る大河である。この上流の開けるあたりか、カヨー、サラマオ、シカヨーの部

落があり、最後に峠淋しきピヤナン鞍部に達するのである。

第一日の泊りは明治温泉に、翌朝は既に風俗を脱した溪谷の中を歩く私達であつた。ウライの蕃社に至れば奥地シカヨ一の娘達が出迎へ、クラスの蕃婦の運んで来た私達の荷物を引いでくれる。

溪の極致美は、此のウライから小澤臺駐在所に至る一里餘の間に止めを刺す。熱帯多雨樹ともおぼしき大樹、谷を埋め、蔓の木が縦横に懸り、オオクニワタリ等の大型の羊齒や、蘭の類が樹上に仰がれ、新緑は萌えて、山躑躅咲き、山の狭霧低迷して驚く可き高さに翠巒を仰がしめる。俯瞰すれば、松の樹間越しに溪の女性的な曲流をながめ得る。道はしつとりと濡れて、その忽ち盡くるところには鐵線橋と稱する所謂内地の釣橋が、目もくらむばかりの谷合にかゝつて、私達を霧の向ふに渡してくれる。本流を渡ること二回、支流を渡る事無数であつてその都度この鐵線橋を渡るのだが、ゆらり／＼と揺られながら、板子一枚下は地獄と觀念しつゝ、雨に濡れた敷板の上を足どりもおぼつかなく渡るのは全く命の縮む思ひがする。精神の統一が肝要で、橋の上から俯瞰して溪底の美を求めんなどゝ、そんな精神的餘裕はない。支那式に云へば肌あわを生ずと云つたところであらう。その尤なるものはクバン社に近きクバン橋であつて、延長實に二三〇米、溪底よりの高さ一二〇米といふすごさである。黒部の吊橋に馴れてゐる筈の「丸さん」も此の驚くべき鐵線橋には肝をつぶし大いに敬意を拂つてゐるから面白い。

この釣橋渡りにも大分熟達したと思ふ頃、谷は漸く開け、森林美の潤ひも、深谷のするどさも失はれ、これにかわるに河岸段丘の廣がりとなる。既に溪谷の美はないけれど、閑谿な山間平野を、五指に開いた如き支流で潤し、豊富な蕃人の焼畑耕作が、これに織りなして、自からそこに水系の一大別天地を作つて居る。粟みのる佳陽

社も、みめうるわしき乙女住むシカヨウ社も、恰も桃源郷の如く此の別天地にある蕃社なのだ。この自然の與へたるひろがり、そこに續ける原始色豊かな蕃人の生活が渾然一體となつて居る景觀こそ、臺灣山岳奥地深く、今なほ残されて居る獨特なものなのだ。私達が蕃人の存在を思惟の外に於て臺灣の山を思ふことの不可なる所以も實にこゝに存するのである。「臺灣の山と蕃人」その言葉のその響のまゝに「在る」のが臺灣山岳だと云ひ得やう。

臺灣の溪の美しさはその大いさと深さにある。そしてそれを覆ふ樹木の潤みにある。又構造的には高山地の入口から上流にかけてしばしば峡谷を形成し、この峡谷部より上流源流にかけて穩かな河岸段丘の展開となる。この特色ある景觀の成因を尋ねれば、臺灣の新しい全般的な隆起運動により、特に隆起の著るしい部分が高山地の入口に存するが爲に、流水岩層を穿ちて深谷を曲流するのである。この現象は、大甲溪のみにかぎらずクロロ溪に於ても認め得るそうである。

・ 聖雪をみる

大甲溪を溯つて三日目のこと、佳陽社に近づいた頃だつたらう。大甲溪のいくつも重り合つた緑の段丘の果に、遠くキラリと光るものが亂雲の中に望まれた。

「雪じやないか」

誰れ云ふともなく、同じ心で凝視してゐるうちに雲の隙間は段々と開けて、まず薄青の山容が現はれた。そして上部を覆つてゐた雲が靜かに昇つて行くにつれて其處には待ちにまつた、白雪が、しかもベツトリと山嶺を塗りこめてゐるではないか。私

達はひれ伏しおがみたい氣持になつた。私達は歡聲を擧げて立ち止つた。眼を凝らして眺め入つた。確かに南湖大山南西面の残雪である。私達はこの二つの眼のうちで、今こゝに臺灣の雪、熱帯の雪をみたのである。不安は根元から吹きとばされてしまつた。三日の船路、二日の炎熱、更に三日の山旅、その後、漸く望み見た貴い聖雪なのであつた。

然しその雪が未だ如何に遠い／＼雪であつたことか、私達が愈々その雪を現實に手につかみ、足に踏むことの出來たのはそれから五日の後であつたのだ。

つき／＼に訪れた佳陽、サラマオあたりの駐在所になると流石に山馴れのした人達ばかりと思はれた。

「雪が降りますか」と問へば、

「今年は特に大雪でしたよ、五寸も積りましたからね。山もこれでは雪が多いことでせうよ」と雪の降るのが當り前のやうに答へてくれる。

一緒に歩いてゐるシカヨウの娘達に「次高に雪ある」と聞くと、「とても多いよ、私達は行けないが兄さん達が皆んなと行きますよ」と答へてゐた。

憧れに憧れ、待ちに待つた臺灣の雪、逸る心をおさえて歩調も軽い私達であつた。

・ 吹きしづくピヤナン越

もう晴れさうなものだと思つた二十五日は却つてうすら寒い日であつた、雲は低くたれこめ又吹く風も冷い。早朝に私達の荷物を鞍部に運んだ娘達が三々伍々と歸つて來るのに會ふ。「鞍部は雨が降つてるヨ、寒いヨ」など、彼女等一流の人なつこい日本語で何となく別れを惜んで行きすぎるのに、ふと遠い旅愁に似たものを甦らせる。

ピヤナン越は中央山脈と次高山脈とを繋ぐ支脈の上にあつて、臺北州と臺中州の州境に當つて居る。能高越、

關山越、八通越などゝともに代表的な峠の一つであるが、地圖の上からでも、概そ、その見當はつくやうに、景色の點から云へば變化に乏しい平凡な峠道である。この峠のよさは晴れた日の眺望にあるのではなくして、雲の動く日の霧の走る日の、荒れすさぶ日の、旅人の心のうちにあるのではなからうか。北に開く宜蘭濁水の谷からは雨期に屬する北部海岸の水蒸氣が洪水の如く押し寄せ、天氣晴朗な臺中から吹き送る南の風と猛烈な鬭争を行ふのが此のピヤナン鞍部なのだ。

今迄登りつめた大甲溪あたりの活々とした初夏の勞働氣に比べて、こゝピヤナン鞍部は何んと冬めいた淋しい峠であらう。

峠の向ふのピヤナン社から十七人の若者をつれて蕃人出身の岸本巡查が登つて來た。吹きしぶく雨も冷し、ぬれた幅広い蕃布を肌身に纏ひ乍ら「寒いよ」「寒いよ」とタイヤル達は震え上る。それに宿舍となる駐在所が目下建直しを行つて居る様な廢屋なので板目の隙間も峠越の風は私達に臺灣の冬を泌々と味はせてくれるのであつた。松林を打つ佗しい雨の響は組しやすいなどゝと云ふ輕薄な心をすつかり抑へて、その夜寒さの餘り毛皮のコートを着込んだ私達は萬事慎重にと作戦計畫を練るのであつた。

先づ大物の次高山を執拗に攻撃し、餘日あらば南湖大山を片附けて凱歌を揚げやうと云ふのが最初のプランであつたが、こゝでの相談の結果は、はじめの豫定を逆にし、南湖大山を先に登り、その經驗を以つて次高山をアタックすることに決した。

それは、タイヤル達が到底雪の中で有効に使へそうもないと云ふ理蕃當事者達の意見が相當に強硬だつたのと山岳地帯の積雪が豫想以外に多かつたからである。それに南湖大山へは田中隊長も已に登り、山の様子も大體判

つて居るし、之等色々の點を考へ合せてまず「臺灣の雪山」のテストと云つた意味で、登山的に容易な南湖大山が選ばれたのである。

・タイヤルの若者

翌廿六日、鞍部には依然霧の往來が早い。タイヤル達に山と積れた荷物の分配を終つて總員廿六名裸形の行列は一路鞍部を北方の谷、濁水の谷へ下る。西流するエキジュー溪との合流點に至り、更にこの溪底を廻行し午後一時頃ガウン・テリユウと云ふ溪の傍、タイヤルの狩獵道が溪から離れる最後の地點に到達する。この日の中にキレットイの泊り場まで行かふとの私達の豫定だつたが、タイヤル達は

「出發が遅かつたからもう上へは行けないよ」

と主張し、岸本巡查の制止も聞かで、てんでの荷物を河原に投げ出し早くも小屋掛けを始めてしまつた。

蕃人と云ふ奴は奇妙な人種である。組し易しと、私達が嘗められて居る譯でもあるまいが、朝發つ時天氣が少しでも悪るれば出盡るし、やれ荷が重い、道が滑るの、と云つて十分も歩かぬ中に休息すると云つた調子である。それで彼等は怠者の弱虫かと思ふとさうでもないらしい。現に私達がこの溪を來る間にも幾つかのせうらぎを渡させねばならなかつた。併しその都度、蕃人は私達を脊負つて渡してくれた。だから靴も濡らさずこゝまでやつて來たのである、全く頼もしい可愛い奴なのだ。

彼等の小屋掛け作業も實に素晴らしき見物である。今私達の目の前に建設中の小屋掛けも彼等の狩獵小屋として山中普通何處にでもみられるものなんだらうが、其の構造はこんな風である。

逞しい腕程の太さの木を蕃刀で切り倒し、長さ六尺ぐらひにはらつたものを兩脇に二本並べ立て、横木を渡し此れを表口として、背後へ長い丸太をもたせかけ、片屋根にしその上へ茅を幾重にも並べればそれで立派な一坪餘りの小屋が出来るのである。

又小屋掛け材料集めの方をみるとなか／＼面白い。この霧小便の中で木を切り倒したり、茅を刈り集めたりすることは、決して愉快な仕事ではあり得ない。だが、彼等はまさしく反對だ。昔の首狩時代の秘傳を知つてか知らずか、彼等の蕃刀(ラ、オ)の冴は素晴らしい。蕃刀は男の魂、日本刀の様なもので、必らず腰に横へ、總ての仕事をそれ一つで足すと云つた、所謂萬刀なのだ。併し出来は至つて粗雑らしく、私達が振り廻したつてろくに木一本切れぬ代物である。その使用方法には彼等獨特の極意と要領があるらしい。彼等が使へば小屋掛の柱など切り集めることなどは、ほんの一吋した運動に過ぎないのだ。

面白いことは彼等が小屋がけすることを勞働と思つて居ないことである。勞働の經濟學定義そんな難しいものはないんだから愉快である。實に嬉々として各々力業を楽しんで居る。むしろ遊戯と云つた方が適切であらう。だから手近に立木がいくらでもあるのに態々河を渡つて遙か遠方の大木を切りに出かけるのがあるかと思ふと、斷崖の上に乗出した立木の上に登つて猿の様に木を揺つてゐるものもあり、刈り集めた丈餘の茅を束にして、それに乗つて崖を上り、落ちて來るものもある。全く我々文明人には解しかねる、まるで一群の猿が遊んでゐる様なものだ。それでゐて、仕事は案外組織だつて居るらしいから不思議である。無規律の様にみえて、彼等相互には木を切るもの、茅を刈るもの、柱を立てるものと、分業が暗黙の中に確立して居るのだ。私達が煙草を燻らして居る、ものゝ三十分とたゞぬ間に、次々と六軒の小屋を美事に完成してしまつた鮮やかさが、何よりの證據

である。

文明社會の惱みの謎のうちにも案外蕃人どもがあつさり片付けてゐるものがあるのではなからうか。

もし私達にやらせたんだら、ろくに一軒も立てずに疲れてしまふか、議論百出、建る段取りにまで進まないのがオチである。この點口先ばかり多くして實行の伴はない連中は、タイヤルにも劣る譯である、だからそう云つた人種は餘程猿屬に近いものと思れる。そんな風に蕃人達が日常茶飯事と心得てゐる習性の中には案外私達にチクリと痛くひびくものが多い。彼等と共同の生活に於て、私は唯の一度も彼等仲間通しの蔭口や悪口を言ひ合ふのを耳にしなかつた。世塵に汚染せざる彼等の心情こそそのまゝに私は清潔なものとして、又ねたましいものとしてながめたのであつた。そして彼等の純情こそ、永遠にあれかしと心奥深く念するのであつた。彼等が眞に愛すべき人間であることは、こうして山に入り生活を共にしなければわからないと云ふがそれは本當だと思ふ。かくして私達は、タイヤル即製の小屋に此宵一夜の夢を結ぶことゝなつた。さつきから降り出した小雨は眞新しい茅屋根に小氣味よい音を立て、降り注いでゐる。タイヤル達の小屋から粟煮たきの紫煙がゆるやかに立昇つて冷えきつた灰色の谷に一脈の動きをみせてゐる。

・ 狩 獵 の 路

幸ひ夜來の雨も納まつて爽涼な谷間の朝が訪れた。今日はキレットイの泊場に通ずるタイヤル達の狩獵道を進むのである。朝、早起きを以て誇るタイヤル達が馬鹿に靜かなので、岸本巡查をやつて聞いて見ると彼等の團長格であるピロノームンが腹痛で動けないと云ふのだ。折よく私達の小屋にやつて來たタイヤルの一人をつかまへて

「ピロだけ後から来る様にして出發してはどうか」と詰問すると

「團長が行かなければ行かないよ。ピロは私達の團長よ」

と、私達の不用意の言葉はものゝ美事逆襲された。併し、與へた薬が效あつてか「ピロ」の腹痛も治つて、どうやら九時頃には森林帯の急坂の登りにかゝることが出來た。鬱蒼たる密林中を行くので別に暑さなどは感じない。一帶に此の附近は濕氣が多い爲、木立には青々と苔がまとひつき、枝と云ふ枝にはサルオガセがゆらめき、淡日がさすと、鳥が歌ひ、足許にはエビネランの白紫の可憐な花が今を盛りと咲き誇り、臺灣緋櫻のほころびも濃紅色に、樹木の間から紫紺の遠山を垣間見ると云つた、歩くにもよしまだ語るにもよき林間道である。タイヤルに追ひつ、追はれつ、先はしれてゐる今日の行程だから、一服、一服、煙草を喫つては立どまり、お茶をのんでは感激し、花が可憐だと云つては又感激し、遠仕込みの植物學者や風景畫家のさかんに出沒するのも、このあたりの潤ひある環境のしからしむるところか。こんなのび／＼した豊かな気分は到底内地の禿山では味へない樂しさだ。

そんな低ビツチの私達ではあつたが、やがてこの森林帯もつきて草原に出た。キレットイの泊場とはこの草原の廣がりにある狩獵に使ふ常設小屋を云ふのである。

先着のタイヤル達はもう薪木を造つてゐるのだらう。下の雜木林から斧刀の亂舞する音が絶へ間なく聞えてくる。

廿七日の夜はこゝキレットイの小屋を包んだ霧と共に更けて行くのであつた。明日は愈々雪線の上に出るのだ。

・白雪の連嶺展望

廿七日の朝、霧が頻りに動く。その霧が見る間に晴れて、目を疑ふ程の大景觀が私達の眼前に展開されたのであつた。

それは次高から大覇に至る「聖なる稜線」が純白な積雪に打續く絶巔を輝かせて颯颯と渦巻く瀟雲の中にその巨體を現したからだ。思へば如何に長い山旅を續けて來たことか。神戸出發以來船路三日、臺北を發つて山路八日そして初めて接する此の大展望である。大甲溪溯行の途上、廿三日に南湖大山の雪冠を遙かにカヨウから遠望して以來、山々は常に雪線以上を密雲に閉されてその片鱗さへも私達に垣間見る事を許さなかつた。しかし、今ゆくりなくも面と向つたこの雪嶺のかたちづくる偉大なる形象に、私達は唯々感激の沈黙をしばし續けるのみであつた。遙かに來たと云ふ感、それは此の南國の山を眺める私達の心に一種の快い感傷を植ゑつけずには置かない。臺灣の地を踏んで十日の後であつたからと云ひ、その肉體的アルバイトの代償として、あまんどて享けるには餘りにも大きな贈物だつたのである。もし我が造り主たる神がその創造する大自然の榮光と讚美との爲に人間を地に送りしものとすれば、ダーズリンからみたヒマラヤの連嶺にも似たこの偉大なる作品に對し私達は絶大の讚美をおしまぬであらう。

それは西の空一杯に立ちふさがり、全長八十軒に連亘する三千八百米内外の山稜を以て驚く可き高壁を形作る。そしてこの高壁の大部分は濃紺の熱帯色に塗り潰され、水平にも近き一線によつて上層部は白雪の世界と劃せられる。この線は凡そ三千三百米ともおぼしき高さに横一文字に引かれてゐる。この甚だ特色ある雄大なる景觀はまさしく「臺灣の屋根」と云ふ言葉にふさわしい。

・ビヤツチンの尾根

キレットイからの登山道は草付と喬木帯を交互にのぼる急坂である。しばらくすると長閑な高原に出る。ウラ

オキレットイと云ふ。この様に三千米以上の高所に亂雲と巨峰を背景にして一面の草原が開け、百合の花が咲き亂れてゐるなど、云つた風景は内地では一寸想像しかねるが、傍のタイヤルの説明によれば、彼等が狩獵の必要上から森林を焼き拂つたが爲に生じたものらしい。その方法は斯うである。森林を焼き拂つて空地を作り、森林との境に小舎を立て、若草を食べに集る野獸を撃つのである。つまり一種の「獸寄せ」の方法らしい。近年焼いた跡には黒焦げの立木があるから直ぐそれと判る。蕃人の生活はこんな高所までも、奥深く浸透してゐるのである。併しながらその蕃人の生活形態は原始的であるからそう云つた草原にも單なる素朴な狩獵小舎を作るにとゞめ決して風景を傷けない。むしろ却つて大切な景觀要素となつてゐるのである。だから趣味の點で「こゝは天下の絶景かな」などと稱し盛んに繪看板やポスターをはりつけ、おまけにコンクリートのベンチまで作つて甚だしく風致を害する人種とは大分違ふらしい。

晴れ行く空に流れるコバルト、皆の氣分が期せずして軽く、此のウラオ・キレットイの高原で、蕃人對日本人の草角力を始めてしまつた。私達は祖國の名譽の爲に力闘したのであつたが、力量の相違は致し方なく日本軍總敗の形だつた。これは育ちによるものらしい。

これからが森林帯の急坂で、標高三千米に近い林相を示し、高さ五十米もある美事なニヒタカトママツがサルオガセを一杯纏つて直立し、下生えに石楠が枝をくねらせてゐると云つた風景だ。

正午頃、最後の急坂を登り了へ、森林帯を脱して明るい草尾根に出た。第一に私達を狂喜させたものは茲に始めて全容を現した、南湖大山主峯と中央尖山とであつた。南湖の主峯は北西面をこちらにむけて居るが、新雪に輝き白と黒との明暗も鮮かに秀麗な威容を中天にかゝけてゐる。銳角的な中央尖山は南アルプスの北岳にさも似

たる山容である。美しき白雪に織なす縞模様の大塊を何等憚ることなく天空に晒す此の山の雄姿に心を奪はれぬ者はないであらう。この日得た第二の感激は直ちに影像となり繪畫となつてフィルムに移り又紙面の上を走る。

私達の睡めを恣にしてゐる場所は實によい處だ。岸本巡查の心許ない日本語の説明によると、インタタ、シンバジンと云ふ處だそうで、その意味は「卵」と云ふことで、それは昔タイヤルの先祖が此の山へ来て焚火をし、その下の熱い土を掘り、その中にガヘイ（芋）を埋めて蒸し焼にして食つた。芋は卵に通じ更に卵は月に通ずるのだと云ふヤヤコシイいわれがある。蕃人の心理はロマンチックである。この説話を聞いて居ると、萬物全て圓くなつてみえて來るから不思議である。芋は圓い卵も圓いし、日も圓い、岸本さんの頭はなほ圓い。私達はのどかな歩みを運びつゝ、こんな他愛のない連想にふけりながらそのなごやかな気分を楽しんだ。タイヤル達は此の附近で小屋掛けすると云つて彼等の荷物を全部抛棄し、私達の荷物だけを擔いで歩きだした。この緩やかな草尾根は明日になれば、私達を南湖大山に導いてくれる筈である。

・タイヤルと雪

南湖大山の雪を撫でて吹く風は冷やかである。タイヤル達は「寒いよ、寒いよ」と小走り氣味にゆく。元氣そうな青年をつかまえて

「毛皮も、ズボンも、靴もかしてやるから、一度雪の中へ来て見ないか。若し誰れか南湖の頂へでも立てばピヤナン社の連中は偉い／＼と賞めるだらう」と、こうおだてあげて色々交渉するが

「雪は滑るから死んでしまふよ、皆んなも行くのをやめたらどうか……私達が南湖大山へ登つたつて誰もえらいと云ふものか、そんなことえらくないよ」と、劍もほるゝの挨拶だ。

初めの雪田は午後二時頃に來た。標高三二九〇メートルである。待望の雪、これが臺灣の雪かと争つて口に入れる。ザラメの粒の荒い清淨な雪であつた。臺灣の道松とも云ふべきビヤクシンヤ、ナンコシヤクナゲも此邊から姿を現し、日ざしは暖くとも気温は十四度位でもう汗も出ない。

草原の窪地をうめる雪田も愈々その数を増して來る。タイヤル達もそろ／＼へツビリ腰だ。雪のあるところは敬遠して一々迂回して登つて行くが次第に足の踏み入れ場がなくなつて來る。案の定少し行つたところで座はり込んでしまつた。

「此から先に行くに死んでしまふヨ」「こゝまでヨ／＼」と愚圖付いてゐる。

併しこんな所からこちらへ荷物を廻されてはとでもたまらぬので、岸本巡查を督勵してどうやら腰をあげさすことに成功したが、ものゝ五〇〇米も行かぬうちに第二のストライキが始まつた。もうどう宥めすかしても動きそうにない。私達がトランスポートを始めやうとする北峯の岩場迄はまだひとつ突起を越さねばならぬのだ。然しこの調子では暖簾に腕押しで一向埒があきそうにない。遂に斷念し私達でトランスポートを開始することに決心した。

「じや皆んな荷物を置き、雪など恐ろしがつてタイヤル青年弱いぞ」と捨臺詞を残して荷物の整理に取掛らうとした途端、今までガヤ／＼騒いでゐたのが急に靜まつたと思ふと、沈黙の勇者精悍そのもの「ピロ」が眞先に脱兎の如く雪田の中に飛び込んで行つた。續いてタヂン、ピサヲ、ユカン……の面々、無言のまゝ續々とこれに従ふ。無垢の雪田は忽ち彼等の足形に亂れ、裸足で雪田をトラバースした彼等は前の急斜面の草附を息をもつかずに登つてゐる。「タイヤル弱いぞ」の一言が痛く彼等の心臓を刺戟したらしい。

先天的に雪を恐れてゐるのであらうか、或ひは先祖の掟に従つて雪山に近寄らうとしないのか、彼等は極度に雪を恐がる。併しこんな風に彼等の自尊心に訴へ、逆効果をねらふと幾何か效目があるらしい。彼等の雪を恐れる理由。そのうちには次のやうな悲しい物語が含まれてゐる。

昔ピヤナン社にバトレエスとセツヤユツと云ふ二人の獵夫があつた。或る年の冬彼等二人は鹿を追ひ求めて次高の山麓奥深く分け行つた。ところが俄かに大雪となつて襲ひ來る寒氣と荒れすさぶ吹雪は彼等を絶對絶命に陥し入れてしまつた。鐵砲の臺尻を蕃刀で削つて彼等は火を起さんと試みた。しかしその努力も全く空しくつた。雪の一夜が明けるとバトレエスは無慘にも屍體となつて雪の中に埋もれてゐた。セツヤユツは半死半生でピヤナン社まで辿りついたそうである。

この遭難が彼等タイヤルに與へた影響は非常なものであつた。親は子につげ、子は孫につげ、それは脈打つ血筋の流れとなつて本能にも近き彼等の雪の恐怖をきづきあげてしまつた。

蕃社に雪が降ると彼等は絶對に屋外に出ないさうである。それ程雪を恐れる彼等が、いざ雪に直面してどんな感情の動きをみせるであらうか、又彼等をポーターとして使用する實際上、どんな風に誘導したら、雪の上を歩かせることが出来るだらうか、と云ふ課題は、この遠征に於ける最も重要なそとして興味あるものゝ一つであつたのである。

かうして荷物は大體豫定の高所まであげる事が出來た。風は吹きつゝのり、半裸の彼等には大分こたえるらしい。ピヤクシンの木蔭に火を焚いて丸く跼つて居る。高度三五四〇米、氣溫四度、午後三時三十分、南湖北峯に續く雪嶺の上である。此處から先は獨力で登る他はない。タイヤルは先刻のピヤツチンの尾根の下方、森林中にあるタツタツクレジエツクの小屋場に歸すことゝする。

田中隊長が雪田で一寸スキーを穿いてみせる。蕃人はそれまで何するものか判らなかつた此の長い棒切がスル／＼と走り出すのを見てすっかり驚嘆してしまつた。そして云ふことに

「マタナク・オットフ（あれはオットフだ）」

「人間のものではない」

「登つて行くのは田中先生だが滑つて来るのはオットフよ」と。

「オットフ」と云ふのは彼等の神である。祖先の靈であり、絶対命令であり、信仰の中心であり、道德の根源である。まさしくスキーそのものに神性を見出したにちがひないのだ。思へば遙々と大甲溪を溯る道々、活動寫眞の三脚と思はれ、時には測量用具と間違へられ、内地人にすら天幕の枠かと思はれた薄幸のスキーが、ところもあらうに此の臺灣の屋根の上に来て初めてその神性を現し遂にオットフとして蕃人の上に君臨するに至つたとは、全く愉快な話である。これが本當の「スキーの驚異」だ。

震へて居る彼等に藁靴を與へ「もう歸つて良い」と云ふと彼等は蜘蛛の子を散す様に先を争つて飛んで行つてしまつた。美事な總退却だ。

不要品は出来るだけ省き、必需品のみに整理したのであつたが、それでも可成りの荷物になつてしまつた。春のザラメ雪もそろそろ凍り始め、所々岩場も交へた尾根なので餘程注意が肝要だ。それに荷物の上にはしばりつけたスキーはルンゼの登攀にはまことに厄介な代物だつた。

豫定の泊り場はブナツケと云ふのに夕闇は手間どる私達に遠慮もなくしのび寄つて来るのであつた。

日輪は既に西に落ちて、目指す南湖の主峯がバラ色の夕映えを染め出してゐる。雲海を抑へて夕空に抜ん出た此の雪稜の上から、日没後の次高山脈を再び私達は眺めやつた。無言、遠山の雪は燠銀に暮れて、そこはかとなき悠久な一日の臨終である。この莊嚴な山岳展望を前にして……。

そしてこの靜思の一瞬時に於て地球が廻るんだとは誰れが考へ得やう。科學者の頭の行過ぎとしか思へない。

此處三六〇メートルの雪の尾根。荷物も重く、豫定のブナツケの泊り場までは、まだ相當かゝるらしいので、遂に天幕をはることゝする。

幸ひ眺え向の雪の平がみつかり、ピヤクシンの叢林で西と東の風を完全に防いでゐる。而も南方は谷に開いてその窓一杯に南湖大山の主峯を眺め得る理想的な地位をしめてゐる。気温はマイナス三度。併し天幕の中は丸型の高い天井、その内に八人が車座になつて、小さな石油コンロを圍むと、温度はグン／＼昇つて廿三度に達し皆暑い／＼と云つて上衣を脱ぐ仕末。こゝだけはものすごい熱帯だ。

寝仕度にかゝれば、月は中天に牙え、皇辰は天界に散り、遠征の思ひを愈々高めてくれるのであつた。

・雪の殿堂

廿九日の朝は南湖主峯の薔薇色にあける。山々はその谷を未だ夜來の影に沈め、山頂から山腹へとジリジリと光が占領して行く莊嚴な一時である。已に足立畫伯は凍える手に彩管を揮つてゐる。

気温マイナス二度。凍りつく雪嶺の一角にたてば、今や次高の大連嶺が、その姿體を旭光にそめて赤、紫、薄青と美しい朝の交響詩のうちにある。さすが臺灣の褶曲は大きい。谷の大いさ、山容の偉大さ、雲影一つだに認めぬこの朝の天空の下に畫き出された大觀。朝の光りが雪面に踊つて、プラチナの様な光の粒をちりばめた雪の鋭角が碧空に切り込んでゐる美しさ。その限界線を破つて八ツのシュタイグアイゼンがぐさり／＼と踏みこまれ、私達は譯もなく南湖北峯（三六三三メートル）の上に出た。

こゝからは茫漠たる南湖の一圓が眼下に展開され、内顧的な眺めをなす。主峯直下の大カール、東峯のカール

など快い白銀のカーブをみせて、早くも私達の心をスキーに奪ふ。今私達の立つ北峯直下のカールも、その東面を朝の太陽に向け雪質はゆるみスキーにはもつてこいだ。もう物足らぬ斑雪ではなくして、一度スキーを驅れば一聯のボーゲンが三百米のシュプールを曳いて、眼の下でナツケーの石室まで切つて落され様と云ふのである。已にアイゼンをスキーにはき替えた友の二、三は「オーイ、よく滑るぞ」の一言を残して舞ふ様に前の斜面から消えて行く。

降り切つたところは摺鉢の底の様ところで、昔からブナツケの泊場と云つて居る。以前蕃人の狩獵小屋があつたが、そこへ最近臺灣山岳會の立派な小屋が出来た。地を深く掘り下げ、低くつくつてあるので雪の害は少しも受けてゐないが、唯内部に雪融水がたまつて居て一寸泊れそうもない。天氣はよし、春の日は永し、こゝカールボーデンの憩は實に長閑である。

こゝからは主山の三角櫓がはつきりと望まれ、私達の征頂慾に拍車をかけるべきであるが、皆完全にのびてしまつて誰れも動かうとしない。何しろ昨夜は通常四人入りの球型天幕に八人も納つたのでこの無理がたゞつて誰れも充分眠つて居ない。ともすればこのおほらかな圀谷底の小春日和が私達を心地よい睡魔に誘惑する。

すつかりのびてしまつた私達であつたが、そのうちに霧の小さな塊が山頂をかすめるやうになつた。それに午後になると天候が崩れ出すのは一般の山の常なので「それでは……」と漸く主峯に向つておみこしを上げた。

主峯からダラ／＼と東方に落した雪の線が一寸水平になつた處がコルになつて居る。此のコル目指してスキーの歩を運んで行く。

すると「オーイ／＼」と何處からか私達を呼んでゐる聲がする。蕃人も入らぬこの雪山の聖地に、私達以外に人影のあり得

やう管がない。「變だなあ」と聲の主を探すと居た、居た、先刻私達の下つて来た北峯のカールの上にそれとおぼしきものが認められる。しかも大急ぎで下つて来る様子だ。

「誰れだらう、ひよつとしたら岸本巡查じゃないか」と凝視してゐると、腰のあたりにピカ／＼時々光るものがある。

「おい、あれはサーベルだ。岸本さんだ。岸本さんだ」と誰れかゞ云つて居る間に顔が見える程相手は近くまで下つて来た。正しく岸本さんだ。ニコニコ笑つて地下足袋のまゝ雪の中を走つて来る。どうしたのかと聞くと、

「ダイヤル達があまりあなた方を氣遣ふので出かけて来た」とのことである。

私達を思ふのあまり岸本巡查は雪山の恐怖を克服して單身こゝまで登つて来てくれたのだ。岸本さんの親切もさることながら、蕃人達の私達を氣遣ふ心はやさしいものである。同行してコル迄登りスキーなどをみせて喜ばせた上、ダイヤル達に安心してゐるやうとの傳言を託してインタシンバジンに引かへしてもらふ。

小屋の附近で五尺程の雪は次第に深くなつて、このコル附近ではもう巨大な岩塊が雪面に一寸顔を出してゐる以外は白銀一色である。浅い表層雪崩が主峯側から盛んに出てゐる。強い太陽熱の故か雪質は緩んで、眼の前に緩漫な呑氣な雪崩がサラ／＼と音立てゝ流れてゐるものもある。霧の出方も先刻より餘程多く、主山の頭をすつかり包んでしまつたので今は一刻の猶豫もならぬと、南肩向つてジクザクを切る。雪質のせいか、ともすればスキーをさらわれがちだ。肩からアイゼンも使わずスキー靴のまゝで三角點に北上する。一時四十分三七九八米南湖大山頂上に達する。餘りたやすいので何んだかあつけない氣がする。折角、はる／＼海を渡つてやつて来たんだからもう少し手應へがあつた方がよさそうだ。併しその様にたやすく山頂をきわめ得たのも、恵れた今日の天候の賜の如く考へられる。何故ならこの山嶺の東南に向つて發達して居る雪庇の大いさからしても、又丈餘の三角櫓に之れと丈比べする位の高さに西の側から巨大な雪塔が取り付いてゐるのをみても、荒れる日の、風のある

日のこの山嶺は仲々組しやすしとは思れない。

積雪は頂上のあたりで八、九尺に達し、山頂は丁度雪帽子を被つた様になつてゐる。この山にこんな豊富な雪を供給するものはきつと宜蘭濁水の谷を北から南に入つて来て、ピヤナン鞍部の上に乗り上げて来る泉の様に盡きない霧の海に相違ない。霧氷の發達と云ひ、山頂部の雪の多さと云ひ、内地の藏王邊りにみる景觀と相似通ふものがある。

霧が盛んに湧き出し、視界を狭め、下りは白霧の中の滑降となつて忽ちコルからブナツケの小屋迄直滑降に、ボーゲンに思ひ／＼のコースを執つて降つてしまつた。

山はやさしいが、三五〇〇米の高處スキーであるせいか、それに縦横無盡に暴れた疲れも手傳つてすつかりのびてしまふ。思へば遙々海こえ、山こえ、昨日迄は自身の肩にのせて擔いで來たスキーである。單に臺灣の山でスキーが出來たと云ふだけでも満足すべきだが、この臺灣の雪の殿堂に内地の山のゲレンデで遊ぶ様に半日スキーで跳梁することが出來たのである。この満ち足りた幸福感に浸つて私達は圈谷底のセ、ラギのほとりに、茶を沸しながら春の日の午後を楽しんだ。

テントに歸つた私達は、昨夜の睡りは餘りにも窮屈だつたので、何んとかうまい工夫はないものかと策をめぐらした結果、山本、石田、私の三人が外で寝ることになつた。三五〇〇米の臺灣の雪尾根に、シュラーフザツクと毛皮のまゝでごろりとならうと云ふのである。何んとすばらしい思付だらう。

あたゝまらうと飲んだウイスキーに、ほてる頬を冷い夜風が無でゝゆく、仰ぐ天界に散る星辰の数は彌々増加して星月夜の空にあやしくも照りひろがり、幾十世紀となく此の山嶺の上空に輝き續け然も今尙輝いてゐる久遠

の光を私はしずかに仰いだのであつた。

・白山羊のオットフ

露天の雪の上に寝た私達であつたが、前日の疲れも手傳つて別に寒さも感ぜず心地よい眠りの一夜を過すことが出来た。

気温はマイナス三度、霜が寝袋の上には眞白にかゝりバリバリ凍りついてゐる。餘り私達が悠々寝そべつてゐるので心配して天幕からみに来てくれた友もあつた程だ。天気もそろそろ下り坂で、重い荷を肩にしてトボトボと一昨日のダイヤルデポに降る頃には霧がすっかりあたりを包んでしまつた。「昨日登つてよかつたなあ」とお互ひに幸福を喜び合ふ。

出迎を約しておいたダイヤル達は既に到着して焚火に暖をとつて居る。

「よく生きて歸つて来た。日本人は偉い」

と云つてすつかり私達を尊敬する蕃人達であつた。一山おえた心軽さでインタタシンバチンまで来たら岸本さんに會ふ。昨日の雪山征服ですつかり目をやられ、痛い〜と涙をこぼして居る。全く氣の毒なことをして了つた。岸本さん曰く

「皆さんは 天皇陛下の御側近くに住んでゐるからあんな所へ行つても怪我はないのだ。私達には到底登ることが出来ない」と眞面目な顔して述べたので返へす言葉もなかつた。

こゝで蕃人達が留守中に射止めたのだと云ふ白毛の大山羊を見せて貰ふ。例の沈黙の勇士ピロノームンが射留めたのだそうだ。この白山羊はピヤナン社の蕃人も曾つて手に入れた事のない代物だと云ふ。白い野獸は白い雀と同じ様に何れ造物主の手ぬかりで出来たものに違ひないが、妙に何處でも神聖視され民族の起源などと結びついて神秘的な話しを残して居る。これも又「オットフ」に屬する南湖大山の主なのだが、ダイヤルに狙われることと二十數回、巧みに逃げおぼせて居たのであるが、私達の雪の南湖登攀と時を同じうして母胎南湖とその運命を

共にしたのであつた。

斯くして私達は急ぎ下つた。そして零度に近かつたタイヤル・デポーから僅か一時間後には氣温一三度の森林帯に下つてしまつた。

森林帯は霧雨が降つて居る。先刻ピヤツチンの尾根を歩いてゐた時足下にみえた雲海の中なのだ。その夜キレツトイの夕餉には、白山羊オットフの肉を賞味することが出来た。

翌卅一日は山を下る日である。タイヤル達は家へ歸れると云ふので朝から元氣に振舞つて居る。今日はオツトフを血祭りにあげた勇しい凱旋の日だ。戀人あるものはそのもとへ、妻あるものは土産に白山羊の肉をたすさへ私達は鶏鍋、酒まつピヤナン社へ、心も軽るく山を降りて行くのであつた。下界は榛の新芽も旨く匂ふ初夏の装ひだつた。

・再びピヤナン鞍部へ

新緑に美しいピヤナン社に休養の一日を送つた私達はすっかり元氣を回復した。今日から向ふ一週間を以つて次高の巨豪を征服しやうと云ふのだ。今度は立石巡查部長が同行すると云ふので甚だ心強い。人夫は南湖の時と同じ十七名、出来得べくんばさきに南湖へ行つた連中を連れて行きたいとの念願だつたが、その中四名を除いてあとは全部新顔である。しかし何んと言つてもピロノーミンが参加してくれたことは一同にとつて此上ない強味だつた。今度の團長はワツタンタツタン、何處かの講習會へ行つたこともあるとか云ふインテリ青年蕃人だ。

小雨の中をピヤナン鞍部まで登る。南湖に入る日下つた同じ道だ。鞍部は例によつて峠越えの北風が烈しく悲

雨は横なぐりに改築中の駐在所を打ちのめしてゐる。

今日はキャワン溪の泊場までは少し無理だらうとの豫想であつたが、果してタイヤル達はもう此の先一步も動かない。立石さんが

「タイヤルにも少し上まで行けと云つてゐますが、どうも時間が遅いのとこの雨では動きさうにありませんよ」と氣の毒顔にかう云つて入つて来る。タイヤル達ばかりでない、この私達も再び行く勇氣は頓にうせてゐるので一も二もなくこの提案には賛成した。

・新緑の園

霧と風と雨の峠、こゝピヤナン鞍部も今日はどうか晴れそうである。駐在所の横からすぐ草尾根にとりつく。焼き跡の草原タイリントキサウが今を盛りと咲き亂れ、俗に鞍部蘭と稱する素心蘭の一種があちこちにまだ固い蕾を抱いてゐる。モミツガ油松の老木林からやがて美しい松の純林にひらけて十一時頃にはミツビンの頭に出て、南東の空に畢祿山の雪が見え出した。私達の目指す次高は未だ雲多くして僅かに雪線の下縁を窺ふに止る。松林を縫ふて山腹を廻れば、やがて前面に桃山からポランシロン、次高へかけての山稜の東面におろす大斷崖の正面に出る。斷層谷と思はれるキャワン溪が足許から始まる恐しい急斜面の下に、幾階かの段丘を作つて流れてゐる。桃山の下、右の奥から發するのがキャワンの流れ、次高の直下、正面にみえるのがコアユン溪、此の二溪の合するところに緑の園が開けて居る。そこがキャワンの泊り場と云ふ。斷層崖上五〇〇米の急斜面を一氣に下り、キャワン本流を渡渉すれば、そこは一面の櫛の林で、今や新緑に午後の陽は映えてむせかえるばかりの

春の息吹きを示して居る。地には蘭、樹上にはセッコクが甘い芳香を放ち、えも云はれぬ山懐の樂土である。「臺灣の神河内だ——いや神河内などは問題にならない」この足立畫伯の絶讃も私達には宣なる哉と承諾出来る言葉なのである。

・タマラツプへの尾根

四日、雨季が愈々去つたと覺しく、空は清澄、身の引きしまる山の朝である。

泊場からすぐタマラツプ尾根の登りにかゝる。柵林をぬけ再び松の純林を登る。老松の亭々とそびへ立つ氣持のいゝ尾根、左の方にはタラツクンヤあたりの稜線が白びやかに輝いて見える。一步一步登るにつれ視界のひらけ行くのが、この尾根登攀の特色である。樹木のつきるところに草原ひらけ、咲き亂れた桃色椿や石楠の花も目を樂ませてくれる。仰げば桃山の南西面真近に迫り、俯瞰すれば足下にキャワンの清流を指顧し得る。二七〇〇米のあたり、漸く松はつきてタイワンツガがこれにかわる。遙か西空に目を轉んずれば濁水の谷をへだて、思ひ出の山南湖、中央尖山が雲海に聳立して居るを見得る。こゝからの南湖、中央尖山、何れの山も私達の行つた時程の雪は見當らない。こゝからながめた中央尖山は「月」の尾根からみた鋭角的な山容もすつかり失せて、たゞ連々たる山脈に突出した一個の山塊にしかみえない。「こゝからでは中央尖山も畫になりませんな」と足立畫伯が嘆聲を洩らす。オラガミと呼ばれる草原へ出るともう視界をさえぎるものは何一つ無く、ほしい儘の景觀が得られる。大分前から左手に眞白な姿を見せてゐた次高山の大カールも、こゝからは頂上直下一筋にかゝつた雪崩までがはつきり手に取る様に見える。

暑さにあへぎ、渴に耐えて三〇〇〇米まで登ると再び森林の茂みとなる。残雪もあちらこちらに横はり、喉を潤し蘇生の思ひを與へてくれる。林中に漸く露出して来た砂岩の山腹を左に捲けばタッタクシンタに出るのだ。正面に高く聳ゆるポチンシロン（ヤボラン）の指峯、その北方に向いた廣い腹には豊かな残雪が輝いて居る。南湖大山から望遠鏡で偵察した時第一に喜ばせた大雪田はこれだつたのだ。ベースキャンプ地タッタクシンタの泊場はこの残雪の麓、幅廣い鞍部の草原なのである。一名スムツタとも稱し、三一五〇米の枯草の高原だが、水あり、斑雪あり、水のほとりに狩獵小屋もあると云つた具合で、素晴しいベースキャンプ地だ。それに中央尖山は勿論、苛菜連峯まで南東の空にズラリと並んで居るのが天幕の前に寝轉びながら見えるのである。北は大覇の大ドームとその東尾根が切つた様な南面をのぞかせて居る。西にはすぐ先の大雪山の上へ、ポチンシロンの頭がチヨピリのぞかせ、タンネンバウムを支へた素晴らしいシーゲレンデである。アルプスの高地牧場を思わすやうな此の高原では、唯無言の山々が私達にこだまを返すばかりで浮世の出来事からは全く懸けはなれた境地である。

・ タイヤルとスキー

五日、今日一日は休養偵察の日と定め、ゾンメルシーを擔いでポチンシロンに登ることとする。タイヤル達は朝早くから狩獵に出拂ひ私達だけの山行である。

例の雪田を登りつめると此の山を形作る一大ドームの前に出る。北面して切れ込んでゐる大きな崩壊を隔て、粘板岩の岩壁は其の腹に怖しく複雑な褶曲をみせ、赤銅色の岩脈に残雪が危く獅噛みついてゐる有様は眞に私達

を壓倒し去つた。眞近に眺め得た臺灣の山の褶曲が畫き出した最も美しい特色ある雪と岩の素晴らしい構造美なのだ。

ポチンシロンドーム上の展望は四圍の山々を盡し得るは勿論、偵察の意味に於ても最も重要な眺めはシミタの岩壁がその全貌をあらわしたことだ。

先年、兒島勘次氏が始めて下つたと云ふ、シミタの北壁。中空に刻んだ繊細な線、直截的に切り込んだ岩壁の鋭さ、残雪が岩脈に纏ひついた縞模様の美しさ、これが久戀のシミタ大斷崖なのである。それは岩と雪を慕ふものゝ最も魅力的な眺めである。

併しシミタを越えればあと次高迄はたゞ單調な雪尾根の連続である。だから頂上からの偵察では専らシミタが問題にのぼつた。山の相が内地の山ばかりみつけて居る私達には難易の判断が一见してつかないが、結局シミタ東稜が案外むずかしいのではないかと云ふ結論に了つた。特に本峯とシミタ東稜の間が眞向ふに延びて居る尾根にさえぎられて判然しない。

往きに通つた根據地まで雪の斜面、雪質は重い軟雪だが、相當急なので思ふ存分スキーを楽しんだ。キャンブに戻ると獵に出てゐた蕃人達はもうとつくに引あげて居た。「獲物は」ときくと「鹿無いよ」と次の様な感心な説明をしてくれる。それによると此の附近は他所の蕃人が既に良をかけてゐる。それだから私達が獵をして喧かましくすると折角良に近ずいてゐる獸を逃がす事になるかもしれない。それで積極的な獵法がとれず獲物もなかつたのだと。私達は彼等の狩獵道と云ふべきものを知つた、否一つの道德を教へられたのであつた。

夕食後、タイヤル達に雪の恐しいものでないことを少しでも知せてやらうと、好奇心を湧かせて一同を引つれ、例の大雪山

に出掛けた。ビヤナン村スキー講習會と云ふところだ。

まづ私達が上の方から盛んにとびして、雪は滑るから面白いよと云ふ賞演をやつてみせる。彼等は「ウエー〜」（これはまあ〜）と感嘆詞を發してゐるだけだ。暫し滑つてから

「さあやつて御覽」

と、驚めるが尻ごみして誰れ一人出るものもない。押問答の末飄輕者のビサオが

「私やるよ」

と、第一に神輿をあげた。これはしめた靴をはかせ、手袋もかして手を引きながら親切に教へてやる。少したつと三十メートルぐらひ滑べれるやうになつた。純眞なだけあつて上達の度は内地の口文句多い連中より早い様だ。こうなるとビサオの兄タチンが黙つて居ない。

「私もやるよ」

といつた調子で亂暴にすべり出した。轉ぶ度ごと物の見事な尻制動、しかしさも愉快らしく腹の底から大聲を立てゝ一人で笑つてゐる。臺灣のスキーと云ふことが第一珍しいのに蕃人のスキーはこれを以て嚆矢とするであらう。アールベルグスキーテクニツクと蕃人、餘りの突飛な對照に私達は微笑せざるを得なかつた。

夜、焚火にあたりながらスキーの感想をきくと、

「飛行機よりも早いよ、日本人は皆んなオツトフよ」

「雪は恐くないだらう」と問ふと、

「冷たいが面白いよ」とまたやりそうな顔つきである。

南湖の時、あれ程までに恐れて居た雪。それが今「雪は冷いが面白いよ」この一語はむしろ私達に意外だつた。何んと妥協的な響を持つた言葉であらう。今や、彼等は少くとも感念的に雪を征服したのである。先程のほ

んの一刻のスキー練習が彼等に與へた革命的といつてもよい著るしい心境の變化なのだ。

夜は臙ろな南國の月に更けて、そよ吹く風は熱した頬に快くあたり焚火を圍む圓座はなか／＼とけなかつた。尙この日の偵察の結果明日から私達は大覇班と、次高班の二班に分れ行動を起すことゝなつた。

・ バツバカ溪に下る

明くれば六日。雲が低く垂れ下つて其の上妙に生暖い風が尾根越しに吹いて來る。最低氣温八度と云ふ脱線ぶりだ。四月上旬、而も三二〇〇米のところでミニナム八度、流石臺灣の山とうなづかれる。然し南湖の時とは季節状態がまるで異つてゐる事に注意しなければならぬ。つい一週間前の南湖では冬の氣候型が萬事支配的であつたのに、此處では夏の型に急變してしまつてゐるのだ。こうした季節的混亂の中に冬の離脱、そして春から夏と飛躍して行くのが臺灣の今時分の氣候なのである。

私達が最後の攻撃準備に慌しく出發の仕度をしてゐるまだ七時だといふのに、タマラツプの上の方から人聲がする。間もなく子供づれのタイヤル男女が四、五人やつて來た。松明の燈で早朝キャランを發つて來たのだと云ふ。それにしても赤坊を背にした母親や、若い娘が交つて居るのには驚いてしまつた。南湖の時人氣者だつたユーカセツツの額も混つて居る。昨日高山病で山を下りた蕃人の話しにタツタクシンタの雪が消えたのを知つて異見にやつて來たとのことである。降雪前に仕掛けて置いた何百と云ふ鼠を見廻るのだがよくその位置を覚えてゐるものである。獲物は鹿、山羊の類ひだが、山猫や、豹に食ひ荒されて形なしになつてゐるものもあると云ふ。

昨日の偵察でポチンシロンから三叉點に至る尾根通しのルートは重荷ではどうかと思はれたので私達次高班も大覇班の連中と同じく北側のバツバカ溪まで一應降ることにする。雪溪など私達はグリーセードで軽く飛ばしてしまふが、タイヤル達は森林の中をゴソゴソして中々降りて來そらない。草原に出たり、笹のブツシュに鹿の道を求めたりしてバツバカ溪へ一途に降

る。こんな所へ來ると蕃人の有難味が眞に判る。彼等が居なかつたら恐らく一步も進める處でない。

・大覇班キャンプを張る

此より暫し、大覇班の行動に就いては同班リーダー田中隊長が「臺灣の山と蕃人」(昭和十二年六月、古今書院發行)に收められたものを許しを得て茲に再録する。

薄暗い密林下のパツパカ溪で次高班と分れた大覇班の五名は、そこに目標のケルンを積み、赤旗を立てなどしてから又道なき林下のブッシュと戦ひを續けた。そして遂に聖なる稜線の一部を形成するプスラン山(三五〇米)と云ふ岩山の東南側に絶好のキャンプ地を見出して仲繼キャンプを設けた。残雪の上、タイワンツガの若木に取り圍まれ、前面だけ東の空を打ち眺めてまことに明るい氣持の良い生活が三晩つゞけられた。

最初の晩は日没と共に天候が回復して、東の空は紺地の浴衣の様な色に冴え上つた。やがてその下に黒くうづくまつてゐた怪物の様な山塊の上に、金色の光が金粉を撒きちらす様にさして來たかと思ふと、十三夜の月が躍り出した。やがてそれが中天にかゝる。暗黒の御堂の中に安置された金色の女體、天空に昇つて照覽する觀音像。さう云つた偶像的な美しさを私は此の南山の明月に見出したのであつた。

此の様に不思議な體驗の中に、月はいよ／＼冴えて、次高班の上つて行つた方向の山上の雪が仄白き光芒を放ち始めた時、焚火を圍んでだまりこくつてゐた私達の耳に何處ともなく物の叫び聲が聞えた。それは叫び聲の様なものであつた。聞えた様であつた。聞いたと云ふ者もいや聞かぬと云ふ者もあつた。野獸の啼聲の様でもあつ

た。やがて風の方でも變つたのか判然と「ヤホー」が聞え出した。次高班の聲を聞いたのであつた。一同は狂喜して次高班の登つて行つた谷を仰いだ。あとは暫しの間、燈火信號の交換、それから又月明、私達は何時までもく／＼月に曝されながら語り合つて居た。

その翌晩も亦その翌晩もかうして月明を楽しんだ。月の出が日一日と遅れ、出る場所も次第に南に移つて行つた。そして月の出頃までには私達は必らず山から歸つて夕食を濟ませ、敬虔な氣持で此を迎へるのであつた。まるで穴居時代の人間の生活を體驗してゐる様であつた。

「こんな風景は油繪にならぬものかしら」と私は云ひ、足立さんは「版畫なら譯はないが一つ油繪で描いて見やう」等と云ふ様な話をいつまでも繰り返してゐた。要するに私達は皆此の香はしき南山の月に酔つてゐるのであつた。

・大 霸 尖 山

翌七日は快晴であつた。私達は尾根づたいに大霸尖山に登つた。三年ばかり前に三角點建設の爲めに架せられた梯子は半ば朽ちてゐたのでザイルを用ひた。残雪が此の奇怪なドーム狀の岩峯の根本を埋めてゐた。西の方、新竹州の深い谷に向つて雪融水は素晴らしい瀧をなし、時ならぬ虹が懸つてゐた。此處から縦に見る次高山脈は、シミタの北面とタラクシヤの西壁の物凄

いオーバーハングとによつて完全に壓倒されてゐた。足立さんは此を油繪に描き、私は望遠撮影に夢中であつた。その晩は燈火信號をしても次高班は應じて呉れなかつた。まだ歸つて來てゐない證據で、一同は彼等の無事を祈る心で就寢した。

・次高班の消息

翌八日には、私達は次高班のキャンプに登つて見た。ところが驚いた事に天幕はビリ／＼に破れ、寝具等は一つしか残つてゐない始末であつた。昨夜烈風に襲はれて、無人のキャンプが壊滅した事は確かだが、隊長が寝具を二つだけ持つて前進したと云ふのが不審であつた。後に判つた事であるが、二つの寝袋は風に吹き捲られて失はれてしまつたのであつた。人氣があつて人影のない此の高峯の岩と雪の上に、烈々たる太陽が輝いてゐるのが海上に乗り捨てられた破船の様で一才氣味が悪かつた。船出して歸らぬ人を待つ様に私達は代る代る望遠鏡をかざして蜿蜒として連る雪稜を眺めた。そして足跡をあちこち追つた。不思議な事に次高園谷の大きな雪の腹を一線左手に劃して足跡らしいものが見える。これは前日一行が下山した足跡であつたが、私達は未だ彼等がキャンプを續けてゐるものと思つて無事を祈願する心で、夕方まで其處に留まつた。此處から見上げ見下すシミタの岩壁は若い羚羊が岩頭に吠立つ様で、何んとも云へない美しさであつた。足立さんなどは此の眺めは一週間は飽きないと言つて長嘆した。私も後髪を曳かれる様で容易に下山する事が出来ず、何となくグズ／＼手間取つて其處を離れまいと努めた。

鋭峯シミタへの前夜

次高班のタイヤル・ポーターは南湖の團長ピロ、今度の團長ワタンタックン、それに最も勇敢なクヂンナボと云ふ精鋭メンバーだ。

ワタンはウインドヤッケに毛のズボン、その上にスキー靴まで覆き、タヂンは登山靴、ピロだけは餘り足が大きいので誰れのスキー靴も間に合はず地下足袋に草靴と云ふ皆んな颯爽たるいでたちである。昨日のスキー練習が效を奏してか、兎角防寒具を身につけさえすれば雪の上を歩けるとの自信を得たのだから大したもののである。

パツパカ溪の空澤で大覇班と分れ、しばらく登ると雪があらわれ出した。テントをあげやうと云ふ三又點（三三〇メートル）迄は一面の雪である。心配して居るタイヤル達は「私達靴の歩き方知らんよ」といひながらも元氣に登つて来る。ワタンなどはスキー靴で滑りそうな所は裸足になり、又穿くと云つた小細工を弄してゐる。「もういやだ」と今にもいひ出すかとヒヤ／＼しながらついて行くが案外私達の考へが杞憂におはりそうだ。地下足袋と草靴のピロは餘程冷いとみえて可愛さうに岩の上へ出ては激しく足ぶみをして居たが、暫くして頭痛を訴へ出した。歸へしてやらうと思つて居たとき、タヂンとワタンも同情の色を面に現し「私達でピロの荷物は分擔するから彼を歸してやつてくれ」と義侠的に申し出た。

かくして次高班の荷物は彼等によつて三又點直下迄運び上ることが出来た。丁度此の頃から濃霧があたり一面を包んでしまひ、残り三又點までは私達の自力で擔ぎ上げた。

アドヴァンス・キャンプは三又點三角櫓の左脇の、西側に岩の屏風のめぐらされた雪の平に建設された。

昨日、ポチンシロンからの偵察ではシュミタの第一峯と本峯との間に物凄いギャップがあるやうに思はれてな
らなかつたので、天幕を張り次第直ちに偵察に出かける事にきめてゐたが、この霧では何とも致し方がない。氣
は焦るが濃霧は一向晴れそうになし、午後四時を過ぎても邊り一面は模稜として依然白濁の世界である。

未知な場所への登攀、そこには餘程自信ある心構へでぶつかつて行つても、常に割りきれない不安といふ暗い

影がつきまとふものだ。

「あのギヤップ、あれどうして渡るかなあ」

「俺あ、ギヤップがまずかつたら、この澤まで大きくトラバースしたら安全第一と思ふがね」と丸サン

「兎に角一度行つて見よう」焦燥に耐へきれなくなつた私達は五時頃、天幕から霧の渦巻く雪稜へ飛び出した。

第二峯と覺しき岩峯に位置して、霧の晴れるのを待つ。併しサッサッと吹きあげる霧は狂つたやうに頭上をかすめ、足下の斷崖も包んでシミクも、第一峯も、それどころか僅か一、二間先きさえ見せてくれない。

霧の中に消える落石の音も一層すごさをまして、果ては霧にだまされた怪奇の山相はあらぬおち氣を誘ひ私達の氣持は滅入る一方であつた。偵察は全く失敗に歸した。しほく／＼と歸る足元に水氣を含んだ雪がザツと崩れ落ちる。

天幕の夜は更に憂鬱だつた。石油コンロの火もうまくついてくれなかつた。何回試みても駄目であつた。あとは尾根を駆け廻る霧の音のみであつた。私達の氣持は全く痛々しいものになつて居た。期待の氣持と不安の心とが入り交つた云ひ知れぬ複雑な心地になつて行くのをどうすることも出来なかつた。

だが、八時もすぎた頃だつらうか、何氣なしに外をのぞくと霧は晴れ上り、月は輝き、星がまたたいて居るではないか。私達は狂氣して三又點に駆け上つた。月に嘯く羚羊にも似て、月光に明るい空に喰いつた様なシミタの鋭峯。青白く輝らし出された次高への雪稜。私達は無言のまゝにながめ入つた。それは神性にも満ちた嚴肅な影像であつた。冷い夜の微風が岩の上にある私達の肩を過ぎ去つて行く。

私達の心には一點の暗い影も宿つてゐなかつた。

「おい大丈夫だ、少しぐらゐ悪い方が却つて手應えがあるぜ」
私達は本心でこんな會話を交したのであつた。私達の心は最早ヤシミタに對する鬱勃たる闘志の外何物でもないのである。

バサラユン峯下で明滅する燈火は大覇班の山幸を祈る燈火の信號であらう。急に寒くなつて天幕に入つた後もヨツホくの聲は風に乗つて勢よくあがつて来る。

・シミタから次高へ

午前五時黎明ともにも天幕を立つ。

リユツクサツクに二日分の食糧と毛皮コートをつめこんでシミタ難場への挑戦である。

朝日に照りはえたシミタは日光のシミタに似ても似つかぬきびくした若者の風格を備へ、兩側を目もとどかぬ深い大安溪とキヤワンの深谷に削ぎとられたこの東山稜は、流石臺灣屈指の悪場の貫録にふさわしい。

案じてゐた第二峯は雪稜の中に少しばかりの岩場がのぞいてゐるといふ程度で思つたより簡単な岩場にすぎなかつた。ところが第一峯の降りでは完全に行き詰つてしまつた。

今まで續いて來た瘦せ氣味のリツチが此處まで來るとストーンと斬つて落した様になつてゐる。約二〇米もあるかと思れるオーバーハングの壁である。そしてその下につゞく谷は眼も眩む程おそろしい。捲くにしても取付く術は一つとてない。これさえ降れば、あとはシミタの頂上まで雪の急斜面が續くだけである。慎重考慮、遂に「捨て繩」で降りる事にする。何しろ風化が著しいので命を頼む岩角の選擇にむずかしい。それでも手頃なやつ

がうまくみつかったので「捨て縄」で難なく降りることが出来た。こゝさえ越せばあとは何でもない。間もなく登頂、午前九時十五分ケルンを記念に先を急ぐ。シミタの頂は南北に三つの岩峯からなつてゐる。その南の端の降りが又手強い逆層の壁になつて、少し面倒なトラバースをさせられた。

これを降つて了へば、次高まではたゞ單調な雪尾根の連続である。トラツクシヤの東肩を正午に過ぎる。雪はやうやく腐りかけ足元が落込みビヤクシンに足をとられる。急斜面のトラバースではアイゼンの底に腐雪が團子のやうにかたまりついて實に歩きにくい。遠慮會釋もなく照りつける太陽は體中の水分を取り去り無暗に喉がかわく。尾根歩きの朗さなど少しもない。たゞ「熱葷食」と雪の固りを交互に嚙り、これに肉體的な疲勞をごまかし、氣だるい體をひきづりながら目指す次高山頂はまだかゝと義務的に歩く私達だつた。

それでも小さい雪峯を二十餘りも越して午後二時三十四分には次高山頂に達し得た。

登頂の喜び！ 嬉しかつた、唯嬉しかつたのだと思ふ。それから三年たつた今日、私にはあの時の氣持をうまく表現する事は非常に難しい。あの時は私達はケルンを積んで唯茫然としてゐた。想像してゐた感激とか、歡喜とか、云ふものとは凡そ似てもつかない様な氣持だつたから、唯「やるべきことをやつた」「やつて了つた」と云ふ風にしか思はれなかつた。私達は三人雪の上に腰を下して、遠く輝やく大雪山のカールを眺め乍ら黙つて残つたパンをかじつてゐたのだつた。

私達は大變つかれて居た。私より頑丈な山本君や、丸さんまでも不思議な程疲勞してゐた。いくら水い雪尾根歩きだからと云つてこれぐらいの登攀に弱音をばく筈はないのだが、これは全く高度の影響らしく三五〇〇米に達する稜線を九時間以上も歩き続けたことに原因するらしい。

頂上の時間は永く許されなかつた。豫定ではこの稜線を再び三叉點の天幕まで引歸す計畫だつたが、心底から疲れ切つた私達は一刻でも早く樂な休み場まで降りたい心で一杯であつた。かくして直ちに東尾根を降ることに決し、次高のカールの中へグリセードで雪崩れ込んだ。

東尾根は三二〇〇米ぐらいから森林帯となり、影になつた根雪が凍りついて、ともすれば足をとられがちだ。残雪の消えた處に水でもあればそこにビヴァークしやうと云ふのが私達の望みだつた。三〇四〇米の残雪限界まで下つたが、一滴の水も見出せず加ふるに夕闇は近い。深谷の流れの音は聞えても降り行くことは出来なかつた。いたし方なく枯草の中へ寝ツ轉るがつてビヴァークときめる。水筒の蓋に雪をつめ火にかざしては飲むものの渴きつた喉には燒石に水の感がある。食慾などは更がない。黒々と茂つたタンネの下枝をすかして今夜も暮しい昨夜の月が痛々しい私達を靜かに見守つてゐる。慈愛にほほえむ中宮寺觀音の御像にも似て。

・ 水を求めて

悲惨なビヴァークにも同じ様に爽やかな朝が訪れる。六時、尾根の下降にかゝる。これからは残雪もなく乾燥の一點ばりである。

足元にどうも力がなく全く頑張のきかない状態、三四町行つては休憩する有様だ。水を飲みたさの一念が仕方なく歩かせてゐるやうなものである。自分達が歩いてゐるのではない、キヤワン溪の水が歩かせてゐるのだ。尾根の徑はタイヤル達の獵道で、ともすれば見失つてしまふ。森林帯には腐り果てた倒木が縦横に重り合ひ、蕃刀の刀痕を頼りに徑を求める。三〇〇〇米あたりで森林はつき、草付の急な降りとなる。遙か下の方にのぞまれるキヤワン溪の流れはいまの我々にとつて最大の魅力だ。併しこの草付の急坂が問題であつた。ネールドブーツの

山本君は左程でもなからうが、スキー靴に履き替えて来た丸さんと私には全く苦手だつた。たゞでもおぼつかぬ足どりだのに枯草の上を歩くのだから滑ることおびたゞしい。一度轉べばもう二度と起き上る氣がしない。起き上つて二三歩あるけばまた滑り轉ぶと云つた調子である。血のにじみ出る様な枯草とスキー靴の悪戦苦闘である。

しかし、水へ水への憧れは私達を十時過ぎにキャワン溪の河床へと轉りこませた。水の中に顔をつけて息もつかずに飲みつゞける。水と云ふものが何んとうまい飲物であつたことか、一升否二升も飲んだであらう。

小羊を食ひ食つた狼の話にも似て水にふくれた腹かゝえ、おもむろに櫛の新緑の下に午睡ときめ込んだ。

睡りからさめればすつかり元氣は回復し、今迄なかつた食欲が勃然と湧き起る。キャワン溪河床の茅を漕いでキャワンの假小屋に着いたのは三時間後の一時半であつた。

翌朝。シンタに居るベースキャンブの人々と連絡をとる必要上、再びタマラツブの尾根を登ることにする。四時三〇分小屋を出て、シンタには八時一〇分に着くことが出来た。

大覇班は石田君と土橋君が歸つてゐただけである。聞けば二人して昨日三又點からポチンシロンの岩尾根を登つて歸り、残りの三人は今日アドヴァンス・キャンブ（大覇班）を引拂つて戻つて來るとの事だ。こゝで石田、土橋兩君の話に、私達が三又點に残した天幕が滅茶苦茶に破壊されてゐることを知つた。三又點の天幕は麻のツェルト地で屋根型の弱いものであつた。

張つた場所は雪尾根上で、西側に岩屏風がめぐらされてゐた。併しこれには小さな岩の割目の窓があつて、これから入り天幕へ當る風が強く吹きつけたのが天幕破壊の元兇であつたと思われる。天幕を倒してさへ行けば何事も起らなかつたのに、天に舞上つた二つの羽毛シラーフザツクと残し置いた衣類の若干を登頂記念の贈物にしてしまつたとは受けとる山の自然も又これを奇と感ずることであらう。

疲労した私達の顔色をみてとつて、石田君が次高アドヴァンス・キャンプの撤收に行つてくれる。午後二時には隊員全部がシミタに集り、固い握手を交した後、ベースキャンプの撤收にかゝる。

・ 山 を 下 る

かくして私達の目的は達せられた。無意識に笑ひ楽しんで来た此の幾日かの山旅、たとへそれが永久に過去のものにならうと、思ひ出に甦る日にぞ榮光あれ。

私達は山を下つた。山の雪はゲツソリと痩せ、往きに蕾の石楠が早や美事に咲いて、臺灣の冬は既に夏への躍進を示してゐる。

ピヤナン社に降りてみると、顔なじみのタイヤルの若者や、娘達は粟酒を用意して私達を待つてゐてくれた。河岸段丘に織なす耕作風景の美しい宜蘭濁水溪沿ひの歩み、それも今の私には遠い夢の様な氣がするのである。

・ あ と が き

私達のこの春季臺灣山行については既に田中薫教授著「臺灣の山と蕃人」昭和十二年六月古今書院發行)及び山本明君「臺灣の山と蕃人」昭和十一年六月號ケルン所載)、「雪藏期の臺灣山岳」關西學生山岳聯盟報告第七號所載)等に殆んどその全てが盡されてゐる。いま「山岳」編輯者の爲めに應じて稿を起こすに當り、私が新たに書加へる何物もないと思はれたので、紀行の部に於ては、右の著書及び雜誌に書かれた敘述、印象のみならず、行文そのままを原筆者の承諾を得て、再録した部分が多くない。或は原著原文に現れたものを損ふやうな個所もあらうかと、それを惧れるのである。

尚この報告は神戸商業大學山岳部のものとしてではなく、私一個人のリポートに過ぎないものである事を最後に附言しておく。

小興安嶺横斷記

京都帝國大學旅行部

(時期) 昭和十四年七月中旬——八月下旬。

(隊員名) 周布光兼・比企能・池田敏夫・中尾佐助・藤本武

馬車五臺、馬夫五名(滿人)
案内兼警備兵(オロチョン人種)四名

一、齊々哈爾まで

私達仲間は昨年夏内蒙古に行つて來た。先輩達は既に遠征または探検旅行として、大陸の一部に殆ど毎年誰かしら出てゐる。

現在學生であり、その方面に精進せんとしてゐる私達は、勿論それ等先輩の口により或は筆によつてその経験を傳へられてはゐる。

昨年の私達の内蒙古行は其の傳へられ來つた経験を、更に自らの體驗と相俟つて強固にするのに役立つた。しかし論議は論議を生んだ。私達は更にまた今年の夏も大陸の未知未踏の地域に隊を出すことの意義を感じた。

従來の經驗に加ふるに今一つ新しい經驗を加え、しかも今まで懸案となつて居るエキスペディション上の或問

題を其の事により幾分なりとも解決出来るとしたら、出来得る限りの努力を拂つて出掛けて見る事だ。いざ行ける事と決るまでは中々實はつらい事もあつた。色々な對外的な問題は、物質的な問題より以上に馴れぬ私達を苦しめると次々に出て來た。然し、此の様な事は去年も經驗済なのであつたし、別に驚きはしなかつた。殊に今度は上手に遠征をやつて見度いと云ふ考へだつたので細い處にも頭を使つたりして忙しく過した。今にして思へば其の時は、實際張り合が有つて愉快だつたけれども、それだけに鬭争生活みたいなものであつた。

それで、結局、やうやく日本内地を後に船で大連に向ふ事になつたのが七月の十五日であつた。

船中の三日間、それは私達にとつては貴重な休養の時間である。又滿洲に上陸すれば、其の日から色々な仕事待ちを受けて居る。しなくつても濟む様な事が有つても、した方がそれだけ良いと思へば、矢張り完全な旅行にし度いから、それだけ忙しくなつたりした。

荷物の方は、内地から持参した物は各自大ルツクサツク一つ宛、木箱に詰めた食料、炊事具、修繕具、藥品等々兎も角みんな使へる物を一式揃へたのが九箱。それにテント二張——一張でも私達には足りるが、案内役の人々の爲にもう一張。之がガツシリと一包みにされて居る。だから銘々のルツクサツクの外に十個程になる。之等の世話が一番實はいやだ。一つでも無くなつたり忘れられたりしない様に注意するし、澤山だから驛に預けて置くのだが、又次の處迄行く時に一々荷札を替へたり、滿人の赤帽は何だか譯の分らない事を言つてハツキリしないし、つい面倒臭くなつて我々自身で運んでやる。之が又一汗仕事で重いしつらい。本當ならば一息に嫩江(墨爾根)迄送れば譯は無いが、一寸さう出来兼ねた事情が有つた。

と云ふのは、實は果して私達が小興安嶺なんかに入れるかどうかも内地では良く分つて居なかつた。調べたけ

小興安嶺北部略圖

ソウエイト鎮

ブラゴエシチェンスク

龍江

黑河市

クマルスカヤ

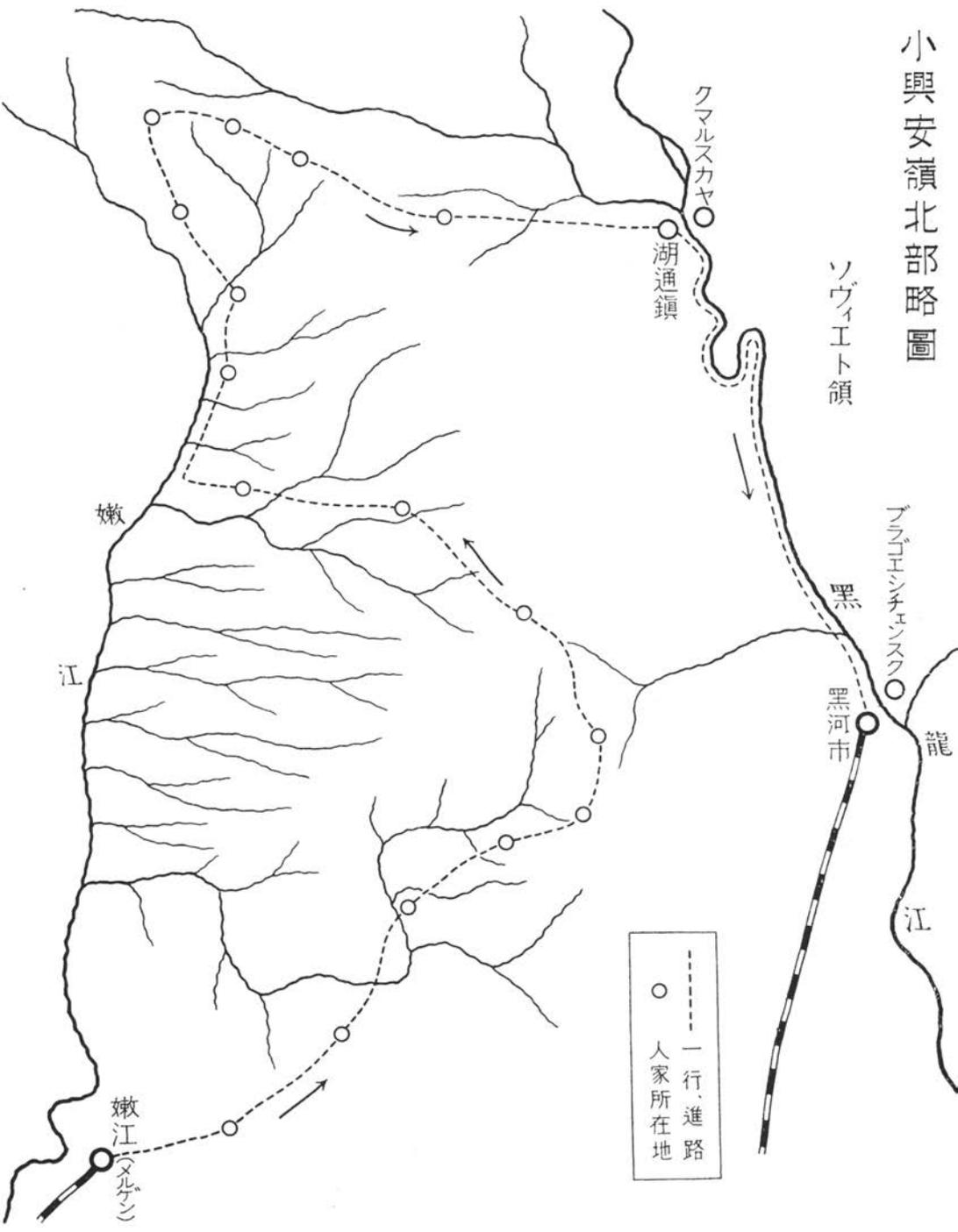
湖通鎮

嫩江

江

嫩江 (ヌルガン)

○ 一行、進路
 人家所在地



れども當時はノモンハンの方で大變な戰爭中だから現地でなければ分らん、と云はれる。仕方が無いので現地迄来て見た譯。だからこそ、此の滿洲での交渉が今度の私達の行動には非常に重大な意味を持つて居たので、若し此處で、入る事まかりならん、と云ふ事にでもなればそれでおしまひである。

然し来て見れば心配した程の事もない。着いた時こそロシアの飛行機が何處そこまで来たとかで新京も燈火管制中だつたが、其の私達に最も重要な小興安嶺旅行の許可證は直に交付を受けることが出来た。と云つてもそれまでには三、四日の交渉を経過したのだつたが、其の最も恩恵を蒙つたのが、滿洲採金株式會社であつた。實は其處で私達は小興安嶺中の同會社の採金場を巡廻する研究生たるの便宜を與へられたわけである。

さう斯うして居る中に出發以來十日近くを経過し、私達は實習生同様世話して頂いた大陸科學院の宿舍を出てハルピンへと向つた。

汽車が六時間程相變らず廣漠たる中部滿洲の原野を走つてハルピン驛頭に着いた時、先發して居たHとLが元氣良く走り寄つて來て云ふ。

「宿所は先輩の家だよ。米も此處で買つたら便利らしい。時にロシヤ臭いぞ。ロシヤ臭いぞ」

「何が」

「へへん。エキヰテイシズムでさあ」

矢張り大連、奉天、新京と、夫々港街、支那街、建設途上の大近代都市と云ふ特徴を見ては來ても、此の白人臭い特徴には及ばない。二人共、珍しいエキヰテイシズムを感じて、來て良かったと云ふ様な顔をして居る。丁度先輩は出張中のお留守宅で、奥さんに世話して頂く。物珍しき土の佛像。之は匪賊に追はれた村落にあつたも

のださうだ。それから陶器や石片の置かれた部屋を眺める中にも夜は更けて睡魔の虜。翌日は夜の汽車の豫定故ゆつくり晝近くなつて驛に切符を買ひに行つて見るとどうだ。豫定の北安廻りは水が出て通れない由。従つて齊々哈爾から廻らねば嫩江には出られない、而も齊々哈爾で一泊せねばならない。ゆつくり出来ればまだしもの事翌早朝又汽車に乗り込むさうでどうもあはたゞしい事此の上もない。夜行列車の豫定が狂つたので、大急ぎでロシヤ料理に舌鼓をうつて、午後の汽車に乗り込んだ。旅行中の米も都合よく此の短い間に買ったし、一同ヘルメツトを買ひ込んだから格好だけでも探検家めいて来る。段々にきたない服装をとり出して替へ始めたのである。

汽車の中はムツとする程暑い。窓は開けて有るのだが何の場所にも風があたると云ふ譯には行かない。私達の或者は蒸され、或者は機關車の吐く石炭の粉が眼に入つて苦しむ。ロシヤの田舎女の太つたのが三人入つて来てまあ一體何を喋つて居るのか何時までも話し續けて居てうるさくて仕方が無い。其の中に素晴しくまぶしくて暑い西日がさし始めると、ロシヤ女はぐつたりするかと思ひのほか益々話題は豊富である。其の西日も入ればやがて暗黒がしのび寄つて来る。齊々哈爾に着いた時は眞暗で、丁度星も出て居ないし、街は全部管制で燈火を消して居る。私達は其の中を教へられた通りに歩いて行つた。三四十分もして曲り角に來た。そして宿屋が有つた。あはたゞしい宿泊。翌早朝の出發。見物も出来ないで惜しい氣持だ。だが、此の邊りの緊張は、矢張り新京の街中よりも一段とピリリとして居る様だ。私達は翌早朝嫩江行の汽車にかけつけた。

二、齊々哈爾から根據地まで

汽車の中でも眠さは益々加はつた。窓外の風景はハルピンを出て以來と云ふもの、段々と野性味を増して來

る。然し、さうかと云つて決していきまいて、居る様なものではなく、唯教養の無い素朴ととりとめの無さがあ
る。

汽車は眠い我々を乗せて走つた。それでも寧年を過ぎて鐵道自警村や第七次入植地のある納河の邊迄にはグツ
スリ眠つたので元氣を回復した。其の中に、伊拉哈イラハに行く青少年義勇隊の人達がドヤ／＼乗り込んで来る。皆充
ちあふれる精氣を體に一杯にして居る。何の一人を見ても悲しさうな顔をしたり、青ざめた顔色をしたりして居
ない。見渡した處、赤い顔、黒い顔、國防色の制服。實際頼母しくてたまらない氣持だつた。彼等が下りて了ふ
と車内は急に閑散たるものとなる。

外は相變らずの未墾の沃野が果しない。其の中に線路の兩側に一杯水がたまつて居る處が續き始める。汽車は
湖の眞中を行く様だ。三時頃に嫩江に着いた。

此處も齊々哈爾同様驛は街の中心から遠い。殊に私達の訪ねて行かうとする採金會社の出張所からは街を眞中
に置いた反對の側に在る。それを私達は仕方が無いので大きな各自のルツクサツクと一緒に馬車マシャをやとつてぶら
下る様にして乗つて行く。馬は重みで早くは走れない。御者は「ツオ／＼」と、けた／＼ましく叫び續けて我々の
御氣嫌取りに早く走らせやうとは試みるが馬の方で「もう不可ません」と云つて居る。私達も馬が可哀さうだと
は思ふ。少し位御者に高いこと取られても没法子ナイフツクス（止むを得ん）とは思つて居る。それでも尙且つ早く走らせて
見度いのである。我々も「ツオ／＼」と、一緒になつて叫ぶ。

そして嫩江の、決してきれいと云へない埃つばい土壁の建物を見乍ら大通りを行くのだが、矢張り馬はゆつ
くりと歩く。

採金會社の出張所で私達の得た知識は、今迄私達の抱いて來た方針を幾分訂正するに十分であつた。私達の行動のキーポイントは嫩江ではない。更に明日建設用の列車に乗つて東北方へ些か小興安嶺に近付き、更に尙馬車で五十軒程奥地へ入つた汗達汽と云ふ採金地迄行かねばならない。其處でこそ私達の今後の進路の事情も確かめられれば、又夫に對して必要な色々の要求も充され得るであらう。唯、問題となつたのは此處から馬車を汗達汽迄備ふべきや否や。若しさうすれば私達は、假令先方に馬車が無い時でも、それによつて今後旅行し得るだらうと云ふのである。然し、それでは汗達汽迄どうしても三四日は掛るし、先方で別の馬車を備へた場合にすぐに引き返さねばならない。之は結局損な事かも知れない。相談の結果私達は嫩江から馬車を備ふのを止めて了つた。私達がそれだけ伺つて出張所を出た時は既にあたりは夕闇が濃かつた。西の眞赤な夕燒の空に反して、東の方には早くも星が輝き始めて居た。之から一體どうなる事だらう。さう云つた期待が大きく胸にうづく。兎も角もさうだ、何とかして興安嶺の未踏に近い地域を横斷せねばならない。今となつては、唯遂行出来れば良いのだ。意義も理屈も其の途中で考へられるだらうし、またそんな物は實行には附隨するものだから心配は要らない。今は漠然として居ても、此の事が意義の無い事だとは決して思はない。又、後になつて、其の意義は時折大事な場所でヒョイ／＼と頭をもたげるであらう事も見當がついて居る。だから私達は疑はないで朗かだつた。

翌朝枕元でトタンに素晴しく大きな音で音楽が響き渡つた。私達はガバとはね起きた。何だ。葬式だ。格子越しに滿人の葬式が肅々と通つて行く。

奥地へ行く汽車は朝七時頃出るのである。それ迄に澤山驛に置いてある荷物を移動させねばならぬ。大急ぎで驛にかけつけて、そこらに居る馬夫達を呼び集めて重い荷物をどん／＼運ばせる。汽車は貨物列車が其の主體を

爲して居る。僅に舊式な一臺の客車が最後を飾つて居るのだ。

本當に之は建設列車である。奥地へく。そして建設に必要なもの、其處に働く人々に不自由を與へない品物を満載して行く。

汽車は動き初めた。

風邪氣味だつた隊員が二人程客車の方へ割込ませて貰ふ。中央に太い煙突がストーヴから眞直上に突出して、其のストーヴには藥罐が掛けて有るのだ。水も何も入つて居ない。唯、冬ともなれば、之がブツ／＼と快い音を立て、茶を湧すであらう事が想像されるのみだ。残りの隊員は澤山の滿人の苦力や出かせぎ人と一諸に仲良く貨車に乗る。いち早く我々の積み込んだ木箱の上にゆつたりと寢袋を重ねたから、其の坐り心地は甚だ優秀であつた。

此の頃は毎日移動で朝も早いから眠い。いつのまにか私達は銘々眠りに落ちて居た。どの位寝たか知らないが眼醒めるとあたりの景色は段々と變化を示しつゝあつた。

國防色のもつとく／＼明るい様な色の世界で、何と、あたりは美しいお花畑ではないか。黄色、白、時に赤色、夫等の花々は内地の高山で見られる様な可憐な美しさを呈して居た。さうして、斯んな見渡す限りの野原には、もう家も無ければ人も居ないのだらうと思つて居ると其の内に小さな驛に着いた。人が居る。人が居る。而も、同胞の立働く姿。嗚呼、婦人の姿まで見える。今迄何となく感じて居た日本人の執着心の弱さなど急にすつとんで、日本人が本當に根強い國民である様な氣がして來る。

雲が野のあちらこちらに其の影を落す。そして、それが汽車と共に流れる様だ。奔放な、亂れた姿が、地上と

空とで呼應してゐるのだ。其の中に、地面には高低がはつきりして来て、やがてゆるやかに丘が續き始める。樹木が点在し始める。又停車する。蟲がやかましい程鳴いて居る。きりぎりすの様な聲で可愛らしい。まだ七月なのに、内地の八月の末を思はせる様だ。

晝過ぎに私達の汽車旅行は終りを告げた。直に今日の宿所の交渉に其の邊に出掛ける。宿屋のやうなものはない。しかし幸に私達は其所の鐵道建設事務所に御世話になる事になつた。それから、警察を訪問したりして之から先の馬車の事など電話で交渉して貰つた。

此處の名はホルメン。ポツリ／＼と建つ家簡單乍らもすべて活氣に充ちて。

夕方になると澤山の馬車が歸つて来る。それ等の馬も車も人も、もやの中を縫つて愉しさに歩く、ガタ／＼／＼と夕方の空氣が振動し始める。

悠久の大自然の中に入り來つた人間と云ふ生物が、混然と何の不自然も無く融け合つて居るのだ。

一夜寝て朝が又廻つて來た。

私達の最初の根據地とする汗達汽迄は五十軒ばかり有る。滿鐵の御厚意によつて丁度二十五軒の奥迄行く筈のトラックに乗せて貰ふことが出來た。

二時間程で着いた。丘一つ越したかと思ふと既に歸路についたトラックは見えなくなつた。其の代りに、白い雲、黒い雲が私達の眼に入つて来る。太陽の光は乾燥した高原の晝日中の空氣を突抜けてサバ／＼と氣持良くあたる。汗をかいても／＼直に乾いて了ひさうな空氣の中に男世帯で洗濯した物が五つも六つも乾して有る。外に居ると睡氣を催して來る様だ。蟲の羽音が絶えず聞えて居て、それも音に聞く興安嶺の蛇の事故うつかりしやう

ものなら「痛いつ」と、早くも赤くはれた所をさすらなければならぬから、氣にして動き廻つて居なければならぬ。然し、思つたよりも小さい蛇で、大きいものになると蟬程も有るとの事だつたがそんなものではなかつた。南京蟲やしらみも我々の強敵である。此所には餘り居ないといふ話であつたが、それでも寝る時には充分に用心した。

夕方サーツと夕立がやつて來た。やつて來たと云ふよりも襲來したと云つた方が良いだらう。思ひ切り早く次から／＼へとやつて來て、一つの雲が「もう水は無いぞ」とばかりに通り過ぎて了ふかと思へば、又次の雲の塊がサン／＼と水を降らして行つた。さう思ふ中にも彼方の白樺の林がしつぱりと煙つて雨にたゞかれて居るのが見えるのだつた。此處で降るかと思へば彼方で降る。彼方で降つてゐるなと思つてると此方も降り始める。そんな雨がそれでも三十分も續いたらうか。雲がどん／＼切れて行くと草がいき／＼として來る。相變らずの天然の花園は美しい。

そして私達は長靴をかりて釣棹をかついで近所の池へ出掛けて行く。――

其の晩の事だつた。Fが急にうなり出した。其の前にも何度か外に出て居た様だつたが氣にもしなかつたが、急にうなられて見ると之は急病かと心配だ。「苦しい／＼」とうなり、後の連中もみんな起きて看病始める。

だが、朝になつても苦しきは段々烈しいらしい。大急ぎで相談した。若しも彼が悪い病氣ならば、とても一緒に之から行けるものではない。と云つて一人置いて旅行を續ける事も出來はしないのだ。前途に對する一脈の不安を抱いてSは汗達汽へ醫者を迎へに馬車にとび乗つた。

馬車は走つた。たくましい三頭の馬はたつた二人の人間を乗せてたゆみなく走り續けた。一際たくましい中央

の馬は、茶色の毛を輝かせ乍ら、又誇らしさうに他の馬をリードして走つた。丘の上り下り。そして小さい流れ。それ等を越して三時間程で汗達汽の採金街が見えて來た。早速所長さんに面會して醫者を頼む。こゝろよく承諾して下さつたが其の準備で二時間程待たねばならないのだ。一寝入りしたのが運の盡き。起きた時にはお醫者さんは既に馬車で樺樹林ホウシュリンに發たれた後で、仕方無く乗馬を一頭用意して戴いてそれにとび乗つて二十五軒の道を走らせた。暑い／＼夕方だつた。中頃までは元氣に走つたが、それから後は人も馬も一體となつて疲れた塊の様になつた。それでも着いた時に病人の良くなつてるのを見た時の喜びと安心。――

お醫者さんは其の晩美しい月光の中を歸つて行かれた。

私達も翌日ゆつくり／＼と其の道を汗達汽まで進んだ。馬車に乗るのも中々つらい。殊に石ころ道に來ると烈しく下から突き上げて來て、初は腰で加減して居たが、段々疲れて來て時々頭の中までショツクが突き上る事があつた。川を越して廣い山の裾を廻ると汗達汽なのだ。整つた採鑛街。會社の人も苦力も澤山居る活氣の有る山の街。

會社の人達は皆親切にもてなして呉れた。

三、馬車隊の旅。嫩江上流河畔に出る迄

勿體無い様な客分披ひの三日間が過ぎた。其の間に、採金船の見學やら場内の見學やら或は又街をぶらついたりして、此所の事情も大體は解つた、程度こそ低けれ、生活の爲の機關は色々と備つて居た。一日の仕事を終へた苦力達は、兎も角とても愉しさうにして街へ出て來た。此處の短い三町程の通りが彼等でゴミ／＼して來る。

歩いてゐると、入口に大きな赤い房の下つた飯屋で、肉のかゝつてドロ／＼したうどんを食べて居る者や、姑娘相手に支那茶を飲んでゐる者などが窓越しに見られた。老人も居た、若い者も居た、何方にしても一様に其の顔面には微笑が上つて居た。

彼等は相當額の金を貯へて歸國する者も有ると云ふ事を聞いた。然し、結局は教養の無さから、彼等は斯うした仕事を平氣でやり、そして夜になつて漸く開放された時の此の喜びが又何とも云へないのだらう。彼等の民族性が云々される時代ではある。それも大事な事だ。けれども又彼等に下手な教育を興へたらどうなるだらう。いたる所に怠惰なお高く止つた連中がうろつく事になるだらう。彼等は又彼等として、其の職能に應じた導き方を考へてやらねばと思つた。

八月二日の夕刻に吾々の馬車が勢揃ひした。而も嬉しい事には各自に一臺宛、都合五臺の馬車が整つたのである。それに、オロチヨン一名、満人一名計二名の此處の警備兵がきちんとした軍服に軍帽の姿で銃器を持つて馬にまたがつて居た。

而も其のオロチヨンは案内も出来るといふのである。

出發を夕方にした譯は、まだ／＼蛇が日中は澤山居るだらうと云ふ懸念からであつた。それに此の邊りの日没時間は夜の八時半頃だから暗くなるのも九時頃だし、五時に出たとしても尙且つ明るい中に四時間を歩み得るわけである。

五臺の馬車と二人の警備兵と五人の馬夫とは愈々肅々と黒河街道を進んで丘を上つて行つた。曲り角を曲るともう汗達汽は見えなくなつた、そして唯、前途に長々と道が續いて居た。私達は二つ程部落を通過して居た。片

言ながらも隊員は馬夫達に話し掛け始める。彼等は元氣だ。道も悪くはないので馬をどなりもしない。然し、到頭一臺の馬車が後れて了つた。馬が大變弱つてゐるらしい。其の馬車の馬夫は若い少し足りない様な感じのする男だつた。彼は吾々に氣兼ねして一生懸命馬を鞭打つのであるが、馬は何となくあえいで居る様子だ。見兼ねて「あんまり打つなよ」と云つてやると、彼等にとつては馬は大事な財産なのだからホツとした様に嬉しさうにする。

其の中に夜が迫つて來た。私達は興安鎮と云ふ處に着いて居た。

例の馬はすつかり弱つて居るので到頭別の馬を汗達汽から寄越してもらふ事にする。電話が鳴る。其處の満人の男が何やらおそろしい早口で通じて呉れる。それから待つ間馬車をすつかり家の圍ひの中に入れて了つてみんな暫くゆつくりした。

私達は其の廢墟の様な大きなガランとした建物——（以前には採金の爲榮えた處だつたさうだ）——の一室に招じ入れられる。煙草を吸ひなさい、と云はれる。例の美味な支那のお茶が出る「好、好」「謝、謝」と云ひ乍ら飲む其のお茶は本當に美味しいのだ。こんな處で飲むからだらうか。いや／＼さうではない。支那の茶は全く良い味ひを我々に與へて呉れる。外には月が照つて居た。家の中は眞暗になつてランプに灯が入れられた。一つのテーブルを圍み夕食の御馳走が出て來る。にんにくの葉を刻んだのにノロの肉が矢張り細く刻まれて一緒に煮込んで有る。それからやはらかいフカ／＼した何も入つてない饅頭マンタウ。然し、それからが不可ない。盃に白い液體を注がれた。「乾盃」さあ大變。口中ピリ／＼し始めた。それが咽喉を通る時其處は焼かれる様だつた。「ウーム」と我々は思はずなつて了つた。それでも、其の刺戟は、つらいけれども何處か快い魅力を持つて誘ひ始め

る。二杯、三杯。其の中に素晴らしい夢の様な陽氣さが襲つて來た。ラムブの醜し出す陰影が彼等の顔にもクツキリと投げかけられて居る。而も其の影は時折ゆら／＼と揺らめいた。そして、彼等も快く酔つたのであらう。眼が段々に充血して來るのが見えた。鼻を通して歌聲ももれて來る。それから彼等は寢て了つた。

馬はまだ來ない。外に出て見た。嗚呼、何と云ふ印象的な夜であらう。此の廢墟の様な建物はどうか。破れた硝子。うづ高く積まれた埃と砂。月はすでに高い。

夜半に馬が來た。さあ出發だ。病氣の馬と其の馬と今度は二頭立ての行進だ。

馬夫は強かつた。それから朝五時まで彼等は馬と共に歩き通して了つた。小興安嶺の一番高い稜線を今や我々は越して來た。徐ろに道は低みへと下つて行つた。突如馬車の横を警備兵が馬を走らせて行つた。何となく頼母しさを感じて居ると暫くして行手から澤山の人影が現れて來る。黙々としてすれ違ふ人の群。ヂツと見つめる夜目にも白く光る夫等の眼。眼。今度は何となく氣持が悪い。彼等は苦力ださうだ。

曉がやつて來た。朝もやの中を先頭は逢源五道溝の含廠に到着した。オロチヨンがホト／＼と門をたゞくと、ギーンと聞く。一室をあてがはれて私達はこん／＼と眠りに落ちた。

起きたのは晝頃だつた。出發の用意をしようとするると此處にゐる日本の人達が、汗達汽から匪賊情報が入つて居る故今日は止めろ、と云はれる。匪賊はどんな處でも歩く。それに素晴らしく速いから或はもう此の邊に來て居るかも知れない。其の代りに私達の方で更に警備や道案内の爲にオロチヨンを二人ふやして上る、と云はれた。其の爲に新しいオロチヨンが二人呼ばれた。一見して彼等が勇敢な魂の持主だと云ふ事が解つた。然し交渉は少し金錢上の問題でこてた。結局、彼等は吾々の一隊に加はり忠實を誓ふ事になつたのである。

吾々は一日中御馳走を食つてぶら／＼して居た。夜が又廻つて來た。天氣が悪くなつて居た。不氣味な夜空に黒々と見張の塔がそびえ立つて居たが、雷明によつて時々、クツキリと浮彫りされた。夜半にみんなは何ともたまらないかゆさでとび起きて了つた。此のかゆさは南京蟲に違ひない事は既に寢臺車の中などで良く知つて居た。あゝ、それにしても、懐中電燈の光の中を右往左往して逃げ行く何十匹といふ南京蟲を眼のあたりに見た時、思はず體中の毛穴が全部開いた様な氣持がしたのだ。馬車へ移轉する者。ベッドを徹底的に掃除する者。それから良く眠れて朝になつた。

最早、吾々の警備は十分であらう。吾々は出發する事にする。朝早く又馬車は動き始めた。北へ／＼の道、それが段々に悪い道になつて來て、石ころ道や、水の中の道などが多くなつた。小さな上り下りの多い坂道だつた。上下にも左右にも、又時には其の兩方を合した揺れ方で揺られた。急激なシヨツクなので、吾々は随分疲れ始めて居た。

時々林の中をうね／＼と馬車はたどるのだつたが、そんな時先に行つてる筈のオロチヨン達が路傍の草の中に圓坐して居て、たき火から煙がいぶつて居た。蛇をよける爲に彼等は斯うして休む度にすぐ火をたくのである。馬が其の煙の中に體を入れて來る。それから我々も馬夫達も一緒になつて休息だ。美しく咲き亂れる草花を隊員のNが盛につみ採つて來る。名も知れぬ草花を彼は一々良く知つて居る。一日中我々の仲間以外には誰も會はない興安嶺の山の中。何時しか馬夫達も警備兵達も私達とにぎやかに談笑する仲となつた。

時折は菓子や煙草をふるまつた。又馬夫には「馬車に乗れ」とも云つてやつた。彼等は皆こちらの出方次第では實に單純とも思へる良い性質を持つて居た。どちらかと云へば、ずつとオロチヨンの方が單純だつたけれど

も、馬子達も決して腹黒いとは云ひ切れぬ質朴さを表した。私達は出来るだけいたはつてやらうと思つた。唯それがつけ上られない程度でなければならなかつた。けれ共、どうせ同じ隊の仲間だからなるべく威張らないでやり度かつた。唯、特別に、さう云ふ事の行届いた監督はIにやつて貰ふ事に大體決めた。矢張り一人二人は「不進々々。（不可んく）」と云ふ人も有つた方が全體の行動の上に於て良いのである。

さうかうする中に或道の悪い處で、一臺の馬車がいきなり顛覆した。中からはひ出て來たのはNだつた。彼を生れながらに波打つた髪の毛は車軸の油でべト／＼になつて居た。氣の毒は氣の毒だが、どうにもおかしくて笑はないでは居られない恰好。――

夕方彼方に城の様な建物が見え始めた。それが此の日の目的地の全陽河（徳安全廠）だつた。此處でも吾々は一人の日本人に紹介された。ガツンリした人で、あごの邊り一人山中に暮す決意がただよふて居た。昨夜でこりて居るので寝る時は極めて皆慎重だつた。

八月五日の朝は輝くばかりの快晴だつた。

朝のこんなにも輝かしいみづ／＼しさはめつたには味はゝれるものではない。感激して居る暇に出發が一時間も後れる。申しつけた通りに満人やオロチョンが待つてゐるのに駄目だな。俺達は。――斯う云ふ事が結局彼等に吾々に對する不信や反感を植ゑつける原因になるのかも知れない。

それは兎も角、私達は朝露の乾きつゝある林間の小路をたどつて居た。北へ、それから西北方へ轉じて再び小興安嶺の嶺筋を西へ越したのである。そして其の瞬間西へ／＼と嫩江の上流まで徐々に下り続けるであらう小興安嶺の西側の大斜面を見たのだ。それは吾々にさへ或雄大な詩情を持ちかける。私達は此の感慨にひたされた何

人目の人であらうか。私達はそれを誇りはしないだらう。然し嬉しいじやないか。楽しい事ではないか。

道は到底判然としなくなつた。草が一杯に蔓つて轍の跡を消して了つて居る。オロチヨンの存在が本當に有難くなつて来る。西側の斜面を、幾つかの小さな尾根を越えて行つた。それはつまり、幾つかの水源を渡つた事にもなるのである。

やがて見えるユイリヤンズのエ。河邊のたつた一軒のあばら屋、近附いて見れば、其處に住む者はたつた一人の老人だつた。彼は極端に無口だつた。幾年かの此の孤獨の生活が、彼から會話をもぎ取つてしまつたのだらうか。

勿論私達が入れるどころの家ではないので愈々待望の「我々のテント」がひろげられる。オロチヨン等にも一張貸してやる。私達が大體張つてやるのをさも珍しさうにもぢ／＼して見て居るオロチヨンの若者。腰に刀をさして、いつも乍らどつしりと感心した様に見て居る彼等の酋長。警備兵もにこ／＼と見て居る。出來上ると、「好。好／＼」と謝意を示すのだつた。

炊事の煙が三つも四つも立ち上り始めた。斯んな生活では、一日の中で一番たのしいのは夕食なのだ。みんなが、其のたのしみを最大限に味は／＼として一生懸命に働いて居る。

美しい星空であつた。満腹した私達は暫くオロチヨンや満人の警護人等と話し合つた。オロチヨン語の勉強が始められた。Fが日、オ、字典を作らう、と張切る。元來オロチヨン族は日本人を崇拜して居る。其の日本人たる我々が彼等の言葉を覚えようと一生懸命になつて居るのだから、彼等としても嬉しくない譯はないのだ。だから、彼等の顔には質朴な微笑が湧き上る。唯、氣の毒なのは一人の満人の兵卒で、私達がさうして居る間一寸淋しさう

で、矢張り權力は持つて居ても同じ言葉の馬夫達の方へ行つて了ふのだつた。

それから、驚いた事に持つて來た星座早見と云ふのを見せてやると、オロチオン達は熱心に見て居たが、之はあれ、之は彼處。と一々空の本當の星と合せるのだつた。彼等の經驗が教へた天體に關する豊富な知識は素晴らしいものなのだ。

テントは矢張り住心地が良い。

翌日私達は又早朝出掛けるつもりだつた。

處がどうだ。親子の馬夫の中、親の方が病氣で動けないのだ。少し醫者の勉強をして居たHがみてやる。成程熱が高い。眼がトロリとして居る。之はうそではない。取敢えず馬車を一臺空けてやつて寝かせて行く事にす。彼は阿片中毒で、もう二三日阿片がきれて居るので、一つは其のせいも有るかも知れなかつた。此の日の路もあまりハツキリしなかつた。或は西に、或は北に、林間を縫う様にうね／＼と馬車は進んで行つた。時折オロチオンが待つて居た。そして道を示して呉れた。馬夫達も今日は随分と疲れたに違ひない。一日の行程を終つて十五里河子シウワーキエにたどり着いた時、たくましい三匹の犬が見なれぬ外來者に吠えついたりたけれども、彼等はそれを怖れて身を護る元氣も無い様に舍廠の門をくぐるのだつた。無口に馬をはづして了つてからも馬車にもたれかゝつたりして居た。

結局、此の結果として、私達は此處で一日休養の餘儀無きに至つた。

それは、此の先に濕地の難關が有るのだけれども、結局隊を構成する連中に無理が有つては尙更悪い結果が豫想されるからだつた。又、恐らくは、折角今までうまく氣分がままとまつて來たのに、之を押して出掛けた爲に、

此のなごやかな気分には破綻が来る事だらうと思はれた。それではつまらない。一日位の休養は却つて旅になぢむ事になつて良いかも知れない。

馬夫達の其の時の嬉しさうな顔。

之に反してオロチヨンはあせり始めて居た。待望のノロがまだ一匹もとれないと云ふのである。彼等は愛用の銃を撫して居た。狩獵で固まつた様な彼等には無理からぬ事であつた。

一日の休養と、此處で食事毎に食べたにんにくの御蔭で、吾々はすっかり元氣をとりもどして居た。もう馬車に揺られる事にも平氣となり、どんなに烈しく揺られても其の中で晝寝の一つも出来る様に鍛えられて居た。吾々は愈々嫩江の上流九站出来の事となつたのだ。

四、嫩江上流に沿つて

雲は天候の悪くなる事を告げて居た。

然し、之以上此所に滞在しては居られない。若しひどい雨にでもなれば、恐らくとも落馬河の増水で通れつこは無いであらう。さうすればあの十站と十一站の間の濕原の中で立往生しなければならぬだらう。

そんな馬鹿な事が有つてたまものじやない。だからどうしても今日中に十站迄は行かねば困る。

支那風と言ふ七里か八里が日本の一里にあたる。五臺の馬車はやがて支那風に數へて十五里程の地點で漸く嫩江の上流に出たのであつた。之からは、今は荒れて居るけれども、其の昔はもつと便利だつたと云はれる嫩莫街道を北へくと進むのだ。五日も有れば、私達はどうか嫩江沿ひの旅を終へて、再び北方の採金地帯へと出

る事が出来るに違ひない。さうすればもう後は、何とかなる。或はトラツクの通る道かも知れない。

相變らずゆらりと馬車に揺られての旅だつた。

遂に先頭のオロチョン達は嫩江上流に直面して私達を呼んだ。彼等も亦、今までの山地から後は只川沿ひの途に出たゞけ故一應の安心をした様子だつた。其處には一軒の小屋が有つて煙をたてゝ居た。入つて見ると薄暗い小さな土間に二人の老人が坐つて居た。一人は何か物を煮て居たが、もう一人は甚だしく疲れて居る様子だつた。病氣じやないだらうか。私達は早速無難な藥として仁丹を手の平にころがしてやる。「謝。々」と彼はものうさうに答へるだつた。それでも、こんな奥地なのに一通りの道具は色々と備つて居る小屋だつた。近所に別の馬車隊が休んで居たが、恐らくさう云ふ連中が遠く街から來る時に持つて來てやるのだらう。さうでもしなければ、到底自給自足の生活は無理だらう。街から來て通過する馬車は彼等には一つの慰めに違ひない。其の内に、みんなのぬぎ捨てゝ置いた上衣を交換して着ると云ふ様な甚だ子供ちみた珍妙な事が始まる。就中傑作は、オロチョンの酋長に大學の帽子をかぶせた時だつた。わざ／＼どうなる事かと、平生かぶつても居ないのにルツクサツクの奥から出して來たのだつた。果して彼は素適な不調和を見せて呉れた。

それから我々が警備兵の服を着て見る。

「弱さうな兵隊だな」とからかふ者がある。既に人種の區別も無い様になつた吾々の身なり、顔、頭髮。Sは既にオロチョン族の仲間入りが出來さうだつた。Iはもう大分前から滿人として扱はれるのに十分だつたし、Fも亦印度に近い方の特殊な人種を思はせた。だから今はもうみんな打解け合つて居るのである。馬夫達の元氣は昨日一日の休養で大方回復して居た。前に病氣して自家用車に悠々と休養した馬夫はすっかりなほつて

申譯無くて仕方がないと云ふ様な風で一生涯懸命働き始めるのだつた。彼はホッソリして居る。だから弱さうだ。だが事實は器用な役に立つ人間だつたのである。

雨が降つて來さうで中々降らない。私達は何となく心配だがオロチヨンは平氣だ。何時も乍らゆつくりした晝食が此處で濟んだ。十五里河子で毎食時、朝つばらから、飲まされた支那酒のお蔭で私達は五人共口の中を荒らして了つて居たし、恐らく胃の中も荒れて居るのだらう。どうも食慾が無かつた。

嫩江は思ひの外小さい川となつて居た。すぐ手のとゞく様な處に向ふ岸が有つた。魚が時々波紋を作つて消えた。

「さあそれでは出かけようか」——

途々私達は、本當に大陸的になつて來た自分等の事を考へた。もう匪賊が出て來ても、どうにかなる位の考へを持つて居る。

段々にあたりが廣くなつて來る。轍の跡が何處までも遠く／＼我々の行先を示して居る。遙か彼方に嫩江水源地帯の山々がなだらかな線をひいて横たはつて居た。それは丘と云つた方が良いかも知れないやはらかい淡綠色に包まれた懐しい姿だつた。二時間歩く。三時間歩く。そして私達が段々とそれに近附いて居る事を意識する。夕方馬車隊は十站の小屋場に着いた。

此處で面白い事が起つた。一見日本人とも見える廿歳位の男が小屋の中から走り出て來たが、それを見た馬夫達はさつと彼を遠巻きにして話しかけて居る。決して近附かうとはしないのだ。それから小屋を見に行つた連中もニヤ／＼薄笑ひし乍らおどけて出て來るのだつた。「何だ一體」と聞いて見る。其處で大笑ひだつた。十站こ

そは猛烈なるのみの住家ださうで、小屋で寝たら最後夜つびて、眠れないだらうと云ふのである。成程彼の青年は話す間にもぼり／＼と體をかいて居たし、小屋の中のわらの束は如何ともかゆいと云ふ感じがするのだつた。

そんな處は眞平御免、と早速テントを張つて了ふ。何と云つてもテントの居心地は上々だ。雨が怪しいので二重屋根にして入り込んだ。夜になる。さうすると外は猛烈な蚊だつた。うっかり用も足せない。テントの中には蚊取線香が二ヶ所で煙を立てゝ居る。

其の夜案の定雨がパラ／＼とやつて來た。

「頼む。頼む。落馬河を無事通過出來ます様に」と天に願ふ。

それから樂しき夢路だつた。

次の日。又朝の營みが始められる。其の時馬夫がやつて來て云つた。

「今日は出られません。馬が病氣です。」

「うそを云へ。」

と私達はどなつた。だが其の顔はしんみりと心から心配して居る事を現して居た。で、馬の診察が始まつた。成程元氣が全然なくて、何を食はせても食べないのだつた。私達は馬の藥は無かつたが遂に一計を案じてエビオスを水に一杯といて、馬夫に馬の口を棒でこち開けさせたすきにそれを流し込んだ。結局藥は馬の腹に收つた。

だが、冗談じゃない。今日出發しなければ實際困る。馬夫は極力出發中止を哀願する。其の結果、警備兵の馬を馬車馬にして、病馬は離して歩かせる事によつて納得させた。其の代りあはれをとゞめたのは警備兵の馬で、何時も悠々と馬車隊を追ひ抜いて行く勇姿も今はしよんぼりと馬車にくゞりつけられ、それから後の濕地帯の難

業苦業を味はふべく運命づけられて了つた。警備兵は一人止むを得ず歩く。「没法子ノイフツライズ。」と彼は云つてにつこりする。

其中に雨が本格的となる。雲の時間も見えない。模糊として霞んだ中の進軍だ。今日の行程が最も難行を豫想されて居るのである。其の一日馬夫達の間には淋しさうな空氣がみなぎつて居た。力無く馬と共に泥の中を歩んで行く肩の落ちた後姿。それでも馬が濕地を通過する時はけたましく聲を立て、馬を泥水の中へはまり込ませまいと努力した。

さらでだに濕つた此の日の行程は雨の爲益々濕潤を加えて居た。そして、濕地に次ぐ濕地である。馬は猛烈にあがいては夫等を通過する。然し、一つの濕地通過に際して必ず一頭の馬ははまり込んで動けなくなる有様だつた。馬夫は容赦無く馬をたたく。雨の音と其の必死な物音が一つの陰氣さを表現する。

馬はいくたびか倒れた。全身泥だらけになつては起き上つた。私達も今は馬車に安閑と乗つては居られない。靴をぬぎ、はだしになつて、ぬる／＼と氣持悪い泥の觸感を味はひつゝ草の株から株へとび移つて行くのだつた。

小さい流れを越した。晝食。だが一體に無言が支配して居た。此の陰鬱の中にあつて、人は全く疲れて居たのだ。

夕刻前私達は問題の落馬河に直面したのだつた。だが何と有難い事だつたらう。馬車もすれ／＼に浸水を免れて渡る事が出来たのだ。何度か馬だけが河の中を往復した。そして隊員は其の上に乗つて足を思ひきり上げて渡つた、それはどう見ても良い格好とは言へないと思はれる。

之を越せば先づ／＼悪い處は無いと云ふ話に、まだ／＼十一站には遠かつたが、或一本の美しい白樺の下を見つけて宿營の仕度にかゝつた。酋長は又もやどつしりとあぐらをかいて云つた。「天氣が良くなります。」正に其の通り天氣はどん／＼好轉した。夜になつてみんなは今日の苦勞も忘れて了つて居た。何故なら、空には何百もない星が輝き渡り、冷厳な、而も又、私達には少年の日の夢を再現して居たから。――

本當に良い氣持の露營地だつた。家でも有つて住んで見たらどんなだらう。哲學的な思索。それには最も適切な場所であらう。

翌日。病馬は相變らず元氣が回復しないので、警備兵には時々我々と交替して馬車に乗つて貰ふ事にする。彼は妻君が有る。そしてかなり家へ歸り度くなり始めたらしかつた。

私達は其の日酋長が朝から居ない事を知つて居た。だが、やがて何里か進んだ頃に彼の姿を右手の林の中に認める事が出来た。彼は我々を待つて居たのだ。而も既にきれいに皮をはいだ、ノロを持つて立つて居た。嬉しいに違ひない。然し流石に彼は落着いた態度を持して居たのは頼母しかつた。おいしい肉が食べられる喜び。驚いた事に、彼等は生のまゝ色々な臓物を口に入れるのである。次々と氣持の悪い血だらけの心臓やら色々な物をむさぼるのでつた。獨特の短刀で切り口のまはり血だらけにして食べて居る彼等。ノロを食ひ終ると今度はこちらに廻つて来るんじやないかと心配だ。だが、そんな事は無い。彼等は天性狩獵慾で固まり、肉を最も好んで食ふだけで、案外氣の小さい男達である。

十一站には家が無い。其の日私達の泊つた處は十二站手前のカラホと云ふオロチヨン部落の有る處だつた。尤も彼等獨自のテントの部落ではなく、固定した土の家ではあつたけれども、此處に着くや、オロチヨンの連中は

大喜びだ。何しろ大勢の仲間が居るのだから。うつかりするともう私達なんか相手にされない様な始末である。折柄、嫩江には魚を一杯積んだ船が来る。一圓で一尺も有らうと思はれる大きな魚が七匹も買へる。ねぎらつてやる心算で馬夫達にも買つて與へたら、既に自分等で買つて居たにはあきれた口がふさがらなかつた。

「もう少し待つてりや良いのに。」

などと云ひ乍ら此方も江戸前天ぶらを揚げ始める。一方ノロの肉のテキも出來上る。油氣が少いからそれ程うまいと云ふ程でないにしても、肝臓だけは舌もとろけるばかりに美味い。その内に江戸前天ぶらの方も出來上つた。だがもう其の時は色々な珍味に壓倒されて腹は一杯だつた。

一雨毎に蛇が少くなつた、今では殆ど居ないと云つても良い程だつた。

八月十一日。一行は更に進んだ。長い／＼路。もう濕地帯も完全に越して居た。素晴らしい花々の咲き亂れる丘の連続。花を手折り、歌をうたひて行く感慨。此の時、此の様な事を「愉しき哉人生」と云ひ度い。

十二站到着いた。それは丁度眞晝の蒸暑い時で、後の丘に登つて見ると、延々として嫩江の上流が素晴らしい屈曲を示して流れるともなく流れて居るのが眺められた。眼の下には、十二站の人々が小さく動くのが見えて居た。私達は遂に嫩江の水源に近附いて居るのだ。湧き上る様な喜びが感じられるのだ。其の日私達は十三站の手前で安心し切つた夜を過したのだつた。

もう十三站迄は短い間だ。それから呼瑪五道溝迄も近い距離だつたから。コングは殊の他嬉しげだつた。彼は兎も角も、人里を猛烈に期待して居るらしかつた。私達は御馳走、殊に生の野菜物が食べられると思つて心愉しかつた。

既に病馬は完全だつた。二行の一人も病氣をしてる者は無かつた。何も彼も好調に此處迄達したので。夜、馬車の方から馬夫の支那歌を口ずさむのが聞えて来る。それから、私達は私達でオロチヨン語を例の如く片端から書き留めて置く、そして彼等との感情は打解ける一方である。

朝、私達はテントの中に居てかなり近くに二發の銃聲を聞いた。こんな處で匪賊が出るのは少し變だ。さう思つて居ると外がやがて騒々しくなつた。然し其のやかましさは何となく明朗な空氣の有る事を知つた。私達は顔を出して見た。

お、何と、オロチヨンの若者は赤い髪の毛を朝風になぶらせて意氣揚々と立つて居た。それから其の足下には二つの首がころがつて居た。人間では勿論ない。ノ、ロである。今度は而も二頭。

「お前の中々上手だ」と盛にほめてやると彼は非常に得意さうだ。

又もや、朝つばらからテキ料理が始まつて了つた。餘りは馬の胴にくゝりつけて行進だつた。

遂に十三站も過ぎた。そして五道溝の屋根が視界に入つて来る。急に馬夫や警備兵や馬などに對する感謝の氣持が湧き上つて来る。自分達の乗つて居る馬車までが懐しくて、明日別の車に乗り換へだと思ふと一寸うら淋しい様な氣もするのだつた。

私は五道溝へ着いた。此處は一寸した採鑛の村落だつた。唯、舍廠だけはちやんとして居た。

そして、私達は今や完全に嫩江流域とおさらばをしてしつた。

五、黒龍江へ出る

其處でも一行は舍廠の御厄介になつた。嗚呼、久し振りで食べた馬鈴薯の煮込みの美味さ。「御馳走が無くてね。」と言つて下さるが、實際こんな生野菜程有難いものは無い。

思ふに、今迄野菜が比較的少く、肉類を主として食べて来たし、それにもうそろ／＼第一回の軽いヒポコンデリ―症状を呈しかけて来た爲、何となく吾々は内心殺伐になつて来て居た事は否めない。恐らく後五日も同じ様な途が続いたら其の感情は表面に出て来て、一寸した事にもいら／＼する様になつて居ただらう。だが斯う云ふ事が言へると思ふ。吾々のパーティーは各自意識して感情を殺して目的に進める様に訓練して来て居る故に、そんな時が来て、假に一人二人が感情を爆發させる様な事が有つたとしても、後の連中までそれに従つて同じ様に興奮すると云ふ事は決して無いだらう。さうした場合、きつと後の者達はパーティーの正しい行動の爲に靜に考へ、そして其の者にも其の事を解らせた事であらう。結局又前の様な、否、それよりも相互に深く氣心を知り合つたパーティーとなつて行動するに違ひない。其の次に來るものは漸く平凡單調な外界の事情に馴れて意に介しなくなる事だらう。さうなれば、此の様な探検はメめたものと言はねばならない。要するにパーティーの問題としては、其の中に縱令自分本位な氣難かしやが居たとしても、一二度ならば良いけれども、何時も他の連中がそれと對抗的にして居たならば何時迄もパーティーは融和しないだらう。何故なら、彼は片意地な故に益々自らを守る事固いであらうから。従つて、斯うした場合に吾々のとるべき方法は、其の缺點を助長させる事なく、努めて其の人と接しようとする事である。但し、それが何時迄も缺點にこだはつて居るものであつてはならぬ。どうして

も相手の長所を見出して、それを生かす様に接してやる事だ。其の内には相互に融和し合ふものと考へられる。さうしてパーティーは上々のものとなる。パーティーの問題は神経をとがらせばとがらす程難かしい問題となるに違ひないのだ。各人の長所さへ見て居たら何でも無い事であらう。

然し、さうは云つても生理的な、例へば偏食等より来る不調子は否めない。それは又それで食料、裝備に關する十分なる研究と準備を怠つてはならぬだらう。

で、私達はさう云つた幾らか偏食より来る倦怠にかゝつて居たから、本當に五道溝に着いた日はガツカリして了つて随分良く眠れた事だつた。景色もガラリと變つて來て、此の邊は何處やら内地に居る様な狭苦しい感じすら伴なつて居る。それは地形が、低い山脈の上の丘陵地である事と、樹木が比較的密になつて來たせいであるかも知れなかつた。

翌朝長い間世話になつたオロチョン二名が歸る事になつて舍廠を訪ねて來た。私達が門までみんな送つてやると、酋長はていねいにキチンと頭を下げてから馬に飛び乗つた。別れに際して私達は、彼等が旅行中大變ほしがつて居た瀬戸引きの大きな茶碗を與へた。若人も名残り惜しさうに馬の上から最後にチラリと此方を見て、それから二人共巧に滑る様に馬を走らせて去つて行つた。時々彼等も振り返つたが、其の度に私達は手を上げて叫んだ。そして彼等は彼方に小さくなつて了つた。

それから、私達は馬夫達の宿舍の方へ行つて見た。彼等は決して歸る事を欲して居なかつた。「歸り度いか」と云つて見ると、「大人達の云ふ儘になります」とは云ふものゝ、其の眼つきは明かにもう一日だけでも一緒に行き度いと云つて居る様だつた。或は、彼等は一日も長くして賃銀を澤山ほしかつたのかも知れない。然しさうは

考へ度くなす。

其所で、今日一日大四道溝迄同行して貰ふ事に決める。彼等の顔は一瞬明るくなつた様だつた。さつき、大きな體のくせに泣きさうな子供の様な顔になつた廿四歳の愛稱コングと云ふ馬夫も、今は生々と張り切るのだつた。「好^{ハイ}好^{ハイ}、々々」と盛に彼は口の中で言つた。

大四道溝迄は近いのだ。一行はもう匪賊の心配も無い立派な道を馬車に揺られていつた。馬夫達も今は馬車と一緒に腰かけて、なすが儘にまかせて居た。何とのんびりした氣持だらう。

何時しかコングの口をついて豫想外にやさしい支那歌が長々と口づさまれ始めるのだつた。彼は柄にも無くうつとりして語るのだつた。「此の歌は、お金の無い可愛想な人の歌です」さう云つて手帳に王小友と書いた。

「もう一つ、／＼と今度は此方が請求した。」ではもう一つ始めますよ。」彼は大得意である。そして今度は李香蓮の歌を歌ふのだつた。綿々として續く彼らしくも無いセンチメンタルな歌は後から／＼と煙草の煙の様に空に散つて消えて行つた。

其の途中又面白い事が起つた。何處からやつて來たか一頭のたくましい牡馬が我々の仲間の牝馬に寄り添つて盛に行進の邪魔をした。さうすると其の子供の小馬が同行して居たが、それが敢然として近寄る馬に向つて行つて後脚で盛にけつた。そして結局、彼は退散せざるを得なかつたと云ふ微笑ましい人情物語、ではない馬情物語が展開されたのである。御蔭で我々は少しも退屈せずに大四道溝の立派な太い丸太造りの舎廠の門をくゞつたのであつた。

舎廠の建物はすべて内も外も頑丈な丸太を以て作られた實に立派なものなのだ。私達は採金場の見學に行つて

見たが、其處には又珍しい採金用の坑が掘つて有つて、其の眞暗い三十米ばかりの坑の中。暗くて、冷い世界。日本人の警官が一人、奥さんと一諸に住んで居る。可愛らしいノロの子供を飼つて居た。先生方には良くなつて居るが私達は中々傍へも寄れない。到頭Iがとびついてつかまへた。

其の晩見に行つた採金街の賭博場の印象的な情景も私達には忘れ難い事であらう。其處は薄暗いラムプに照し出された一場の夢幻境。臺を圍む人々はすべて苦力なのだ。彼等のテラ／＼と光つた腕より把み出されたのは十圓、二十圓、三十圓の紙幣である。無理もない。彼等の此處四道溝での収入は他の舍廠に於けるより遙に大なるものが有るからなのだ。油切つた顔。ちつと見つめる眼。眼。時に其の當然二つ揃つて居るべき眼は、病でか、怪我によつてか、無残にも深く落ちくぼんでつぶれて居るのである。顔のはれ上つた者、眼尻のつり上つた者。――それ等が一樣に勝負をちつと見入る。そしてバラ／＼と札がまかれ、又集められる。勝ち。負け。だが彼等は勝つてもにこりともしない。負けても決してひがんだり悲しんだりする顔附をしないのだ。さうして勝負は續けられて行つた。私達は思ひ思ひに、煙草を吸つたり、西瓜の種子をかちつたりし乍らそれを何時までも見て居た。――

苦力の人生。それは全く私達とは別の、甚だしくかけ離れたものゝ様に思はれる。其の後から又、非常に人間的なものを感じられて来る。それとも彼等には、終極に於ては諦念と巧利主義の他に何物も無いのだらうか。

私達が夜風に吹かれて舍廠の方へ歸つて行くと、私達の馬夫の一人が酒を飲んで、如何にも心地良さうにして幾分フラ／＼として夜の闇の中から浮き出して來た。私達は、學生ばかりの會の後などでよくやる様に、其の男と一諸になつて肩を組んで大聲でわめき乍ら宿舍の方へ歩いた。

朝が来た。――

警備兵二名が此處から戻る。又、馬車五臺及馬夫五人も汗達汽へ引返す事に決定する。私達五人は廣い舍廠の庭を横切つて門の外まで彼等を送りに行つた。もう今日になれば、別れも思ひ掛けない事ではないのでお互にさつぱりした氣持で離れて行く。途中の主な處には手紙を持たせてやつた。

十時頃此方の爲にも四臺の別な馬車が用意された。それは今までの二輪車とは違つて車輪が四つ附いて居た。それと、懐しいアンペラの屋根が無くて、乗つて居れば、唯もう青天井が見える様なしろものだつた。其の代りに馬は今迄のよりもずつとガツシリと大きいのが各々二頭或は三頭も附いて居た。但し、馬夫はと云へば、まあ無理もない尤もな話では有るが、見た事も無い様な男で何となくまだ親しめない感じがした。それは一つには、露西亞領と大分接近して來て、此の邊に向ふのスパイが入つた儘未だに發見されないから用心する事だと云ふ風な話が昨日も出たせいだつたかも知れない。

それでも、いざ乗り込んで了つた時には又新たな旅の感覺がひし／＼と身に泌みて來て、又今日も全然自分等には新しい始めての場所を通り、其の風物が眼に映じる事かと思へばたまらない嬉しさが襲つて來た。

それにつけても、私達が本當に直接に國の爲、又、人類の使命としての絶えざる發展の一段階ともなる様な廣い未知の地域の探検が出来る様になるのは一體何時の事だらう。嗚呼、私達の若き日の此の夢は、縱令無殘に打ちくだかれる事が有らうとも、私達は其の事の意義を信するものである。單なる本能や流浪性や活動性の満足の爲ではない。其處には矢張り一つの、人を首肯せしむべき理論が必要だ。そして其の見通しは既について居る。唯、それが漸進的な實行によつて廣い發表の機會を待つて居るだけなのだ。大きな仕事は必ず將來に控えて居ね

ばならないのだ。

さうだ。吾々は此の夢を決して泡沫の如く消え去るものとのみは思つて居ない。我々の此の夢は實現し、飛躍する可能性が有るのだ。我々は熱情に於ては自信を抱いて居る。そして其の基礎的な訓練を怠つては居ないだらう。それから又同じ志を抱く者が今日本には随分と澤山居る事だらう。

唯、私達は考へる。斯る仕事は、決して熱情のみによつて爲し得らるべきものでもなく、又爲すべきものでも無い、と。其處にどうしても（完全なる真に有意義な探検としては）隊の行動を速かに安易に確實に爲し得べき種々なる能力の養成も、不可缺な條件としても、隊員となるべき者の頭の内容が云々されねばならない。それは勿論豊なる内容を持ち、其の行程中に見聞するものを徒に流す事無く、自己の把握すべき問題は何であるかをハッキリと知つて居て、そして夫等を自分のものにし、更に整理研究の努力を惜まずに世間のものとす様な人ではないのだ。

めつたに得られざる斯る貴重な體驗は、決して熱情のみにて頭の内容無きものには委ねらるべきではない。之は單なる理想論で無い事は勿論である。探検は尤も多くの肉體的勞働者を使用するのを常とする。然しそれは隊員が兼ねる事が有るとしても、主人役たる隊員の使命は決して、そんな肉體を使ふ事のみには有るのでない事は云ふ迄もない。

然らば探検隊員の使命とは何であるか。

吾々は先づ第一に自分が日本人である事を考へて見ねばなるまい。無暗に國粹主義を振り廻すものではないが此の事はどう考へても云へる事だと思ふが、私達にはどうしても、現下の亞細亞が日本の強い力によつて起ち上

りつゝあると云ふ事實、又それが世界に對する日本の使命である事と、此の探檢と云ふ事とは切り離せないもの様に思はれる。各人の人間性は勿論尊重すべきだらう。だが、結局、此の事に考へ及ぶ時に、ひいては人類愛を發見し、人類の向上の問題に及び、探檢も決して自分本位の考へ方でされるべきに非ずして、斯うした國家を通じて見たる、人類の一つの進展に結びつけて考へらるべきものと信ずるに至つたのである。

勿論此の考へ方は今後幾分訂正されないと云へないし、又別の正しい考へ方が有るかも知れない。然し、先づ以て、吾々は吾々の内容を作らう。吾々は吾々として行ひ、そして考へる事だ。それから、多くの他の同志との結びつきだ。――

馬車は既に大四道溝を出で今までに無い良い道を、林の間を危ふく急カーヴしたりして進んで居た。

馬車の中は本當に思索するのに適して居た。難しい書物を久しく讀まない私達には、難しい事を考へ度い要求が強かつた。又一面に於ては、他愛もない話をして、馬車の中からどん／＼後へ／＼と次から次へ過ぎて行く綠色のまだ濃い木々の群葉に向つて爆笑を投げ掛け度い様な衝動も強かつた。さうして、さうする事によつて、近日に終りを告げるべき此の旅行に、何故かしら締めく／＼りを與へられる様な氣もした。一人で乗つて居る者は物を思ひ、二人で居る者は果もなく語り合ひ度かつた。

路は全く小さな屈曲が多くて、而も段々に下つて行つて居る事が良く解つた。馬は下り坂にかゝると殊に張切り、馬車は物凄い音響を立て、彼等に追ひすがつた。そして其の度に私達の體は小刻みに突き上げられるのだつた。

三分處の舍廠に到着する事が出来たのは既に夕刻だつた。

でも、未だ日は高かつた。ヘルメツトを取ると強い日射しが襟首に暑い。三分處の舍廠の建設中の立派なのが先の方に見えて居る。だが今はまだきかない事務室で、何人もの邦人が働いて居る。女性も二人来て居る。私達はひげの一杯に生えた人に案内して貰つて宿所に落着いた。

若い生々した表情の人が懐しさうに話に来る。所長さんも吾々と同じ京大の生輩なので喜んで話に来る。有難い入浴。粗末乍ら皆さんと同じ愉しい食事。こんな粗末な物を毎日食べて働いて居るやうな、而も誰一人として情無い顔は見あたらない此の三分處。

漸く薄闇が訪れた頃、其の人達にビールの會に招かれた。三人、四人、五人、と人が増して来て、到頭狭い食堂に一ぱいになつて了つた。それから段々にみんな元氣になつて来て、さうなると又益々ビールの出様も早くなつて来て、其の中に何方からともなく大聲で歌が始まつて居た。インデセントなものが多かつたのも斯う云ふ時は止むを得まい。斯うしてお互の無聊を慰め合つた。此方も酔つては居たけれども、こんな處で何年も住み切つて働く人の氣持を泌々と考へる事だけは忘れなかつた。酔つた氣持で、暗い外に出てふと仰いだ空には無数の星がまたゝいて居た。

翌日は舍廠も休みだつたし、私達も休養した。又入浴。それから澤山のよごれ物の洗濯が始まつて、到頭宿舎の前は細引きに掛けた洗濯物だらけになつて了つた。日は照りつけ、乾燥した空氣は夫等をサツパリと乾き上らせた。澤山の豚の子が、ひしめき合ひ乍ら、親の晝寝の腹の中に割り込まうとして居る。

次の日、みんなの前には上等なトラックが待つて居た。我々は久し振りにトラックで行ける。而も今日中に黒龍江畔に出られる。嗚呼、シベリヤが眼のあたりに眺められる。――

何邊も何邊も、トラツクが道を曲つて舍廠が見えなくなるまで私達は手を振つてさよならを叫んだ。三分處の人達も何時迄も同じ様に叫んで手を舉げて居た。

トラツクの旅は決して愉快なものでは無かつた。景色は、どん／＼過ぎて行つて了ひ、だから私達は景色とは少しもなじみになる事が出来なかつた。私達は、もう乗る事の無い馬車の旅を懐しがつた。そして、トラツクはこの日の夕方黒龍江畔の湖通鎮と云ふ處に着いたのだつた。

六、歸 路

始めて見る對岸。其處はあのシベリヤの一角である。夕もやの中に次第々々に一つの灯もともさず煙つて行く對岸クマールスカヤの街並。行き交ふ乗馬の兵士の姿。赤い着物を着たロシア女が川邊に出て洗濯するらしい姿。何か叫ぶ聲。ロシア音楽の響きさへ川の上を渡つて來るのだつた。すべてはロシアの姿だつた。

私達は何とも云へない氣持になつて、只ボンヤリと岸の丸太の上に並んで腰を下して居た。みんな唯々、考へるともなく向ふ岸を見て居た。誰も皆、今まで經驗した事もない様な不思議な感情に胸をしめつけられて居た。黒龍江のみが、絶え間も無く岸を洗つて居た。

明日は此處に船が來て黒河まで下れる筈なのだ。けれども、其の船は其處の人々の豫想通りに翌日は來なかつた。私達は一日中きちんと仕度した儘今か今かとあても無く待つて居なければならなかつた。

其の翌朝早く、まだ眠つて居る間に汽船が上流から下つて來てとまつた。ボーツ／＼と盛に汽笛が鳴りわたつた。眠い眼をこすり度いにも兩手に一杯の荷物を持つて居るのでそれもならず、それでも漸く五人共汽船に乗り

込んだ。

船は朝もやの中を、除々に船首を川の中央に進めて、それから流れのまゝの方向に下つて行くのだつた。

黒龍江は悠久の姿で船と共に流れ下つた。

何方の岸も、國際狀勢も知らぬ氣に美しい景色を見せて呉れた。早くも木の葉が紅葉しかゝつて、思ひ無しか秋の息吹きが身の周りにも感じられるのだつた。

船は、そんなに大きくも無かつたが、又決して小さいものでも無かつた。スクリューの代りに船尾に大きな水車のような物が廻つて居て、アフリカの河や、其の昔のミッシンッピーなどを想ひ起させるに十分だつた。

晩になつて、此の船は黒河の碇泊所に横づけにされて居た。

待望の黒河の街は矢張り大きな街だなと思ふ。

夜、暗い中を、私達は採金會社出張所へ宿所の交渉に行つた。

此處で、偶然にも吾々は興安嶺の出發點たる汗達汽の所長さんに御眼にかゝつたのだつた。例のお醫者さんも居られた。

翌日は、お醫者さんの案内で黒河を見物したり、公園のベンチで西瓜の種子をかちつたりして一日中、何となく疲れて居たけれども心は愉しかつた。

八月十九日。それは翌日の事である。

其の日私達五人は、既に自分達のルツクサツクとテント包みと、鍋なんかの入つた二箱の木箱だけになつた荷物と共に、一日に一回きり出ない列車に後れじと乗り込んだ。

汽車は暫くの間は小興安嶺の中と同じ様な風景の中を走つて居たが、それも何時しか滿洲らしい大平原の中に走り込んで居た。北安を過ぎ、海倫を過ぎた。沿線の驛はみんな日本人や滿人の警備兵によつて守られて居た。時には白系露人の兵隊の姿も見られた。彼等は皆一様に滿洲の治安維持の爲に働いて居るのだつた。

一晝夜經つて汽車はハルビンへ着いた。

到頭、私達は、又戻つて來たのだ。

Sだけはリポートを書く爲に次の汽車で新京へ發ち、後の連中はハルビン見物。それから二日の後、又みんなは新京で會したのだつた。

方々への報告や禮廻り。――

銘々、出來るだけ自分達の得たものの整理につとめるのだつた。

廿五日に私達は相談の結果解散する事になつた。それは内地で用事が待つてゐる者と、まだ諸所をみたい者と兩方居つたからである。其の日IとFは吉林へ行つて、滿洲京都の香りをかいで來た。HとNは奉天へ向つた。Sは一路朝鮮から内地へ向つた。

其の別れの際に、一同はさゝやか乍らも、行き馴れた海上ビルディングの地下食堂で共に食事をした。お別れの意味だつたのだ。

「之で到頭今年の計畫も終つちやつたね。」

と、一人がホツとした様に云つた。

「全く愉快だつたなあ。俺は滿洲つて云ふものを見なほしたよ。――」ともう一人が懐しさうな眼つきで皆を見

廻した。

「うん。だけど、まだく／＼からの仕事張りが有るんだぜ。きつと面白くなる。」と別の者が元氣らしく胸を張つて見せた。

それからお互の身の上の事など注意し合つてビルディングを出た。

「じゃあ、さよなら。」と云つて早くも二人程は馬車にとび乗つて居た。「又京都でな。」と下に居た連中も言つた。パカ／＼／＼と馬車はアスファルト道を遠ざかつて行つた。二人の制服の角帽だけが随分遠くに行く迄見え居た。滿洲の國都新京にも、はや秋の風が立ち初めてゐた。

附 記

周 布 光 兼

此の全文は私が擔當執筆したものであるが、何しろ時が時であり、又旅行した場所が場所だけに之以上にあまりに詳細にわたる説明は許されない。又最も残念なのは、蒙古などと異つて、寫眞に就ては殊に嚴重な取締りがある爲に、全く發表の自由をもたないことである。尙、裝備などに關しては他の機會に書き纏めたいと考へてゐるが、差當り關西學生山岳聯盟報告第八號に記載したものを参照されたい。

綜説

高所に於ける人體血液に就いて

額 田 敏

高所に於ける人體血液に就いて

近來航空術の發展は將に成層圈飛行が實現化されんとし、之に伴ふ高空醫學の研究も其の必要性が益々加はつて來たし、一方登山方面の趨勢は八千米級の巨大山岳へ大規模な計畫が次々に實現せられる様になり、科學的意味をより多分に持つ大遠征時代となつて來た。之等の遂行には人類最高の能力と云ふ問題の他にも是非高層醫學の研究が行はれなければならぬ事が解つて來た。之等に關して先人が如何に努力して今日隆盛の基礎を築いたかを知り、又現今の研究は如何なる状態にあるかの概觀を窺ふ事は、これに多少でも關心

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

を有する者の等しく欲する處であらう。然し高空醫學的研究は深き専門學的知識を必要とする事は勿論且つ航空科學的に、乃至技術的に素養を要することであるし、又登山方面にも、之に關する深き知識と理解と體験を有するものに非ざれば完成を期し難い事は當然である。私は茲には單に登山方面に關して實際に高所に登つた時、人體に如何なる變化を來やすに就き諸先人の跡を追つて見度いと思ふものである。學者の研究は實際に高所に登つた人體に就きての實驗の他に之を動物實驗に依つて補つて居るし又高所に相當する減壓室の實驗にも待つものが多い。然し私は茲では人が實際に高所に登つて其の人體に就いて行つた研究の報告

により、又處によつては之と重要な關係を有するものは動物實驗或は減壓室の實驗の結果をも比較對象することにした。そして先づ初めに人體血液が如何に高所に於て變化を受けるかに就き總括的に述べ度いと思ふ。

血液中の諸元

A 赤血球

1 赤血球及び其の量的變化

高所に於いて測定せられた人體赤血球數は標高の上昇と共に増加することは多くの登山、遠征隊の報告に見る處である。此の高所に於ける赤血球の増加すると云ふ實測値は採血中の赤血球の増加を云ふのであつて換言すれば採血單位容積中に於ける増加値で之を以て直ちに身體全血液中の赤血球の増加を表はすものと考へ得るや否やは問題とすべきであらう。何となれば皮膚部毛細管中赤血球の増加(採血は多く此の部分から行はれる)は身體深部毛細管より移動によりて増加し

得るものであるかも知れない。殊に高山に在りては強烈なる太陽光線が皮膚を刺戟し此の毛細管は擴大されて皮膚部血球數を増加する傾向を有する⁽¹⁾、故に採血單位容積中の赤血球増加を以て眞の赤血球増加(或は骨髓よりして新生する血球の増加)であるか否かは疑問である。又血球數測定に使用する器具器械に對する物理的、氣象的其他の原因に依つても測定數は異り得べきである。

高山の強き氣象的刺戟より發生する皮膚部筋肉收縮、内部脈管内に生ずる血壓興奮作用によりて *Bishop-Tanna* の淋巴道への濾過作用強化せられ、其れが爲めに血液の濃厚化を生じ得ることもあり、或は又高山の空氣は濕氣少く、低地に比し大いに乾燥し水分蒸發により血液は濃厚となる傾向を有し従つて血球數増加を來すとも考へられるが減壓室中に於て其の壓に相當する飽和水蒸氣壓下の實驗の結果は矢張り血球増加を示す故に空氣濕度により赤血球の増加は考へられないかも知れない⁽²⁾。

今種々の實驗者によりて高所上で測定せられた赤血球數を示すと次表の様である。Hingson は彼自身の血液に就き Pamir 高原に於て血球數を測定せしに次の如き結果を見た⁽⁴⁾。採血單位容積中の赤血球數はこの表を見る如く高所に登るに従つて相當急速に増加し

測定者	測定場所	高度	1mm ³ 中ノ赤血球數(3)
		m	
Laache	Oslo	0	497.0 × 10 ⁴
Schröder	Hohen Honno	236	533.2 "
Stierlin	Zürich	412	575.2 "
Schröder	Gorbersdorf	561	580.0 "
F. Wolff	Reiboldgrün	700	597.0 "
Kündig	Davos	1560	655.1 "
Egger	Arosa	1800	700.0 "
Viault	Kordilleren	4392	800.0 "
Barcroft	Peruanische Anden		
	遠征隊員	4500	600.0 "
	住民	4500	700.0 "
Hingson	Pamir 高原		
	Hingson	4400	740.0 "
	住民七名ニツキ	4400	{ 730.0 "
			{ 796.0 "
	Hingson	5500	832.0 "
	Sarikolis 住民	5500	759.0 "
	Kirgisen 住民	5500	792.0 "

高所に於ける人體血液に就いて (續田)

月	日	高度	1mm ³ 中ノ赤血球數
		m	
April	10	210	448.0 × 10 ⁴
	12	1350	524.0 "
	21	2440	604.0 "
	28	3050	662.4 "
	30	3645	676.0 "
Juni	1	3780	680.0 "
	21	4050	752.5 "
	23	4750	784.0 "
	26	5150	764.0 "
	27	5550	832.0 "

同一標高ニ滞在スレバ血球數ニ變化ナキ事ヲ認メタ

又遠征隊員と住民との血球數を比較するに住民の方が遙かに數少ない事を見る。此の原因に就いては明記して居ないが馴致作用がその原因の一つである事は考へ得られる。

2 赤血球の性質

高所住民及び登高者に就いて赤血球増加することは既に述べた事及び更に多くの測定に依つて認められて居る。其の原因は高所の氣象的な種々の影響による事は勿論であるが如何なる機構によりて然るやに就いては諸説がある。

血液は循環血液と體內臟器中に停滞して居る血液とに分けられて、循環血液は外的條件によりて鋭敏なる變化を受け新陳代謝に影響する處大であるが、臟器中殊に脾臟中に含まれて居る血液は新陳代謝には餘り關係が無い。高所の大氣中に於て酸素缺乏時循環血液は直ちに影響せられこれに對應する血液變化が起る。

これに就いては *Larwofl, Linzel* 及び *Daleff* 等が動物實驗によりて認めた。斯かる場合に脾臟中の血液も亦酸素缺乏の對應作用に參與することを實驗的に認めた。尙斯かる對應作用に脾臟の他に皮部乳頭脈管叢及び內臟脈管も亦參與すると謂はれる。

然し高所に於ける赤血球の眞の増加は細胞それ自身に關係する事であつて、赤血球中未成熟赤血球は比較的迅速に循環血液に入り易く、成熟せる古き赤血球との區別は其の色調、血球中核を有する所謂有核赤血球の存在によりて容易に行はれる。

高所酸素缺乏は骨髓に刺戟を與へてその結果異常生

成物として網狀細胞が赤血球變化に關係ある事が注意を喚起する様になつた。有核赤血球は極めて高度の大なる(4000—5000以上)大氣密度稀薄な所に於て長期滞在しないと發生しないのを普通とし、高所住民の血液中に多く見出されると云ふが又小赤血球は 1800m 附近の中級高所に於て數日乃至十數日滞在する人にも認められる。此の現象は正常赤血球が二個以上に分

正 常 赤 血 球 (μ)	全 量 %	400mm減 時置ケル 赤血球直 徑(μ)	全 量 %
5.2—6.0	4	5.2—6.0	6
6.0—6.9	34	6.0—6.9	34
6.9—7.8	51	6.9—7.8	21
7.8—(8.1)	11	7.8—8.7	29
		8.7—(9.0)	11

尙Asztalos, Ellos,
Kraunitz $\frac{14}{\mu}$ ノ赤球
ヲ見出シタ(9)

割して血球數を増し従つて表面積を増大し酸素缺乏に對し吸收力を強化する一種の自然的馴致現象であると認められる。又斯かる高所酸素缺乏時に更に巨大赤血球も發現する。之は赤血球が新生し

た徴象であると謂ふ (*Dressisch*)。斯かる變化が血液中に發生する一般的觀念を動物實驗によりてこれを觀るに次の表の如き結果を得た。

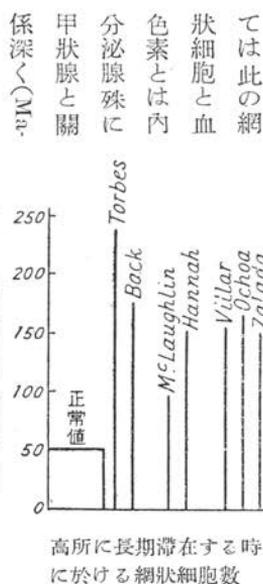
此等の事實より高地の大氣より來る酸素缺乏の強さ、其處に居る時間及び状態等により赤血球の状態に變化を及ぼすことを知る。

又或る學者⁽⁹⁾によれば巨大赤血球は心臟右心室の活動不充分なる徴象で、高所に於て急激な血液中酸素缺乏の爲めに骨髓刺戟を受け此の爲めに未成熟赤血球を血液中に送り出すことに依りても亦此の巨大赤血球現象⁽⁹⁾が發生するものであると云ふ。

これ等の赤血球異大症状と同時に高所に在りては *Polychromasie* も亦一つの著明な徴象で、此の現象は本來未成熟赤血球に於て生ずるもので新生赤血球の生成を示す。又網狀細胞も亦高所に於て發生する現象であるが、此の血液中の網狀細胞の増加は酸素缺乏によりて骨髓への反應の徴象として最も確實で且つ迅速な證據であるとされて居る。*Larocoff* が *Hoch-Pern* 遠

征の際其の隊員及び土地住民に就いてその網狀細胞を測定した結果は次圖の様であつた。

高所に於



血液中に *Tripetid Glutathion* を加へると高所に於てのみ血液全體及び血漿に於て酸素消費量が著しく増加することが知れた。それは低地では表れないが高所に於ては酸素を喰ふか或は之を遞傳する物質が血液中に及び血漿中に發生するものであると考へられる。減壓

下に曝らされた體中の赤血球の實際の増加は多くの實驗によりて認められて居る處であるがこれが酸素供給の減少に關係する事は V. Korányi 及び Seller によりて(一氣壓下で而も酸素分壓少なき空氣中で)實驗された。太陽光線殊に紫外線が血球數増加に力ありとするものもあるが又此の反證もあつて一定の説は無い、が然し諸學者の實驗する處に依ると高所に在りては赤血球は増加すると共に馴致現象が発生し全血液量は増加し、血液循環も亦促進せられるものと謂ふ。

3 赤血球の抵抗力

赤血球抵抗が低地と高所では異ふ。小學兒童を休暇中 1500m の高所に滞在せしめて實驗した結果其の 93% は最小抵抗は變化しながら 63% は抵抗減少した (V. Rohlen) 又高所太陽照射によりて最も敏感である赤血球の抵抗を低下せしめたが其の大部分は抵抗力昂進すると云ふ、然し最大抵抗力を有するものは未成熟の若き赤血球であると云ふ。Kaulfers は此の赤血球抵抗の亢進は高所 3100m に於ては滲透的刺戟によりて發生

することをも見出した。又假令若き赤血球が血液中に存在するも赤血球の増加と抵抗とは血球のより長き生命の期間中に關係を有するものであると述べて居る。

B 血色素

1 血色素の量的變化

高所に於て赤血球増加とよく似た現象が血色素に就ても發生して増加するが、但し赤血球の増加と比例はしない。多くの場合血色素の増加は其の割合が赤血球のそれよりも少ない。而して血色素は赤血球の値に對照して表されるのが普通で其の表し方には色々の形式がある。着色率 $\frac{Hb}{Er}$ 正常血液 10mm 中の赤血球數は大凡 500 萬で之を 100 とし、又一方血液 100cc 中の正常血色素量は 15g で之も亦 100 と表して計算すると着色率は $\frac{Hb}{Er} = \frac{100}{100} = 1$ 高所に於ける此の比率は普通 1 より少ない値を採る。

Birker's は一個の赤血球に就いて血色素量如何なる比に在るかを示す $\frac{Hb}{Er} = 30.2 \times 10^{12}$ (正常値)

又赤血球一個の表面積に就いて血色素が如何なる關

係にあるかの表し方をも採用することがある。 $\frac{Hb}{Er} = 31 \times 10^{\frac{-14}{10^2/10^2}}$ 又 $Draskis^{(15)}$ は赤血球 100個に就いて色素が如何なる關係に在るかの表し方を用ふ。

今種々な高所に於ける赤血球と色素の關係を示せば次の如し。

場 所	測 定 者	赤血球増加%	色素増加%	Hb Er(個)		Hb Er(面積)		
				高 所	低 地	高 所	低 地	高 所
Col d'Olen 2900m	Chiatellino, Madon ⁽¹⁶⁾	+14.5	+7.	Turin				
"	Margaria, Saepno ⁽¹⁸⁾	+12.82	+4.67	$\times 10^{-12}$	$\times 10^{-12}$	$\times 10^{-14}$	$\times 10^{-14}$	$\times 10^{-14}$
"	Chiatellino, Margaria	+16.6	+7.61	32.7~32.9	30.6~30.1	30.6~30.4	28.4~27.5	

之等の數値を見るに何れも $\frac{Hb}{Er}$ の値が減少するを見る。高所に於て何故に斯かる現象を呈するかに就き $Zalka^{(17)}$ は高所の空氣稀薄なる所に於ては脾臓は血液増殖抑壓に際して網狀内皮細胞の延長の一部であるかの如く作用して可溶性含糖酸化鐵或は Carmin によりて網狀内皮細胞を抑壓すること脾臓摘出と等しき作用を血液生成に作用するものであると云ふ。之を以て全然正しき意見とすることは出来ないが $Zalka$ の強度

稀薄空氣中に於て發生する重き肝臟障病は傳達性麻痺により末梢神經を麻痺すれば非常に輕減せしめられるか或は全然斯かる症狀の發生を認めないと云ふ事からして其の妥當性を見ることが出来る。又 $Zalka$ は空氣稀薄な場所に於ては骨髓は其の機能亢進状態に置かれ

るが故に血液生成に對する抑壓作用は血液脈管に對する骨髓の防水作用に起因し血液生成場所中に於ける造血そのものの抑壓に非ずと云ふ。

2 色素の總量

高所に於て血液の新生成、色素の總量如何に就ては主に動物に就て實驗が行はれて居るが其の方法は同腹の鼠、家兎等の一半は高所に、他半は低地に置きて色素の量の比較が行はれた⁽¹⁸⁾人體に就ても此れに關

する調査の報告)がある。其等の調査報告に依れば高所に滞留する間に著しく總血色素量が増加することが知れた。其の増加は 7.7~8.7乃至 30.5~32.9%⁽²⁾で又體重1kgに就きての増加は *Alderharden*, *Lintzel* 及び *Radeff* 等の調査によれば中級の高所に於て 29%, 8000m 高度に於て鼠で 80%, 幼兎は 115%の増加を示すと云ふ。幼き者程増加率があることが知れる。此の原因に就ては幼者は老齡者に比して骨髓の血液生成作用の刺激が強い爲めであると云ふ。之等の實驗動物を低地に移せば再び總血色素量は減少するが正常値に迄歸復するには相當長時を要する (*Giamni*) 又反對に高大氣壓下に置かれた動物は膽汁色素が異常に増加する爲め血球並びに血色素が分解すると云ふ。

3 高所に於ける血色素の變化

高所に於ては血色素に結合して居る酸素の分離が正常状態に於けると異なることは大氣及び酸素の分壓の異なることによりて容易に推知することが出来る。血色素の酸素との結合力は甚だしき高所に於ては(最初勞動

状態、後に靜止状態に於て)低下し高所滞在短期なる場合は低下を持續す。従つて急性貧血症を起す。處が滞在長期に及ぶ時は酸素との結合力を異にするに至り漸次強化せられる。

甚だしく酸素分壓の低き場合の血液中に於ける酸素との結合力は毛細管部に於て特に著しく低下するが、此の現象は又毛細管血液より組織へ酸素を授與する事が容易化する點より却つて一種の適應現象が起ると考へることが出来る。又高所に於ては低地よりも等しき酸素分壓に對して多量の酸素を收容し得る様な變化が血色素中に起る。此の特別な所謂馴致變化は *Dougl's* (*Barrolo*)が *Teneriffa* 高地に滞在中及び *Fan roff* が *Hoch-Peru* (Cerro de Pasco 4500~5000) の高所で住民に就いて調査した。

C 白血球

高所に於る人體白血球に就いては赤血球程調べられて居ない。*Stauki* 及び *Cranstjke* は次の如き變化あるを知つた *Rauzer* の第二回 *Kangchendzöngu* Expe-

	St.Moritz及 Davos	正 常 値
總白血球數 { Staubli Craandijk	6675 6660(男)	6000—8000
多核中性色素嗜好性細胞 { Staubli Craandijk	52.6% % 53(男)55(女)	70—75%
Eosin 染色性細胞	2.2%	1—3%
淋 巴 球	27.2%	22—25%
巨大單核移行型(Staubli)	8.2 8.9 } 17.1%	2—3%
單核巨大細胞(Craandijk)	6.4—6.5%	
脂肪性細胞(Staubli, Craandijk)	0.4%	0.5%

dition に際して *Hartmann* の調査せる結果は右の表の如し。

之等の表を見るに總白血球數は低地正常値と殆ど變

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

細胞の種類	高 度 m								
	0	2800	4525	5830	6270	6470	7005	7360	600
Eosin 染色細胞	3	5	2	3	3	3	3	2	3
桿狀核細胞	1	2	1	1	1	1	3	1	1
Segment-kernig	64	44	50	54	56	58	61	63	52
淋 巴 球	29	45	42	39	37	32	27	29	40
單 核 細 胞	3	4	5	3	3	6	6	5	4

化なく寧ろ却つて減少の傾向を有する位である。之に對して多核性白血球は比較的著しく減少を來し、淋

球は増加す。高所に登つた後は一種の馴致的に白血球發生し2乃至3週間の後に又復歸すると謂はれる。斯かる過程は矢張り高所の酸素稀薄の作用によりて酸素供給不充分となり同時に總白血球減少と同時に尙中性色素嗜好性細胞減少、淋巴球増加及び Eosin 染色球減少を來す(2) 又第二回 *Kangshendzönggr-Expedition* に際して *Hartmann* が其

の隊員に就き調査せし處によると白血球は高度 5000 ミ迄は低地のそれと何等異らず中性色素染色性細胞

の分割現象を見た。之れは登攀隊員が強烈なる労働と極めて制限された食糧との爲め Vitamin 缺乏症 (殊に B 及び C に就いて) を起した爲めであると稱して居る⁽¹¹⁾。

斯かる白血球減少、淋巴球増加症状は多くの減壓室中の動物實驗の結果骨髓中に白血球の抑留に關係があることが知れた。骨髓には鹽基性色素嗜好性白血球多き事が澁谷氏⁽¹²⁾によつて知れて居る。

近年高山に於て烈しき労働時に於ける白血球の状態に就き調べられて居るが Knol⁽¹³⁾ は第二回冬季オリンピック競技の中でスキー競技者の血液中の白血球が著しく増加を來し、同時に中性色素嗜好性細胞も亦増加するが淋巴球は減少を來すことが認められた。單核細胞は多少増減するがその最少數は増加す。これは高地で見る現象で、スイスの山岳兵斥候に就き調査された結果 35—36 乃至 63% の増加を見た。又 Loewy,

Vogel, Eysern 及び Oppissac⁽¹⁴⁾ は 1930 Davos 冬季競技會中スキーランナー及びホッケー競技者に就き調

査した處中性色素嗜好性細胞は矢張著しく増加し同時に桿狀核細胞が 5—7% 乃至 11—20% も増加し左方移動現象を呈し、淋巴球は 30—44% 或は 7—11% 減少し、最初の 1/3—1/6 にもなつたと云ふ。高所に於ける労働時の淋巴球の減少は白血球に關係して特に内分泌物質例へば Adrenalin 分泌に影響せられ、疲勞極度に達するが如き労働時に際しては之の物質が動員せられると云ふ。

D 血小板及び血液凝固

巨大高峻山岳の遠征に際して往々傷部よりの出血が低地に於ける場合よりも著しく短時間に凝固することが見られる。Djurenfurth, Internationalen Himalaya Expedition に於ても亦同様の現象が起つた事を Dr. Richter が認めた。これは如何なる原因によりて發生するかに就いて Naegeli, Faù, Koss⁽¹⁵⁾ 等が研究した大氣壓の減少、大氣上層の紫外線豊富に由るものであつて血小板の増加にも關係があると謂ふ。又これ等の反對説もありて一定して居ない。高所に於て紫外

線豊富なるが爲めに小血小板増加することは多くの實驗で認められて居る處であるが、これを以て血液凝固の第一原因であると考へることは出来ない。又高所に於ては脂肪血症を生じ、此の爲めに血液凝固が促進せられる事は認められる⁽⁸⁾が又血液中に總 Phosphatid ことに *Kephalin* 量が増加してこれが又血液凝固を促進せしむるものであるとの説もあるが又此の反説もある。

總血量と血漿との關係

1 物理的性質

高所に於て血液（血漿、血清）が低地のそれと異なることは既に述べたが又他の異なる點をも有す。

(a) 血液比重の増加 高所に於て長期滞在すれば其間に血液は 4~6 單位其の比重を増加することを見る

(Zuntz, Loewy, Muller, Caspari)

(b) 血液細胞の増加するが爲めの粘度の増加 高所に於て血液内部磨擦(粘度)を増す、例へば Freiburg より St. Moritz に登る時は 2~11日間 17.4% 又長期滞在すれば 11% の増加を見る⁽⁹⁾と云ふ。中央アンリ

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

カ Uenda に於て高度 4000m の處に於て多數の人に就き調査せし處に依ると八日後に 5 (Wren) は 4.6) 黑人に就ては 6.5 の増加を見た。血液中含有 CO_2 ば赤血球の膨化作用を有し、高所に於て此の作用が殊に著しく、これは又赤血球の増加と共に著しいから粘度増加を來す原因となる。而して此の粘度増加は心臟の勞作を増し右心室は左心室よりも特に活動して右心室肥大症を生ずると云ふ。

(c) 分子濃度及び電導度 血液の分子濃度及び電導度は餘り増加しないが 2900m の高度を旅行する際は血液中の蛋白質乾燥残渣及び比重、分子濃度、電導度のある狭き範圍内に於て増加する。高度 1500m に於て紫外線照射の爲め血清中膠質狀態に變化を起し局部靜脈に鬱血を來し照射部分の血清の表面張力は照射せざる部分のそれと異り短時間増加して再び減少すと云ふ。

2 化學的性質

(a) 血液中の蛋白質 Toth の實驗によれば高所に

住する人の血液に就ては低地のそれに比して蛋白質質量増加し Albumin をひと増加し Globulin は低地の値(30.5%)よりも減少(27.5%)すると云ふ、又 *Schermensky* は高所の住民及び多年高所に住み慣れた人に就き Cholesterin の調査と同時に實驗せしに Globulin の減少を見たと言ふ。此の時血液も亦粘度を減少することを見た。これは血液中粘度高き Globulin 減少に基くものと考へられる。

(b) 非常に標高大なる例へば 5000m 附近の高地に滞在すれば血液中の窒素含有成分に異常症状を來し殘餘窒素が甚だ増加を來す⁽²⁸⁾、氣壓 430~380mm Hg (4500~5000m) の高所に幾月も滞在すれば血液中殘餘窒素23%, 更に高所の氣壓330~230mm Hg の處に於ては約4%を増加し、蛋白質はより強く分解して其の分解生成成分である尿素及びアミノ酸分がペプトン分よりも増加すると云ふ。

(c) Lipoid の量も高所に於ては變る 血液中の Cholesterin 及び脂肪量も高所に於ては増加するが Phosphatid 量は變らなると *Naikoenig* は報告して居る。又 *Schermensky* は自己の體に就きし Davos に於て研究し Cholesterin 量は低地に於けるよりも増加し、高所に滞在する時は矢張り高き値を探り例へば高山上に於て血液 Cholesterin 最大量は 180mg% にもなり低地に於ける腎炎症の如き異常症状に於いて見るが如き値となるが、尙高所の住民に就き調査せる結果は此の値が 200mg%, 350mg% 乃至 480mg% にもなる事があると云ふ。

血液中の脂肪及び Cholesterin 含有量は多く動物實驗によりて見ると氣壓の減少により影響することが知れて居る⁽²⁹⁾ 即ち減壓に於て増加し壓力を戻すと再び正常値に歸復する。之は減壓によりて酸素の不足を來して肝臓の機能に變化を起す爲であると云ふ。 *Schermensky* によれば高所に於ては恐らく強き血液退行變化が發生し殊に赤血球に於て甚だしく、其時に基礎組織より多くの Lipoid が遊離せられ、斯の如くしく血液中の Lipoid 量を増加すると説明せられる。尙高層氣

象的作用ことにその光線作用は植物性神経系統に關係を有し、光線は交感神経を弱める作用があり、副交感神経は興奮状態となる。

(d) 血糖 高所に滞在中血糖量の變化には二つの要素が作用するものと考へられる。即ち光線の作用と減壓作用之である。光線は血糖を調節する作用を有す即ち高血糖には之を低め、低血糖には之を高むる⁽³⁾、⁽⁴⁾高山に於て日光照射を行はずして長期滞在すれば軽度の血糖多過症を起す。糖は高所に在る時は血液中に、より迅速に且つ急激に増加し屢々より高き最大値を示す之に日光照射したる後は血糖は正常値に迄下降し、糖寛容度は日光照射後に於て高めらる。次に空氣稀薄即ち酸素缺乏現象は交感神経を興奮せしむる作用あり、之に對して日光は之を鎮靜する作用がある(或は副交感神経を興奮せしむ)、高所氣象が血糖に對する作用は此の二要素であると *Messerie* は稱へて居る。*Go'dberg* ⁽⁵⁾ 及び *Ferraro* ⁽⁶⁾ の研究によれば高所に於ては血糖の値は漸次に増加し二週間にして低地の値より 30%

40% 増加す。然し *Ferraro* によれば高所にありて糖燃焼は増加せずと云ふ。*Adrenalin* は高所に於ける血糖に對しては低地に於けるよりも強き血糖の増加を與へると云ふ (*Breme, Györy, Monasterio*)。

(e) 血液中の無機成分 高所に於て身體内諸器官中に於ける無機成分含量讀化は日光及び大氣の稀薄に基くことは多くの實驗によりて知られて居る處であり、血液中に於けるそれ等の成分の變化も亦諸器官中に於ける變化より來るものである。*Pi-cussen* ⁽⁸⁾ は太陽紫外線照射は血液中の $K:Ca$ の値を減少せしむると云ふ。又尿中の $K:Ca$ は著しく増加す。照射によりて交感神経に對して降下作用あり、高所に於て日光照射を受けざる時は血液中 K 及び Ca 量は減少し次第で徐々に原値に復す、日光照射は磷酸鹽量を増加す⁽⁹⁾ 此の事は尙僂病患者に對して特に重要な効果を呈するものである。 K, Ca, Na, Mg 等の含有量の變化に就ては *Pi-cussen* 著 *Photobiologie, Leipzig (1930)* に詳しく述べられて居る。

豫備滴量も高度と共に減少す⁽³³⁾之も恐らく空氣稀薄に原因するものであると謂はれる。Peters 及び其の共働者の研究⁽³⁴⁾は特に血液の反應變化より血液の變化研究であつて體中ガスの發散餘りに盛んなる時は強直性痙攣症狀も發生する様になることもあるが血液中の總滴量に變化はない。中等度の酸素缺乏に際しては *Überventilation* なる現象を起し血液中の豫備滴の減少を來す、此の際鹽化物の量は組織より流入するが爲めに却つて増加す。又強き酸素缺乏に際しては血液中には有機酸増加し組織側より滴を放出して血液中に於ける滴量は増加を來す。

血液中の炭酸アルカリ減少に際しては常に之れを補ふ意味で NaCl が入り來り之が解離しつゝ其の Na は炭酸化合物を生ず、故に血液滴量及び血液鹽化物量は相互關係を有する、其れ故に斯く如き關係より兩者の量は變るも全體に於ける電離平衡は出來得るだけ保持せられんとする。*Breime* 及び *Gjorvig*⁽³⁵⁾ は高度 1500 m に於て自らの體中の血液總滴の増加を、又 2450 m 著

しき増加を認めた、此の事は Peters 及び其の共同者の所見の所説の如く血液酸素缺乏の現象であると見て居る。

(f) 血液中の酵素 高所に滞在する時血液はその中に存在する酵素にも影響がある、此の影響は短波光が酵素に對する作用に似て居る、概ね短波光は酵素に對して滅殺作用を有す⁽³⁶⁾之に關する研究は Pincussen 及び其の共同者によりて多くの材料が提供せられて居る (*Photobiologie*) Koltajew 及び Altschuler⁽³⁷⁾ は中級高所に於ける紫外線は血清 *Amylase* 及び *Katalase* を減少し *Lipase* を増加すると謂ふ、此の變化は新陳代謝に影響を及ぼす、而し高所に長く滞在し餘り強からざる日光に照射せられる時は却つて反對の現象を起し⁽³⁸⁾血液 *Katalase* は増加す⁽³⁹⁾例へば高所に三週間滞在するに著しく之を増加し6〜7週間にして約70%の増すと云ふ⁽⁴⁰⁾此の増加は高所に於ては氣溫減少及び空氣移動烈しき爲めで若し高温で風なき静かな場合は却つて減少すると云ふ、此の *Katalase* の増加は *Rigou*⁽⁴¹⁾

が Col. d'Olten に於て調査せし結果も同様増加を來した、滯在期間の延長に依つて之が増加することを認めた。此の血液 *Katalase* の増加は高所に於ける酸化現象の上昇と關係がある即ち高所に於ける酸化作用が旺んになり *Katalase* が増加することによりて保護作用も亦強化せらる (*Albrecht*)。

(g) 血液形成素 大氣壓410~480mm Hg (4000~5000m) の稀薄な處に24~48時間動物を置くと概ね貧血症狀を發生する。其の動物の血清中には其の由來及び特性等未だ充分知られて居ない處の血液を生成する一種の成分が其の血清に見出されると云ふ *Carrot* 及び *Defibrin* は之を血液形成素と名づけた。更に *Fröscher* は放血により人工的に貧血狀態に陥らしめた家兎に對し前以つて減壓室中に置いた家兎の血清を注射せしに血液の再生が著しく迅速に促進せられた事を見たが之に對してその血清を注射しない家兎は血液の再生が1~2日も遅れた。又常態の血清を注射しても何等の造血促進作用は認められない。此の事實を考へ

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

ると必ずしも減壓下に置いた動物の血清そのものの中に何か一種の新生した造血促進素の存在するとは斷言出來ないにしても確かに造血に著しき効果を有する即ち結果に於て骨髓を刺戟する作用を呈するものを生成した事を知る。又此の現象は減壓下に曝らされて生ずる酸中毒に關係があるとも考へられる。又 *Daire* の實驗によれば貧血狀態に在る動物に對して鹽酸、磷酸或は硫酸を與ふることによりて極めて著しく血液の増殖を促進せしむることが出來ると云ふ、更に *Sanders* は減壓下に置いた動物血液の血清は貧血狀態に陥つたものに對してのみ作用があり正常なる動物に對してその等量を注射するも血色素及び赤血球は却つて減少せしむると云ふ。

(h) 日光照射による血糖の狀態は如何なるかは交感神經系統に關係があるものとされて居るが又此の交感神經系統は又ホルモン生成系統に又血壓及び皮膚色素沈着にも關係がある、殊に副腎系統には關係が深いと云ふ。

Feldmann 及び *Azuma* (5) は高所日光照射は血清の脈管收縮力及び副腎系統に關係を有し色素沈着を起さざる程度の高所日光照射を行へば脈管收縮力を減少し血糖及び血壓に對しても等しき傾向の作用を呈す、皮膚色素沈着を起した後は日光照射を行つても作用はない、之れは照射による副腎の影響であつて循環運動中 *Adrenalin* の生成、減少によりて發生する現象であると云ふ。

(i) 有機酸類 強度に減壓せられた空氣中に於ては有機酸殊に乳酸が血液中に生ずる (6) が之が炭水化物の新陳代謝中の唯一の中間生成物で血液中乳酸として測られる。*Ruffel* (7) は氣壓450~460mm Hg 下に曝らざれると血液中乳酸の著しき増加するを見、又 *Douglas* 及び *Laquer* (8) 同様の現象を認め、*Barcroft* (9) は *Monte Rosa* 上及びその登高途中に於て同伴者二人に就き調査した處2900m 及び317~18%, 山頂では36~39% (平地では12~13%) で平地の約三倍の乳酸を見たといふ。

高所に於ける血液ガス

(1) 高所に於ける動物及び人類血液中の酸素炭酸ガスは靜脈中と動脈中で其の量を異にする。動脈中の酸素量は組織に運搬すべき酸素 (之は組織に供給する酸素でない、却ち之が供給は運搬された量には直接關係せずして血漿の酸素の分壓に比例す) に對する一つの啓示を與へるものである。混合靜脈血中の酸素測定は器管中の酸素給盡平均値を示して呼吸による總新陳代謝の決定と連絡して血液循環速度によりて計算することが出来る。血液中の CO_2 量は血液の酸、鹽基比を決定し得る。 CO_2 は O_2 に比して血液との結合緊密ならずして CO_2 の分壓によりて種々に變化 (動脈中の CO_2 量は肺氣胞中の CO_2 分壓によりて著しく變動す) す、又其他の原因及び身體状態によりても異なる、故に CO_2 變動は第一に肺氣胞中の CO_2 分壓を知らなければならぬ。高所に於いて肺氣胞中の CO_2 分壓は呼吸作用の興奮によりて、次に肺氣胞中の CO_2 分壓の低下従つて血液中 CO_2 量によりて變動す。此の兩原因は著しく性質の異

るもので第一は中樞刺激により第二は血液形成性と呼吸刺激により起る、而して此の兩場合は血液に對し全く異なる反應を發生する。即ち第一は血液の Alkalose を起し之を Relative Alkalose と云ひ呼吸によりて生じた CO₂ の増加の結果滴量が減少し血液中の CO₂ と重

炭酸鹽との正常なる比を破る。滴は漸次に血液より減少して尿に排泄せられて尿をして適性へ反應が移行する。斯の如くなれば血液の Alkalose は又漸次消失する。血液形成的呼吸刺激は組織の中間的な新陳代謝に基因し最後生成物でない物質の爲めに血液が酸性を呈する様な生成物の存在の爲めであるとされて居る、病理學上より糖尿病では斯かる變化（血液中に有機物質の崩壞に際して酸性有機生成物が殘留するが如き）が血液に見出される、此の酸性生成物は血液中の CO₂ 分壓従つて血

液中の CO₂ 量を下降せしむ、又此の血液 Alkalose に對し血液 Acidose を生ずる事がある。

(2) 血液中の正常酸素量 此の量は血液中の血色素量に關係するもので物理的に血液に溶解して居る O₂ の量ではない、溶解して居る O₂ は純酸素吸入を行ふ時に於てその量は變るが甚だ高所に於ては此の酸素吸入によりて空氣中不足の酸素を補ふ事がある。斯かる酸素吸入を行ふ場合には溶解酸素は大氣のみを呼吸する時の 1/2 倍にも達する事がある。大氣吸入の場合に溶解せる O₂ は血液 100cc に對し 0.44cc に過ぎないが酸素吸入を行ふ時は 1.1cc にも昇る、之に對して血色素 1cc は 1.34cc の O₂ と結合して今血色素含有量が 13%

O ₂ 分壓 mm	壓力 mm	標高 m	血液中O ₂ 飽和度%	O ₂ 分壓	壓力 mm	標高 m	血液中O ₂ 飽和度%
760	—	—	100	70	335	6500	90
159	760	0	96	60	288	7700	88
100	480	3500	94	50	210	8900	82
90	432	4500	93	40	194	—	72
80	385	5400	92	35	144	—	55

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

15g%の時その血色素は17.4~20.1 vol%はO₂と結合する、又此のO₂量はO₂分壓にも關係するがO₂とHbとの結合物なる所謂分解すべき即ち化學的に結合せるO₂は酸素の分壓及び收容せられた酸素量には比例しない今體温38°及び肺氣胞中のCO₂分壓40mm Hg.の時の關係を示せば前頁表の如し。

上表中O₂壓力760mmの場合の收容率を100%とし此のO₂の分壓が減少する時例へば159mmになつた時は血液中のO₂は飽和率が96%となるが如し、此の計算はBarcroftは次の式から出したものである。

$$y = O_2 \text{ 飽和度 } \cdot x = O_2 \text{ 分壓 } \cdot S, T \text{ 恒數}$$

$$y/100 = \frac{Sx^T}{1 + Sx^T}$$

Barcroft Hoch-Pern (4500m) で動脈中より取り出した血液中の調査によると前表の値に大體一致することを見たと云ふ、又各種標高に於ける動脈中酸素飽和度状態を示せば次(一二五頁)の如し。

氣壓と之に對する動脈血中O₂の分壓及び其の飽和

氣 壓 mm	標 高 m	肺 胞 中 O ₂ 分 壓 mmHg.	飽 和 率 %	場 所
760	0	100	95	平 地
600	2100	72	91	Teneriffa
540	2900	64	89	Col d'Olen
460	3400 4350	52	81—83 85	Cerro de Pasco
435	4560	50	82	Monte Rosa Spitze
330	7000	40	72	Mount Everest

度との關係につき Pflüger (56) が次の値を與へて居る但し之の値は家兎に就てのものであるが人體に就ても大差無い唯人體ではO₂の結合力が弱いと云はれて居る。

40mm以外のCO₂分壓に對するHb=O₂の分解曲線は次の如し。

CO₂は他の酸と同様血色素がO₂と素合する力を弱める事は圖を

見れば知れる、即ち酸素は同一壓力でもCO₂の分壓が増へるとHbとO₂との結合力が弱くなる、此の事は高所に於て重要な事でO₂の分壓の高き時例へば一氣壓下に於てはCO₂の作用はO₂の低壓に於ける場

	氣 壓 mm Hg				
	730	630	530	430	330
肺氣胞中最大O ₂ 分壓mm Hg	102	85	69	52	35
動脈血中ノO ₂ 飽和度%	91.9	88.3	80.7	68.2	48.4

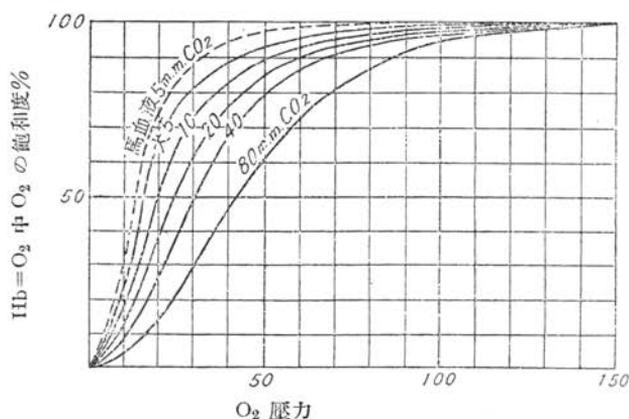
合よりも弱く、高所に昇るに従つて肺氣胞中のCO₂分壓は減少し肺毛細管にO₂の吸収が良好となり、動脈血中のO₂は脈管中のそれよりも豊富となる、而しHbとの結合はより強きが故に組織へのO₂を取り去られる事はより困難となる、而し實際に於ては組織へのO₂の放出は血液中の他の酸が含まれて居るが爲めに容易になり。又酸素を消費する器官中では又組織へ酸素を與へることが著しく促進する。

Hb=O₂の解離曲線は血液酸性化に際しては正常状態に對してより平坦化する、此の酸素結合曲線の平坦化はBarcroftが3000mの高所に於て調査したが之と同様の實驗をLoewy及び其共同者が行つたが(56)次の

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

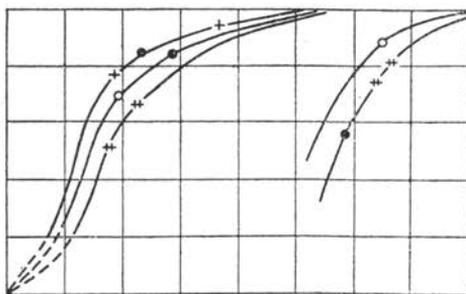
様な結果を得て居る。(一二六頁圖面)
BarcroftはHoch-Porn遠征に於て隊員10人に就き及び住民に就きO₂飽和度測定を行ひ87.5%及び87.5%其の多數は85%、87%であることを見る。

(3) 血液中のO₂結合
血液中炭酸ガスの量は呼吸に著しく關係を有し正常状態に於て



二三

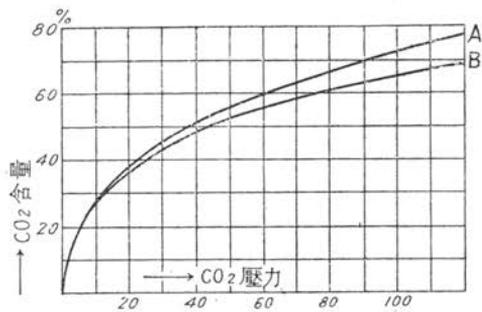
も其の量は變動する、故に假令其等の値を測定より得たとしても個々の人の値を以て人體一般値とすることは出来ない、而し血液中の CO_2 量は CO_2 分壓に關係し一方に於ては血液の CO_2 との結合曲線の經過及び又他方に於て血液中酸素量にも關係す、又循環血液中に對する CO_2 結合曲線は動脈血及び靜脈血中に存する O_2 量に關係して考へられなければならぬ、 O_2 飽和血液と之を含有せざる血液とを比較するに O_2 含有せざるものに在りて飽和せる血液よりも多くの CO_2 を收容し得る。Christiansen, Do-



+...Davos, Ruhe. #...Davos Arbeit.
○...Muottas Muraigl, Ruhe. ●...Arbeit

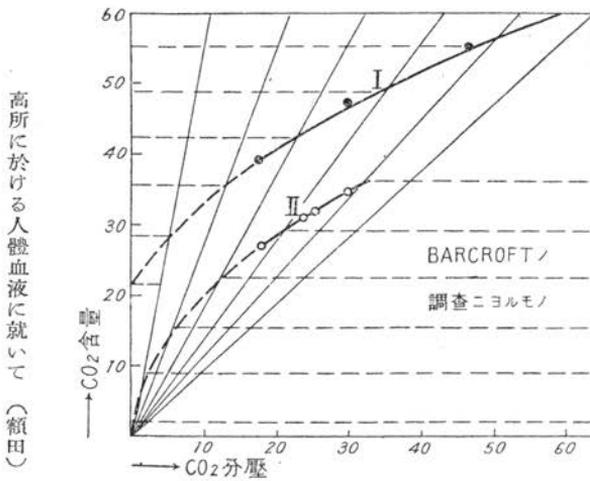
nylius, Haldane⁽⁵⁾等の實驗に依れば血液中の CO_2 分壓は O_2 を含まざる血液に對しては O_2 飽和せるものよりも約1/10多く、容積に換算すれば5~6 vol.%に相當するが之は尙議論の餘地があるが理論上からは差を生ずべきである。

低地に在りては之等の値の差は著しからずと雖も高所に在りては著しい⁽⁶⁾、高所に於ける CO_2 に就いては場所に関係し又高所に於て發生する一種の異状酸によりて血液の CO_2 結合力低下す(即ち CO_2 と結合すべき滴を此の異常生



體温ニ於テ CO_2 結合曲線
A...人體血液 B...血液中物理的に吸收された CO_2 を取り去りたるもの

成酸によりて奪取せらるゝが爲めである) 而して結合曲線は正常状態に於けるよりも平坦化(之をHypokapnieと云ふ)し正常の CO_2 よりも小となる。此の現象は *Barcroft*⁽⁶⁾が Cerro de Pasco 4350m に於て(次圖)又 *Loewy* 及び其共同者⁽⁷⁾が 2450m で静止状態



CO₂分脈
I...海面標高に於けるMeakinsにて
II...Cerro に到着後 1-2 日後にて

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

時に見出した、低地に於ても烈しい勞働を成す時は血液中に酸が発生して Hypokapnie 現象を呈し CO_2 結合能力は 3)~40% も低下す。高所に在りては低地と同様程度の勞働によりて著しき現象を呈し Acidosis⁽⁸⁾ が其の二倍にも達することがある。之に就いては *Paton*, 及び *Barcroft* が *Monte Rosa*⁽⁹⁾ 上及び *Hoch-Pern* 遠征時に調査した。

(4) 豫備滴 CO_2 結合曲線は血液中に於て遊離せる及び鹽化物の状態で結合する CO_2 量を示すもので其の鹽結合物としては重碳酸鹽が其の重なる部分であるから⁽¹⁰⁾ 其の曲線は CO_2 の遊離の部分と重碳酸鹽となる部分との比 $\frac{\text{H}_2\text{CO}_3}{\text{NaHCO}_3}$ をも示す、此の比正常なる時に在りては一定の値 (*Masselbach*) で之が實際の血液の反應(水素イオン濃度)を示し、遊離 H_2CO_3 は全量の約 1/20 である。故に重碳酸鹽となる量を知る事が出来る此の量を豫備滴と稱し正常状態に於ては全炭酸量と此の豫備滴とは平行して行くべきもので血液の實際の反應を示すに屢々 $\frac{\text{H}_2\text{CO}_3}{\text{NaHCO}_3}$ の値を以て表はさるゝ事が

ある。若し H_2CO_3 が NaHCO_3 に對して多き時 (H_2CO_3 増加或は滴の減少) は血液の水素イオン濃度は増加して酸性となり之と反應の現象を生ずる時は H_2CO_3 は NaHCO_3 に比して少くなる。

今豫備滴が變化し例へば減少する時は血液の反應に唯此の減少のみで變化することは出来ないうで H_2CO_3 も亦之に従つて減少し $\frac{\text{H}_2\text{CO}_3}{\text{NaHCO}_3}$ の比は常に保たれ血液の反應には變化を來たさなす。高所に於て屢々起る處の Hyperventilation では先づ最初に肺より CO_2 が放出され、血液中には之が減少を來し、血液は比較的 Alkalose を起す、次に血管は過剰の Alkali を放棄して酸と滴との比を正常に戻す、その結果豫備滴は正常より減少して來る、又過剰の酸が血液中に入り來る (之も亦高所で實際に生ずる) 時は血液は異常酸性を呈することとなる。然る時は他の酸類によりて重碳酸鹽の爲めに遊離し血液中に入り來り循環せる炭酸によりて正常の反應を取り戻すことが出来る。此の時も亦豫備滴は減少する、斯かる補償せられた豫備滴 Kom-

pensierte Alkalireserve に對して時と場合によりては補償せられざる即ち $\frac{\text{H}_2\text{CO}_3}{\text{NaHCO}_3}$ の比が正常値より異る事が起る、高所に至りては屢々 H_2CO_3 量が大となり謂所 Unkompensierte Acidose を屢々起すことがある。斯の如き關係は CO_2 の結合曲線から調査せらるゝ事が多く、ことに高所に於ける状態を調査するに直接豫備滴を見るよりも此の CO_2 結合曲線を調査せられる方が多く、Fung 及び Hirschberg⁽⁶³⁾ が 3400m の高所で自己の血液を調べた結果豫備滴は減少して居た即ち高所に到達した初めの日は其の後の結果より小なる値を得て 40mm Hg. の CO_2 分壓で低地に於けるよりも炭酸量は 4.0~5.7 vol.% 少なきを見た。

(5) 高所に於ける血液の反應 CO_2 の結合曲線及び $\frac{\text{H}_2\text{CO}_3}{\text{NaHCO}_3}$ の比及び豫備滴は血液の實際の反應に深き關係を有する事は既に述べた即ち血液の實際の反應には CO_2 結合曲線及び豫備滴が水素イオン濃度測定に設立つが、實際に於て CO_2 曲線より計算する方が⁽⁶⁴⁾ ガス電極を用ひて直接に酸濃度を測るよりも屢々良結

果を得ると謂はれて居る。

血液中の反應には此の實際の $[H^+]$ と滴定酸度又はアルカリ度と稱するものがある。此の滴定アルカリ度は強酸を用ひて滴定して與へられる滴の量であるが、實際アルカリ度とは血液中に平衡を保つて居るアルカリの量を以て示す、故に二つの意味には非常に差がある。而し滴定アルカリ度より豫備滴を決定することも出来る。高所に於ては此の血液のアルカリ度を調べた場合が多く *Gaevolin* は Monte Rosa 頂上 (4560m) にて血液アルカリ度の減少が 36~47%, *Dunin* 及び *Zuntz*⁽⁶⁵⁾ は 2100m にて 10% と云ふ値を見た。

實際の血液の水素イオン濃度は CO_2 結合曲線又は豫備滴より計算する間接方法又は直接測定法⁽⁶⁶⁾ もあるが何れにしても之は酸の濃度即ち $[H^+]$ 或は P_H によりて現はさるゝも普通とする、普通血液は正常値 $P_H 7.4 \sim 7.3$ であるが高所では静止状態で血液は酸性へ移行すると云ふ者もあり又 *Barcroft* が Cerro de Pasco 4350m で測定した結果に依ると酸性へ及び鹽基性へ

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

實驗者	場 所	m-kg 労働 分	PH減少	場 所	CO ₂ 40mm Hg 壓力を 換算する時	
					PH	PH
Redfeld	Boston	750	0.12	Cerro4350	193	0.11
Barcroft	Cambridge	640	0.08	減壓室中	370	0.08

實驗者	場 所	自轉車 轉 週	静止時 PH	労働時 PH	CO ₂ 40mm Hg 壓力を 換算する時	
					PH	PH
	Davos Ergostat	1550m	7.409	7.343	7.420	7.361
Loewy	Muottas Nuraigl	2450m	7.409	7.302		7.335

相當廣い範圍に作用して居る事が特に注意される。即

移行する兩方の結果を得た、又動物實驗は結果も一定方向への結果は得られて居ない。而し筋肉労働を爲す場合に高所に於ては著しく酸性へ移行することが知られて居る (Barcroft, Monte Rosa の測定結果及び Hoch-Tern にこの測定結果) 其の一例は上表の如し。血液の反應には之を補償する力が

ち體外に取り出された血液に就いては酸性となり、その CO_2 結合曲線の位置及び形が異常形へと移行し非補償性の Acidose が發生するが、體内に於ては肺氣胞中の CO_2 は著しく下降し異常的酸は補償せられて所謂 Kompensierte Acidose が起る。高所に於ては普通大氣中の O_2 分壓の減少により血液反應變化を起す、Kroetzg の研究に依れば大氣中の紫外線も亦血液 Acidose を惹起するに關係を有すると云ふが之は酸性蛋白質分解物が血液中の無機物質と結合して酸性の變化を起すものであると云ふ、而し之れは公に確認された理由ではなす。

高所に於ける血液量及血液の増加

1 總血量

血色素が高所に於て増加する事は總血液量が増加するか或は單に單位容積中の血色素が増加するかに就て種々なる議論がある事で動物實驗及び Taitane と其共同者が Pikes Peak 4300m 上に於て行つた調査に

依れば矢張り増加 (10~20%) すと云ふ、Laquere が 1550m の高所に於て Kongorot 法により四週間同所に滞在せる彼の血液を測定してこれを低地に於ける値と比較した結果約 5% の増加を示した、Lippmann (8) が四人の Davos 青年に就いて調査した結果低地の値に比して約 20% の増加を示した。之は總血量で 5.3~6.1 立、體重で 7.4~10% の増加に相當する、これに比して低所に於ける正常値としてに 7.2% に當る、又 Seydler elm 及び Lampe は低地平均量として 8.2% で此の兩値より見るに總血液量は矢張り増加を示して居る。又 Margaria 及び Sapegnog が 15~25 日間 Col di Olen (2900m) に滞在せる時に血液量 18% の増加を見た。

2 高所に於ける血液細胞及び血色素の増加する理由、

高所に於て血液細胞及び血色素の増加に關する議論は體內的及び體外的に分けて考ふるに、此の體外的の原因としては如何なる氣象的要素が之に入り來るかの

問題でこれには主に光線と氣壓の減少が重要な役割を演ずるが如しと云ふ、Kosher 及び共同者は血液及び血色素の増加は主に光線が原因すると云ふて居るが特に光線中の紫外線に由るとの説が近時優勢となつて居る。而して此の増加は虚弱な兒童に就いて特に著しきを見るが健康人に就いては多少増加する程度に過ぎないと云ふ、暗き減壓室での動物實驗の結果でも矢張り著しき血液細胞及び血色素の増加を見るから光線に照らされずとも減壓が強き増加作用を有するのであるとの説もある。之に關しては酸素の分壓低下することが大なる原因で、著しき減壓下で而も酸素を特に供給する場合には何等造血的刺激を受けないが酸素少なき大氣中著しき増加を見ると云ふ、然らば何に依りて減壓が高所に於て血液に影響を及ぼすやの問題であるが之に關しては脾臓に影響を及ぼすとする説もありて又甲狀腺に影響されて發生するとの説及び之の反對説もあり一定して居ない。現今では造血場所就中骨髓が減壓即ち酸素分壓減少によりて影響を受けると考へられ

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

る。高山に滞在すれば骨髓が變化し、その機能高まり造血作用優勢となる、Loewy 及 Fu Müller は一腹の犬一組を Bern に残り他の一組を 2300m の高所に數ヶ月置きその兩者に就きて調査せし處骨髓に著しき差異を來したのを認め、Ballo は強度の減壓下に於て實驗した處骨髓に於て著しき赤血球増生群と有核赤血球の活潑なる増殖を證明することが出來たと云ふ、Ballo は更に巨大多核細胞は白血球によりて包圍され、巨大多核細胞によりて細胞が喰はれて居る事を見た。澁谷氏も亦の減壓下に於て骨髓中に赤血球の生成を認め、Ballo の實驗と一致した結果を得た、澁谷氏は減壓下に於ける骨髓の鹽基性色素嗜好性細胞が増加せることを認めた。

之等の骨髓の研究に際して行はれた減壓は 2300 ~ 6700m の高度に相當して居たが勿論酸素の缺乏が最も大きな原因であると考へられて居る。一方に於て約 500m の高度に於ても血細胞の増加が認められるが此の程度では骨髓には何等の變化を來さない、故に増加

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

の原因は減壓の他に尙他に存することが伺われる。延髄及び血行運動中樞及び心臓中樞は大氣中 O_2 分壓が少し減少しても (例へば 1000~1500m の高度に相當する減壓) 著しく興奮状態に置かれるが故に原因は此の方面にもあることが大いに考へられる。而し高所に於ける造血作用の旺盛となるのは骨髓が酸素分壓の少しの低下によりても直接に其の機能を高めることは認められた事實である。

高所に於ける血液循環

1 脈搏數

高所に於ける循環關係は高度の變化に従つて組織への血液供給作用即ち酸素供給が促進せらるゝ場合には甚だ高所に滞在する時、此の問題は重要な意義を持つことになる。之に關しては高所に於ける血液循環、心臟毎分送血量に就き述べべきである。高峻山岳に於て比較的容易に測定せらるゝのは脈搏數であるが、此の調査は今迄多く高山病に關係して行われた (Krovi-

cker, 1904) のいふ

つて元氣旺盛なる登山者に就ては登高の後では尙旺んな筋肉勞働の餘勢が残つて眞の脈搏數を與へない (脈搏數は絶対靜止状態で測られることが多い) 一般に高山に於ては肉躰機能の殘餘影響は低地に於けるよりも非常に後長く躰内に殘續するのが普通で尙高山的氣象例へば空氣の移動氣温、光線等の爲

場所	月日	高度m	脈搏數			備考
Berlin	6—9.9	34	64.	60.	60	
Brunnen	27.8	—	63.	60.	—	
Col d'Olen	10.8	2900	78—84.	72—78.	88	登高の翌朝
Gnifettihütte	17.8	3700	76—80.	86—88.	80—84	登高の翌朝—Col d'Olenに8日間滞在後
"	19.8	"	74.	58—60.	80	
"	20.8	"	68	—	68	
富士山	山麓	平地	77			} (73a)
大宮	五合目	2600	86			
頂	上	3775	87			

めに脈搏強化の影響がある。

それ故に脈搏に對し高所影響を測らんとするには測定に必要ならざる諸條件を除外する様に努めなければならぬ、故に脈搏数を測る最も適當な時は早朝食事前で床中に横臥して居る時を選ぶが良い、斯かる條件の中に測定した脈搏は一般に高度と共に増加を示す。而し其の脈搏増加は又夫々の個人によりて甚だ異なり、今迄高所に滞在の経験無き人に於て甚だしく、高所滞在の経験を有する者では増加は甚だしくないのを普通とする、又高所に長期滞在して居ると漸次脈搏数は減少を來す *Duwig* 及び其の共同者⁽⁷³⁾ 並びに其他の測定結果⁽⁷⁴⁾ を總括すると次の表の如くなる(一三二頁表)

又高山に充分馴致した

場所	高度 m	脈搏數	
		最低	最大
Turin	276	48.8	58.4
Gressoney	1627	49.4	62.2
Lager Indra	2521	54.4	61.0
Linty hütte	3048	51.6	65.0
Gnifetti hütte	3700	62.7	69.0
Margherita hütte	4560	71.8	79.0

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

山岳人に就いて *Mossig* の調査せる處に依ると上表の如し。

此の表を見ると高所に馴致した人に就ては高度に從つて漸次脈搏數も増加するが又ある高さより以上では甚だしく脈搏數を變化する第二回の英國の *Everest* 遠征に際し *Hingston* の報告を見れば一層この事が著明に表われて居ることが解る(下表)即ち標高 5000m に到る迄は多くの人の脈搏數は増さないがそれ以上の處では急に増加して居る。即ち表の様な結果となつて居る⁽⁷⁵⁾ 一般に高所に登るに從つて脈搏數増加するのは普通であるがこれは酸素缺乏が大きな原因であると考られて居る。

獨乙 *Bauer* の *Kangchendzönga* 第二回の遠征に

標高	座した時	直つた時	運動せ る後	脈搏正 常時に 展る時 同秒
m 0	72	72	84	20
2100	"	81	96	15
4360	"	81	108	40
5030	"	96	120	20
6100	108	120	144	20

高度 m	脈 搏 數		
	Hartmann	Wien	Pircher
0	52	61	—
1800	50	—	—
4525	45	57	—
5800	54	54	75
6170	54	61	76
7005	63	69	88
7360	72	83	94
6490	62	71	76
5830	54	66	—
5275	46	59	70
4525	42	—	—
3400	48	—	—
1500	50	—	—
0	52	61	74

際して70日間5000mに、40日間6000~8000mの高所に滞在せる隊員に就ての Hartmann の調査によれば右表の如し⁽⁵⁾ 此の Expedition では隊員の多くは 5000m の高度迄は 静止脈搏數は平地のそれよりも少し減少してそれ以上の高度に従つて又漸次増加するこ

隊 員	脈搏數 最少搏	其の時の 高度	平地の 脈搏
Hartmann	40	4525m	48
Wien	54	5076	54
Fendt	56	1500	60
Pircher	70	5275	74

とを見た、又此の遠征中最も脈搏の少なき高さは上左表の如き高度となつて居る⁽⁶⁾。

又 Bauer の第一回 Kangchendzönga Expedition で V. Kraus の調査によると次の上表の様である⁽⁷⁾。

隊 員	高度 m	脈 搏 數		
		運動時	静止時	平 常 平地に於て
Kraus	7000	144	88	62
Bauer	7000	112	92	70—76

相木氏富士山の調査報告によれば下の如し。

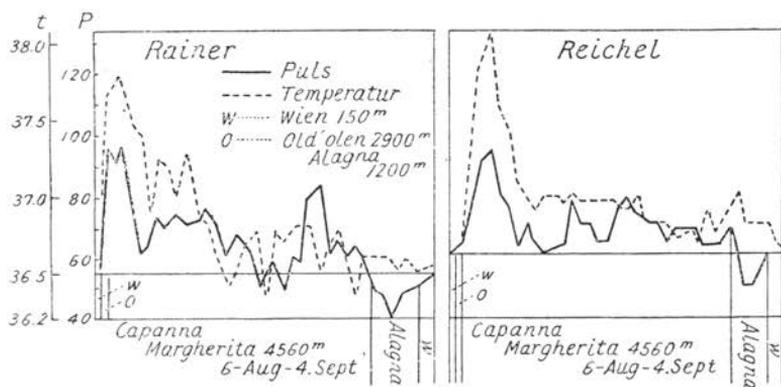
高所にある期間滞在せる後降る場合には最初は脈搏數急に増へて又減少し更に低地に降る時は正常値よりも一時減少し更に正常値に戻る事を見る之は Hartmann の報告

平地	大宮口五合目2600m	富士山頂3775
77	86	87

によりても最高所に登りて再び降る時同一標高に於ける登高時の値に比較すれば脈搏數値が少なき事を見る、又 Duvig が遠征の際に調査せし報告によりても同様な傾向を呈するを示す⁽⁸⁾之は Hasselbach 及び Linhart が自己の脈搏

に就いて調べた
 値で此の場合脈
 搏のみならず体
 温、呼吸數及び
 總代謝量も亦一
 時正常値より降
 り再び正常値に
 迄戻ると云ふ。

稍高度高き所
 例へば 2500m
 附近に於て早朝
 床中で數へる脈
 搏の變化するこ
 とは空氣稀薄從
 つて酸素缺亡の
 原因よりも他の
 氣象的因子は此
 の變化に入り來



高所に於ける人體血液に就いて (額田)

らないと考へられる。此の氣壓減少即ち空氣稀薄が本
 來の原因である事は減壓室内の實驗結果から推知する
 ことが出来るが、何となれば一度減壓せるものに酸素
 吸入をなさしむれば再び速に正常値に戻ることによりし
 て此の變化は酸素缺亡が其の主なる原因である事が知
 れる。高所靜止時に脈搏數の増加は酸素缺亡により心
 臟中樞を興奮せしめ、此の刺激が更に神經系統に作用
 を及ぼし迷走神經の抑壓、交感神經の興奮が心臟に影
 響を及ぼすものであると云ふ、又甚だしき高所に於て
 は脈搏數が均等で無くなる事を Moss 及び Fuhrst は
 見た。

高山に於て筋肉勞働の後は甚だ著しく脈搏數を増加
 するが又中級の高度の山でも輕き勞働をしてさへも低
 地に於ける極めて烈しき勞働に匹敵する程身軀に影響
 を及ぼし、甚だしきに到りては發熱さへ伴ふ病的状態
 を惹起する事さへある。此の事は Himalaya の Ever-
 rest, Kangchendzönga, Nanga Parbat 等巨大山岳へ
 の Expedition に際して登攀隊員の多くが経験する處

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

三六

であつて、7000m 以上の登攀が如何に困難であるかを物語つて居る。肉体的には勿論精神的にも勿論、強き自然の威壓を受ける、然るに斯かる大なる身心の困苦にも打克つ處に登山者の本領は存するものとし深く且つ固い自覺の下にその困苦と闘ひを続ける。之が彼等の山に挑戦して闘ふことであり、遂に山頂に立つ事は即ち觀念的に山を征服した事でもあるのであらふ。

Loewy は Bayerische-Tirolsch Alpen の山旅に於て身體の疲勞は餘り感じなかつたが心臟の鼓動の烈しさに惱み、平地の運動には脈搏 100—120 を數へたが高所では 160—176 に昇つたと云ひ、Zuntz は Monte

隊員	Darzeeling (10秘匿きだ) 測つた脈搏	Base Camp.	Jongsong-Pass 6150m 到着後15分後
W.	58/72, 66, 66, 58	66/81, 78, 72, 65	72/96, 98, 181, 78 {到着直後 114} {停止後 108}
Dyh.	60/96, 96, 78, 72, 60	78/108, 102, 96, 87, 78	
Sch.	72/84, 78, 72,	78/96, 90, 81, 84, 78,	
Dr. R.	78/90, 90, 84, 78	90/114, 102, 96, 96, 90	96/120, 114, 109, 96, { # 108}

Rosa 頂上に座して居る時脈搏 92—108 で横臥して 80 を數へ、Loewy は座して 116, 横臥して 80, Caspari は立つ時 109, 座す時 96, 横臥せる時 66 を數へた。高度に馴れた人又は肉體勞働を常業とする人は高所でも脈搏は甚しく増加しない、Zuntz が遠征に際して Brienz (500m) から Briener Rothorn (2300m) に最初登つた時 4—5 時間中に 1800m の登高をなした時 Caspari は 158—175 で後程尙 120—130 であつた、高所で而も勞働に馴れた Koerner は 130—140 であつたと云ふ、又其後 Monte Rosa に登つた時は Zuntz 及び Loewy は 132 Koerner は 128, Caspari は 100 になつたと云ふ、高所で筋肉勞働をする時著しく脈搏の上

昇するは峻悪なる豫後症狀は伴はなすが脈搏數は其後も尙多く持續する、普通 1—2 分で強烈なる鼓動は靜

まゝが尙15〜30分間は繁き脈搏は持続する。(Siaclian)
 (81) 極め訓練の積んだ登山者でも著しき高所に登る時は脈搏は著しく増加することは Everest 遠征に際して Hingun が報告して居るが其の隊員一名が 8500m を登高する時脈搏 160〜180 を數へたが其處

Hartmann					
絶對静止時		静 止 時		少しの労働の後	
高さm	脈	高さ m	脈	高さ m	脈
0	52	0	54	0	54
1800	50	280	60	4525	72
4525	45	4525	63	5830	84
5830	54	5830	76	6470	96
6470	54	6470	86	7005	104
7005	63	7005	90	7360	108
7360	72	7005	90	7360	108
6470	62	4525	61	0	62
5830	54	0	53	(二回握力計を握つた後)	
5275	46	(晝間天幕中に居る時)			
4525	42				
3400	48				
1500	50				
0	52				

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

に暫らく休息する時は割合に速に静まり(+)に減じ(平地では+)此の様な充分高度に馴れた者では登行中休息によりて速かに脈搏は靜まること⁽⁸²⁾が出来る。

Dyrenfurth⁽⁸³⁾によれば Himalaya Expedition に於て高度 5000m では静止状態に於て脈搏極めて少しの増加を見るのみであるが 6000m 以上の高度になるとそれが著しく増加する之は Hartmann⁽⁸⁴⁾の報告によく一致して居る、労働を爲す時(五回の深き膝を曲げる運動)は脈搏の増加は高度に従つて著しく増加する、之は同伴の工夫に就ても同様であつた。
 高所で同一人で種々なる状態に於ける脈搏數が如何に變化するか⁽⁸⁵⁾の調査例は Hartmann が Himalaya

Base Camp 4619m	
靜かに横臥隊員名5……	80
Schlafsackに入つた直後……	100
Camp III 5800m	
三貫餘りの荷を負ひ	} ...120
登行中	
少し高度に馴致せる	} ... 80
時労働直後	
ナンダゴート頂上に	} ...120
登つた時	

Expedition の際の報告によると一三七頁上表の如し⁽⁸³⁾立教山岳部員のナンダゴート遠征に際して調査せる結果次の如し⁽⁸⁴⁾(前頁下表)

脈搏数の増加が血行を促進し従つて組織への酸素供給を良好ならしむる様な結果を來すや否やは屢々議論せられて居る處であるが病的な發作心氣急速症には脈搏數非常に早まるが之と反對に血液運行は却つて緩慢となる、而し *Golwitzer-Meyer* は酸素缺亡によりて發生する脈搏數増加は血行を旺盛ならしむると云ふ此の事は動脈中で酸素が正常値の約半分にもなる様な時に於て特に著しいと云ふ、而し斯の如き動脈中酸素半減するが如き事は地上に於て達せらるゝ最高所では見られない事で 4000~5300m の高所に滞在する際は循環血液 30%位旺盛となると謂はれて居る。

2 脈搏形

高所に於ては脈搏數のみならず脈搏形をも異にする即ち脈搏不整、之は吸氣時に脈搏増加し、呼氣時に疎となるか又は期外心臟收縮を來すことに依りて生ず

る。此の脈搏不整現象は高度が原因であると云ふよりも寧ろ登行時の過勞に基くものであると云われ、高所の酸素缺亡は之には餘り重要な素因で無いと云ふ、空氣稀薄なるが爲には脈搏形が變化しない事は減壓室中での實驗で明である。V. *Levy*, *Lazarus*, *Schürmuck* 等の實驗によると強度の減壓迄も脈搏形は變化しない、高山に於て *Heller*, *Mayer*, *Schivoler* が *Dachstein* 2210m, *Simonhütte* 及び *Mosso* が高度 4500m で山岳兵三人に就き、*Durig* 及び其の共同者が同一の場所で、又 *Conway* が *Himalaya* の 7000m に於て其の *Fidler* について同様な結果を得て居る、高所に於ては低地よりも脈搏形の變化は屢々起るが此の現象は疲勞脈搏とも稱せらるるもので *C. auveau* 及び *Loid* は *Mont Blanc* 上で此の不整脈搏を始めて認めた、更に *Kronecker* が *Gornet-Grat* の 1800m 及び 3000m で之を認め、*Conway* は *Himalaya* に於て 7000m 以上の所で 1+ 時間連續的に登つた時に此の脈搏不整が起つたのを認めた、此の疲勞脈搏は高度

に於て屢々起る事は高地に於ける労働には心臓が低地に於ける労働よりも烈しく活動しなければならぬ事即ち高地の労働はより大なる Energy 消費を伴ひ従つてより多量の血液の供給を要するが故に心臓に對して要求大となるが爲めであり。又高地では酸素は低地に於けるよりも分壓力低きが故に心臓は速に疲勞を伴ふが爲めであると云ふ。

3 高山に於ける血壓

之は高山に於て心臓機能、心臓力とに重要な關係があり血液循環系統の全體殊に毛細管部が高所に於て特

に大なる役割を演ずる。故に血壓の問題は之に參與する循環系統の個々に就き分析的に説明せられなければならぬ、又血壓は外的因子にも關係があり溫度濕氣照度、氣壓も亦之に關係深い、此の氣壓即ち空氣の稀薄度のみによつては數多の減壓室實驗があり(2)收縮期血壓力 (Systolischen Druck) の變化は認められない、又心臓舒張期血壓 (Diastolische Blutdruck) の變化も氣壓 420mm Hg 迄は起らなると云ふ、又脈搏振幅も變らなると云ふ (Stein) 高所に於て實際に測定された結果によれば St. Moritz (ve. Pognath) 及び

高 度 m	R.W.H.		E.O.S.		B. B.		G. B.		E.F.N.		J.V.I.L.		E.I.M.		A.G.T.		T.H.S.		N.E.O.	
	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.
0	120	80																		
2100	130	90	125	90	150	110	130	90	140	80	120	100	120	85	130	100	110	85	100	80
4360	135	95	115	80	145	85	130	90	135	99			120	90	130	100	130	99		
5030	146	101	104	99	140	102	128	93	136	96	126	91	122	78	140	100	120	82	125	95
6400	138	118	118	80			110	90			100	80								

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

120

Stäubli), Monte Rosa 山頂 (Mosso) では血壓は餘り變化しなかつた(極少しの増加はあつた)

1924 年英國 Everest Expedition に於て Hingston は隊員に就いて種々なる高度で血壓を測定したが夫々の個人により種々なる値を得て一定した結果は得て居なかつた。(一三九頁表參考)

高所の乾燥せる空氣中に於て日光浴を行ふ時は普通人は血壓興進する⁽⁸⁰⁾これは低地で或は高所でも單に日光に照らされる時とは狀況を異にする、*Isotonische Pulsresistierung Apparat* を使用して血壓を測定すれば一定間隔を置く處に所謂 *Meyer* 波狀を示す、*Meiserte* は強く加温せられた皮膚は高山の太陽を以て照射すると血壓上昇⁽⁸¹⁾と云ふ、*Bern* から *Jungfirnjoch* まじ登るに老年の *Fühler* は 15mm, 老年の醫師は 45mm の血壓上昇を見た、*Lischer*⁽⁸²⁾の調査せる處によると40歳以上の人では *Davos* で血壓は増加し⁽⁸³⁾*Loewy* は又種々なる年齢の人に就き調査せる處老年者は *Davos* で 20~25mm, *Miotas Murrigi* (2450m)

で 40mm の上昇を示し、若年者に比し老年者の血壓變化は高所に於て敏感であると云ふ。

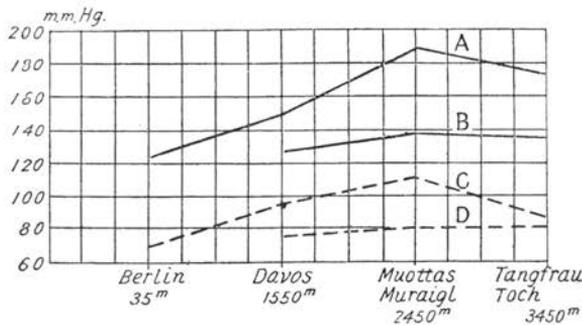
相木氏⁽⁸⁴⁾が富士山に於て調査せる結果は下の表に示した様になつて居る。

高所で血壓の増加は酸素缺乏に深き關係があるが、酸素吸入を行ふ時は上昇せる血壓は速かに平地の値に迄下降(*Loewy*)すると云ふ

	Sys.	Dias.
平地	118	72
大宮口五合 2600m	134	88
山頂 3776	141	88

此の關係を示すと次の如き一例を示す、(一四一頁圖面參照) *Loewy* に依れば高所に登るに従つて血壓の増加する原因は高所の酸素缺乏が血液運行中樞を奮せしめ、脈管收縮作用を發生する事に因ると云ふ、老年者は若年者に比して中樞の酸素缺乏が容易に生ずる、この事は毛細管の弾力性が減少するか或は毛細管から動脈へ移る間の管が硬化し始めて居て脈管中樞へ酸素の移行を困難ならしむる爲めであると云ふ、此の *Loewy* の説は *Roberts*⁽⁸⁵⁾ も之を支持して居る、脈管運動中樞

高所に於ける人體血液に就いて (額田)



—Systolische Druck

...Diastolische Druck

A.C. 酸素吸入ナシ } 場合
B.D. 酸素吸入セル }

は酸素欠亡に對して敏感で血行を妨害し血行運動中樞の局部的酸素欠亡を來すと血壓上昇を起し血液中に乳酸を生ぜしめるから之に對して種々の實驗が行はれて居る⁽⁹⁶⁾ *Heel*⁽⁹⁸⁾ は低地から高所に急に移動(鐵道によりて)した時の血壓變化を調査したが *Rexal* 鐵道で8分間に500mより1500mに登り、次に1000mより

500mに降り、次に *Zugspitz* 鐵道で 1245m から 2850m に 16~20 分間に登つた結果、下降上昇共に血壓の上昇するものと、低下するものとありて一定した結果を得られなかつた、その割合は降下及上昇共に凡そ等しき率であり、その年齢には關係しなかつたと云ふ、高度の差の大なる程その影響は大で又到達する標高が高い程此の値も大きいと云ふ。

一般に高所で滞在する時は血壓は變化する殊にその上昇が屢々起るが之は低地で正常の値を有する健康者では何等悪性を示さない、高所で血壓の高くなるのは高所に滞在せる後早晚元の値に戻る、假令血壓に變化があるも何等の苦痛は伴はないのが普通である。

高所に於ける血壓の關係は年齢が進むに従つて血壓も増加し低地で例へば 125~130mm, Davos で 150mm, 更に齡をとると低地で 135mm, Davos を 155mm となり更に老年となれば低地で 145mm 高地で 165~180mm となるが如し、斯かる場合に高所にて酸素吸入を8分間行ふと低地の血壓に戻るが更に酸素吸入を續ける時

は血壓は再び多少昇る。緩慢に階段を昇る時は血壓は 30~35mm 昇ると云ふ。

アルプス及び Teneriffa で Grover⁽⁶⁾ の行つた實驗によると 3150m の高度迄9ヶ所で14時間中1時間毎に血壓を測つたが身體静止時の値を標準として比較するに高度の變化によりて血壓は差異を見ることが出来なかつたと云ふ、又高所に於て膝を曲ぐる運動をする時疲労極度に達するのは低地より速く生じ脈搏及び血壓も著しく増加する而し其後時間の經過と共に漸次正常値に戻ると云ふそして老年者の方が此の現象が著しい又高所に馴致せる者程此の現象が少ないと云ふ、又動脈壓は靜脈壓に對して屢々減少すると云ふ(Schneider及び Sisco)

4 心臟に對する高度の影響

高所に於ては低地に於けるよりも筋肉労働の爲めの心臟の勞作が大で従つて心臟疲勞を早める、之の事に關しつは Barroff が Hoch-Pern の Cerro de Pasco 4500~5000m で人及び動物に就て調べたレントゲン

寫真で心臟を検査した事によるとその中三人は心臟影縮少し二人は何等の變化を見なかつた。此の心臟影縮少しは心臟容積の縮少を意味し心臟舒張期の心筋纖維の張力が低下した事を示す。

又 Barroff が Cerro de Pasco で調査した人體の狀態は高所で心臟擴大を屢々見るのであるが此の現象は又甚だ高所にも發生し、降下後 2~3 週間も尙續くと云ふ、1922 年 Everest Expedition に於て Somerville⁽⁷⁾ は酸素を使用せずして 7500m 迄登つたが矢張り心臟の擴大を経験した。最近は飛行機で 10000m 或はそれ以上の高所を航行することが稀でなく、斯かる空氣稀薄の場所に於ては如何に心臟に影響を及ぼすかは重大な問題となる。Barroff 及び其の門下生竹内氏⁽⁸⁾ は動物實驗で矢張心臟の擴大を認めた同様の結果は Loewy 及び Mager⁽⁹⁾ も認めた。

心臟が酸素缺乏に對して如何に鋭敏に影響せられるかは Dielrich 及び Eisler が Strychnin によりて發生する強直性痙攣を起す時一分間後には心臟は窒息性

痙攣を起すことを實驗上から認めた。心臓の働きの弱る時は血液は酸性へ移行することを認められた *Allen-grove*⁽¹⁰⁾

之等の實驗よりして心臓疲労極度に達することは高所への登行中烈しき労働によるものであり、此の事は低地に於ても急激なる運動することに依りて屢々起る而して之等の心臓極度疲労は尙酸素缺乏によりて迅速に招來せられる。之は心臓の抵抗力が内部的表面に對して降下せられた事によると云ふ。

心臓は餘り過度ならざる運動によりて訓練せられて漸次強化せられ、高所に對する抵抗力を増加するものである事は今迄經驗の教ゆる處である、高所で心臓は右心室が左心室よりも大となり又心臓の重量が大となす (*St. o' D.*)⁽¹¹⁾ 事は 2000~3000m の高所に住める雷鳥の心臓が低地のものに比して大なる事から推察せらる。

5 高所に於ける血液循環

Lacroix が Hoch-Pern Expedition の際撓骨神經穿

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

刺によりて動脈血を調査した處、同行者二人に就き海面標高に於て毎分 5.1 立の循環血液量を見又 *Cerro de Pasco* に於ては 4.1 立と云ふ値を得た、又他の方法によりて測定せしに平地で 9.3 立高地で 5.4 立及び低地で 7.8 立、高地で 9.5 立を得て餘り一致した結果を得て居ない、初めの方法では高地の毎分血液循環量は減少し、第二の方法では増加して居る、高地に於ける心臓搏動容積は低地のそれの 1/4 だけ減少すると云ふ、之は高地に於て心臓が弱つて來るからであらうと考へる (*Barroff*)

靜止状態に於ても筋肉労働時に於ても血液運行には元來大して變化ないと云はれて居る、低地に於て自轉車を廻轉する運動で 252m kg の仕事を爲す際は 9—10 立で、4500m の高所で、230m-kg の労働をなす時は 12 立であるから其の血液循環の増加は著しい。

Grolmann⁽¹²⁾ は Acetylen 法によりて二人に就き低地と Pikes Peak 4300m へ登山鐵道で登つた場合とに就き實測した結果高地では心臓毎分送血量は徐々に

増加し5日後に最大値に達し低地に對して40%を増し、次で低地に下降した時の送血量に迄減少した、それと同時に血色素量が漸次増加する、低地に降ると心臟の毎分送血量は正常値以下に降り再び漸次元の値に復する血色素も亦正常値に漸次復する。

Ewig 及び *Hinsberg* が *Freiburg* へ *Jungfrau* joch との二ヶ所にて比較實驗を行つた結果によると *Freiburg* より *Jungfrau* joch に達した直後及び8-14日後の馴致が起つた以後では *Grolmann* の値を保證したのみならず又種々なる方面へ之を擴張した。即ち高所に於ては動脈血中の酸素飽和は減少するが之の値は組織の補償作用が行はれなくなるからであると云ふ同時に靜脈血中の酸素量は理論値に迄降らない事を見出した、又呼吸の上昇(初め20%後に33%)及び心臟毎分送血量の増加を來した。*Grolmann* の場合は最初は20%で後に血色素等の増加と共に戻り14%となつた。*Jungfrau* joch に達した直後、計算によれば調節作用の4/5が作用して減壓された酸素を補償するもの

であると云ふ、最初動脈血の酸素飽和度は82%で靜脈血に於ては60%であつた、馴致作用が現はれた後には動脈での酸素飽和度81%でその標高に相當する値より多少少く、*Darvay's* が *Hoch-Porn* の1000mの處で見た値で、尙充分なる馴致が行はれなかつた證據であると云ふ。

其後の4500m~5000mの高所で血液循環の促進と云ふことが救助手段として現はれて來る。此の現象は組織の酸素欠乏の補償の爲めに血液及び血色素が充分になつて之が補償作用を受持つ様になる。唯著しき酸素欠乏が發生し之が爲めに直ちに危険を伴ふ時は血液循環促進作用が自働的な調節現象として現はれて來る。

筋肉勞働の際に循環に關して起る調節作用に酸素供給減少せる場合に如何に肉體的勞働が爲し得らるゝかの、而して可成り高所に於ても尙正常の状態を保つかの鍵を與へるものである。*Ewig* 及び *Hinsberg* が之に關して次の事を認めた、即ち高山に於て勞働時酸素

少き動脈血が毛細管中にて酸素を使用し盡される事は低地に於けるよりも少く例へば労働時に毛細管中にて動脈酸素が好條件の下で酸素使用が25%の時でも高山に於ては30%に過ぎない。而し高所労働時毎分の容積は低地に於ける筋肉労働の場合より30%増加して居る之は高山に於て筋肉労働を爲す時心臓に對する不當の荷重に相當する、*Ewing* 及び *Hens'erg* の調査では筋肉労働を正常に営ましむるが爲めに此の程度の血液循環の促進で充分である、何となれば酸素の責務は低地に於ける程大でないからである。又斯かる事に對しても馴致現象が起る、即ち8日乃至10日後には身體靜止の状態と同じく労働時にも毎分心臓送出血容は毛細管中に酸素利用作用が改善されるが爲めに元の状態に戻る、又斯かる高所では總て人は正常の代謝作用は現われなく、*Grolmann* 及 *Ewing* 及び *Hinsberg* の實驗

中には或る時期に明かに血液循環作用が促進せられる事が生ずる、而し此の時期以外に尙最大値及び個人に依りて異なる再降下現象が現はれるべきであると云ふ

高所に於ける人體血液に就いて (額田)

故に實驗がある一定の時期以外に行はれると實驗其ものは不充分でなくとも却つて反對の結果を生ずる事もある。

高山に於ける血液循環の興進状態は又 *Eppinger*, *Kiss* 及 *Schnitzler* の調査によると多分心臓の調節機能悪しき病人にも見ることが出来ると云ふ。彼等に於ては酸素の組織への供給が他の原因からも不足を來す此の酸素缺乏は酸の生成を起し血液の豫備滴の減少を生じ、乳酸量の増加を來す。動脈血酸素利用變化は或る範圍内では血液循環の興進を來すが之は *Ewing* 及び *Hens'erg* の所見と異なる。處が後者の所見は既に補償作用が起つて居る事に依つて斯く異つた結果を生ずるものであらう、又 *Gollwitzer-Meyer* によると矢張り甚だしき高所では毎分心臓送血量の増加を生ずるが延髄中樞の水素イオン濃度が増した動脈血圧の増加は靜脈血圧をも興進せしめて、其の興奮によりて靜脈の收縮を來す、之れによりて靜脈血は大靜脈に對し移動し其の結果心臓の毎分送血量の増加を來すと云ふ。

6 皮膚毛細管中に於ける血液循環運動

Luscher⁽⁶⁾ は *Jungfraujoch* 3450m に於ける人體血液を低地のそれと比較研究し兩者の間には餘り變化なき事を認めた、*Lieserly*⁽⁶⁾ は高低兩所に於て皮膚顯微鏡を用ひて人の爪溝毛細管血液の循環を比較したるが低地に在りては毛細管中には整然と血液充滿して循環せるを認めしが高地に在りては毛細管中の血液は整然たらず赤血球は塊狀をなして管の一部分膨脹し所謂毛管怒張を呈す而して循環は緩慢となり不整で尙粒狀循環を呈すると云ふ、之に對して *Luscher* は *Jungfraujoch* 上でも毛細管中血液は何等循環には異狀を呈せず、又 *Finslerwald*⁽⁶⁾ は之の粒狀血行は低溫の爲めで之の現象は低地でも寒氣の爲めに生ずることがあり、高山でも充分温度が高き時は此の様な事は現はれなすと云ふ。*Vanolles* は *Zürich*, *Luino* と *Col d'Olan* (2900m) 及び *Puntla Griffei* (4560m) とで毛細管血液の循環を調査し減壓の爲めの純粹なる作用を示すことは難しくして心臟の機能の變化は尙此外に疲勞、寒

氣、日光照射が影響すと謂ふ。

毛細管顯微鏡研究の結果は毛細管中の狀態に血壓により又環境特に皮膚温度及び内部條件と代謝生成(之は筋肉勞働及び疲勞の生ずることより生成する)によりて異なる、之等の諸原因によりて毛細管の形及び直径は變り又循環速度も變る、高所に於ては殊に靜脈部分の毛細管は擴張し *Vanolles* は此の爲めに心臟機能は興進し血液循環は促進せられると云ふ、殊に疲勞狀態に於ける變化が著明である、此の際擴張せられた毛細管中血液の流れは緩慢となり一部には鬱血を來すことさへある。

毛細管血壓は動脈血壓に關係し又皮膚温度及び疲勞にも關係す又毛細管中の血壓は高き動脈血壓にも拘らず毛細管の擴張の爲めに降下する。又高所に於て充血毛細管の數が増へる、之は *Vanolles* によれば甚だ複雑なる原因によること唯高度の作用のみから説明し難し。

引 用 文 獻

- Philos. trans. roy. soc. B. 203 (1913).
- (1) Loewy, A., J. Loewy, Leo Zuntz: Pflüger Arch. 66 (1896).
- (2) Jaquet: Arch. f. exper. Path. 45; Schaumann U. Rosenquist: Z. Klin. Med. 35 (1898).
- (3) A. Loewy: Physiologie des Höhenklimas, Berlin (1932).
- (4) E. F. Norton: Hingston. Bis zur Spitze des Mt. Everest (1924).
- (4a) 相木: 岡山醫學會雜誌, 第 51 年第 598.
- (5) Barcroft: Nature (Lond.) (1922); Die Atmungsfunktion des Blutes, Berlin (1927).
- (6) Lintzell u. Redeff: Pflügers Arch. 222 (1929).
- (7) Wallhelm: Klin. Wschr. (1927, 4928).
- (8) Knoll: Schweiz. med. Wschr. Nr. 5 (1924).
- (9) Asztales, F., H. Ellos u. H. Kautz: Klin. Wschr. 41 (1931).
- (10) Frank u. Hartmann: Klin. Wschr. (1931).
- (11) Busker: Pflügers Arch. 195 (1922).
- (12) Drastisch: Pflügers Arch. 219 (1928).
- (13) Margaria u. Sapengno: Arch. di Fisiol. 26 (1928).
- (14) Zalka, V.: Z. exper. Med. 76 (1931); Douglas: Philos. trans. roy. soc. B. 203 (1913).
- (15) Chiatellino u. Madon: Arch. di Fisiol. 28 (1930).
- (16) Lintzell u. Radeff: Pflügers Arch. 222 (1929).
- (17) Douglas, Haldane, Henderson, Schneider: Philos. trans. roy. soc. B. 204 (1913).
- (18) Loewy: Physiologie des Höhenklimas, Berlin (1932)
- (19) Barcroft: J. of Physiol. 42 (1911).
- (20) Barcroft: The Physiol. of life in the Andes. Nature, Lond. (1922); Die Atmungsfunktions des Blutes, Berlin (1927).
- (21) Gutstein, M.: Fol. haemat. (Lpz) 26, I. 1921.
- (2a) Bauer: Hartmann. Um den Kantsch (1933)
- (21b) Bauer: Hartmann. Um den Kantsch (1933)
- (22) Shibusya, K.: Z. exper. Med. 63 (1928).
- (23) Knoll, W.: Die Sportärztlichen Ergebnisse der zweiten olympischen Winterspiele in St. Moritz 1928, Bern. 1928.
- (24) Loewy, Vovel, Eysern u. Opyisscu: Arb. physiol. 5. (1931).
- (25) Balo, J.: Z. exper. Med. 51 (1928); Kolozs, E.: Biochem. Z. 222 (1930).
- (26) Schmidt u. Koch: Bioch. Z. 233 (1930).
- (27) Staabli: Z. Balv. 3. Nr. 19—23 (1910/11).

高所に於ける人體血液に就いて (頼田)

- (28) Chatellino u. Margaria: Arch. di Fisiol. 27 (1927);
Laubender: Biochem. Z. 162 (1925) 167 (1925).
- (29) Rabbeno: Boll. Soc. Biol. sper. 1 (1925); Arch. di
biol. 9, 1—3 (1926).
- (30) Grifel, W.: Biochem. Z. 222 (1930).
- (31) Frenkel-Tissot: Dtsch. Arch. klin. Med. 333 (1920).
- (32) Rothmann, S. T.: Z. exper. Med. 36 (1932); klin.
Wschr. (1923).
- (33) Messerle: Schweiz. med. Wschr. (1927—1928).
- (34) Goldberger: Boll. Soc. Biol. sper. 4 (1928).
- (35) Aggazotti: Arch. di. Sci. biol. 13 (1929); Rayeux:
C. r. Acad. 151 (1910).
- (36) Pinussen: Biochem. Z. 161 (1930).
- (37) Hess, A. u. Unger: J. of exper. Med. 36 (1927);
J. of biol. Chem. 50 (1922).
Sonne: Verh. Klimat. Tagg. Davos. 1925, Bassel
1926.
Schulzer: C. r. Soc. Biol. Paris (1925).
Gates u. Grant: Proc. Soc. exper. Biol. a Med. 22
(1925).
- (38) Aggazotti: Arch. di sci. biol. 5 (1923).
- (39) Peters, Bulger, Eisenmann, Lee: J. of biol. Chem.
67 (1926).
- (40) Brehme u. Gyögyy: Biochem. Z. (1927).
- (41) Pinussen: Photobiologie.
- (42) Koldazew u. Aetschuller: Z. physiol. Chem. 186
(1930).
- (43) Viale: Atti. Accad. noz. Lincei. 33 (1924).
- (44) Alexeeff: Biochem. Z. 173 (1926).
- (45) Alexeeff: Biochem. Z. 192 (1928).
- (46) Rigoni, M.: Arch. di Fisiol. 28 (1930).
- (47) Carnot u. Deflandre: C. r. Acad. Paris. 143.
- (48) Fröster, J.: Biochem. Z. 145 (1924).
- (49) Detre: Klin. Wschr. 28 (1928).
- (50) Sänder: Z. exper. Med. (1932).
- (51) Feldmann u. Azuma: Z. exper. Med. 62 (1928).
- (52) Araki: Z. Physiol. Chem. 15. (1891).
- (53) Ryffel: J. of physiol. 39 (1910).
- (54) Douglas: Erg. physiol. 14 (1914); Laquer: Z. Biol.
70 (1919); Pflügers Arch. 203 (1921).
- (55) Barcroft: Die Atmungsfunktion des Blutes, Berlin,
(1927).
- (56) Loewy u. Gen: Pflügers Arch. 207 (1925).
- (57) Christiansen, Douglas, Haldane: J. of Physiol. 48
(1914).
- (58) Winterstein, II. u. K. Gollmitzer-Meier: Pflügers Arch.

- (59) Barcroft: Die Atmungsfunktion des Blutes, Berlin (1924).
- (60) Loewy u. Gen: Pflügers Arch. 207 (1925).
- (61) Darson u. Barcroft: Report of Monte Rosa exped. 1911, philos. trans. 206.
- (62) Henderson: Erg. Physiol. 8 (1909).
- (62a) Ewig u. Hinsberg: Z. klin. Med. 115 (1931).
- (63) Haselbalch: Biochem. Z. 78 (1917).
- (64) Galeotti: Arch. ital. de Biol. (Pisa) 41, (1904).
- (65) Durig u. Zuntz: Skand. Arch. physiol. (Berl. u. Lpz.) 39 (1913).
- (65a) Cullen-Hawkins: J. Biol. Chem. 57, 493 (1923).
- (66) Kroetz, C H.: Biochem. Z. 1924.
- (67) Laquer, F.: Klin. Wschr. (1924).
- (68) Lippmann, A.: Klin. Wschr. (1925).
- (68a) Margaria u. Sapegno: Arch. di Fisiol. 26 (1928).
- (69) Zuntz, Loewy, Müller, Caspari: Höhenklima und Bergwanderungen, Berlin (1906).
- (70) Bälö, J.: Z. exper. Med. 59 (1928).
- (71) Shibuya, K.: Z. exper. Med. 63 (1928).
- (72) Durig, Rainier, Reichel, Kolmer: Deutscher Akad. Wiss. Math.-Naturwiss. Kl. 86 (1909).
- (72a) Kronocker, H.: Die Bergkrankheit, Berlin u. Wien (1903).
- (73) Luntz, Loewy, Müller, Caspari: Höhenklima und Bergwanderungen, Berlin (19 6).
- (73a) 相木: 岡山醫學會雜誌 第51年 第598.
- (74a) Mosso, A.: Der Mensch auf die Hochalpen, Leipzig (899).
- (74) E. Norton: Hingston. Bis zur Spitze des Mt. Everest 1924.
- (75) Bauer: Hartmann. Um den Kantsech (1933);
- (75a) 立教山岳部: 山岳第三十四年第一號、フンダメント
日記.
- (76) Bauer: V. Kraus. Im Kampf um den Himalaja 1931;
- (77) 相木: 岡山醫學會雜誌 第51年 第598.
- (78) Haselbalch u. Inlard: Skand. Arch. physiol. (Berl. u. Lpz) 25 (1911).
- (79) Liebig, V.: Der Luftdruck usw. Braunschweig 1898.
- (80) Fuchs, R.: Sitzsber. physik.- med. sec. Erlangen 40 (19 8).
- (81) Staehelin, R.: Einfluss der Muskelarbeit auf die Herzätzigkeit. Naumburg (1897).
- (82) Dyhrenfurth: Himalaya, Berlin (1932).

- (83) Gollwitzer-Meier: Pflügers Arch. 220 (1928).
 (84) Lazarus u. Schimmanski: Z. klin. Med. 7.
 (85) Heller, Mager, V. Schröter: Z. klin. Med. 33, 34.
 (86) Conway: Climbing and exploration in the Karakorum Himalaya, London (1894).
 (87) Fränkel u. Geppert: Über die Wirkung der verdau-
 ten Luft. Berlin (1883).
 (88) Loewy: Die Respirations und Zirkulation bei Ände-
 rung des Druckes usw. der Luft. Berlin (1897).
 (89) Norton: Hingston. Bis zur Spitze des Mt. Everest.
 (1924)
 (90) Hediger: Schweiz. Med. Wschr. (1923).
 (91) Lüscher: Schweiz. Med. Wschr. (1923).
 (92) Grossmann: Z. klin. med. 102 (1925).
 (93) 相川: 岡山醫學會雜誌 第51年 598.
 (94) Roberts, F.: J. of physiol. 59 (1924).
 (95) Raad, W.: Arch. int. Med. 47; Med. klin. (1931).
 (96) Hecht, V.: Wien med. Wschr. 77 (1927), 78 (1928).
 (96a) Grober: Z. physik. Ther. 31, 32, (1926); 35 (1928).
 (97) Somervell: J. of physiol. 60 (1925).
 (98) 竹内: J. of physiol. 60 (1925).
 (99) Loewy u. Mayer: Klin. Wschr. (1926).
 (100) Ahlgren: Skand. Arch. physiol. 58 (1929).
 (101) Strohl: Zbl. physiol. 24 (1910).
 (102) Gollmann: Amer. J. physiol. 93 (1930).
 (103) Ewig u. Hinsberg: Klin. Wschr. 39 (1930).
 (104) Schwarz: Klin. Wschr. (1929).
 (105) Gollwitzer-Meier: Klin. Wschr. 1930, Nr. 19.
 (106) Liebesny: Wien med. Wschr. 71 (1921).
 (107) Finsterwald: Beitr. klin. Tbk. 54 (1923)
 (108) Vanotti: Klin. Wschr. 6, 31.

蕃人の原始社會經濟生活の一側面

——タイヤル族の土地制度に就いて——

阿 部 武 道

△これは嘗つて秋が神戸商大在學當時坂西研究室に於てな
し、「地理學」〔昭和十二年八月號〕に發表したものに全面
的に改訂を加へたものである。私のこの拙ない研究が讀
者諸氏が彼等蕃人を知る上に於て多少なりと役立ち得る
ならばこれに越した私の喜びはない。こゝに恩師坂西由
藏博士の御懇切な御指導を感謝するとともに博士の御健
康を祈る。

・ は し が き

臺灣の山が内地の山と異なる著るしい點は、山の隅に
まで蕃人の生活が滲み込んでゐると云ふことであら
う。

河川溪谷の奥、河岸段丘のひろがりに散在する部落

蕃人の原始社會經濟生活の一側面（阿部）

や、焼畑耕作が、彼等の畫いた生活景觀の全てではな
い。明日は私達を高峰に導くであらう登山道も、實は
彼等の狩獵道であり、又私達の絶好の憩の場所となる
高地にひらけた草原も、彼等が焼拂つた狩場なのであ
る。だから四千米に近き高峰と素朴な蕃人の生活とが
渾然と一つのものになつてゐるのが臺灣山岳であると
云つても、決して過言ではないと思はれる。

私達の彼の地におくり得た山旅が、單に純粹の人間
と自然の接觸から得た山岳觀賞の喜びや、登山的な面
白さに盡きずして、何かしら不斷の肉體的な潤ひにつ
ゝまれたものであつたことは彼等蕃人と一緒におくり
得た旅なればこそであつたからだと思ふ。

彼等が眞に愛すべき人間であると云ふことを知り得

たのも又この旅に於てであつた。彼等の純情、彼等の共同精神、全て私達が口をきわめて讚美したところであつた。臺北に歸つてから理蕃課の人も異口同音に彼等の團結心の強いことを讚めたゝえてゐた。「だから一朝事があると危険なんですよ」とまで言つて居られる人もあつた程である。

この拙い研究に於て彼等の生活形態の若干にふれ、私達の目からすれば美徳とも思はれた、彼等の數々の行爲が、何によつて何處に由來するものであるかを尋ねてみようと思ふ。

時間的に制約されたこの旅行に於て、登山と云ふ主要目的を持ちながら、道すがら蒐集し得た、僅かの資料に基いて神秘のベールに奥深く閉ざされた、彼等の原始經濟生活の本質を捉へんとすることは無算にも近き企であることは言ふまでもない。それ故に、この試みも初心の私の最初の一つのメモとして心の奥に藏し置くべきものかもしれない。

たゞこの一文が、餘りにも、誤り多きもの、獨斷多

きものと、そのみを懸念しつゝ「旅行者の一瞥見」としてこゝに記することゝする。

・方法のことゝも

私達が人類經濟生活の原始的形式を研究するに當つて、その基礎とすべき資料は決して豊富であると云ふことは出来ない。何故なら文字を有せざる彼等原始人は彼等自身の生活記録を残してゐないからである。その時代の唯一の記念物は地中から發掘される骨、道具、並に慣習、儀式、民語、語源に保存せられてゐる。前史時代の社會關係の痕跡である。而してこの研究資料貧困性の補足として私達の取り上げ得るものは、今日も猶、未開の儘の生活状態を續けてゐる野蠻人の生活を直接に觀察することである。しかし、この直接的觀察により抽出せられた結論には、大なる注意が拂はねなければならぬ。私達は、今日に於いて最早ヨリ進歩せる文化人と接觸したことのない野蠻人を發見することは出来ない。それ故に、實際は彼等が比較的

代に得た慣習を、原始時代の慣習の遺物であるとする
と、飛んでもない誤りに陥りやすい。現在臺灣蕃人が
續けて居る生活様式に於ても、彼等固有の原始生活と
は全く不釣合な色彩の多くが織込まれて居るのであ
る。従つてそれ等のものを排除することなしには、蕃
人固有の原始的社會構造を明らかにすることは出來な
い。理蕃政策の行はるゝ今日、撫育教化を受けた彼等
蕃人の生活は、假令、其れが私達の目に原始色豊かな
ものとして映じても、そのまゝには決して彼等の原始
生活の本質を物語るものではない。

彼等の大部分は今猶、燒畑農業を行つて居る。かゝ
る原始的農耕法の展開せられてゐる土地は、殆んど全
て彼等の私有に屬する。併し本來燒畑農業なるものは
それが多分に共同的性質を有することよりしても、か
ゝる小地域に區分せられた個別的私有地に發達するも
のではない。燒畑農業の成立は大地域の上に多數者の
共同的作業を前提とするのであらふ。

かくのごとく彼等蕃人の生活形態のうちには「古い

彼等固有のもの」と「新しく彼等が得たもの」とが混
在するのである。彼等の原始生活の本質を究明せんた
めに、私は彼等の古きもののみを篩にかけて彼等固有
の生活形態をのぞくこととする。

・ 土地制度に關する課題

原始社會の經濟生活に關する研究に於いて最も重要
なるもの、而して又多くの論争を生んだものは、原始
社會の經濟組織が土地との關聯に於いて、共產的傾向
を有してゐたか、否か、と云ふことである。

この論争は私有財産の發展を、共產主義の原始的狀
態からの漸進的段階によつて辿らんとする者と、未開
部族は個人による土地私有を完全に知つてゐたと論ず
るものとの間に、今猶盛んに續けられてゐる。

如何なる土地の所有關係が存在してゐたか、この問
ひに對する答へは單にその表微的な形態からのみ把握
し得るものではない。その關係は、常にその社會的諸
關係の不可分の一環としての「存在」であり、彼等の

規定的特徴的な土地所有關係は所與の社會經濟的構造の不可分のな考察を通じてのみ、正しく理解せられ得るものであると思ふ。これと同時に、何故に如何にしてかゝる土地支配形態を生ずるに至つたかの、史的究明も極めて重要な課題である。

私は以上の點に留意し、彼等臺灣蕃人の原始的社會構造をタイヤル族に選び、土地制度との關聯に於て考察しようと思ふ。

・蕃人の居住分布

臺灣には凡そ二十萬の高砂族が住んでゐる。その中五萬は平埔族所謂熟蕃と稱せられ、古來平地に住んでゐた關係上他の優秀なる民族文化から受ける影響最も甚だしかつたがために殆んどその中に解消せしめられ、彼等個有の種族文化は已に其の原形を失つてしまつてゐる。そして他の十五萬は山地、東部平地及び紅頭嶼等に住み、所謂蕃人と稱せられ高山蕃、平地蕃の區別がある。

而して之等蕃人は體質、土俗、慣習、其他傳説等の異同により、系流の差異が認められ、移川子之藏氏の分類によれば次の九種族となる。

アタヤル Atayal、サイシヤット Saisiat、ブヌン Bunun、ツオウ Tsou、ルカイ Rukai、パイワン Paiwan、パナバナヤン Panapanayan、パンツア Pangtsah、ヤミ Yami 是れである。

總督府に於て行政上用ひられてゐる最も一般的な分類法に従へば次の七種類で

タイヤル (前述の Atayal)、サイセツト、ブヌン、パイワン、アミ (Pangtsah)、ヤミと成る。

その中、主として平地に居住するパンツア、ヤミ (紅頭嶼)、並にパイワンの一部を除けば、約八萬の蕃人が山地に倚つてゐる譯であり、所謂高山蕃でタイヤル、ブヌン、ツオウ、即ち之である。

ブヌン族は埔里以南の中央山脈及びその東側に沿ひ知本山北に至る山地、標高五、六百米乃至二千二、三百米の間に居を占め、多くは散居するが小部落を成す

ものもある。

ツオウ族は新高山の西側に流下する諸溪の流域に沿ふ標高八、九百米の地を占め、多くは集團部落を成してゐる。

此に反しサイセツト族は新竹州、南庄附近の浅い山地に居住し、不整頓な集團部落をなしてゐる。

その他、アミ族は臺東、花蓮港兩廳下の平地に分布し、ヤミ族は紅頭嶼に小部落を成して居住してゐる。

併し、アミ、パイワン、ツオウ等の諸族は、その居住地の地理的環境の故に、漢民族文化の浸蝕が著るし。

タイヤル族は、次高山を主山とする臺灣北部の山地に占居するものであつて、私達の旅行に使用した蕃人ポーター此のタイヤル族の青年達であつた。

タイヤル (アタヤル Atayal) なる語はピアン社、シククン社、シカヨウ社邊りの蕃人が自ら用ひてゐる種族の名稱であるが、「私はタイヤルよ」「あの人タイヤルよ」と云ふ風に使つて居る。ところが同種族で

蕃人の原始社會經濟生活の一側面 (阿部)

ありながら蕃社や、タロコ蕃のタイヤルは自らをセデツク (セーデツク又はサジアク) と呼び、又白狗、マレバ蕃では「スコレツク」西部山脈地方では「ツオレエ」と呼ぶが、何れも「人間」「同族」等の意味ださうである。これは北海道に住むアイヌ族が自らを稱してアイヌ (Ainu) といふのに類似して、語原的にも甚だ興味ある問題だと思ふ。アイヌと云ふ言葉はカムイ (Kamu) 即ち「神」に對する語で「人間」の意ださうであるが「タイヤル」「セデツク」或ひは「スコレツク」と云ふ言葉も、丁度英語の man と同じ様な意味でないかと考へる。

移川氏はこの「人間」なる語の呼名の相違を系統を分つめやすとなし、それによつて、タイヤル族の三つの發展系統を區分され、スコレツク系、ツオレエ系、セデツク系となし、彼等の傳承を分析せられ、現在の如き定着を示す以前の彼等の移動系路を研究せられて居る。

タイヤル族は高山地に居住する關係上、平地的な卑

俗な文化からは比較的完全に隔離せられ、したがつて、未だに最も多くの原始的狀態を傳へ、強猛剽悍にして最近まで首狩の盛んに行はれてゐた、難治の種族をもつて目せられてゐた。過去臺灣總督府が理蕃事業の上に主として力を注いだのは、實にこの種族であつて臺灣蕃族の殆んど代表的なものであらう。

この種族も他の種族と同様、屈尺蕃（蕃稱—タラナシ）、サラマオ蕃、南勢蕃（蕃稱—サウライ・クシヤ）と言ふが如き幾多の部族に分れ各部族は獨立的な存在として各々一定の領域を占有してゐる。部族と部族との間には排他的意思があらわれ、そこにはおぼろげながら「領土」なる觀念がみられる。近年に於いては餘程緩和せられてゐるとは云へ未だ全く融和してゐるとは云ひ得ない。已に紀行文中に於ても述べておいたやうに、大甲溪湖中島來駐在所に於いて、クルスの蕃婦とシカヨウの娘達との荷物の引繼に丁度私達も居合せてゐたが、彼女等の間には風俗の上にも著るしい差異が認められ、そのみならず、同一種族にありながら

彼女等相互には「親しさ」と云ふものは殆んど認め得なかつたのである。蕃界の不祥事の多くはこの種の非親睦的關係から生ずると云ふことであるし、私達登山者にとつても二部族の蕃人を同時に擔夫として使用することは出来ないのである。

従つて種族それ自體には何等の統一性なく同一種族内に於いて各部族間の有機的連絡を求むることは殆んど不可能である。

更に部族は各所に分れて大小の集村式部落——現在は理蕃の都合上密集部落をなしてゐる——を構成する。タイヤル族では、部落を「アーラン」或ひは「カーラン」と云ふ。而して蕃社とは此等の一又は數部落より成るものを稱するのであつて、例へば溪頭蕃（蕃稱—メニボ）「ピアン社」「シキタン社」は蕃社の名稱である。

註一 屈尺蕃、溪頭蕃、南勢蕃の如き呼稱は、清國時代理蕃の都合上附せられたものであつてかゝる名稱以外に「タラン」、「メニボ」、「サウライ・クシヤ」の如き個々の蕃

稱がある。必らずしも蕃人個有の集團的區別ではなく、したがつて彼等の集團的社會構成よりせずして、むしろ行政上の必要より、地域的に區分したものである。例へば、南勢蕃は實はサウライ・クシヤの二部族よりなつてゐる。

註二 蕃社なる名稱も、元來清國時代蕃族の部族を基礎として定めた行政區劃であつて、必らずしも蕃人個有の集團ではない。地域の廣狹に依り一蕃社は一部落のみより成ることあり又は數部落よりなることもある。本來部落毎に一の集團社會を構成するに限らず、又必らずしも地域に基いて集團社會を構成するとも限らない。故に蕃社制は必らずしも蕃族個有の社會組織と一致するものではない。時としては一蕃社が數個の集團社會を含むこともある。

・ 蕃人の移動経路

稱族——部族——蕃社の概念は大體以上の如くであるが、かゝる社會集團の系列を或ひは部落構成を可能ならしめた土地への定着以前に於て、一體彼等は如何

蕃人の原始社會經濟生活の一側面 (阿部)

なる生活を續けて來たか、更に又、彼等の生活がこの島國に始つたのは何時頃であらうか、彼等の渡來する前に、先住民族と稱すべきものが居住してゐなかつたか、何故現在の如くこと更、生活に不便な山間地を選んで居住するやうになつたであらうか、等の疑問が湧いて來る。

其の説明の爲には彼等の古い歴史を溯らねばならぬ。併し彼等は文字を有しながら、彼等自からの「書かれたる歴史」を持つてゐない。だからこの方面に、彼等の種族的起源、或ひは古い種族生活の状態に就いての問題解決の鍵を求むることは出来ない。

だが文字を有しない種族は素晴らしい記憶力を持つてゐることがある。例へば文字を有しない北海道アイヌのうちに幾代となく口傳へに傳承された神々を讃えた美しい詞章、英雄の武勇を讚美した物語歌「書れざる文學」ユーカラがある如く、又、印度や希臘の遠い書契以前の昔に、やはりあの大叙事詞が、さうした時代から時代へと口誦繼承されてゐたものだといはれるが

彼等蕃人のうちに於ても、説話や、物語りの形式をとつて、幾代となく口傳へに傳承されたものがある。

彼等のさうした傳承や説話をその儘に取入れてよいか、どうかと云ふことは議論の餘地があるとしても、「書かれざる歴史、法典、聖經」の中に彼等の種族的起源或ひは過去の生活状態を辿らんとする試みは決して不可能でない。

何故なら、傳承や物語りが、その内容からしても、決して或る個人の創作とは考へ得られないからである。傳承、物語りの恒久性普遍性にしても、若し個人の創作であるとしたら、部落の人々に、全部の信仰を繋ぎ留め得ないであらうし、又信仰されないものは傳承されず直に失せてしまふであらう。部落に傳承されて存続する所以のものは、眞理であり事實であると考へられるからであつて、決して單なる感興の對策として傳承されるものではないと考へられる。その意味で彼等の傳承や、説話が宗教的色彩Ⅱ信仰的の多いことは自然に領けることである。

まづ彼等の傳承についてみると、血族關係について血族團たる部落の長「頭目」(蕃稱ムラホー)は、系譜の保證人とも云ふ可く、系圖を一々暗記してゐるさうである。例へばタイヤル族タロコ蕃の頭目の中には系譜を直系のみならず傍系をも含め、實に七代、三七九人の人名を記憶してゐるものがあると云ふ。又、パンツア族、バナバナヤン族のうちには、家系を六十代まで遡る事の出来るものと云ふ。

かうした彼等の傳承、或ひは物語りについて、彼等の種族的淵源、古い時代の彼等の移動経路を、移川子之藏氏の「高砂族系統所屬の研究」によりみると大體次の如くである。

まづ最初に彼等の發祥起源の問題である。こゝではタイヤル族のみにかぎらず他の種族も含めて、彼等は何處から何時頃やつて來たか、又渡來後如何なる種族移動を行つたかをみよう。

彼等が何處からやつて來たか、それは容貌、性質、皮膚の色、風俗等からして、私達全くの素人の目から

みても何れ南方から渡來した種族でないかと常識的にも考へられるが、併し、如何なる人種に屬すべきかは未だ適確な判断はついてゐない。専門家の説に依ればインドネシアン又は原マライ系統に屬するものであつて、何時の時代かに南方から海路を越えて渡つて來たものであらうと云ふのであつて、それ以上の問題は未だ明らかにされてゐない。唯、現在居住する各種の種族は、それぞれ、多分幾度かの異つた時代に渡來したものであらうし、又渡來後幾つかの系統に分れて、各地に分布して行つたものであらうと云ふ見當がついてゐるだけである。

彼等自身の傳承の中に、果して南方から渡來して來たかどうかと云ふ物語があるかを次に調べよう。その前に種族全般にわたり、彼等の信じて居る發祥地傳説を述べやう。

ところが各種族には夫々別の發祥起源を信じてゐるものがある。同一種族内でも部族によつて異つた發祥地を指摘してゐる場合がある。例へば同ヒタイヤルで

も溪頭蕃と白狗蕃とはタイヤルの發祥地と信ずる土地が異つてゐる。要するに彼等は種族發生の傳説を持つてゐるのであるが、各種族の信ずる處が一致しないところをみると、更に又部族の異なるによつても發祥地傳説を異にするによつても、それ等の傳説は單に各種族、部族乃至血族團體の移動系統を暗示するに過ぎないものかも知れないのである。

移川子之藏氏の研究によりその發祥地傳説を分析すれば三つの系統あることを知る。

- (一) 高山を發祥地とするもの
- (二) 平地又は海岸を發祥地乃至祖先の故地とするもの
- (三) 海外より渡來せりとなすもの

もの即ち是である。

(一)の高山を發祥地となすものには、後に詳述するタイヤル族等が含まれるが、(二)及び(三)のごとく島内に發祥起源を有するものは、移川氏によれば、彼等が島内移動を重ねてゐる間に、島外發祥を忘れてしま

つたのではないかと云ふ解釋を下しておられる。

さて、(一)の海岸を發祥地乃至祖先の故地とするもの及び(三)の明らかに海外より渡來せりとなす發祥地傳説を有するものは、南方から渡つて來たものであらうとの私達の豫想と極めて好都合に符合するものであるが、彼等の傳説の内容にふれてみると、海岸を發祥地とするものは紅頭嶼に住むヤミ族や、東海岸に倚るパンツア族、パナパナヤン族等である。その臺灣島への上陸地點は、傳説の中では多く秀姑巒溪以北の海岸地方となつてをり、その附近のチラガサン山、サツラアン山、タケブラサン山等へ洪水や海嘯で漂着したと云ふ。この洪水説話は、舊約聖書のノアの洪水にも似ており、仲々興味ある問題であるが、北海道アイヌに於ても、彼等のアイヌラツクルオキクルミに結びつけて物語られる洪水説話がある。

又、パンツア族や平埔族が火燒島から渡來した事も一般に信ぜられてをり、その火燒島へは紅頭嶼から、又その後へは南方からヤミ族が渡來したと云ふ風に、

少くとも東部に住む諸族が南方から島傳ひに順次渡來して來たものであらうことは彼等自からが語る傳説によつても大體想像が出来る。花蓮港に近き黒漏社に於ては、一隻の獨木舟について、海に浮べる祭が今尚ほ行れてゐるさうであるが、かうした宗教的行事の起源も、彼等の祖先が海を渡つてやつて來たと云ふ事實に關聯するものでないかと思はれる。

・タイヤル族の移動經路

次に高山發祥を傳へえるもので、これは我が高天原傳説と類似して居り、先にも述べたごとく、タイヤル族はこの高山發祥傳説をもつてゐる。併し同じタイヤル族でも各々の部族により彼等の傳へるところは異なるのである。

私達が南湖大山及び次高山登山の際使用したピヤナ社の蕃人達は「タイヤルの祖先は大霸尖山(パバツクワツカ)から生れたものだ」と言つてゐた。私達の登つたあの獵奇的な偉容をもつ三五〇〇米の高峰が、

彼等の發祥起源の聖地として考へられることはもつとも話してあり、ピヤナン社の蕃人のみならず、新竹州紋水、大湖兩蕃や、臺中州の北勢蕃等の如く、西部山脚地帯にゐるタイヤルも、その祖先は大霸尖山から降りて來たものだと思つてゐるさうである。併し彼等の傳承中から或ひは語源的に分析した移動系統から云つて、必ずしも大霸尖山から降りたものばかりとは限らず、眞の發祥地を忘れて、便宜上、手近な怪奇の山にむすびつけたものではないかとも考へられる。

マレツバ蕃のマシトバオン社の河岸段丘の上に、タイヤル發祥の石、ピンスブカン（岩の割れ目の意）と云ふものがあるさうであるが、これは内地にもざらにある夫婦岩と同じ様なものではなからうかと考へられる。而してこの岩の割目から生れた人間が盛んに近親婚をしたため神の怒に觸れ、洪水に襲はれたので、一時、大霸尖山に避難した。そして近親婚者を水に投じた處、忽ち水が退いたので、一部は故地に復歸したが他はピヤナン鞍部を越えて北方に移り散つて行つた。

かくして、その一部は北方の溪頭蕃となり、又は東方山地の南溪蕃となつたが、又他のものは新竹州方面に入つてガオガン蕃、メリバー蕃、マカナジイ蕃、マリコアン蕃等になつてゐると傳へて居る。前にも記した様に、ピヤナン社や、新竹州方面のタイヤルが、その祖先が大霸尖山から降りて來たものだと思つてゐる傳説は、この説話の移住系統と一致するのである。

以上は大霸尖山を發祥地と信ずるものであるが、これは移川氏の「人」なる呼名の相異によつて行はれた系統區分に於ける「ツォリエ系」（大霸尖山を發祥地とするもの及び西部、北西部山脈地帯に先住せるものは、自からを稱してツォレエと云ふ）に相當するものである。

次にこれとは別に、北溪（萬大溪上流）の上流、白石山（ブノホン、三三七米）に發祥起源を信ずるものがある。それは白石山にボシヨカフニ（原木の意）と云ふ老木があつて、その枝の間から男女が生れ、其の子孫が榮え、大部分は中央山脈を越えて東に行つた

が、一部は霧社タロワンに住み、今日の霧社蕃となつたのであると信ぜられてゐる。今日タロコ峽にゐるタロコ蕃も、タウサイ蕃も、此の分派であらうと云はれてゐる。これは移川氏の區分による「セデツク系」に相當するもので彼等は「人」「同族」を稱してセデツク (Sedek) と云ふ。

以上の如き口碑に移動經路を求めると、(一)ピンスブガン岩系統Ⅱスコレツク系、(二)大霸尖山系統Ⅱツオレエ系、(三)白石山老木系統Ⅱセデツク系の三つに分たれるが、移川氏の研究によればその定着の順序は少くとも十五代以前にタイヤルの地域的分離が始まり一は北港溪を溯つて霧社方面にセデツクを形成し、最初から紋水、大湖、北勢等の西部山脈地帯にゐたものと、ピンスブカンより大霸尖山を降つて西部の山を出たものは、その先住者と合してツオレエとなり、最後のピンスブカンを中心として中央高地に定住したものはセコレツクと云ひ、所謂高山蕃の生活に入つたものであると云ふことである。白狗蕃、マレツバ蕃、シ

カヨウ蕃、サラマオ蕃等このセコレツク系に屬するものと思れる。

スコレツク系移動經路についてあるが、マレツバから大甲溪の上流に沿ひ、シカヨウを経てピヤナン鞍部に出で更に宜蘭濁水の谷に降る線が、最もはげしい彼等の移動路であつたことは、私達が實際見聞した地形上からしても充分首肯し得る處である。

さて問題は、何故に、彼等は生活に樂な平地にではなくして、不便な山地を選び居住するに至つたかと思ふことである。

移川氏によれば、高山蕃は、タイヤルに限らず、固は平地から入つたものであるが、殆んど島外發祥の記憶を失つてゐる點から考へて、平地蕃より早く渡來したものであらうと思はれ、又最初に山地に入つたのは北港溪を溯つて行つた白石系統のものが一番古く、十五代前、その他が夫々の地を得たのは六代乃至十代位前の事であらうと述べられ、平地より山地に入つた理由を移川氏は平埔蕃(熟蕃)との優勝劣敗に歸してを

られる。即ち高山蕃となつた蕃族の祖先はまだ狩獵を事としてゐたのに反し、それより前に渡來した平埔蕃の文化は既に定着農耕に進んでゐたから、彼等は漸次に此に壓迫されて山地に逃避するに至つたものであらうと云はれてゐる。スペイン人やオランダ人が來島した頃には既に熟蕃が平地を占有してゐて、兩者の分野が既に定まつてゐたと云ふ事である。かくの如く蕃族の山地居住原因を熟蕃との優勝劣敗にありとなす考へは極めて自然的な考へ方であるが、或る論者はもし彼等が熟蕃に壓迫されて山地に遁入したのが事實であるとすれば、兩者の激しい鬭争の傳説が残つてゐなければならぬが、それが無いではないかと言ふ。

彼等の傳説、説話のうちに、果して熟蕃との鬭争を物語るとき傳説が皆無であるかどうかは私は未だ調べてゐないが、かく云ふ論者の言をそのままに信じて鬭争の傳説がないとしても、このことは決して彼等の山地居住が熟蕃の壓迫によるものであることゝ矛盾するものでないと考へる。即ち熟蕃の壓迫＝鬭争の傳説

と云ふ考へ方をなす必要はないと思ふ。

熟蕃の壓迫による山地への遁入と云ふことは、兩者の生業の相違、即ち熟蕃が既に農耕を支配的生産部門として居たのに對し、蕃族は未だ狩獵生活を支配的生産部門——彼等が高山地に移住する前に農耕技術を多少なりと知つてゐたかどうかはこゝでは問題でない。農耕をもつていてもそれが狩獵に對する補助的生産部門であればよい。——としてゐたと云ふことに起因するのではないかと考へる。即ちこの兩者の生業の相違は、直接彼等の「土地」に對する價值認識の相違に結びつけられる。農耕種族が狩獵種族より「土地」に對する關心が高いと云ふことは今更こゝに説明するまでもない。

したがつて農耕段階にまで進んで居た熟蕃が未だ狩獵段階にとゞまつて居た蕃族より己れが占有した「土地」に對し高い關心をもつてゐたと考へても不自然はないと思はれる。かゝる兩者の「土地」に對する關心の相違こそ、それが唯一な原因ではないにしても蕃族

をして山地へ遁入せしめた有力な要素ではなかつたかと私は考へる。

何故なら熟蕃の土地に對する關心は、一度彼等が占有した土地、而も平地と云ふ極めて農業生産力高き土地を永久的に、己が領域にせんと欲求を強めたであらうが、これに反し狩獵をこゝとする蕃族は、かゝる「土地」に對する關心もたず、むしろ獲物の豐滿な新なる地域を求め生活も移動的であつたと考へられるからである。彼等にとつて農業生産力高き「土地」などは何等の魅力もなかつたと言つても決して過言ではない。

かくの如くであるから熟蕃の土地定着はますます強められ土地占有による排他的性質も自から生じて來たであらうが、これに反し、蕃族は己が故地を容易に放棄し、獲物の豐富なる地域を求めて、山地奥深く入つて行つたものではないかと考へる。

だから熟蕃の壓迫＝山地遁入を全く兩者の「土地」に對する關心の相違に起因するものであると考へれば

たとへ彼等の間に激しい鬭争の傳説がないとしても何等不思議はないであらう。

狩獵種族相互間に於て狩獵地域を巡り、血なまぐさい鬭争の行れることはあるとしても、農耕種族と狩獵種族の間に於てはむしろ「實力」の相違、生産力の相違による非武力的壓迫として考へた方がヨリ自然的と思れる。即ちヨリ優れたる生産力を有して居た熟蕃が何等積極的な鬭争を加へずして、彼等が唯土地に對し強い關心をもつて居たばかりに蕃族を高山地に遁入せしめた、否、蕃族は、彼等が土地に對し左程の關心を持つてゐなかつたため、他方、狩獵生活を維持して行く必要上、容易に故地を捨て、獲物を求め山地に遁入して行つたのではないだらうか。

併し私のこの考へ方も一つの豫測にすぎず、何等有力な實證的根據を有するものではないが、高山蕃の山地移住の原因につきその一つではないかと、かく考へてゐる次第である。

・ 小人 説話

更に蕃人渡來以前に、先住民族が居たか否かと云ふ問題がある。

蕃族の間に小人傳説が豊富に傳へられてゐることは古くから注意せられてゐた事實であつて、かゝる小人傳説につき、私は北海道アイヌのコロボツクル説話にも似て極めて興味深き問題であると考へてゐる。

小人傳説なるものは、兎角、原始人が空想的に畫いた所産として、荒唐無稽なものとして考へられ勝ちであり、それは人間心理の必然的發展に仍り産まるゝものとされる傾向があるが、彼等の傳える小人説話は如何なるものであるかを若干次にみることにする。

タイヤル族に於ては小人を「シーグツ」、「シンシグ」、「シヨゴチ」「Tsikuskui-naka-natoho」等の呼名を用ひるが「昔ビンサバカンの邊にシーグツの枝をも渡り得る小人の住まひ、名をシーグツと云ひけり、彼等は身長に似合はぬ大刀を腰にして常には叢中に身を

隠して蕃人の目撃を避け、時々蕃社に來りて祖先を苦めり」——ガオガン蕃、テイリリ社、プトノカン社所傳、尙同様の傳説はハツク蕃マシトバオン社、及び南溪蕃コーゴツ社（シヨゴチ）にも傳へられて居る。

「昔シンシグとて極めて小さき人住めり、木豆の幹に攀ぢ登るも手を延して其の實を取る能はざる程の小人なりき、されど常に大刀を帯びて蕃人を苦めるものなり、我々木豆の名をとりて、彼等をシンシグと呼ぶ」——シヤカロー蕃。

「昔バスコワラン溪の西岸に巨樹あり、其の枝互に延びて交叉し、さながら橋をかけたる如し、偶々小人此の橋を渡り來りて、多くの婦女を姦したれば、祖先等怒りて其の橋を切り落したり、其後死者の靈魂は此の橋を渡りて東に赴きしものなり」——鹿場蕃所傳。

「遠き南の方の山中に Tsikusikui-naka-natoho (小さき異種族といへる意) と呼ぶものあり、身の丈三尺に満たず、弓矢又は槍を用ふる事を知り、昔我がタイヤルにも彼等に殺されたるものありしと云ふ」——大崧

埃、五指山方面所傳。

以上はタイヤル族の傳ふる小人説話であるが、サイセツト族に於ても小人説話があり、小人は「タアイ」なる名に於て呼ばれてゐる。

「現時サイセツト族が毎二年に行ふバスタアイなる大祭はタアイと云ふ矮人種の亡魂を慰めるに行はれるものである。今その由來を聞くに、タアイは往古ワタイ溪（上坪溪の上流にあり）の右岸マラバライ山の西北方中腹の岩洞内（現時その地をライタアイと稱する）に棲息した矮人の一群で、身長は僅かに三尺に過ぎないが脊力強く且妖術に長じて居たのでサイセツトは恐れて居た」——（小島著、蕃族慣習調査報告書第三卷十一頁）

その他、ツオウ族に於ても、小人は「サイウツ」[Tsaurira]「カボロア」と云ひ、ブヌン族にては「サロソ」[Sadon]「サルツン」[Tsantso]等の名に於て呼ばれ、パイワン族に於ては[Sugudul]「Kano」と云ひ、それぞれ小人説話がある。

これ等は蕃人自身の傳へる小人説話であるが、支那人は早くより之れに注意し且記録に遺してゐるさうである。鹿野忠雄氏によれば、乾隆二九年の鳳山縣志、又臺灣縣志にもこの説話が記され、又十八世紀の前半に於て蘭領東印度諸島の布教に従へる *Evancouis Var-* *gentin* も、臺灣の山中に「ヂャモックス」と云ふ一種の黒人の棲息する事を記して居ると云ふ。

次に最も注目に値することは、かゝる蕃人自身の傳へる説話の外に、小人棲息せりと傳ふる地點に遺跡があり、其處より彼等が使用したであらうと傳へられる遺物が出土せられることである。

前述のサイセツト族の傳ふる小人「アタイ」の岩窟を見るに

「數年前迄は我等其の中に入ることを得たり、入口は二尋の廣さに過ぎざりしも、内部は頗る廣く以て數百人を棲ましむるに足り、而して石造の椅子ありたるも今日は岩崩れ路斷崖となりて中に入ることを得ざるに至れり……又此の岩洞は本族一般に之を神聖視し、異

種族に見らるゝときは雨降來ると信ぜり」——小島(1) 一四頁。

又ブヌン族の傳ふる小人「サルソー」の棲息せりと云ふ遺跡は

「轡大社の小社に屬する下毛(エモオ)社より下諱(エシイ)社に到る途中、郡溪と轡溪と相合する所削成せる絶壁の頂上に稍開展せる平地あり、此處に一の大なる石壁を有し、廢屋の跡の如し。人語りて曰く、今を距ること三〇〇年前(々)矮人の住居せし所なり」

その他、臺灣南部の大麻里地方には極めて豊富な小人遺跡があり、其處には今尙小人の先住せしと傳へられるパリシンの森があり、又石垣等の遺跡がみられ、小人が使用したと傳へられる石製の臼、杵、皿等が出土されたと云ふことである。

他の地方の蕃族が、その説話の中に、小人と戦闘争を續け遂に小人を壊滅したと云ふ風に傳へて居るが、パイウン族の説話には餘り小人との闘争は傳へられずタバナク社の祖先の如きは小人と友誼的關係を結んで

ゐたと傳へられて居る。ことにタバナク社頭目の家には、古く祖先の時代に小人から好意的に譲り受けたと傳へられる小人の壺があるさうである。パイウン族は現今でこそ、土器の製造を全く忘却して居るが、太古は盛んに土器を製造したことは、祖先傳來の壺を有することによつても明らかである。併し、鹿野氏によればこの小人の壺と、彼等個有的のものゝを比較すると前者は著るしく口が廣いとのことである。

さて、かゝる小人が果して實在したか否か、又小人は彼等蕃人の征服するところであつたか、否か、更に又出土する土器、石器が或ひは小人の遺跡と傳へられるものが、實際小人なるものが使用し、住居したところであらうか、もし小人が實在したら、彼等は如何なる人種に屬すべきや等の問題がある。

勿論この問題に關し非専門の私は一言をも發し得る資格はないが、唯、この小人説話が前述せるごとく北海道アイヌの傳承したコロボツクル説話に極めて類似してゐるので、この點に甚だ興味をもつてゐる。

コロボツクル説話とは、今更らこゝに説くまでもなく、北海道の先住民族が「コロボツクル」と云ふ小人で、堅穴に住ひ、土器や石器を遺したのもこの小人であるといふアイヌ自からの傳説である。

村上嶋之丞によつて寛政十二年に書き始められたと云ふ蝦夷嶋奇觀には

「夷人 (アイヌ：筆者註) 言傳ふるには、古へコツチヤカモイといふ神有て體四尺計り、手は甚だ長し、此神處々に住たもうて漁獵の道に通力を得たまふ、トイチヤ (土舎) に居て、夷人等に魚肉獸肉などを其窓より與へ給ひける故に、其漁獵の術を學ばんと近よりて請へば教へられず、夷人等も嫌ふにや、遂に此地を去りたまふ、其神の妻なる人別に美麗なりしが、手に色々の文理あり、後人かの神夫婦の徳を慕うて其の状を寫し傳て女夷とも今に至るまで文身すと古老の口碑なり、其の住居しまふの類など種々の寶器を掘出す事ありとノツカブの酋長シヨンコなる者語りき」

文化五年に書かれたと傳へられる著者不明渡島筆記

には

「コロボクルグルといふ者あり、是も古への人にして時世いつなることを失ふ、コロボクルグル仔細に唱ふればコロボツコルウシクルなり、ボツ實はボキなり、コロはふきの葉なり、ホキ此にボツと略呼す、ボキは下といふことなり、コルは持なり、ウシは居なり住なり、グルは人といふ義なり、則ちふきの葉の下に其莖を持て居る人といへること也、東邊にては之をトキチセウシクルと呼ぶ、トキは土なり、チセは家なり、ウシクルは前に同じ、是れ土室に住む人といふこと也。婦人の手と吻唇とに鯨する此コロブクシクルに始まる。相傳ふ、聲あり、形を見ず、夷人が漁獵をすればとて前に行てとり、或は捕ておきたる魚を盜去り、又家に來て魚を乞ひ、與へざればあだをなす…(中略)…さまざまにエゾをなやまし戰鬪をなすとき介冑して六七人ふきの葉したになど語り傳ふ…(中略)…又彼が宅趾として凡方二步計なる地を穿ち今見る所の深さは二三尺計四邊土を封じ埒の狀をなしたるあと所々あり、後いつち

へか行しあと無し、其宅跡の邊より小壺を掘出すこと聞々あり…(中略)…此等の説をいふものコロボツクルが事をこひとくといへり、もしエゾがコヒトといはゞ穴居の跡といひ胡人ならずもはかりがたきまゝ、よくく尋ねしにふきの葉の陰に六人も七人もかくれたりといふなれば、常の人にてはさは有まじ、小人人らとて之をきゝし松前や南部津輕より來る鄙人が臆よりいひ出したる詞なるよし、然らば胡人の事には引附かたしと雖も穴居の跡といひ壺といふ事はよく近似すといふべし」

この説話は、コロボツクル説として、北海道の石器時代遺跡こそ「コロボツクル」の残したものであつて「コロボツクル」はアイヌと別の人種であるがどこかに去つてしまつたであらうと言ふ學説にまで發展し、北海道の先住民族こそ「コロボツクル」なりと一時學界を風靡したのであるが、その後考古學的實證研究の進むに従ひ小人説としてコロボツクル説話は全く單なるアイヌの説話に過ず、北海道の堅穴、土器、石器は

アイヌの遺したものであるといふ考へ方が有利になり今日ではコロボツクル論は全く専門家の間に省みられなくなつたのである。その後續行されてゐる發掘結果も堅穴住民は大部分アイヌであつたと云ふ證明に有力な資料を與へてゐる。

臺灣蕃族の間に傳承される小人説もアイヌに傳承されたこの小人説と同じ様に彼等の畫いた事實無根の一片の空想に過ぎないものか、かゝる小人が實在し、蕃地に出土する石器、土器こそ彼等が使用せしものなのか、反對にそうした石器、土器は蕃人の祖先が使用したのだから、それを現蕃人が忘れてしまひ、その遺跡を小人居住遺跡との説話をたてて結びつけたのか、又一部學者の説くごとく小人達こそニグリートであるかこれ等問題の解決は今後の民族學的考古學的考證に待つより外ないであらう。

・ 狩獵より農耕へ

さて、以上に於て臺灣蕃族の概貌、その移動経路、

及び私達の取扱んとするタイヤル族の系統所屬等根源的な問題に觸れたが、何れにせよ、その多くは今後の學術的研究に待つところ多きものである。

私は次に、彼等の社會組織並に財産進化の問題に關し、史的考察を中心とし、解説を試みようと思ふ。

現在の高山蕃が移住以前に農耕技術の知識をもつてゐたか否かは別問題としても、彼等が狩獵を支配的生產部門としてゐた所謂、狩獵の民であつたと推論を下すことはあながち私一人の獨斷ではあるまい。

一般歴史命題が私達に教へる如く、彼等も土地定着以前に於いて狩獵を中心とせる「採集經濟」に依存してゐたにちがひない。前述せるがごとく彼等の激しい部族移動も、彼等が狩獵の民なればこそであつたと考へる。そこでは血縁者よりなる一團による協同的な經濟活動が、慣習的規律のもとに營まれ、集團と集團との間には何等恒常的な經濟關係はなく、個々の集團は閉鎖的孤立的體制をとつてゐたであらう。だから部族間には有意的な連絡はあり得よう筈はなかつた。かゝ

る社會では、身の廻りの僅かな所持品等を他にして、何等の私有財産的なものはなかつたことは言ふまでもない。

土地の私有の如きはもとより考へ得られない。否、ひたすら採取經濟によりながら移動生活が營まれてゐた。かゝる時期に於いては、個々人による土地所有は何等の意味もなかつたことは明白であらう。各集團の占有領域と云ふものも、彼等の一時的な聚落をめぐる一定圏の採取活動區域のみが、その期間にかぎり個々の集團の占領區域をなしてゐたに過ぎなかつた。その領域の地點乃至範圍は動搖的であつた。

併し、集團の放浪はいつまでも續かなかつた。而してそれは土地への定着が起つたことであつた。それは漸時的に起つたものであらう。

かゝる土地への定着を可能ならしめたもの、それは農耕であつたと考へる。彼等が始源的に農耕技術を知つてゐたか、否かは一概に斷定し得ないが、土地定着への最初の物質條件を與へたものは農業であつたと云

ふ断定は過言ではないであらう。

タイヤル族に於いても未だに男子は農事にたずさわ
ることを厭ふ風習が残存する。これに反し彼等の狩獵
好きは驚くばかりである。この慣習の中に、男子は狩
獵のみを——今でこそ理蕃上男子の狩獵は制限されて
ゐるが——農業の大部分は女子が行つてゐたこと、更
に狩獵をことゝし、移動生活を續けてゐた時代已に女
子による土地定着への準備が蓄積せられてゐたのでは
ないかと私は考へる。

狩獵が支配的生産部門であつた時代に於いても、女
子の營む多少の農耕は——後には男子も之に加つた——
——まず／＼土地への定着を促進したであらう。何故な
ら獲物を追つて山野をかけめぐることが、彼等にとつ
ても容易ではなかつたらうし、農耕はこの困難を排除
してくれたからである。

併しこの時代の農業は、その條件に於いても、また
その方法の不安定なる點に於いてもあまり生産的では
なかつたであらう。それ故に人口の増加が一定の限度

以上に達すると集團は直ちに分裂することを免れ得な
かつた。この集團分裂の過程は、母體共同體より姉妹
共同體の離行の形に於て、即ち一つの集團が二つにな
り、各々は新なる領域を占有しつゝ人口を増加し、そ
れが一定の限度に達すると不可避的に再び二個に分裂
し、之が繰り返へされたものであらう。

人口の増加は一方の住民の數を限りなく増加せしめ
る傾向を有するが、一地方の面積には限度があり、且
つ當時の生産手段をもつてしては、一定數の人口を維
持し得るにすぎなかつた。この増加する人口は生活資
料の缺亡に當面したのであつた。この人口過剩の排除
は——原始的社會心理の極端な保守性の爲、技術の進
歩は人口の増加に曳られる——唯一の殘された道、そ
れは「移住」であつた。

かくの如き母體共同體より姉妹共同體の離行を、サ
ラマオ蕃の傳説に聞かう。

「……漸次蕃殖して所も狭くなりしかば、或るもの老
人（恐らく氏族の長（頭目）であらう——筆者註）——

に向ひ、吾等今より平地に出て耕作せんと思へば、願くは社業の半數を分ち與へよ……とそこで社業を兩分して其の一を與へた……」と。

しかし土地への定着は、農耕法の漸次的な改良と相俟つて促進せられ、一時的なものより、恒常的なものへと進まざるを得なかつたであらう。かくして各部族の占有領域の中心も、現在とほぼ同様な領有地域に固定せられるようになったのではないかと考へる。

・ 土地所有の萌芽

集團による土地所有の發達はまづ土地への定着、農業の發達によつて條件づけられる。聚落地點を中心として生産活動の範域が稍々永續的に固成されるからである。併しそれは他集團の同様の占有地帯の並存に接觸によつて始めて確然となるものである。

そして、こゝで各個の占據領域の上に——若干の圍繞する緩衝地帯によつて他領を區別されるところの——共同的所有が成立する。タイヤル族の部族間に於け

る共同狩獵地域とはかゝる緩衝地帯を意味するものであらう。

新なる占據は次ぎ次ぎと新なる所領々域を形成して行く、この現象は同一集團の移動の場合にも共同體が分列し母體から遠く離行して行く場合でも同様であつたと思へる。かゝる所領々域は當時に於ては彼等全體に屬するものであつたらう。

何故ならこの時代は狩獵が彼等經濟生活の支配的生產部門であり、又その狩獵も部族の領有區域内に於て行はれてゐた。狩獵は當該部族の構成員の共同的集團的作業として營まれてゐたものであらう。農業も未だ左程の發達を示さず、したがつて土地そのものに對する社會的關心を高める程のものではなかつたらう。

狩獵の如き獲得經濟から再生産經濟への移行、而して今日の如く農業が支配的生產部門となつた過渡的段階として、採取經濟の放浪性と農業の定着性との混合せる時代が存在したであらうが、人口が増加すると共に農具の改良進歩は、定着なる農業へと進展するより

外はなかつたであらう。

今日彼等の行ふところの狩獵も農業への過渡的段階に於ける生産形態としてのみの意義を有し、又狩獵それ自體の土地への粗放性、掠奪性は、農業發達以後に於ける彼等の土地關心に反映する。

農業の發達は彼等の生活を比較的安定にし、土地の社會的重要性は狩獵に比し一層増加し、従つて部族領有區域間の境界線は益々明確にされたであらう。

併しそのみにとゞまらなかつた。彼等の社會組織の上にも大なる影響を與へたものであつたと思惟される。

・ 血族關係と「ガガ」の制度

人類共同生活の根本的連鎖は血族關係であり社會の根柢を成すものは血族團體なる家族である。

しかし原始的家族は單に兩親と未婚の子供のみからなるものでなく、男の子の妻、また、その男の子及びその妻並にその子孫に至るまで三、四代の人々を包含

する大家族を云ふのである。そして共同の祖先を有し又有すると信する幾多の家族を包括する團體を氏族と云ふ。従つて氏族は單に直系の血族のみならず、傍系の血族をも包含するのである。しかして部族はこの氏族か或ひは幾多のこれら氏族の集合せるものに他ならない。

中央山地に居住するタイヤル族には「ガガ」と稱する制度があるが、この生活共同體の根源は上述の氏族に存するのではないかと私は考へてゐる。それは血族の一團乃至は一團に加盟せる——共同の祖先を有すると云ふ理由のもとに——數個の團體によつて構成せられてゐる。

「ガガ」を祭祀團體と看做す論者もゐるが、これを單なる祭祀團にすぎずとなすことは誤りであらう。祭祀は共同の祖先を有すると云ふ血縁の事實乃至はかく信するところの有意的な基礎にそのオリジンがあるものでなければならぬ。私は「ガガ」の起源は氏族と看做して間違はないと思ふ。「ガガ」は氏族なるや、否

やの間に對して私は次に掲ぐる彼等の慣習を以て答へる。

氏族内の男子が其の妻を同族の内に求めずして他の氏族に屬する女子と婚を通ずることを一般に族外婚 (Exogamie) と云ふが、この族外婚の制度が彼等タイヤル族の社會に於ても存在してゐたと云ふ事實である。

既述せるツオレエ系のタイヤルのうちに「ピンスブカンから生れた者が盛んに近親婚をしたゝめ神の怒に觸れ、洪水に襲はれたので、一時大顎尖山に避難した。そして近親婚を水に投じた處、忽ち水が退いたので、一部は故地に復歸し得た」と云ふ傳説があるが、この洪水説話は、そのまゝに近親者の婚姻 (族内婚) が實際に行れて居たと、とるよりは、私はむしろ族内婚こそ彼等の禁忌でなかつたか、即ちこの説話は族内婚禁止の規定を暗示するものでないかと、考へるものである。

同一「ガガ」内に於ける婚姻は嚴重に禁止せられて

ゐたと私は思ふ。

「ガマ」は族外婚でもなく族内婚でもない、タイヤル族に於ても父系制が行れ招婚であるが彼等の通婚は「ガマ」に制限されることなしに「ガマ」内にも結婚することが出来る」と云つて、族外婚を否定する論者もゐるが、かくの如き同一「ガマ」内に於ける婚姻が許容せられるに至つたのは本來同一血族を基礎とし成立せる血族團體即ち「ガマ」が農業の發展とそれに伴ふ土地への定着により、地域團體と化してから後の事であらうと考へる。

其處では血と血のつながりと云ふ人間結合の第一原理とならび、後にはそれ以上に、同じ土地に住し同じ土地から生ずるものをもつて生活し、また同じ土地に葬られると云ふ第二の原理が重要になつて來たであらうし、かゝる傾向は血族團に根源を有する「ガガ」の本來の意味を失はしめ、他氏族の混入も可能となり、従つて同一「ガガ」内における通婚をも可能ならしむるに至つたのではなからうか。

しかし未だに同一「ガガ」内に於いて不正な婚姻が行はれた時は、出獵、出草をしても思ふ様に獲物が得られないばかりでなく、隊員の中の誰かと思はぬ怪我をしたり、又は横死したりするものであると云ふ禁忌が信じられてゐることや、婦女は婚姻によつて其の縁付き先きの家族の屬する「ガガ」の一員となると同時に實家の屬する「ガガ」の成員たる資格を失ひ、その加入脱退の手續として豚を縁組先きの「ガガ」より實家の「ガガ」へ提供するがごとき慣習を有することは嘗つて族外婚の行はれて居たことを物語るものであらうと思ふ。

シカヨウ蕃に於いては婚姻の際原則とし女子は男子の「コツト・ガガ」(既婚者の團體)に加入すべきものとされ、サラマオ蕃に於いては「コツト・ガガ」(祭祀慣習を同くする團體)に加入すべきものとされてゐる。族外婚の行はれて居たと云ふ證據は「ガガ」の起源を氏族に求むることを可能ならしめるが、そのみでなく、氏族は軍隊組織の單位をなすものであり、その

指揮は族長氏族の長によつて爲されたものと考へられる。

タイヤル族に於いても今でこそ嚴禁されてはゐるが「出草」(首狩)は「ガガ」全體によつてなされたものであり、その指揮には「ガガ」の長が當るを原則としてゐたらしい。出草の後に残されたその「ガガ」の家族は爐の火をたやしてはならぬとされてゐた。そして「ガガ」の長とは本來は氏族の長を意味し、地域團體となつた今日では頭目(蕃稱—ムラホウ)と稱するものに外ならない。

出草の要因——歴史的發展は幾多の變形をうみ、宗教的色彩をこれに加へはしたが、例へば禁忌に依る出草——として擧げ得るものうち、重要なものは「力」による領域の擴張であつたと思ふ。占領したる土地は彼等の協力によつて獲得せられ。又これを防衛することは彼等全體の事業であつた。従つて土地に對する排他的意思のあらはれは當然と云はなければならぬ。彼等も住居——宅地はもともと「私有」的性質

を帯びたものであつたが——のため、耕作のために一定の地域を必要とした。この場合「ガガ」は土地占有の團體であつた。

しかし部族領有地域に於ける「ガガ」の土地占有は時の経過と共に「ガガ」の永久的所有に歸し、今や、「ガガ」は私有的土地共同所有の團體となつて其の地域に定住した。この場合「ガガ」内部に於いてはこれを構成する個々の家族は未だ土地に對する私有權を認められず、單にその使用收益のみが認められ、土地は「ガガ」全體に屬してゐる。

今日「共有」とは個人的私有を基礎とするものであるが、この意味での共有が存在して居たのではない。土地全體が「ガガ」全體に屬すること、全體が全體としてそれを有すること、即ち總有（Gesamteigentum）蕃稱——サツバ）であつた。そしてここでは各家族に對して「ガガ」の分配割當によるその土地の使用が認められ、家族の長が代表者としてその分配を受けた。しかしその分配は必らずしも均等に行はれたものでは

なく「家族の身分格式」に従つて差異はあつたであらうし、又かゝる土地の配分割當は必しも嚴然と行はれたものではなかつたらう。それは「ガガ」の占有地域の廣狹、人口の密度等によつてその程度を異にしたと思はれる。

何故なら人口寒度大にして土地狭小なところでは當然土地に對する關心は高められ、既に土地私有への萌芽的基礎さへ形成されつゝあつたからである。

しかし土地所有の基礎はかゝる外的條件のみによつて規定されるものではない。こゝに最も注意すべきことは未開地は部落民が自由に開墾し、使用收益をなし得ると云ふことである。そしてそれは先占と勞働とによつて可能とされる。「ガガ」の領域内に於ける未開地の開墾は決して同時的に行はれるものではない。まして個々の家族が已に氏族と云ふ血族團から地域團に移行して行く傾向が進むに従つて、土地所有の觀念は益々強化されるのは當然である。即ち「ガガ」による共同體私有の傾向は又それと並んで必然的に私有地の

發生を導いた。勞働と先占とは彼等の姉妹共同體が母體共同體と離行して行く場合にも農業が發達した以後「ガガ」によつてなされる土地占有に於ても、同じ様に今や家族による土地私有の萌芽の基礎をも構成せしむるに至つたと考へられる。

・ タイヤルの農耕法

惜て私はこゝで彼等の農耕法が如何なるものであるかの研究に入らねばならない。何故ならば農耕地の支配關係は彼等の農業技術と必然的關聯の下におかれるからである。

彼等の現今に於ける生活の主要なる部分を占めるもの、今日彼等の經濟生活に於てその支配的生産部門たるものは前述せる如く燒畑農業である。彼等は未だに施肥を知らない。彼等の生活地域は山地であつて、その耕地は大部分傾斜地にあたるので、施肥をしても雨水に流され、施肥は事實上不可能なのである。しかし施肥の不能はかゝる自然的條件のみから來てゐるもの

ではない。彼等の農耕技術が未だ施肥を行ふ程度にまで發達して居らぬからではないかと思ふ。施肥は或る程度の農耕技術の改良を待つて粗放的耕作より集約的農耕法への移行の中に漸次あらはれて來るものだからである。

今日でこそ彼等は比較的優秀な農耕用具を持つてゐるが、其れ等は理蕃當時者から與へられたるものであつて、彼等個有の生産用具ではないのである。現在に於いても彼等は狩獵或ひは戰爭の用具として、原始色豊かな弓矢を持つて——殆んど使用しはしないが——ゐるがこれと同時に農耕用具としても彼等個有の原始的なものを持つてゐたに違ひない。ピヤナン社に於いて發見されたパァエーなる小ハツクの如きも彼等が原始農耕用具を持つてゐたことを想像せしむる有力な資料である。

こんな次第であるから現今一般に燒畑農業と云はれてゐるものゝ本質は前述せる如く、歴史的發展の過程の中に於て考案しなければ本當に理解することは出來

ないであらう。

今焼畑耕作の一般性をみるに、これは狩獵を主とした採取經濟生活から定着農耕に入り來つた最初の段階を示すもので、原始經濟の研究上極めて興味ある問題である。

狩獵より農耕への過渡的形態として、森林を焼拂ひその跡へ播種する原始の焼畑耕作は、その母體が狩獵である以上、その母體の遺傳的素質を多分に保有するものである。農業萌芽期に於ける耕作は半定着的なもので、森林を焼拂つてその地を耕作し、一、二年の後には他に移動したものに違ひない。しかし定着生活が確立して來ると、一旦枯渴した耕作地面は休閑地として草木の繁茂するに任せ、地味の自然回復を待つて再びこれを耕作する。そしてそれ迄の間は新なる森林を開拓すると云ふ様な稍進歩した農法が——休閑地農法——行はれる様になる。しかし地面が狭小を感ずる様になると、休閑地農法に代つて輪作農法が行はれるのである。

以上は焼畑農耕なるものゝ概念であるが、彼等タイヤルの現在行ふ焼畑農業なるものにもこの三つの歴史的發展の類型が混在してゐるものであつて——理蕃當局は輪作農法にまで推し進め、更に河岸段丘を利用し水田耕作をも行はしめてゐる——うちには已に輪作法に迄達してゐるものもあるが、未だ休閑地農法と目されるものもないではない。

それ等の歴史的發展類型の混在は、土地の廣狹、地味等の自然的條件、並に農耕技術等の如何に支配されるものである。

次に以上の農耕法が實際には如何に展開されてゐたかに就いて見やう。

開墾の實際

森林地（蕃稱—クージー、筆者註、未開墾地の意）を開墾するには喬木の根本に刀痕を加へ、皮を剥ぎ、此にまつはる蔓藤を伐り、自然に枯れるのをまつて下草を刈り、斧を用ひて枝を拂ひ、後火を放つて焼き、礫

を除いて地ならしをし、急斜面には小石や、自然木で土止めを施し雨の降るのを待つて播種するのである。

開墾せる土地には粟などの同一穀物を毎年植ゑつけるものもあるが、中には粟をその初年に、蕃薯を次年にと云ふ風に種類を換へて順次に栽培して行くものもある。しかし絶對に施肥をしないで大低三、四年で休耕してしまふ。かゝる休耕地をゴツケーと云ふ。ゴツケーは全く自然のまゝに放任し、植物の鬱茂するにまかせるものもあるが、中には植樹——榛木等の若木を植ゑて綠肥とする——して地力回復を急速ならしめるものもある。かくて放置して地力の自然回復を待つものは再墾する迄七、八年の永き休耕期間を必要とするが、植樹して人爲的に地力回復を待つものは二、三年乃至五、六年である。

開墾は「ガガ」の割當分配によるか、又、同一「ガガ」内に於ける領有區域の自由先占と、勞働とによつて爲されるが、家族は前者の場合は單に耕地の使用收益を許されるに止り、後者の場合と雖も未だ家族の私

有は許されず單に先占と勞働と云ふ事實によつてその土地を事實上、その耕作期間に限り使用收益し得るにとゞまるのである。

そして私有なりや否やの問題の起るのは多くの場合休耕地に關してである。こゝに於て何等植樹することなく自然的地力回復をまつ休耕地は全く放棄したる場合と類似の性質を有するものと見做される。

彼等の間では全く放棄された土地は後、何人が此を耕作しようが異議を申し立てるものはない。同一「ガガ」に屬してゐるものゝ全ては、それを耕作し得るのである。此の場合には開墾と同じ性質を有する。しかし休耕地に何等植樹せず、自然的地力回復を持つと云ふことは耕地を全く放棄せる場合と同一視すべきではない。若し當該休耕地と他種の耕作地——休耕地でもよい——との境界に溝などの原始的標識の設けある場合は、そこに排他的意思のあらわれをみる事が出来る。かゝる休耕地の繼續的保持の欲求は私有の萌芽を基礎づけるものである。又それは「ガガ」の協同的組織自

體の如何にも關聯する。「ガガ」内に於て人口が多く、慣習規律が嚴であれば「ガガ」の規律を犯したものはその贖罪の意味から屢々「ガガ」に對し土地の返還を——勿論使用收益すると云ふことではあるが——要求されることがある。此の様な贖罪の代償による土地使用區域の變動は土耕の不均衡を助長し、益々休耕地の繼續的保持に拍車を加へるのである。しかしかゝる場合でも未だ完全なる私有と云ふことは出来ない。

さて休耕地に植樹する場合であるが、地力の人為的回復の促進は、休耕地保持の繼續性の欲求を益々高める。何故ならそこでは以前より土地の先占はヨリ以上困難となり、又ヨリ以上の勞働を土地へ投ずる事になるからである。「ガガ」の共同組織も土地に關する限りに於て弱められ、家族がこれに置換へられる。中には土地は自分のものである如き觀念を持つてゐるものもある。

しかし斯る場合でも土地が「ガガ」に屬すると云ふ觀念は全く放棄されたのではない。他の何等かの原因

により植樹せる土地を放棄せる場合でもその土地を他の「ガガ」に屬するものが再墾せんとすることは全然許されず、再墾の權利は同一「ガガ」に屬する者のみに賦與される。

かくの如く彼等の土地制度の上には幾多の歴史的類型が並存する。しかし一見、煩雜にみえる彼等の土地制度もその本質は土地制度發展の歴史のうちに於ては容易に理解され得るのである。

かくてタイヤルの土地制度に就いては、單に表徴的な形態のみをみて、タイヤル族には公有制と私有制がある、など云ふならばそれは誤りである。理蕃政策の行はれてゐる今日、かゝる土地支配の形態は殆んど看ることが出來ず、皆私有である。

併しそれから直ちに私達は臺灣の蕃人は始めから土地を私有してゐたと云ひ、ひいては之れを原始人の土地私有説の實證的資料に用ふるが如きは正常な見解とは考へられない。

更にこゝに注意すべきことは、かゝる農耕法の故に

部落と耕地との距離が次第に遠く離れて行くと云ふ事實である。したがつてこの不便は、特に農繁期には耕作小屋に寝起することを必要ならしむるであらう。出産の時期が略一定してゐるのは秋の收穫期に於ける耕作小屋生活の結果であると思はれてゐるが、此は恐らく事實であつて、耕作小屋の生活は彼等にとつて精神上にも重大な意味を持つてゐるのである。この耕作小屋生活の繼續性がまた、彼等の家族分列の重要な要素たることは看過し得ない。

・ 結 論

以上は農耕地に就てあるが、彼等の土地制度を理解する上に於て農耕地のみを單獨に考察することは至當ではない。狩獵地も、居住の形式も農耕地と關聯して考へねばならない。狩獵地は「ガガ」の部落の所有である。こゝでは家族の私有など云ふことは問題にされない。それは狩獵それ自體の社會的共同的性質によるものである、如何にして狩獵地が領有さるゝに至

つたかは已に述べたところであるが、かくして得られる狩獵地に漸次的に農耕地が設けられて行く場合、農耕地は狩獵地と關聯するは容易に考へ得られることである。

狩獵地に於ける農耕地の新なる設定はそれだけ狩獵地の減少を意味する。それは個人の意思によつて規定されるのみでなく「ガガ」なる共同體の名に於て爲される場合が多いのである。

居住の形式は土地支配に關係する。單居式住居制度は自然に耕作地の個人的占有を導くものであるが、彼等タイヤル族の部落の如く集村式住居は自然的慣習と傳統の維持に適合するものであるからである。

財産なるものは絶對的に變化しないものではない、それは歴史的條件に従ひ分化し、漸次に高化し得るものである。動産は最初から個人によつて所有されたが土地に關する限り個人主義の表現は耕作の増大度と關聯する。

人がある場所に勞働を投下すると彼等はそれを彼等

自からの爲、並に近親者の爲に維持せんとするのが自然である。しかしかゝる人間的或ひは主觀的要素は、社會的共同事業の客觀的要求と調和することによつてのみ維持せられ得るのである。従つて共產主義の曙光も亦、絶對的財産も原始民族に歸することは出来ない。併し個人的所有權や、公權的權力が原始民族には現代法によつて統制されてゐる状態とは又別な方法で認められてゐると云ふことを理解しなければならぬ。

以上に於いてこの研究を終へるが私は尙ほ一言附加へて置きたいことがある。

私達が南湖太山に登つたとき彼等は白山羊を射止めたがその獲物の分配は極めて公平なものであつた。

射留めた勇者には特權として毛皮が與へられたが、肉は隊員の頭數に等分され、一人前は僅か一握りにしか當らなかつたが、その中の權力者が餘計取る様なこととは決してなかつたのである。分られた肉は蕃社に持ち歸られ、老若男女の別なく蕃社一同公平にその恩惠

に浴するとのことである。
 彼等と山行を一緒にした私達が、うるわしきもの、又ねたましいとまで思つた彼等の共同精神、一致團結もそのよつてくるところのものは、既に述べたとき彼等の生活事實にあるのではないかと云ふことである。

北 葛 澤

西 岡 一 雄

この澤は、登山者としては誰れ一人手をつけたといふものを聞かない。獵師も釣師も共に澤通しは絶對に不可能也といふ。會社の人達と雖も這入れぬとして、その一部分は知られてゐない。

かういふ風説と實際が、私の膽を奪ひ、決行を逡巡させた事は甚だしい。即ち幾度か計畫し幾度か齟齬した所以である。

しかし、積雪期に於ては、澤通しの通過は極めて容易であつて、入口から尾根筋へかけて一日の行程である。この期に至つて獵師が獸を追つて澤に入るものがある。故に、北葛澤は、夏季に於て悪く、冬季に及んで容易な澤であることが判る。

位置及び概念。大町より二里、葛温泉より一里、笹

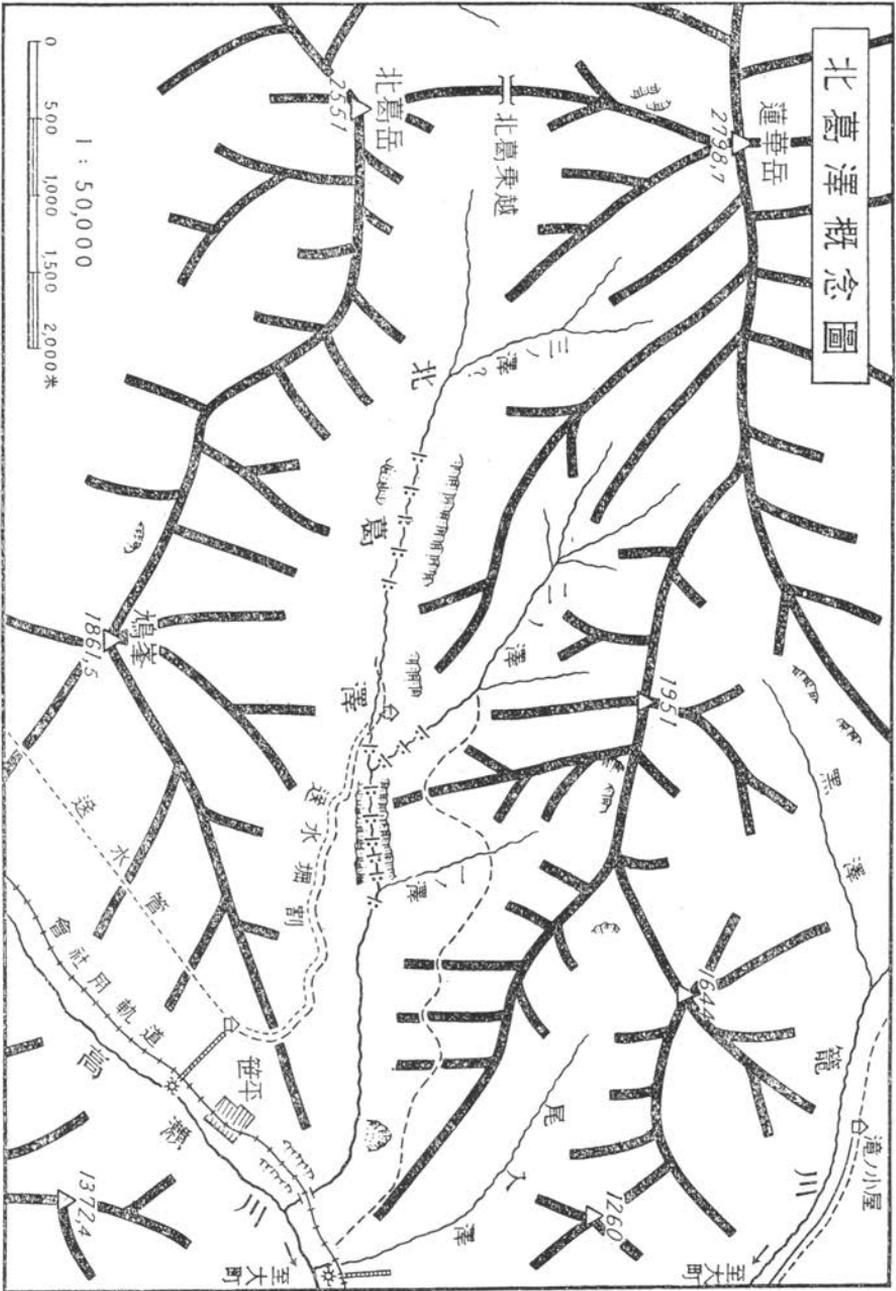
平の入口にある谷である。

蓮華岳と、北葛岳の間に介在する山々の水を集めて流れる谷であつて、原流から落口迄、距離は凡そ二里位であらうか。その落口には高瀬川、無二の立派な鐵橋が架つてゐる。こゝで高瀬本流に合し、乗合自動車は、この鐵橋上を往復してゐる。

この鐵橋から下をみると、水は極めて清淺で且穩かである。逸る心には入口から尾根筋迄一日中には飛ばせるやうな氣がするが、實際は二日かゝる。そんなに穩かな、よさそうな澤の奥に、どうして、あんなに悪い荒寥たるものがひそむかと、全く想像も及ばない。

これを地圖上から觀察するも、屈曲のない素直な一本の流れであつて、何等の奇も變化も、唯一の瀧でさ

北葛澤概念圖



1 : 50,000



へも記號の明示がない。約三分の二の上流點に露出せる岩巢が都合二ヶ所、僅かにマークされてゐるのみ、これが有名なる七釜の嶮である。

二里のこの澤を略、五つに區分できる。即ち高瀬川との合流點より約半里は明朗なる散步氣分。そこで俄然第一の釜と、第一の大瀑布にぶつかつて動きがとれなくなる。その瀑より上流約五丁計りの間が、この澤最大の惡場であつて、凄慘にしてむしろ鬼氣の迫るものがある。それを越すと再び晴々とした、美しい流れに出る。そこに東信會社の人々が安置したといふ山の神が、亭々たる川胡桃の大樹の下にある。この樹は群を抜いて高いから直ちに眼につく。こゝから、すぐ上を通つてゐる東信道に逃れることが出来る。

第一の大瀑から、こゝ迄は約七丁餘の道程であるが二本の支流が、何れも左岸から這入つてゐる。下流から數へて一ノ澤、二ノ澤と呼ばれてゐる。遙かに上流に至つて又左岸から一本落込むのが三ノ澤であつて、(しかし、この三ノ澤の名稱は自分勝手に命名であつ

て實名あるを知らず)これ以外、支流は一つもない。

一ノ澤と二ノ澤との間隔は約三丁程。この北葛は、元來七釜の嶮を以て有名だが上記の中七丁の間が、先づ澤の心臟部に當り、むしろ上流七釜の難場をしのぐ。

山の神以上、約半里強、谷は華麗、何の危険もなく水は涼々と清しく流れる。

そこに、東信小屋が建つ。左岸から這入る窪との合流點にある。寢具、食器、薪の備へがある。この谷を搜るには最もよろしき位置を占めてゐる。即ち源流よりするも、下流より溯行するも、丁度この小屋はその中央點に在るから、恰好な根據地となる譯である。

この澤の中流は、先づこゝでつきて、小屋より上流二丁程にして奥の惡場が展開する。里人のいふ七釜はこれである。そこに至る迄に、針金渡しを二度越へる。右岸東信道は、こゝで絶え、最奥の取入口が見へる。

針金橋とは、上下各一本の針金が、平行して澤を横

切るのみで、上なる一本に手をそへ、下なる一本の針金を踏んで、横這い。體であるくのである。(釣橋とはちがふ)

七ツ釜の最初の入口は釜であつて、左側より、すだれ狀の瀧が一本懸つてゐる。これより上流約六七丁程の間は、小さいが、瀧と、淵との連続になつて、幾度か高廻りを餘義なくされる。最後に左岸から突き出る一つのヒラを廻ると、そこから、私のいふ三ノ澤が這入り、源流の近くなつて、水のないゴロ／＼石原、雪溪に續いて、所謂源流の相を如實に示して遂に尾根筋に出てゐる。

七釜あたりから、右岸に残雪の片塊をチョイ／＼見るから、大分高く深く這入つた氣がする。

この澤は前記七釜を以て有名であるが、七釜は文字通りの數を表はすのではなく、ある多數の代數詞たる事が判る。即ち淵は上流のみでも十數個、下流の壘場を合すると三十近くもある。

釜は皆、必ず瀧と連絡してゐるから、この二つのも

のは一つのコンビをなしてゐる。

瀑も釜も、その最大のもの、下流最初のものである。瀑は凡そ二〇メートル、釜は紺碧の籃を湛へて廣大なる古井戸を窺く感がある。

この澤で最悪にして最も悲壯な感じを催すところは二ノ澤落口附近であらう。こゝ這入ると、耳はぐわんと高鳴り、氣持ちは上づつてしまつて、唯一途に速に逸脱を計る心で一杯になる。

この澤は登るよりも降るに樂である、溯行しては澤通しは、到底不可能だが、下るにはロープの外三ツ道具が揃つてをれば、何とか工夫はつく。切迫話れば、釜も瀧も滑り込む計りだ。幸な事には、谷を構成する岩石は皆、平滑な一枚岩の花崗石であるから、それは度胸一つで困難ではない。その反對に登るには滑つて手がつかないだらう。

山路は鐵橋の入口を左右に、各一本が奥に通じてゐる。極めて踏み心地よき、昇降の少ない小徑だが、左岸のが官道、これは尾入澤の方向に一度大迂回して、

遂に一ノ澤附近に達し、二ノ澤の瀧の上迄きて切れてゐる。手入れをせぬから、今日では随分荒れてゐる。右岸のは東信路であつて、兩方共、略同高度にある。笹平から一氣に約三四〇米を登り切ると、會社の落水管上部事務室が見へる。高瀬川發電所の眞上に當る。そこを右に、その等高線に沿つてずつと上流に迄延びてゐるから歩きよい。この徑は前述の小屋に迄達してゐる。小屋の上は會社の人々が中山と呼ぶ頂上に扁平な山形をもつ山が、すぐ眼につくからよく判る。

この小屋より上流、約二丁、取入口迄、小徑がのびてゐる。

以上を概括して、北葛は、上流と下流とに各一つの悪場の群を有するのみで他に難場はない。この小屋が丁度、澤の中心點をなしてゐる。難場は下流に於ても悪く、特に二ノ澤の落口附近を最とする約七丁の間降るに易く、登るに困難な澤である。

北葛澤の探検。八月廿三日から廿五日迄九二日半を費したが、實際は二日と見て、落口から尾根筋へ出ら

れると睨んだ。

第一日、高瀬川との合流點、鐵橋のすぐ下、左岸から澤へ下る切り拓き路がある。澤は美しいといふよりは、むしろ平凡な流れである。氣易い散歩氣分であることが出来る。二丁計りゆくと、會社のつくつた堰堤に突當る。苦もなく乗越して進む。水は清淺であるが絶えず徒渉をする。川柳が程よき風景を整へ、ところ／＼に盛り上つた砂丘が在り、野營キャンプによき張り場である。そうした川原が約半里近くも續くと、谷は俄に急迫し、岩は峙ち、明朗な谷が闇鬱となり、穩かな流れが急調となり、而してその光を洩さぬ暗い兩岸の大きいに迫る奥に一本の大瀑が、しぶきをあげて堂々と落ちてゐる。瀑は上下共、大きな釜狀をなして水は濃藍色を呈し底の知れぬ深さを見せてゐる。上の釜は右手から流れ入る水を湛え、幽暗な洞窟狀をなすが故に、光りはそこ迄は達かず、たゆたふ水は薄暗くして凄慘な感じを與へてゐる。そこから落口は開けて水は吹き出て瀑布になつて落ちてゐる。谷はこゝに極つて抜き

差しならぬ状態である。

この日は、午後から偵察の意味で這入つたのであるから、こゝであつさりといき退く。

八月廿五日。(一日を前後するが、記述の便宜上、廿四日の上流探検をあとに廻す)

澤は、この第一の瀑布を關門として、約七丁の間が最悪場であつて、別言すれば、一日はこの僅か七丁の距離を如何にして乗り切るかに懸つてゐるのである。

午前九時に、上流東信小屋を下流に向つて出立する。澤は暢々として綺麗だ、約二十丁の間、足は滞りなく運ぶ。一昨目下見を濟ませた第一の大瀑へ直降りて、澤筋を結びつけようとするのである。約半里を降つたと思ふ頃、右岸に鬱然たる大樹を發見する。これが川胡桃の樹である。根元に山の神が安置してあつた。茲から遙かに高く東信の見廻路へ逃げる事が出来る。このあたりに羚羊が多い。こゝを越すと山形が急に峻しくなり、兩岸は迫り岩が高く聳ち水音がせはしくなるから、瀧の近いのがすぐ想像される。最初に

小さな瀧と瀧とにぶつかる。苦もなく澤通しに越へた。ひき續き四つ計りの小瀧と釜とが連續して表はれる。敬遠して左側を高く捲き再び澤に降りる。この澤の特徴として獨立した瀧も淵も殆んどない。瀧のあるところ必ず釜に續く、釜があれば必ず又瀧を發見する事が出来る。見ると、行く手に又瀧が落ちてゐる。こゝ迄入り込むと、もう岩と水と瀑聲との重圍に墜ちて耳はぐわんと高鳴り、氣は上ずつて興奮を禁じ得ない。この瀧は容易に乗り越せぬからまた高廻りをする。随分上を捲いて遙かに高い水音を慕ひながら一つのヒラをへつると、忽然として二ノ澤が深く眼前に展開する。樹の幹に椅子恐るゝ覗いてみると、豊富な水量が猛烈な勢で落下してゐる。一段、二段、三段、四段、遙か上から一本水を噴いてゐる。白く光るものが瞬くから瀧であらう。直下に釜を湛へて一度たゆたひ更に二條の並行せる瀧となつて湍り、再び合して釜を作り、最後には一本の大瀑となり、谷を振はせて落ちて、又釜をつくり最終段は約一間計りの小瀧となつて

本流に合してゐる。その落口の險惡と凄愴とはむしろ本流を遙かに凌ぎ、妖氣の漂ふものがある。慄然として戦き惶れざるを得ない。獸の如く、樹から樹へ、草を倒し、岩角をかすめて愴愴としてこの重壓から脱れ出んことにあせる。谷はこのところに至つて本格的となり、最高調に達し、北葛澤の焦點をなす觀がある。ロープを使用して本流に降りる。見ると、下流で又行詰つてゐる。二ノ澤の水を合した本流は稍深く且急調になつてゐる。聾した耳と、重る樹葉の闇と、水沫の眞只中に蠢く吾等は專念に光を求めんとする思ひに、一途に唯谷を追つた。一つの暗い淵を通り過ると、兩岸が最も近迫し、殆んど相うつが如き狀を呈してゐる。覗くと、この澤唯一の廊下がこゝに始まつてゐるのであつた。一直線に約二十間、水は三尺の中を以て樋と迄縮り、滑かなる石床の上を速射砲のやうな勢で迅走してゐる。終始共に小さな釜である。手がつかぬ。三十メータのロープと捨て繩のみがこれを解決するが、捨て繩を持たず且つ先きの見通しのつかぬ自分は、思

案餘つて復もや高く左岸を廻る。足場が悪く、適當な逃げ口を發見するに幾度か空しき努力を費した。下り立つには三度計りロープを使つて苦もなく成功してゐるが、登るには、足場に確實性を缺いたり、岩計りで手掛りがなかつたり、立木の間隔が遠すぎて、背が足らず、甚しく困却した。漸く一路の活路を拓いて、上へ上へと懸命に逃げた。遂に約三〇〇米程も高くなつて心の中に求めてゐた官道を發見するに成功して、ほつとした。こんなに迄、高く上らぬと岩巢のため遮斷されて山をへつれなかつたのである。その官道を專念に急ぎ凡そ六七丁も歩いたと思ふときハタと一ノ澤に出合ふ。谷で云へば二ノ澤と一ノ澤とはヒラが一本突き出てゐる計りの近接であるのだが、山路では十五分計りもかゝつた。一ノ澤で晝食を攝つた。午後一時であつたから九時に小屋を出て、約卅丁の道程を四時間もかゝつた事になる。しかも無休の努力だ。これから先どれだけの時間を要するのかわ不明だから不安も多い。加ふるに午後の天は曇り出し、あせる心に一抹の

不安が漂ふ。

一ノ澤の落口は涼々たる美しい瀧となつて懸り、下は澄明な小さな釜を作つてゐる。この澤は元々、涸澤であつて、下流に近く水は浅く露出するが、途中伏流となり一度は切れてゐる。半分以上は無水、二ヶ所計り層々たる岩櫓がある。官道は澤のつくる源流に近く明かに髪をひけるが如くに通じてゐる。本流との合流點から一時間も溯れば澤はつきてしまふ。

さて一ノ澤は下り切つたが、先きの廊下迄はどうしてもゆけぬ、一つの淵と一つの瀧とは強固に飛び込むことにより通ることは出来たが、今眼前に表はれた瀧は手掛りがないのである。この澤の岩質は花崗岩と覺しく、何れも平滑にして皺がない。そして石には水苔があるから、手足共に滑つてどうにもならぬ。それだから登るに難く下るに容易い所以である。加ふるに瀧も釜も無数にあるが、規模は大きくないから、罷りちがへばロープを傳つて飛び込んでよい譯である。

今度は右岸を高廻りする。相當に高く上つて一つの

窪を乗り越すと、先きの廊下が脚下に表はれる。その先きはずぐ二ノ澤につゞき、廊下を境として上流下流に、二つの瀑群が點在してゐる。即ち二ノ澤を中心とせる瀧と釜との交錯、一ノ澤を中心とせる釜と瀧との群がそれである。そして丁度この廊下がその焦點をなしてゐる。

一ノ澤から下流は、一つの大きい釜をへて、すぐ第一目に遭遇した大瀑に接してゐる。あの洞窟狀の淵が明かに意識されて、水はこゝに逡巡^{タユク}つて油の如く濃い。岩が頭からのし懸り、樹葉が空を覆つてゐるのに加へて空が怪しいので、この淵は心を闇くする。釜の深さは浅いところで躋迄ある。最初見てをいた第一の大瀑は谷をゆすつてこの釜から落ちてゐた。この釜の上に二つの可愛い瀧が並行して落ちてゐる。あの幽暗な洞窟狀の釜を乗り切り更に一つの瀧を越へて、明るい空に首を出した吾等は、こゝで晴れやかな笑聲をあげた程陽氣にならざるを得なかつた。それは谷が急にひらけて明るくなつたせいでもあらうが、それより

も並行して落つるこの水の左側にある小瀧の奇妙な形を
一見した瞬間である。自分の想像は、その形から直ぐ大杉谷にある光りの瀧に移つた程餘裕があつた。滑かな石を滑り落ちた水は、大きな岩磐の自然に掘れた臼のやうな凹に陥入し、勢餘つて空間を凡そ四尺餘りも高く、丁度噴水のやうに放ね上り更に同じ空中を下に向つて水が自ら折れ飛んでゐる。緊張し切つたる心の機はこの瀧の放棄にあつて春の如く融けて終つた。午後四時を十分過ぎてゐた。これで完全に、鐵橋下の入口から、この澤の中央部に位置する東信小屋迄約半分道は探検した事になる。以上を總括して、この澤に關する限り谷の特別な美觀といふものはない。只僅かにこの約七丁計りの惡場が、俄然として單調を破つて本格的谷相をむき出してゐるのみ。又その僅かに七丁が、この澤の生命であり、北葛最難關を形成し、よき意味に於ても惡き意味に於ても、この谷を代表するものである。

八月廿四日。葛温泉を早立ちして十時に東信小屋に

這入つた。早飯を攝つて十一時、上流七釜に向つて出立する。

小屋より上流、約二丁計りのところに會社の取入口が右岸にある。小徑はこゝでブツツリ切れてゐる。そこで迄に二度の針金渡しによつて澤を高く横切り渡る。

七釜は此より初まる。丁度その七釜の入口に右岸から細流が平布して落ち美しい水簾を懸けてゐる。そして本流は復こゝも釜によつて始まつてゐる。釜は瀧につゞく、瀧は又釜となつてつきる。それを一々乗り越すと、亦同一状態で先きが展開する。少々のところは構はず押し通すが、行き詰ると高廻りを餘儀なくされる。常に左岸を捲く。以上二つの難場を越すと、あとは全く亂戰亂闘の形となり、瀧五、釜四と續くから復々高くへつる。特に大きい瀧も、驚く程の釜も見ないが、同じやうな高さや深さと大きさをもつ釜と瀧との交錯がいくつも連続して、上流へ上流へと知らざる間に吾等を導く。上下流を通じてこの澤には急湍とか奔走とか形容に値する水の姿態はどこにもない。それ

だから平凡にあらざれば破格、特に悪いか特によいかだけがあり、時には淀み時には逸走する千變萬化する谷の種々相はない譯である。

第四の釜の群にきて、左手の窪から水が潺湲として落ちてゐる。谷は漸く深くなつてゆく氣配がする。岩の影に汚れた残雪を發見する。又瀧をのぼると、四つの瀧と三つの釜とにあふ。その一々を捲くのだから相當に時間を喰ふ。しかし規模は下流の惡場に比して更に小さいから重壓にイラ／＼したり、心を暗くするやうなことはない。ハムマ、ピトンがあれば大いに助かるところである。そこを辛うじて越し澤に降り立つと右手からヒラが出てをり澤は一寸左に傾き、その奥に四間計りの瀧が落ちてゐる。最後の難場である。この瀧をのり切ると、私のいふ三ノ澤が近く右手から合する。あとは源流の相、即ち水は急に淺く、流れは小さくなり、ガラ／＼石原が、しばらく續いて雪溪となる。この雪溪を約一時間半許り(臆測)あるくと蓮華と北葛とを繋ぐあの人跡稀な尾根筋に出るのだらう。

自分は、最後の瀧から、三ノ澤(或は右俣か)を明かに意識しつゝ先きを見ずして引き返した。小屋からこゝ迄四時間半を費した。

雜件一束。

以上は私の探檢の概略である。即ち上流下流に各一群の惡場がある。それは非常に大物ではないが一丈から三丈位の瀧と、小さいが涉るに難き釜とが一組となつて續いてゐるため、澤通しを絶対に阻んでゐる。上流はそうでもないが、下流の惡場は高廻るには、ウンと上をへつる故時間を喰ふこと夥しい。二三ヶ所どうしても直接には通過不能の個所があるが、三ツ道具の併用によれば打開の道はある。何れも岩は平滑であるから、滑つて危いが、それだけ下るには條件がよいから、案外容易い氣がする。

元來、七釜は餘りにも有名であるが(こゝで登山者が一人死んでゐる)實際は下流の一ノ澤二ノ澤間の方が著しく峻しく、特に二ノ澤の落口附近は戰慄を覺へる。廊下は文字通り樋の如く、水深三尺、奔走する水

は脚を痛撃するから、水浅は或は腰あたり迄をも濡らすのではなからうか。二の澤はどうしても澤通しでは登れぬだらう。就中、最下流の釜と瀑とが最大の問題になる。

探検といふ文字は、この澤に對してはピッタリとくる。その惡さに對しても、まだ誰れ一人完全に這入つてをらぬため、何か好奇なものがそこに動く點からも更に人々の大仰な噂に對しても。

地圖は十分に信頼をおけぬ。あの數多い淵も瀧も、符號は一つもない。一ノ澤二ノ澤間は異外に近い。

さて、この澤を他の種々なる名高い澤と比較して、どれ程の位置に据えてよいかを貧しき經驗に徴して書いてをかう。

二ノ澤は棒小屋澤の落口によく肖てゐるが、凄味と規模はむしろこの方が稍優つていようか、荒寥凄惨の氣は谷として一流の下どころにあると考へる。淵は何れも小さいが無數に存在する。下流から第一にぶつかる谷の大きさは略、劍澤の落口の釜程ある。最大の瀑

は笛吹川、東澤に懸る釜の瀧に比較しようが巾がない。穂高の瀧谷澤はずつとスケールも大きく、惡さも眼立つが征けばゆける。しかしこの澤は小さくしてしかも押し通し得ぬところに特徴がある。一見膽を冷すやうな壯大さが無い。縮み上るやうな惡場もない。どうにかして行けるやうに思はれて實際はとも手がつかぬ。かういふのが反つて面倒な谷だ。これは下から登つた時の話しであるが、下降となるとつと簡單になるのは前述の通りである。不動、打込、秩父東澤、西澤、黒部東谷、棒小屋澤、團衛澤あたりよりは幾分かは悪い。唯一ヶ所にしては、團衛の最下流、川九里澤との出合にあるあの大きな岩壁も、オグラ谷のあの大きな淵も、西澤の相迫るあの大瀑もこちらにはない。近畿で云へば、大臺ヶ原の東澤、大杉谷は、谷全體の構成はむしろこれに優るが、惡さは劣ると見てよい。大杉の七釜は北葛よりは雄大な氣がする。本當の惡場は上流下流合して約十町餘の間に集つて、あとは平凡すぎる。唯廊下のみは、一寸他に類例なき程典型的なもの

だ。黒部、双六等とは水量や、谷巾や、水深や、水速等比較のしやうもないが、一支流としての澤を考へるとき、矢張り悪さといはんよりも、その困難さに於て

慥かに一流所に位すると見て差支ない。自分が這入つて苦しんだ谷はどうしても最負がつく。且、比較すべき他の多くの谷々とは記憶も已に薄らいであるから、その眞を詳述し捕捉し難いが、難場を多く持つ點ではこの澤を押してもよからうし、濁り澤は澤の恰好は全く異ふが近付けない點で北葛と同じやうに評價されてよい。コグラ谷、小黒部にも過ぎ、黒部上ノ廊下とは谷相が全く肖ぬ故比較し難いが、これにも稍過ぎるのではなからうか。一寸判断に惑ふ。唯何としても水が浅く、悪場が一ヶ所に片寄りすぎて、中流どころに山がなく、平凡すぎるから物足らぬところが多分にある。それにしても、高瀬谷に住む人には、この谷を過大に評價しすぎるのにも一理はある。谷の中心點へは悪戦苦闘をせぬと容易く近づけぬこと、通しでは歩けぬこと、這入つた人がないから、這入れぬものとして

省みないこと、得にもならぬのに這入つてみようとする人は無論なからうから、この谷は處女谷として今日迄ものこつたのであらう。

谷の構造が小さいから、雄大性に於て遜色があり、その上、鬱蒼たる原始の林がないから、春の新緑、秋の紅葉の美觀にも乏しく、且岩壁が屏風の如く高聳してをらぬから、壮大嚴肅味がなく、岩に激して水沫を高くあげて逸走する激湍流水の見るべき變化がないから、谷は全體として變幻端貌の壯觀に缺けるのみならず、幽邃閑雅の趣が全く無い。奇岩秀峰の峙つものもなく、美しい花が咲き亂れて水に映發するといふやうな媚態もなく、むしろ素莫たる老翁の如き靜さが感ぜられる。さればこれ程よい綺麗な水もちなながら、風景にしても上位に置く譯には參らず、昔から今日迄人の這入らなかつた理由の一つもこんなところにもあるかと肯ける。特に雄大とか豪壯とか、怪異とか、又華麗とかいへば、早くから世人の眼を惹いてをつたのはあらうが、そんなものは一つも持たずして且一部分

に獐猛に悪いところが片寄り過ぎて、しかもそれを權威する道具建てが小じんまりしてゐるから顧みられなかつた所以ではなからうか。しかも又これ程里に近くして、これ程人間放れのしてゐる谷も稀であらう。所詮は、澤としては第二流どころであるが、その荒涼として寂寞たるこの谷は、蓮華、烏帽子を貫く不人氣な尾根筋と共に永遠に寂しく不人氣に残るのではなからうか。(十四年九月二日)

補説。

この概念圖は、陸測を其儘寫生したのだが、自分の踏破した記憶では、一ノ澤と二ノ澤との距離は、もつとウンと近い。そして二ノ澤と小屋との間隔は地圖の約四倍位違ひ筈である。

小屋より上流に二ヶ所の岩巢が描かれてあるが、七釜あたりに谷が迫つて岩壁が立つてゐるが、決して大きなものではない。

二つの瀧の群は、下流に於て七、上流に於て五の数を以て、こゝに表示してをいたが、實際は、もつと共に多く、

北 葛 澤 (西岡)

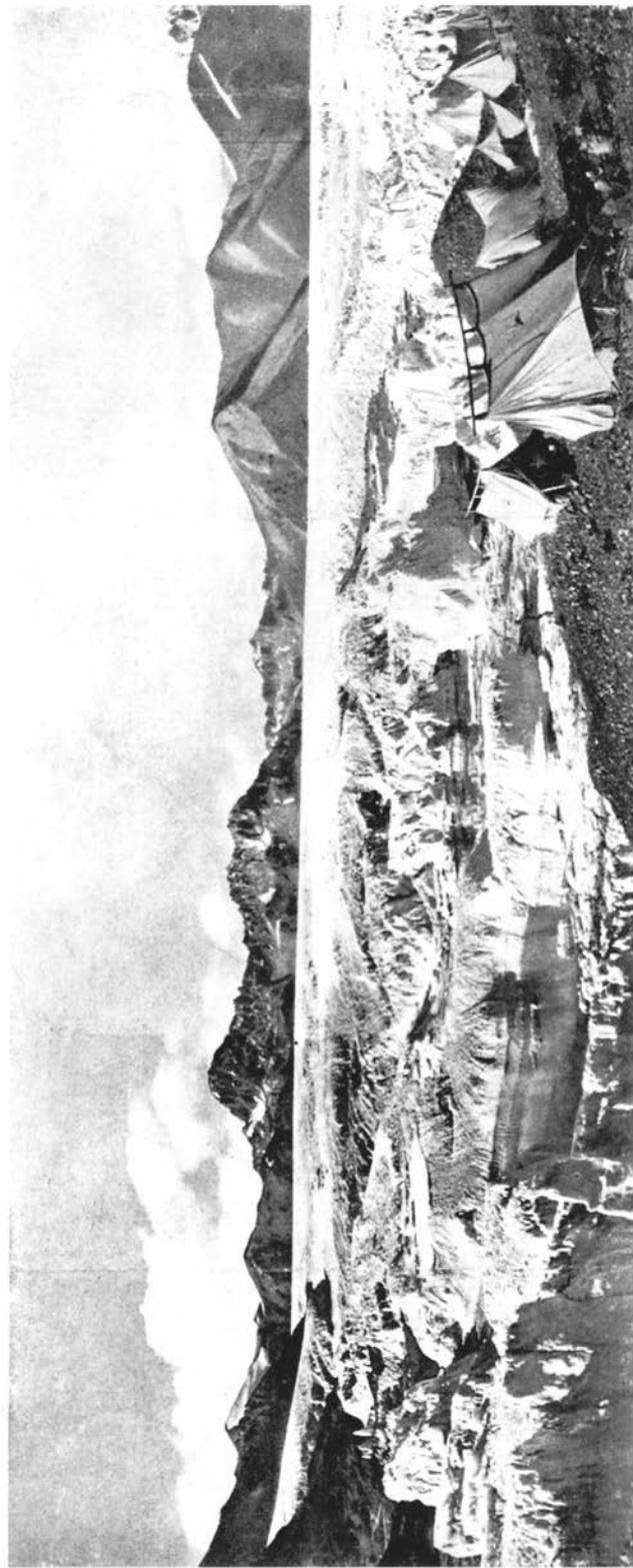
しかも瀧の觀念を以てするには稍少いものである。一例をあぐれば、瀧澤にかゝる、一ノ澤二ノ澤又不動澤の不動の瀑よりは遙かに小さく、名付ける程も大きくはないのである。唯二ノ澤の瀑と、本流最下流の瀑は一寸大きい。

文中の里程は、永く感じが重であるから、實際には、多少の距離の差があるだらう。

瀧の高さは目測によるの外感じが多分に働いてゐるから、高き四、五間と書いたのはむしろ六、七間もあらうか。其の後一、二の山へ這入つてから思ひ直してそうみるのが適當と思つた。



フィリッポ・デ・フィリッピ (1869—1938)



リモ氷河に於ける第三キャンプ(左は北支流)

— „Himalaya, Karakoram & Eastern Turkestan (1913—1914)” —

フィリップ・デ・フィリップ

(Filippo De Filippi, 1869—1938)

オーレル・スタイン

吉澤 一郎 譯

(Alpine Journal Vol. LI No. 259 Nov. 1939)

フィリップ・デ・フィリップの如く偉大な生涯を持つた人に對し、正しい批判を爲すといふ事は、その各種の部門に於ける夫々の輝しい業績を正確に評價し、

又その総合的な眞價を誤りなく判断し得る人々にしてはじめて可能な仕事であつて、私如きは全く其の資格のないものと云つて差支へないのである。然し乍らアルパイン・ジャーナルの編者が、私に彼に關する追憶の辭を依頼して來た時には、それが如何に不完全なものとなる心配があつたとしても、これを無下に斷るといふ事は出来なかつた。といふのは、二人の間には地理學其の他への共通な關心事があり、之によつて二人の間は固く結ばれてゐたのであるから、その友情への

私の深い感謝のしるしとしても役立つ事にならうと思つたからである。

私は印度に職を奉じてゐる間に、デ・フィリップが科學的探検者として一大成功を收めた、印度と中央亞細亞との間に横はる高山地域の一部に、親しく足を踏み入れる様になり、之が共通な關心事への主たる導因となつたものである。彼が結局あの巨大なるカラコラム山脈に己れの地理學的勞作の主たる舞臺を求めたといふのは、疑ひもなくサヴォイから繼承された高き山々への熱愛と、青年時代に於けるアルプス的環境によつて育成せられた結果である。科學的探究に於ける多種多様の成果、アブルツチ侯のあの登山遠征に關聯し

て得た諸經驗、そして又夥しい功績を膺し得た異常な組織力、之等の體驗を得、且つその威力を發揮したのは實に此のカラコラムであつたのである。

私の彼に對する讚仰の心は、彼が贏ち得たその偉大なる山岳地域に於ける業績の困難さを、自ら體驗する事によつて益々大きなものとなつて行つた。稀に見る彼の視野の廣さは、その注意を溪谷の中に隠れた狭小な社會にまでも拂はしめるに至つた。其處にある文化と宗教はカシミールと關係を持つてゐる。その遺物と歴史的勞作は、長い年月の間、私には親しいものとなつて來てゐる。吾々の友情は此處に發し、その恩典を私は二十八年間享受して來たのである。

私がフロレンスの上のセッティニャーノにある、あのデ・フィリップの好ましい家庭を訪問した事は、今だに愉快な追憶として残つてゐる。彼の話はいつも生々として鋭く且つ激動的であつたがため、現在の仕事或は將來の計畫等の興味ある問題から、話を、彼の個人的過去を持つて行くなどは、なかなか容易な事で

はなかつた。然し幸ひにもデ・フィリップは、アブルツチ侯が一八九七年にアラスカへ遠征して、セント・エライアス(一八〇〇八呎)峯に初登頂を行つた時以來、侯の遠征には殆んど参加して居り、其の都度優れた觀察眼と筆力とを以てそれ等の遠征を敘述してゐるので、吾々は彼自身の活動と、廣範圍に亘る彼の天稟とを瞭りと窺ひ知る事が出来るのである。

アブルツチ侯は、其の總ての遠征に際して、隊員の選擇に於て非凡な才能を示してゐたが、セント・エライアス峯の登攀に、當時既に登山家として令名のあつた、若き外科の教授補を参加せしめた事は、此の上ない幸運であつた。デ・フィリップは、侯の遠征記を敘するに當つて、個人的な感情に關する事は總て極力之を抑制してゐるが、然し、其處には其の隊長に對する献身的な敬愛の情が溢れてゐる。其處に滲み出てゐる感情こそは、アブルツチ侯の不變の友情に對する、正常なる返禮である。デ・フィリップは其の後、ヒマラヤ探検に關し異常なる關心を持つてゐたが、それによ

ると、アブルツチ侯の最初の計畫が、ナンガ・バルバットに向つて居たといふ事がわかる。之は實に興味深い事である。

エライアス峯への遠征は、純然たる登山のみの爲めのものである事が公表されてゐた。然し其の優れた報告書 (A. J. 19, 116 sqq) を見ると、遠隔な、而も踏査不充分的地域に於ては、單に登山のみの爲めにも、廣範圍の知識が如何に必要であるかを、著者がよく吞込んでゐたのを知る事が出来る。それにはアラスカの海岸山脈が、氷河時代に於けるアルプスと同じ状態にある事實に對する特別な注意が喚起されてゐる。こゝにも他の總ての遠征記録の場合と同様に、デ・フィリップの筆で彼の歴史的判斷に對する鋭い感覺によつて、先行者の探検に關する詳細な説明が行はれてゐる。又その抜目なき科學的觀察以外に、彼は一個の藝術家としての手腕を以て、その地の景觀を如實に描いた繪畫を挿入してゐるのを見る。その上、裝備、糧食に關する精細な事項が記録され、又醫療方面の事も細心の注意

を以て書かれてゐるのは、瞭らかに、將來の計畫に對する指導書たらしめんとする意圖の許に、用意されたものである事を證明するものである。又著者が二十代の若さにあつてその青年隊長たるアブルツチ侯の偉業に共力した、總ての人々に對して賞讃の辭を呈してゐる共を見る。

エライアス峯遠征報告の英譯版が出る頃、デ・フィリップはボロニヤ大學に於ける外科手術科の椅子を離れて、化學的生物學の研究の爲めに、羅馬大學の病理學研究所へ移つた。其の後間もなく彼は、ブロウニングと親交あり、且つ自らも英詩をよくするカロリーネ・フィツゲラルド嬢と結婚した。琴瑟相和する事十年、不幸にしてカロリーネ夫人は長き病床から遂に再びたつ能はざる事となつた。デ・フィリップがその最愛の妻と中央亞細亞に長途の旅行を爲し、コーカサスから露領トルキスタンに出たのは此の時代の最初の頃であつた。此の旅行から彼はブーハラ刺繡の夥しい見事な標本を齎して來て、其の幸福な旅行の憶ひ出を

こめる、傳說的東方の技工の手になる他の産物と共にセッティニャーノにある彼の別荘を飾つた。

一九〇六年のアブルツチ侯に率ひられたルウェンゾリ遠征に關する、デ・フライリッピの報告書が刊行されたのは一九〇八年の事であつた。此の行に於てアブルツチ侯は總ての高峯の登攀に成功し、主たる山脈の全域に亘る測量を、苦心の末完成した。デ・フライリッピは此の偉大な業績に參畫する事は出来なかつたが、遠征隊員の日誌並びに覚え書によつて其の記録を整理する様依頼せられたのである。隊員の大部分は(キャヴァリエレ・セラを含む)彼とエライアス行を共にした者であつた。(A. J. 23, 242, 310, G. J. February, 1907) デ・フライリッピの、記者として或は科學的觀察者としての稀に見る筆力は、與へられた此等の資料によつて實に見事な報告書を作り上げたのであつた。彼は又シニョール・セラの美事な寫眞に依り、諸溪谷の幻想的な植物と、かの珍奇な熱帯山地の景觀を詳細に顯現する事が出来た。その遠征にポーターとして傭はれた土

人の種々な種族に關する覚え書は、彼の過去の人種に對する人間的興味、並びに人類學的研究の凡庸ならざる事を證明してゐるものである。而して廣大なる英領ウガンダ地方に住む、土人の福祉と開化に對する英國殖民地統治の成功に對し、正當なる批判の行はれてゐるのを發見する事が出来るのである。

其の翌年、彼はアブルツチ侯のカラコラム大遠征に参加した。デ・フライリッピはアブルツチが率ひた最大のこの遠征によつて、浩瀚な記録を残したが(A. J. 25, 107) 自分自身の活動に關しては極めて僅かの行數をしかとつてゐない。然し乍ら現地へ至るに必要な總ての勞苦多き下準備、或は現地に於ける作業に於て、彼こそは侯にとつて最も不可欠な人物であつたといふ事實を如實に示してゐる。彼の敏速な、而も正確な特異な觀察力、及びそれ等を照合記録する際にとつた彼の細心の注意は、カシミールの通過とインダス溪谷並びにバルティスタンの記述に捧げた、第二章から第九章までの完璧な記録の中に最も明瞭に顯はれてゐ

る。私がカシミールに親しみを持ち、その好古的或は地形學的仕事に長い間従事してゐたのは、大部分此の地であつた。私は今、デ・フィリップの書いた前記の諸章を讀んで、かの大溪谷の記述の正確さ、地理學的特質の光輝ある解剖、人類學或はその住民の特徴乃至は歴史的過去に對する細心の注意に、深き感動を受けざるを得なかつた。

デ・フィリップが一九一三年から一四年にかけて行つたカシミールからバルティスタン及びラダークを経て、かのカラコラムと崑崙山脈の相會する高峻にして冷酷無情の、山岳地帯に於ける科學的大遠征の計畫を心に描いたのは、アブルツ候の此の遠征報告を出版する準備中の事であつた。今日までに斯くの如き大規模な科學的探究を目的とし、他に比類なき困難を伴ふ一地方の自然地理學或は人文地理學に關する多方面に亘る調査を行つた、大陸横斷の遠征隊はなかつた事と思ふ。此の遠征が大成功を収めた所以のものは、實にその計畫の用意周到さにあつた。此の準備が完成され

たのは一九一二年の夏の終りの頃であつて、最愛の伴侶たる妻を失つた時分である。彼は此の打撃にも決して怯む事なく、異常なる勇氣を以て、必要にして且つ勞苦多き總ての用意と準備とを完了し、一ヶ年をも經過せぬ内にその大遠征に出發する事が出來た。

一九〇九年の遠征より得た經驗を以て、デ・フィリップは、それまで非常に論議されてゐた地球物理學の問題の多様性を知り、該問題の解決には、インダス河の上部溪谷と、中央亞細亞との間の障壁となつてゐる高山地域の系統的な觀察が、非帶に重要な役割を演づるものである事を悟るに至つた。前回の旅行記録によるとカラコラムの東端並びにそこに在る未知の諸氷河に、特別な興味を惹く踏査地域の殘されてゐる事がわかる。正確な資料を蒐集するには優れた經驗者を數多く必要とした。幸ひにも伊太利政府はデ・フィリップの此の遠征に對して大いなる援助を與へたが爲めに、彼は各大學或は其の他の公共機關から夫々の部門を專攻する八人の令名ある科學者を參加せしめる事が出來

た。又印度政府は地形學的の踏査を目的として四人の専門家を彼の爲めに派遣する事となつた。

デ・フイリツビが此の遠征に就て書いた明徹精細な記録 (A. I. 27, 453) を讀む時、吾々は其の遠征を完成せしめた無缺な先慮や精力乃至は手腕に對して、實際讃仰の念の禁じ能はぬものがある。世話をやかねばならぬ歐洲人が比較的多かつた事、一年半に亘る遠征中の各季節に於て遭遇せねばならぬ種々の氣候状態として異常な生活條件の許に、長期に亘る努力を必要とした所の科學的な勞作を行はねばならぬ、荒寥たる高山地域に於ける地方的物資の皆無なる事等を慮つてあつたため、一般的糧食並びにその補給品乃至は裝備品等の運搬のみを以つてしても、大きな問題となつてゐたのである。デ・フイリツビが軽い冗談交りの謙遜さを以て、自分は其の遠征に於て丁度キャラヴァン・パス (隊商の先導者) の親方を務めた様なものであつたといふ事を、屢々口にしてゐたのも洵に故なき事ではなかつたと思ふ。

一九一三年から一四年にかけての秋から冬は、バルティスタン及びラダークに於ける科學的な問題の研究に費され、其の間に特に選擇された方面へ夫々踏査隊が派遣せられてゐた。デ・フイリツビ自身は、高地溪谷の苛酷な氣候状態を考慮して、彼に最も適した方面へと赴く事となつた。彼に課された仕事は、それ等の溪谷に散在する各種の興味ある社會、即ちバルティヤダードや西藏人達に關する人類學的、社會學的研究にあつたが、それに對して適當な機會を與へるために、身體的な勞苦を輕減せしめられる様な事は決してなかつた。

私は、その遠征に於ける最初の部分を取扱つてゐる各章の中に見出すのであるが、脊負ひきれぬ程の責任を持ちながら、而も人種的に非常に差異のある社會に對し、或はそれ等の經濟生活乃至は歴史に對する、綿密な研究をなすべき餘裕を、彼が持つてゐたといふ事をつくづく不思議に思ふ。此等の問題が如何に彼に異常な興味を喚起したかは、バルティスタン及びラダ

一クの住民の人種的特質、習慣、傳統乃至は文化等に對して向けられた、細心な觀察による夥しい研究によつて之を知る事が出来る。此等の山岳地域をカシミール、西藏乃至はタリム盆地等と關聯せしめる、過去及び現在の關係に對して行はれた嚴正な解剖は、彼の地理學上の主協力者たるダイネリイ教授が供給した貴重な資料と共に、遠征の一般的記録の中に於ても、特に此の部分をして東洋研究者に對し重要な知識の源泉たらしめてゐるのである。

ラダークにあつてデ・フィリップは少數の住民と乏しい經濟的資源に反比例して夥しく存在する、神社佛閣其の他の宗教的な記念物により反映された、西藏の宗教、祭儀、藝術等の多様性に就いていたく興味を惹かれた。其の後、彼が、以下に詳述する同國人P・イッポリト・デンデリイの重要な、而も長期間忘却の内にあつた記録に對して捧げた、最上の學者的研究は此處に淵源を持つてゐるのであつた。

一九一四年五月の半ば頃、印度測量局から派遣され

フィリップ・デ・フィリップ (吉澤)

た一隊によつて強補された全遠征隊は、その探檢計畫の最も重要な最も困難な舞臺に向つてラダークのレーを出發した。高地に於て、且つ適當な時期に於て、三月月に亘る大規模な探檢隊に必要な人物、物資そして運輸機關等を集合せしめるには、デ・フィリップの既に證明済みの組織能力の總てを絶對に必要としたのであつた。一行の根據地はカラコラム峠の南側、海拔一三、六〇〇呎のデブサン高原に建設された。其處を中心としてその高原及び二四、〇〇〇呎以上に及ぶ山々を含む一大山岳地帯の、凡ゆる自然現象を觀察し調査する事となつた。其處は北極地方と同様に人及び動物に對する物資の全く缺除してゐる地域である。この遠征は、斯る大事業の完成にとつて、隊長の細心な計畫と優秀な能力、並びに全協力者の献身的努力が、如何に必要であるかを示す、最高なる模範として永久に残る。

そこに得られた收獲は、その大探檢者の豫想通り夥しくもあり、且つ重要なものでもあつた。踏査の結果

夫マインダス及びクリムの兩大河に流入するシャイヨ
 ー、並びにヤルカンド兩川の水源を決定する事が出来
 た。此等の河川は廣く分布された水系地域に所屬して
 いるが、而もその主たる源流は共通な大リモ氷河の
 支流から出てゐるものである事がわかつた。遠征隊は
 最初ヤルカンド河の主支流がシャクスガム溪谷にある
 ものとし、それから幾多の注目すべき發見をなしてゐ
 る。デ・フィリップは其の記録書の中に於て、遠征の
 成果は全く總ての彼の協力者達（伊太利人、英國人及
 印度人）並びにバルティヤラダキイ人夫等の忍苦の集
 積によるものである事を、注意深い筆を以て述べてゐ
 る。然し乍らあの廣大なリモ氷河上に於ける先驅的な
 業績が、クルマイエルから伴つて來た老アルパイ
 ン・ガイド、ブテガの適切な助力を持つたデ・フィリ
 ッピ自身のものである事は瞭らかである。

一九一四年の、かの世界大戰勃發の最初の通報が、
 高地に於ける踏査を完了し、數週間に亘る分業を終え
 再びデブサン高原に集合したその時に、はじめて遠征

隊に到達したといふ事は、洵に幸運であつたと云はな
 ければならない。同隊内の五名の伊太利人は歸國の
 止むなきに至つたが、デ・フィリップと二人の同胞並
 びに印度測量局からのパーティは、ヤルカンド河の溪
 谷に沿ひ且つそれを下つて支那トルキスタンの平原に
 出るといふ踏査計畫を續行する事が出来た。最後の重
 量分析及び測地學的調査を行つたカシユガルから、
 デ・フィリップと伊太利並びに英國の同僚は露領を通
 過して夫々歸國の途に就いた。彼は總ての記録と他の
 必要な資料とを、無事に伊太利へ持ち歸へる事が出来
 た。彼が止むを得ずタシユケンドに残さねばならなかつた
 夥しい精巧器具類の總てが、最後に完全なまゝに
 一九二五年ソヴェイト當局者の手によつて彼の許に
 送られた事は、彼のためには最上の悦びとなつたので
 ある。

此の記念すべき遠征の齎し來つた科學的な成果は、
 その活動範圍の廣大さと、その成就された仕事の大き
 さとに全く比例して、偉大、且つ重要なものであつ

た。然しデ・フィリップの歸國後數ヶ月にして伊太利が參加した大戦、否それにも増してその經濟的影響は、爾後の仕事の完成に一大障礙となつて現はれて來た。その價値に比適する規模に於て之を組立て、莫大な費用を要する、大著述の刊行に必要な、財的手段を獲得する爲めには、數年に亘る他事に身を投じなければならなかつた。彼は、其の協力者達に、社會一般から正當に認められた勞作の結果を見ろといふ満足と與へる事を、彼自身の個人的な責任であるとしてその出版に努力した。

彼は個人的にシニョール・ムッソリーニに頼み込み、その力によつて伊太利政府より必要な援助を得、漸く所期の目的を達成する事が出來た。十六卷からなるクオートウ版の“*Relazioni Scientifiche*”が斯くして出版される事となつたが、その大部分は、同遠征隊に參加した大學者ダイネリイ教授によつて蒐められた、豊富な地理學的、並びに地質學的な研究によつて占められ、該遠征の好個の優れた記念的記録となつてゐ

る。その完成は此の偉大なる遠征隊長の晩年を、光榮あるものとなしたが、之より以前、彼の功績は英國側よりして公式に認められ、一九一六年には已に印度帝國のナイト・コマンドーといふ稱號をうけてゐる。一九三一年には伊太利での最初の最高科學賞を貰つた。又彼がヴァティカン學士院並びに王立伊太利學士院に屬し、兩者の終身會員となつてゐた事も特記しなければならぬ。英國山岳會の名譽會員に推された時に（其の後長きに亘り彼はこゝのメンバーの一人であつた）彼は此の名譽に對し非常な欣びを感じてゐたといふ事である。

伊太利の大戦參加當初、彼は醫療機關を監督する爲め陸軍中佐に補された。其の後、一九一七年の末頃となつて彼は英國に派遣され、其處で伊太利事情の紹介と宣傳方面を指導する事となつた。英國と個人的に種々な關係を持つてゐた彼にとつて、此の新しい任務は實にうつつけのものであつたのである。

休戦となつたが彼の重い任務は一向輕くはならな

つた。而もその時、彼は伊太利海軍將校であつた最愛の弟を喪ふに至りその痛手は大きかつた。其の死は實に悲劇であつた。彼は大戰中身に一ヶ所の傷も負はず最後まで無事であつたが、彼の巡洋艦がダルマチャ沖に來た時、一敷設水雷に觸れて沈没してしまつた。その時彼は、水泳を知らぬ一水兵に身分の救命帶を與へ自分は遂にその犠牲となつて溺死してしまつたのである。デ・フィリップは、弟の夫人並びにその二人の若い娘達の爲めに明るい家庭を提供したが、それは、羅馬の混雜と喧騒を避け、彼がその優れた文庫と、東方の美術や手藝品と共に、フロレンスの上にあるセツティニャーノの美しい古莊ラ・カッポンチーナに引移つた直後の事であつた。英國或は其の他の國々からの友人に對して彼が其處で供した歡待は、それを享けたものゝ心に永久に忘れ得ぬ追憶として残つてゐる。

戦後彼は、その最後のそして最も偉大であつた勞苦を整理し、且つその科學的成果を世に送つたが、その勞苦にも拘らず、彼は西藏及び中央アラビヤと云つた

全く異つた方面への新しい遠征踏査を計畫してゐたのであつた。然し此等の計畫への障礙が全く乗り切り得ざるものとわかつた時に、彼の鋭い歴史的感情は西藏に關する最初の全體的、且つ凡ゆる點よりして異常な精確さを持つ記述に向けられる事となつた。西藏に關する事項は傳道の爲めに西藏に旅行した(一七二—二九)ピストニアの神父イッポリト・デシデリーの記録の中に包含されてゐる。デ・フィリップは彼が踏査した地域に於ける先驅者達の覺え書に對し、入念なといふよりは寧ろ殆ど熱愛的な關心を注いだのであつた。不思議にも一世紀半といふもの全く忘れ去られて居り、その發見後も完全には研究されてゐなかつたデシデリーの記録は、ラダークに於て得た西藏の文化と生活に對する魅惑的印象を享けた後のデ・フィリップに對し、非常な興味を喚び起さしめる事となつた。一九二四年、それまでは部分的にしか知られてゐなかつたデシデリーの記録の完全な英譯を出す許りとなつてゐた時、ウェッセルス神父が『Early Jesuit Missions

In Central Asia”といふ書物を出版したため、デシ德里イには前記の他に尙二つの手記のある事がわかつた。仍で彼が、前文と此等の追加資料とを詳細に照合し、それが完了まで自著の出版を延期したといふ事は、實に彼の嚴正なる學者としての完全さを示す特徴と云はなければならぬ。斯くして豊富な、而も非常に價値ある註釋附きの第一版は遂に一九三一年になつて出版されたが、之は西藏の傳承的文化、宗教並びにその社會組織に關する貴重な研究書として第一流のものとなつてゐる。改訂第二版は一九三七年に發行された。“An Account of Tibet. The Travels of Ippolito Desideri of Pistoia, S. J. 1712—29. G. Routledge & Sons, London”) 附録にある詳細な文獻紹介のみを以てしても西藏並びにその物教文明の總ての研究者にとつて缺く事の出来ない貴重な勞作たるを失はない。然し此の偉大なる探検者の歴史的地理學に於て示された廣い關心は、デシ德里イと西藏のみに限られてゐなかつた。彼は又その友ルイギ・フォスコロー・ベ

フィリップ・デ・フィリップ (吉澤)

ネデッティがあゝの不朽なマルコ・ポーロの旅行記を出版するに際して、多大な援助を與へ、且つ之を勵ました。此の事から又デ・フィリップは一九三二年に、最初ヴェニス政府當局者によつて一五五〇年から五九〇年の間に出版されたラムシオの偉作 “Raccolta di Navigazioni e Viaggi” の精確な解説版を出させる様になつたのである。それから彼は、吾々に中世に於ける世界の知識を與へて呉れた多くの先驅的伊太利人旅行者の記録を、研究のため或は教養ある讀者のため、近づき易くするといふ計畫を樹てた。目指した目的は丁度、英國に於てその探検の歴史が、ハクルイトの有名な “Navigations” 及びブルチャスの “Hakhyt Poshmunus” 等と、又引續きそれに對する新版が出で、次第に明らかとなつて行つたのと、全く同様なものであつたのである。デ・フィリップは、英國で云へば丁度ハクルイト協會の理想的な會長とも云へやう。然しその計畫が實際に價値あるものとして採り上げられるに至つたとしても、彼が手を下し得たのは最初

1107

の間だけであつたと思ふ。何となれば一九三四年には既に恐ろしい病氣の徴候が現れて来て、宿望の活動に悲しむべき制限を課してしまつたからである。醫者として彼は、自分の病氣の不洽なる事を知つてゐた。然し彼は性來の堅忍不拔な精神を以て之に對抗した。彼には仕事のない生活といふものに堪へる事が出来なかつたのである。そのために彼は世の中の爲め少しでもその生命を延長しやうと凡ゆる注意を怠らなかつた。

幸ひにも自然が、その矮少な體軀にも拘らず、彼に異常な體力を與へてゐる間、彼は身體的な訓練の必要を感じなかつた。斯くして彼はグレンソニー・サン・チャンにある、かねて懐れてゐた夏の保養地からモンテ・ローザを眺めた時に、假令山に近寄る事、或は單なるその山麓での散歩さへもが遮られてゐたとしても、充分にその大景觀を愉しむ事が出来たのである。

デ・フィリップの個性に對する強い信念は、生活上の自分の現實な姿に對して、完全な自由を要求してゐた。然し彼の現實主義には、人間性に對する深い同情

と、虚偽、僞信或は自己追求から遁れやうとしてゐる人々に對する、大きな寛容さがあつた。吾々の混亂した世界に於ける種々な出來事を、眞正な歴史學徒の嚴正な精神を以て判斷してゐた彼は、決して時代の思想に左右されはしなかつた。斯くして彼は幸運にも彼の友情を贏ち得た人々と、假令政治的な事件や其の他の事情で、兩者の間が分離されてゐた時に於いても、さういふ人々との間の親交關係は決して變る事がなかつた。彼は多忙なその勞作の間にも、常にその親友に對して誠實な、而も熱心な文通をば忘れてはゐなかつたのである。

その夥しい友人等の、仕事や計畫に對する彼の關心は、晩年になつて心ならずも實際活動からは退いてゐたが、そんな理由で、影を秘めるやうなものではなかつた。彼の周圍にあつた友人等は、今更の様にデ・フィリップの死によつて出來た、自分等の生活の間隙を感じないでは居られなかつた。痛ましい苦痛もなく彼は安らかに死んで行つた。彼はアオスタ溪谷の別荘

に一夏を過した後、アルプスの榮光に充ちた景觀を愉しみながら、悠くりと家郷を目指し、途々マギオーレ湖畔の高みから、多彩な丘や湖や大空を、數日に亘つて眺める事が出来た。一九三八年九月二十三日、フロレンスの秋の陽を一杯にうけたその家に於て、彼は靜かに最後の息をひきとつて行つた。彼を知り、彼を

愛する者にとつて、彼の死は餘りにも慌しかつた。然し彼の生涯をかけての偉業は爲し遂げられた。其の功績は人が地球の問題を研究し、その山々への高みに心を惹かれて行く限り、永遠に、偉大なるものとして遺されて行く事であらう。

故人河野齡藏氏を語る

小 島 鳥 水

河野齡藏氏逝去の報を聞いて、私は信州の山中で目標になる大木が、俄かに倒れたやうな地響きを、心頭感じた。この大木は老木ではあつたが、枯木や朽木ではなかつた。同じ明治期の登山草分け時代に人と爲つたおかげで、私は河野氏とは、松本市に於いて、又は東京に於いて、僅か数回の面晤に過ぎなかつたが、精神的親身が繋がつてゐるやうに思はれた。今の私は人生の初冬期に入つて、數多からぬ友人が、次第に凋落するのを、面のあたりに見てゐることは、堪まらなく寂びしい。

私が始めて河野氏と相識るやうになつた動機は、明治三十五年槍ヶ岳登山の年に、山崎直方氏が、大蓮華山に登られ、雪倉岳のカアル、北俣澤附近絶壁の氷河

擦痕に就いて、東京地質學會に講演せられたときの氷河問題に關してである。同じ年に、矢部吉禎氏が、高山植物採集に、白馬岳に登られ、植物上より觀た氷河觀を物語られた記事が、新聞に載せられたが、爾後私は氷河や、萬年雪の探究と研究に年々熱度が昂くなつた。

當時は氷河と言へば、白馬岳が先づ第一に連想される程で、白馬は高山植物の第一寶庫であると共に、明治中期及び以後に於ける氷河問題の發祥地であつた。そして白馬岳の萬年雪風景を、始めて世に紹介したのは、信州の博物學者、河野齡藏氏であることを知つて同氏に書面を以て教へを乞ふたのが實際の始まりである。

河野氏は、明治三十一年八月十五日、友人と共に、この山に登られて、その登山記を三十二年六月頃の「信濃教育會雜誌」に載せられたが、その雜誌が、手許に保存されてゐないといふことで、舊稿の寫しを、私に惠送された。その内氷河とおぼしき部分に關する記述を抜萃すると、

登ること四里許にして一の廣き溪洞に出づ、溪は一里餘に亘り、深幾丈なるを知らず、悉く白雪を以て埋めたり、積れる雪は千古消ゆることなく、結びて氷をなし、表面波紋を現せり、大なる岩石の岬より落つるもの、何時しか此氷河を迂り下りて、思はぬ所に横はるを見る。

これは白馬尻の大雪溪のことであるが、ともかくも河野氏は大膽に、氷河といふ名詞を使用し、側堆石狀の墜石を暗示されたのである。

次いで明治三十三年五月の「植物學雜誌」に、河野氏は白馬岳植物採集記を載せられ、三十四年長野師範學校で、地文學を講ぜられた際、氷河の講話には、白

馬岳を例に引いて、氷河や終堆石を説かれたさうであるし、又今日謂ふところの氷河の擦痕も、白馬岳に於いて氏が初めて發見されたのださうである。この氷河の擦痕石は、同氏自ら寫眞に撮られ、その崖上に、植物採集罎を背に掛けた若い人が憩つてゐるところが寫され、「白馬山水河の擦痕」と印刷されて、繪ハガキとして汎く行はれた。

當時、高山氷河問題の探求に最も熱心であつたのは、山崎教授は別格として、登山者中では、恐らく辻村太郎氏と私ぐらゐであつたらう、その他にも、仙丈岳のカアルを早く踏査紹介された辻本満丸氏もゐられた。その後、辻村氏は地形學者としても、氷河學者としても、高名になり、最早單なる登山家ではなくなつたが、舊態依然たる私は、斯の學問に何等の教養なきにも係はらず、一個の老措大として、未だにこの問題に執著してゐる。河野氏は、必ずしも地形學者ではないが、その著「高山研究」に於て、我國の氷河問題に就いて、説かれてゐるが、氷河論者としては、本著の



氏 藏 齡 野 河 故



氏 二 勝 本 岡 故



氏 一 良 羽 赤 故

關する限り、消極的の態度を見せられてゐる。

ともかくも、白馬岳と言へば河野齡藏氏が、第一に連想されるほど、白馬と河野氏は、縁故が深い。久邇宮殿下が、大正六年頃に、白馬に御登攀あらせられた時の御寫眞を拜見すると、白馬山上から、日の出を御覽せられて、殿下は左の手に金剛杖、右の手に帽子を振つて、在はせられるが、先頭に立つてゐるのは、長髯美髯の河野氏で、高らかに帽子を振り、萬歳を唱へてゐるところらしいが、その頃の河野氏は、未だ壯年なものであつた。

私は氷河問題のことで、河野氏と文通はしたが、親しく遇つたのは、大正三年頃、矢澤米三郎氏や河野氏が、信濃山岳研究会（今は信濃山岳會と改稱）に依つて、山岳講演會を催うされたとき、私も招かれて松本市の女子師範學校で講演したことがある。その時、淺間温泉の目の湯が宿所で、志賀重昂先生も同行の一人として合宿されたが、矢澤氏河野氏が、夜分訪問された。その時が河野氏との初対面で、河野氏の「憲政擁

護然たる美事に黒い長髯が見える」と私は書いたことがある。河野氏は、鼻下にも八字髯があり頸には長い髯を垂れてゐる、晩年にお目にかゝつたときは、その長い髯が、灰色になつて、落葉松の長幹に、垂れ下つたサルマガセを仰ぐ氣がした。壯年の同氏が政治家のやうな風采に見えたとすれば、晩年の同氏は、孤往する哲人の風采に見受けられた、若い人のヒゲはともかく、老人の髯は、威嚴よりも、慈愛の溫相を湛へさせるもので、私は髯の徳を讚美する。

河野氏の早期登山は、明治二十六年に乗鞍岳、三十二年には前述の白馬岳、三十六年には赤石岳に登られ、山巔に二泊して、假松や、ヤマハハコ、オンタデの中に交つた黄花草栴の美事な寫眞を撮られてゐるが、赤石岳頂の寫眞としては、恐らく最も古いものではなからうか。尙ほ同氏撮影の神河内の河童橋や温泉宿の寫眞なども、相應に古いもので、在りし佛の、自然と人を偲ばせる。四十一年八月には、矢澤氏と共に、牧野富太郎先生を聘して、白馬岳に植物講習會を

開き、山頂の石窟に三泊し、杓子岳鏈ヶ岳に亙つて採集會を終り、同年十月中旬には、武石峠を経て、碓氷、妙義、大日向連山に鏝物の採集を試み、百十數種を獲られた。翌明治四十二年七月、長男通岱氏を連れられ、松本市を出立、中央東線倉野驛で下車、馬車で宮田驛に至り、大田切の溪谷に入つて、木曾駒の前岳、寶劍岳、中岳、本岳から連峰中の低地、木曾殿越えを、寶劍南から越え、南方の諸峰鷲垂、檜王の大峰、濁澤、西熊澤の大峰を通過し、空木ヶ岳に登り、本谷を下つて、赤穂へ歸られたが、その紀行文は「山岳」に寄せられた、この内の空木ヶ岳は、今から約二百年前の、元文元年駒ヶ岳一覽之記に、名前だけは見えてゐるが、實際に登攀して、世に紹介されたのは、河野氏を以て嚆矢とすべきであらう、只だこの記念すべき木曾山脈縦走で、空木ヶ岳に隣れる南駒ヶ岳の峻峰を残されたのは惜しい氣がする。(後から登られたかも知れないが。)

昭和七年七月には、北海道に赴かれ、利尻岳及び禮

文嶋に、植物採集旅行をせられ、更に根室から千嶋に向はれ、國後嶋の茶々岳(チャチャヌブリ)へ登られ、駒草の大群落を發見されたが、その駒草の五分の一は、白花であることが、珍らしいと述べられてゐる。

以上は、河野氏登山のうち、早期のものと、注意すべき分とを、私の知つてゐる狭い範圍で、述べたに過ぎないが、明治三十一年の白馬登山以來、毎年登山を缺かしたことなく、約四十年に及んでゐるし、殊に日本アルプスの膝下に永住されてゐたのだから、登山の便宜から言つても、都會人の比でなく、多くの高山に草鞋や靴の痕を印したことは言を俟たない。尙ほ河野氏の教育家としての履歴は、前に長野高等女學校長、後に松本女子師範學校長となられ、隠退せられたが、長野でも松本でも、アルプスの庇の下に立たれたのであつた。尤も日本アルプスといふ名を、河野氏はあまり好まれなかつたさうだが、飛驒山脈といふ名も、信州人として承服しなかつたらしい。

河野氏が、登山家となり、且つ高山植物研究の一權

威となられたことに就いて、氏自ら記述せられたところに依ると、氏の父が、自然を愛する癖があつて、特に植物を愛好せられ、山から採つて來ては、培養するのを楽しんで居られたから、氏も幼時から之に倣つて、おのづと植物の研究と栽培を畢生の事業とするに至つた由で、二十八歳の頃、初めて乗鞍岳に登り、爾來毎年各地の高山に登つて、植物の研究に務めたのも、亡父に對する謝恩のためだと言はれてある。氏の高山植物栽培は、松本市の自宅に、早くより高山園を作られた程で、名品は鉢植として楽しんでゐられたが、惜しい哉、大正二年四月二十日、松本市の大火で、氏の宅も、高山植物園も全滅したが、氏の著書「高山植物の研究」(今は絶版で、古本市場でも稀見の書である)に主として、園の設計や、栽培方法を説かれてゐるのは、亡び行きし高山園の紙上再現で、類書中の異彩である。

峠のことに就いて憶ひ出の話がある、木曾街道が今ほど衰滅しない以前に、木曾からの伊那越えは、御坂

故人河野齡藏氏を語る (小島)

峠に登り、園原(藪原とも書く)の里を経て飯田などに出たのであつた。謡曲木賊には「木曾の御坂の楢より、浮ぶ雲間の朝づく日、園原山にうつろいて、木賊刈る野の青緑」とあるが、その外の古歌にも「とくさ刈る木曾の麻衣」とか「とくさ刈る園原山の木の間より」とかあつて、トクサは木曾の冠詞であつた。その木賊は、昔この峠に野生したのであつたらうか、甲斐金峰山つゞきの尾根にも、木賊峠の名があるが、御坂も木賊峠であつたのかも知れない、木賊の方は先づ措いて園原の里といふところは、帚木(はきぎ)を以て、古來有名になつてゐる。源氏物語の卷の名にも、帚木の卷がある。帚木は「園原や伏屋に生ふるははき木のありとは見えてあはぬ君かな」(新古今和歌集、坂上是則)の古歌で、著聞してゐる割合に、どんな樹木だか、正體が明らかでない。武藏野の逃水なるものは、陽炎のちらつく幻の姿であらうといふ説もあるが、有りと見えて實際に、正體の解らないはき木といふ植物は、何であらうか、これは私には久しい疑問であつたが、河野

氏は「信濃に於ける歴史上の動植物」の一文(明治三十八年)に於て、前述の木賊のことも解説せられたには、木とは、もと葎木(ウツキグサ)のことで、枝極の繁つた藜科植物であるが、併し園原の名物、葎木は、その實ヒノキで、枝の叢りが葎草に似てゐるところから、名づけられたもので、日本武尊の古跡なる神坂神社から少し下りて、路傍に立てる伏屋から、二町許の小山の上にあると、明快に説かれてゐる。ハハキ木とは、果してその一本の檜であらうか、或は密叢したヒノキの樹林中の或物であらうか、私は知らないが、木曾ではヒノキを、笠や曲物、又は經木眞田の材料として、使つてゐるから、この峠にヒノキのあることも、頷づかれる、ハハキ木に疑問を持つ旅人には、河野氏の説が、好き参考になるであらう。

河野氏と言へば、高山植物の採集者であり、學者であることに、誰も異論はないが、一面に於て河野氏は博物學者だから、單に植物に止まらず、動物に於ても、房州館山灣に於て「ふぢまなこ」と稱する海鼠を

研究され、又三種の發光動物(夜光蟲の類)を世に紹介されたことがあるが、山男が漁夫に化けたやうに思はれる。併し山の動物となると、雷鳥や、羚羊の研究は、お手の物で、雷鳥の食物が、從來假松の實であると唱へられてゐたが、河野氏自身の解剖に依れば、毫も假松の實を認めず、岩高蘭科に屬する小灌木の若芽のみであると言はれたが、假松の實否認は、後の雷鳥研究者が等しく認めてゐるところで、或は河野氏が先唱者では無いかと思はれる。それは明治三十五年の發表である、尤も河野氏のは、主として白馬岳の雷鳥に就いて、研究されたのである。

河野氏は繪がうまい、嘗て何かの講演會で、上京せられたとき、私は東京會館の一室で、河野氏外數人と會食したことがあつた。その折、鮮明精緻に描かれた高山植物の圖を多數見せられた。その繪は、美術的に云ふよりも、畫學的の實物寫生で、少しく窮屈に過ぎ、寛やかな想像の餘地は殘されて無いが、標本的に寫實風なものである。例へば石楠花にしても、その葉

は厚く、やゝ楕圓形で、縁の折れ込んだ裏葉に、氈毛の密布してゐるところなどは、標本的の圖畫としては、佳作と信ずる。あまりに上手なので、あなたがお描きになつたのですかと聞いたら、さうだと答へられた。三百種以上とも謂はれてゐる高山植物を、かういふ風に、一々克明に描いてゐたら、それだけでもえらい仕事だと感服した。その挿圖は頓て「日本高山植物圖説」といふ、單行本の挿畫になつて現はれた。この本は、河野氏が、私に贈呈の辭まで記して、自署されてある、今は記念となつた。併し本書の製版圖は、到底原畫に及ばない、殊に色彩が貧弱だ、從來高山植物を彩色版にして現はしたものに、前田曙山氏の「高山植物叢書」(明治四十年)、三好學牧野富太郎兩先生の共撰「日本高山植物圖譜」二卷(明治四十一年)があるが、河野氏の寫生の、一段と實物的に秀ぐれてゐるのを憶ひ出させる。併し圖版に R. Kono, Del. の文字は逸してある。

河野氏の著作は單行本としては前に援引した「高山

故人河野齡藏氏を語る (小島)

植物の研究」(大正六年七月岩波書店)「高山研究」(昭和二年十月同書店)「日本高山植物圖説」(昭和六年十月朋文堂)の三書の外に「高山植物の培養」(昭和九年六月朋文堂)があり、矢澤米三郎氏と合著の「日本アルプス登山案内」(大正五年七月初版岩波書店、昭和四年六月に「日本アルプス附登山案内」と改稱)が、世に行はれてゐる。この日本アルプス案内も、最も植物の記述に於て、特色が見られる。尙ほ日本高山植物圖説の續篇が、廣告されて、未だ出版を見ないが、原稿及び圖畫は、全部出來上つてゐるさうだから、これが出版されると、最も完成された遺稿の出現となるであらう。

附 記

河野齡藏氏は、慶應元年二月八日を以て、信濃東筑摩郡島内村に生れ、昭和十四年四月三日、松本市新田町の住宅に、長逝さる(右、夫人の御知らせに依る)壽七十四歳。

赤羽良一氏を憶ふ

茨 木 猪 之 吉

或る日突然左の手紙を受け取つた。

「先生が信州小諸の小學校で圖畫を教へておいでになつた頃―明治の終りか大正の始めでした―小學校の教員に赤羽こうといふ女教師があり、その伴に赤羽良一といふ生徒があつて先生から圖畫を教つたのであります。

數多い鼻たらし小僧の中ですから先生は私を御記憶でないことは勿論ですが、私達はよく先生を憶えて居りました。

當地には小諸出身の人達が比較的多いものですから先生のわら繩のバンドだの御愛用カレントウなど折にふれて噂に出ます。當時の先生の面影をなつかしむのであります。先生が山岳愛好家として山岳畫家として

御活躍のことは新聞雜誌で承知して居りました。

私は東京帝大の學生頃一度先生にお目にかゝり度いと思ひましたが遂果さず、卒業と共に都落ちを致しました。

その後御住所が判らず今日迄過ぎました所、文藝春秋二月號の寄稿家紹介欄に之れを見付けましたので、この書面を認めた次第で御座います。先生の山岳愛好に負けず劣らず私も登山狂で御座います。圖畫で先生に一〇〇點をもらひましたが、この方には一向縁がなく鯨を畫いて子供に見せると、象だといはれる程度で御座います。

大學を出て、しばらく松本（信州）の中學の教師をして居りました關係上、河野齡藏氏や井口良一氏の知

己を得て、山登りに熱中するやうになり、近年は北アルプスは秋と冬とに出掛け、夏は南アルプスの方へはいつて居ります。昨年は半年ばかり歐洲へ出掛けましたので月並のアルプス登山をやつて來ました。今度先生名古屋御通過の際は豫め御知らせを願ひます。小諸會を開いて大いに御歡待申上げます。

私は時折所用で上京致しますから、御住所の判つた上は一度御伺ひしたいと存じて居ります、私は本年三十七歳同封の通りの面をして居ります。先生の御健康を念上げます。昭和十二年三月三日 敬具

以上の手紙を読んで十歳頃の少年を思ひ出し、同時に懐しい小諸時代を想像して、すぐ返事を書いて送つた事は、つい昨日の様に覚えてゐる。たま／＼機會を得て面接し思はず「ヤア大きく立派に成つたね……」と談次から次と出てくる、終りは呵々大笑はお定まり、そしてよく飲みよく活躍した。今考へると少々懐しい位だつたが、性來の熱情と事務家だつた爲め、目ざましい精力には私なぞ只だ／＼啞然たる事しば／＼

赤羽良一氏を憶ふ (茨木)

だつた。利害を離れて、よく親切に盡してくれた。一部では野心家だとか、或はヤリ手だとか非難もあつたが、俗世間の事なぞピクともしないで、自己の信ずるまゝに動いた。彼の少年時代は小兵だつたが秀才型でもあり、峨嵋大將の級長はけだし有望だつた、中學高等學校時代は不幸にして知らずに過ぎてしまつた。

最近公私共にしば／＼往復し又文通もした、私は昨秋乗鞍行の際は彼れも同時に神河内より三俣連華へ出るコースで涸澤に入り穂高小屋の一夜は同行の窪田寛二氏(空穂氏甥)の記録によると十月一日「稀にみる快晴にて陽の入りまで富士山が眺められ初秋の涸澤の紅葉は實に美しく、夜の月光もまた格別、室に炬燵を作りたのしい山の物語に先生のスキスのアイガーやメンヒの登山談に花を咲かせ、持參のウイスキーの口を切りしも、明日に備へてほんのチョットしか召上らず(上條君は相當飲めるが私は全然駄目)、九時話を打ち、この山奥に唯三人静かな眠りに入る、思へばこの山行中一番たのしかりし夜だつた。」

三九

私が乗鞍行から歸京した翌日、突然名古屋の病院から「主人事云々」と奥さんから手紙を戴き、急行し曙近き頃ベツトに横たへる彼を見舞つた（面會謝絶）を押し其の時は氣丈夫で元氣なれば一寸安心したが何しろ大手術の爲疲勞は勿論なれど、安靜をちかつて別

岡本勝二君を憶ふ

田 中 菅 雄

昨秋十月廿五日突然勤務先にかゝつた電話が僕を愕然とせしめた。それは岡本君の親戚の曲田君からで、「岡本が十月廿日に戦死したといふ公電がありまして、然し詳細は全然解りません」との事だつた。僕の數多い出征中の友人の中でも最も生命の危険の少いと思はれてゐた彼だけにこの電話は青天の霹靂だつた。「勝チャンが戦死したかなあ」僕は電話機を掛けると何度も口の中で呟いた。然し當時の公電にも展誤報は

れたのが最後だつた。

再び危篤の電報を握り急行した時は、すでに白菊に包まれ彼の書齋に笑つて永眠せられてゐた時だつた。

昭和十五年一月七日。

あつて勝チャンの場合も何かの間違ひではないかしら、其中には無事だつたといふ電報があるのではないかと考へ、不取敢二三の友人にも彼の死を知らせ乍らも「只戦死といふだけで詳細は不明だから或は誤りかも知れない、彼が死ぬ譯はないから」といふ様な半信半疑のものだつた。然し其後戦友からの簡単な便りで「頭部貫通銃創」と知り、又十二月五日遺骨が東京に着くと聞いて、初めて彼の死を葦々と身に感じた。そ

して再び「勝チャンが眞個に死んだのかなあ」と口の中で呟いた。

彼との交りは丁度十年間だつた。山で得た友達ではなく、僕が學校を出て太平火災に入社した時彼は一年先輩として同社に勤務して居たのだつた。そしてその後十數回、山やスキーに同行した。

彼が山登りやスキーを初めたのは比較的遅かつた。遺稿を調べに彼の心服してゐた叔父上の蘆田氏に遇つて初めて聞いたのだが、昭和六年の元日に同氏宅の附近で偶々の大雪に近隣の友人がスキーをしてゐるのを借りて穿いたのが抑々の初めだそうだ。

彼は何事にも非常に熱心で、研究心深くまめで、而かも器用だつた。最初にスキーに同行したのは昭和六年三月の五色だつたが、その時は未だスキーを初めた當時で迪々しい腰付きだつたが、翌年三月再び五色に行つた時はすっかり上手くなつて仕舞つて驚いた事がある。彼はこの一シーズン十回位スキーに行つてゐたのだ。そしてスキーに關する種々の本を読み、之を實

岡本勝二君を憶ふ (田中)

地に研究したのだ。彼はこの一シーズンに僕等が漫然とやつた十年位のスキー技術を習得した。之は山に行つた場合も同じで、自分の登る山を前以て地圖でよく研究し、種々の記録、文獻を獵涉してゐたから、初めての山でも實によく知つてゐた。然し彼は山よりスキーにより多く心を惹かれてゐたのは事實で彼の記録を見てもよく窺はれる。彼の器用を物語る有名な話題として今でも我々の中で出るのは、彼はスキー帽やスノーコートを自分で作つて仕舞つた事だ。當時驚いた連中は「彼は今に屹度スキーも自分で作るよ」なんて云つた位だつた。スキーは遂に作らなかつたが、彼の器用さは戦争に行つても發揮され、遺品として送還された品々の中で、自製の美事なアルバム二冊と慰問袋の手拭で作つた浴衣は特に彼の面目を物語つてゐた。

又彼の筆まめも有名なもので、多忙の戦地からも月に二三度の便りは必ずあつて、而かも便箋數枚に亙るものも珍しくなかつた。山岳會の仕事などには非常に適任で、凱旋したら是非にと思つてゐたが今はそれも

空しい。

彼は現役は近衛歩兵だったが、昭和七年頃僕と二人で仕事の餘暇に自動車の運転を習つたのが因で、演習召集も自動車隊に行き、今事變勃發後、昭和十二年十月、世田谷自動車隊に應召、十一月中旬、自動車小隊長として出征した。十二月初旬上海に上陸以來、中、北、南支の各地を轉戦、昭和十四年十月廿日、要務を帯びて石家莊より北京に至りその歸途飛行機で石家莊を目前の河北省正定縣大孫村上空で遂に壯烈なる戦死を遂げたのであつた。年齢正に三十五歳。洵に惜みても餘りある次第で、彼の元氣な風貌に再び接することが出来ないと思ふと残念でならない。

登山スキー經歷

昭和六年

一月 湯原、大原スキー行。二月 水上、妙高、池ノ平スキー行。三月 關温泉、燕温泉、五色スキー行。四月 五色スキー行。五月 西黒澤より谷川岳。七月 穂高連峯。十月 武尊山。十二月 湯澤スキー行。

昭和七年

一月 熊ノ湯、岩原スキー行。二月 湯澤、土合、妙高湯澤スキー行。三月 五色、岩原スキー行、乗鞍岳。五月 仙ノ倉山。七月 富士山。十月 奥日光。十一月 木曾駒、御坂山塊。十二月 湯澤スキー行。

昭和八年

一月 横手山、白根山、岩菅山、蓬峠。二月 奥日光、湯澤、菅平。三月 藏王越、乗鞍岳。四月 唐松岳。六月 大菩薩峠。七月 赤城山。

昭和九年

一月 野澤より發啼へ。二月 那須。三月 御飯岳、四阿山。四月 仙ノ倉山、萬太郎山。八月 甲斐駒、淺間山。十月 赤城。十一月 苗場山。

昭和十年

一月 熊ノ湯、奥日光、妙高温泉。二月 御岳、一倉澤。三月 樽池より白馬岳。四月 月山。五月 大菩薩峠。七月 御坂山塊。八月 槍——穂高。十一月 月山。十二月 神津牧場、岩原。

昭和十一年

一月 松尾鏡山より八幡平、赤城山。三月 御岳。

昭和十二年

一月 早池峯、八甲田山。

戦 歴

昭和十二年十月五日 世田谷自動車隊に應召。

十一月下旬 神戸出帆

十二月六日 上海吳淞上陸

中支方面に於ては

南京攻略、杭州攻略、浦東肅正作戦に参加。

北支方面に於ては

山東省掃蕩作戦、徐州攻略戦（快速部隊として多大の戦

果を収め軍司令官より同部隊に感状を授與せらる）

南支方面に於ては

青島より揚子江を溯江し安慶に上陸、武漢攻略戦に参加

大別山系に奮戦し武漢攻略後漢口に入城。

再び北支方面へ

十四年一月、漢口より揚子江を下航、青島を経て石家莊に到着、冀中地區の肅正作戦に参加。

○月より實施の潞安作戦に於ける潞安周邊掃蕩作戦に當り、重要任務を帯び、十月十六日邯鄲出發、北京に至り任務完了の十月廿日空路歸還の途河北省山定縣大孫村附近上空に於て敵彈の爲め頭部貫通銃創を負ひ壯烈なる戦死を遂ぐ。

白馬嶽山麓蓮華溫泉主人親子遭難記

糸魚川顯勝會山岳部員 月 橋 正 樹

蓮華溫泉主人田原幸治郎氏（新潟縣西頸城郡糸魚川町、當年四十八才）は昨年溫泉にて越冬せる經驗によ

り客室の一部を増改築して高窓、通風筒等を設け本年は更に愉快に越冬しようとて次男芳郎君（當年十八才）

白馬嶽山麓蓮華溫泉主人親子遭難記（月橋）

三三

を伴ひ昭和十年十二月廿七日糸魚川を發し、廿八日木地屋から杉の平の冬道を経て唐澤小屋に宿泊し翌日温泉に到着したのである。

昭和十一年二月二十六日、糸魚川町木島誠造君、同
上村充君の二青年は親戚にあたる田原氏を慰問し、併せて白馬の冬山を樂まんとて糸魚川を出發、同日大所に宿泊、翌日廿七日蓮華温泉に向つて登山したのである。元來冬山登山路は木地屋の村はづれ萱場から東に切れ、杉の平から唐澤小屋をへて、長池東端より獨活川右岸の大山毛樺林を斜登し、獨活川上流を渡り、獨活川左岸急壁の一鞍部角小屋峠から一氣に梅の平東方に取りつき、後は大體雪の情況にもよるが夏山コースによつて温泉に取りつくものである。

さうして此登山路の難場といふべきは角小屋峠から獨活川との間と、今一つは登路にあつて見透しがつかぬと彌平川附近から西廻りをして温泉に取り付く道であつて、特に後者は間違ひ易い場所である。

木島、上村兩君も亦此彌平川附近で道を誤まり終日

温泉を發見する事が出來ず、雪穴を掘つて露營にあらす雪營したのである。翌日注意して見ると平馬ヘイマの平タセの東方であつたので見當が付き、温泉にたどりつき通風筒から田原氏を大聲で呼んだのである。中からきつと元氣の主人の聲が聞えるのを期待したが、何遍呼んでも物音がしないので案内知つた部屋の窓から雪を掘つて飛び込んで見ると、最近居住して居る様子が無い。

相當整理されて十數日か數十日前に空屋になつて居つた事がわかつたので、大急ぎ下山の途につき夕方唐澤小屋着一泊、翌二十九日糸魚川に歸着したのである。

糸魚川では此凶報に驚き長野縣四ツ谷方面、神の田圃の早大ヒユツテ等へ照會の電報を打つたが、何れも消息不明であるので取敢へず幸治郎氏長男善治君、平岩強力頭六藏君(吉田爲治)等が温泉へ急行して調査した所米や薪の消費量で少なくとも四十日位山に居つて温泉を出發して何れへか二人共行つて居る事に考へられるのである。さうすると二月の十日頃山を出發した事になる。特に歸路乘鞍川在岸岩壁上黄金の瀧への分

岐點へスコープが一挺木の下にたて掛けてあつたのを發見したので、これは糸魚川に歸町下山し其途中で遭難して居るのではないかと考へられるに至つた。

そこで連日唐澤小屋を本部として木地屋、大所平岩、山の坊等の人も加はり岩窟を初め、あの道此の澤、人の通りさう人のかくれさうの所は全部さがしたが見當らなかつた。

然るに四月卅日に至つて白池東南方長池の北方に於て窪地からスキー一臺、其北方の山毛樺の大木の下からスキー杖一本が發見されたのである。

この報告を聞いて五月二日出發、平岩宿泊翌日五月三日早朝出發一行は息善治君、平岩山案内組合長小川君、六藏君以下全部で九名途を杉の平西方より逐次發行凍結せる白池を横斷して午前十一時スキーの發見された現場に到着したのである。

現場に到着後更に附近を搜索するとスキー杖の一本發見された後方の山上——唐澤小屋からの登路の高地——に親指大のスキー杖の頭を發見、掘出して見ると

前のスキー杖より八寸餘短かい別の物である。よつて親子共此地點まで無事に到着して居る事がわかつたので、しかもこのスキー一臺と二種の杖の發見された附近は最も怪しいので唐澤小屋から長さ八尺の鐵棒（徑五分）とスコープ四挺を借り搜索した所、午後一時に至りスキー發見の東方短杖發見との交叉點の窪地の底に雪面下二尺五寸の下に木、土、岩石と全く手應の異なる丁字形にて各割各六尺の物體を突止め、發掘を開始した所やがて黒き羅紗のマントラしき物を掘出し、愈々屍體なる事をたしかめ二時半完く掘出し、屍體は芳郎君なる事が明瞭となつた譯である。尙サツクは親子二人の物が芳郎君が幸治郎氏のコート、上衣、セイター等を着して居る點から芳郎君が父よりも疲勞し或は父の生前に倒れたものであると考へられたのである。

特にサツクの中から出た芳郎君の日記によつて父が一月五日から風邪氣味にて臥床、以後種々の藥を服用するも全治せず、一月十四日下山の準備をしたが猛吹

雪の爲め下山を見合せた記事がある。この日記は一月十九日まで記入してあつて一月廿日には午前四時の溫度〇・二度とあるだけにて記事がないので、當日温泉を出發したのではないかと考へられるのである。

二月の十日頃に出發したと考へて居たのに一月の二十日に出發したとせば米及薪の分量に誤算があつた譯であるが、後から考へて米は山内の鼠が冬は全部温泉小屋に入るの爲め、相當食ひ荒されたらしいし、薪は今年からストーブを新調したので豫想外に薪を多く使つたのであらうと想像せられたのである。

芳郎君發掘後皆考へた事は、恐らく幸治郎氏は目標のスキー杖を立て唐澤小屋に救援を乞ひに行く途中に斃れたのであらうと思ひ、心當りを隈なく探索したが當日及翌日小生が山に居る間は全く無効であつた。越えて五月十二日田原氏の親類其他によつて組織された搜索隊は芳郎君の發見所の僅か二間程の西方長池寄の所に幸治郎氏の屍體を發見したのである。即ち親子完く一つ場所で疲勞の爲め遭難したものと考へられる。

我々は吹雪の爲めの遭難とも考へたのであるが、芳郎君はスキー帽をサツクに入れて鳥打帽をかぶつて居るし、其他から考へても大吹雪があつたとは考へられぬ。従つて冬山コースも少しも間違ひなく長池まで来て居るので、未だ軟雪の中を父の分共二人前のサツクを脊負つて先登になつた芳郎君が大疲勞をやつて父よりも先きに倒れたものと考へられる。少量ではあるが食量もまだ残りがあつたのである。

（昭和十一年五月）

附 記

塚 本 繁 松

蓮華温泉主人田原君父子が雪の山中に遭難死去されてから早くも四年程の歳月が経過した。冬山登山者の安全と便宜の爲に喜んで雪中の温泉小舎に滞在して幾冬かを過した父子をあつけなく失つてしまつた事は、今更乍ら返すべくも残念でならない。後ればせ乍ら田原君が生前山の爲にくざれた功を憶ひ、謹んで哀悼の意を捧げたいと思ふ。

當時自ら搜索の任にあたられた糸魚川小學校長の月橋氏からいち早く遭難記をいたゞき、私がお頂りし乍ら其後在

昔今日迄日の日に合せずに置いたのは全く私の怠慢によるもので、執筆者月橋氏を初めどちらへ向いても何とも申譯ない次第で、此處に深くお詫びする次第である。其後各方面で田原君の遭難に關した記事などを見ると、遭難の時期など可なり誤り傳へられてゐる點などもあるやうで、何としても正確な記録を山岳誌上に殘して置かねばならぬと痛感し此に漸く責を果す事が出来た。

今更返らぬ事乍ら、當時もしも田原氏が傳書鳩を連れて行つてゐたらあんな悲惨なアクシデントは起らなかつたであらうし、又せめて犬を伴つて行つてゐたら死後一ヶ月以上もその遭難を家族さへも氣付かずに過すやうな事はなかつたらうにと惜まれる。冬期登山者及び山中滞在者は今後には十分にその點を考慮されたいものである。

尙田原君の長男善治君は父君及び弟君の死の悲しみを踏み越へ其後も元氣で引續き蓮華温泉の經營に當られ、父君に劣らない熱心さで登山者の世話をしてゐるのは嬉しい事である。そして昨冬からは再び温泉で冬籠りを始められたと聞く。吹雪に明け吹雪に暮れる深山に忍苦の生活を續ける同君の姿を偲ぶと何だか慰問して上げたい氣も起つて來

る。尙冬期蓮華温泉を訪られる方は前以て糸魚川町の田原善治宛滞在の有無を聞き合せてから登山せられる事を切望する。(昭和十四年十一月)

「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるを問はず。
 - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
 - 一、原稿は返却せざるものとす。
 - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
 - 一、原稿にはその梗概を附せられたし。
 - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
 - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或は別紙に説明記入を乞ふ。
 - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
 - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。
- 原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所
- 原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

著作權有所

昭和十五年五月二十七日印刷
昭和十五年五月三十日發行

〔定價金參圓〕

發行所 日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯者

東京市牛込區東五軒町三四
藤島敏男

責任校正者

東京市蒲田區女塚四丁目五ノ三
吉澤一郎

發行者

東京市麹町區一番町二〇
川喜田壯太郎

印刷者

東京市芝區濱松町一ノ十三
植田庄助

